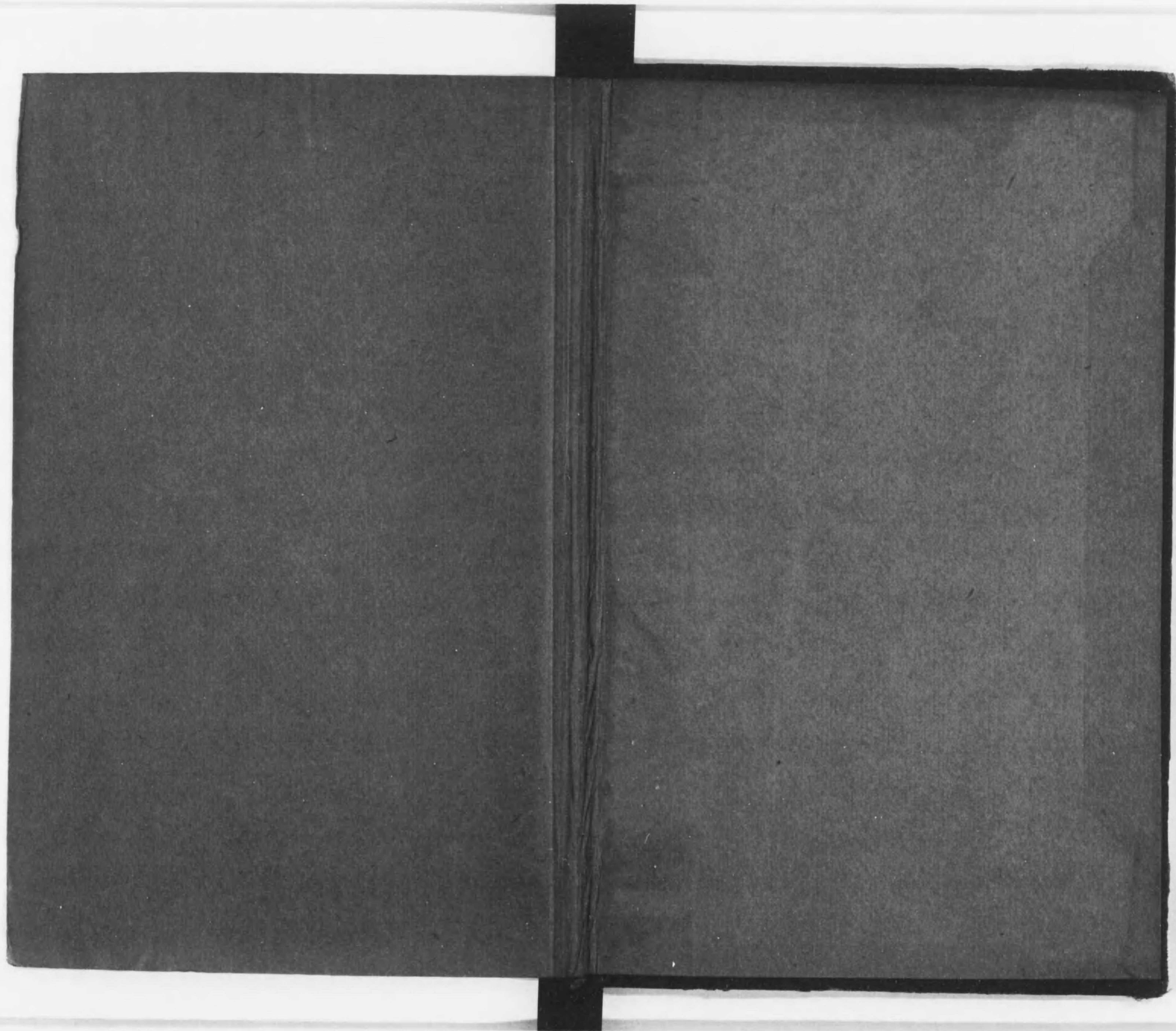




始





324  
1  
2



大日本世界教宣明書

324-21



松のついでに  
松のついでに  
松のついでに  
松のついでに  
松のついでに

松のついでに  
松のついでに  
松のついでに  
松のついでに  
松のついでに

凡兒謹書

大正  
8. 4. 29  
購求



啓

これは、凡兒が出世の本懐としての序幕に候、ほんの一端を示したる者に不通候。未だ以て委細を彰かにするに足らずとは云へ、その如何の存意なるかを、聊か物語り得たりと存入候。

これなる教趣を神大日本世界教宣明書は、今を去る子の歳の秋、巳に既に成稿いたし居り候。而も、猶、本論全篇の完了せざる爲め、尙に篋底に藏め置きたる次第に候。只、本書の末尾は、日露の戦争に徹して、昨冬、少しく訂正致候。

この度、漸く百書まで脱稿致候。殆ど二十年の歳月を要し候、逐次修文、發表可仕候。

本書高覽の君子は、咄、かばかりの存意にて、二十年を要し、僅に百冊を認むるとは、餘りに迂愚にして迂濶ならずやとの御叱りもやあらんずらむ。その御叱りは、謹んで拜受仕候。世に鈍根劣機至愚至痴なる凡兒としては、これが根かざり、性かざりの心配骨折りにて有之候。その立言行爲の迂愚迂濶なること、致方無之候、鈍根劣機至愚至痴なる凡兒としては、これより以上の根機無之候。あはれと思食さば、可然、御教訓あらまほしく不堪希望候。

一 世に鈍根劣機至愚至痴なる凡兒は、何等の識なく學なく、更に徳なく福なく、尤に以てうら恥致次第に御座候。而も鈍根劣機至愚至痴なるが故に、人生の那物たるかを知らず、宇宙の那物なるかを知らず、自己の那物たるかを知れば、萬有の那物たるかも辯ずる能はず。何故に世に生れ、何故に世を去り、何故に家庭を組織せればならぬか、將た、何故に國家世界を組織せればならぬか。極言すれば、我は何故に生活し、何故に衣食するか、更に何事を爲すべき者か。何にが、なんだか、風浪り判り不申、一事一物一言一行として、疑惑の種たらざるはなし。其疑惑の發すると共に、煩悶の奈落に陥落し、殆ど前後を忘れ、我たるを忘るるゝまでには化石致候。もし我れ聰明睿智の性なれば、かゝる疑惑、かゝる煩悶は、なかるべきも、そこが鈍根劣機至愚至痴の性なれば、致方なき結果に候。それ唯、鈍根劣機至愚至痴なるが故に、この疑惑を解決し、この煩悶を一拭し、少くとも、凡兒は凡兒としての相應に、自己の那物たる、萬有の那物たる、人生の那物たる、宇宙の那物たるかを解決し、更に個人、家庭、國家、世界の那物たるかと、その生死興廢する所以等とを解決し、以て人生に處し、宇宙に處したしと思ふの動念は、念念已むと能はず候。而も已に疑惑するからには、豈に亦、之を解決すべき道なからんやと思ふの動念、再び殷殷として轟發し、轟發すると共に、そ

の動機は、更に鬱勃として、凡兒の前後左右に煥發しつゝありき。而してその動念動機は、茲に霹靂照して、時時刻刻、解決の道に啓行致候。是れ實に鈍根劣機至愚至痴なるが故に、深く自から警めて、凡兒と稱し、凡兒の凡愚を救はんが爲に、晝日晝夜、勵精刻苦し、鞠躬盡瘁し、ありとあらゆる艱難危厄と闘戦しつゝ、猛然奮然、進行究明し、凡兒は凡兒としての相應に、之を解決致候。解決すると共に、その身の神となり得ること、及、本來、神たることを自覺仕候。自覺しては、他をも均しく神たらしめ、否、本來、均しく神たることを自覺實行せしめんとするの念、念念、亦、已むこと能はず、旁、以て卒に本書百冊を成したる次第に御座候。

一 神とし云へば、天人萬有は、均しく共に神にて候。而も、傲然、他をば蛆虫こむごの如く擯斥して、獨り自己のみ標榜して、我は神也、靈言者也、活佛也、權化也と自稱する者ありとせば、是れ狂者也、神としての發狂者也。凡兒が所謂、神とは、人としての神にて候、神としての人にて候、人間は、どこどこ迄も人間なり、人間は人間以外に化石するものに無之候、人間は人間にて足れり。然れども、人間としての進歩は、亦その人間としての希望する所に御座候。故に人間の常識的に進歩したる成格を、茲に區別して、尊重して、神と云ふに過ぎざ候。神とは云へ、人間

也、人間は依然として人間也、只その人間中に卓出したる人間を稱して、人中の神、神中の人と申すに不遇候。換言すれば、猶、人中の傑」と云ふに歸すべく候。然れども、人中の傑とは、何を公準として之を稱する乎、宇宙は廣大なり、獨り人中の傑を以て安すべからず、天人萬有の發顯しあるからには、亦その歸着する所なかるべからず、凡兒はその發顯歸着する根本大極を以て、神なりと確信するが故に、その「神」にまで進化せんが爲に、人人、人中の神」として、常識的に進歩發達せんことを期したき所存に御座候。神より發顯したる者は、均しく神也、天人萬有、悉く之れ神なり、豈にその中、一人のみ、獨り神なりと云ふものあり得べきや。凡兒は斷じて之を信ずること能はず候。

世の多くは曰く、在來の學説は陳腐なり、在來の宗教は腐敗せり」と。さらば、之に代はるべき新學説、新宗教は如何」と反問すれば、一も成立したる形式を有する者なし。適、ありとすれば、亦凡兒をして満足せしむるに足る者なし、是れ亦凡兒は凡兒としての形式を建立して、本書百冊を成したる次第に候。

然れども、書中の問題は、悉く人生宇宙に關聯し、古今東西、いづれも皆、離問題也と、しつゝある者なれば、假令ひその一問題たりとも、専門に論出する時は、少くとも、五百頁、乃至千頁を要せざるべからず。故にこの度、發表する宣明書中に

は、僅にその一部分つゝを辯じたるに過ぎず候。鈍根劣機至愚至痴なる凡兒として、何條、之を一小冊子に論じ盡すことを得べけんや。是れその表を論ずれば裏を辯ずるの遠なく、前を辯ずれば後を論ずるの餘地なく、右を申せば左を缺き、上を述べれば下を落すと云ふが如き安排にして、遺憾不遇之候。是れ其前後重複雜亂して、章を爲さず、節を爲さず、字句を爲さず、秩序を爲さず。所謂「斷朝朝報」に非ずして、寧ろ「斷片亂書」に有之候。特に書中に所謂「本體大本體」なる者に論及するも能はざるは、遺憾中の遺憾に御座候。然れども、是は之れ人生宇宙、天人萬有の根本大極なれば、その人生宇宙、天人萬有、を辨彰したる後にあられば、その「實體の如何」を論じ得らるべきものならず、立論の順序として自から然らざるを得ざれば也。然れども、已に本論たる、「大日本世界教天照太神宮」に辨彰しあれば、逐次發表可致候ま、左様御承知願度候。

鈍根劣機なる凡兒にして、猶且、此上とも向下する者とせば、如何なる惡念惡言惡行を爲すやも期しがたし、假令ひ惡事大惡事を実行するも能はざる迄も、その大惡念を發するは必然なり、思へば身の毛の慄立つばかりに候。幸なるかな、身深くその鈍根劣機至愚至痴なるを知りて、この上とも、復、下向するを好まず、根限り性限り、能ふ丈それ丈、向上せん者と志し、志しては、念、念、言、言、行、行、已

むこと能はず。いかに身は至愚至痴にして實行する丈の根柢なしとするも、  
責めては、念想にても、言論にても、どこんく迄、向上し得る者にや、向上し得る限  
りは、向上して、その念想を發し、その言論を爲し、みんものぞ。已に念想し、已に  
言論しつゝあるかぎり、直に之を遂行するも能はずとするも、責めては、一念  
つゝ、一言つゝ、一實行しつゝ、生を更め世を代へても、その念想し得たる限りを  
實行し、言論し得たる限りは、之を實行せんものと志し居る次第に御座候。言、  
大にして、未だ行の伴はざる所多きは、深く愧ぢ深く警めつゝある次第に御座  
候。

一 昔は聖者の明を以て立教開宗するものを、今將た、凡者の愚を以て、立學開道す、  
これその跡は、雲泥の大差あるが如きも、その心は一致するものと存入候。  
一 世に鈍根劣機至愚至痴なる凡兒として、猶、且、自他救済の道心道行を發するも  
は、餘の義に無之候。萬有の一たる凡兒として、人類の一たる凡兒として、國民  
の一たる凡兒として、家族の一たる凡兒として、個人の一たる凡兒として、その  
凡兒としての一分分の天職責任を盡さんとする所存に不遇候。換言すれば、  
自から、其愚を救ふと共に、もし亦、他に凡兒と共に、愚を同ふする者あらば、其の  
愚なる者を濟はんとす。者に候。是れ實に凡兒としての分を盡すべき道也、

一 天職也、責任也、とこそ存じ候らへ。

一 凡兒としての愚存を、遠慮なく、自白すれば、本書は、天人萬有の信ぜんとする所  
言はんとする所、行はんとする所を、覺束なくも、信じ得たり、言ひ得たり、行ひ得  
んとする者なりと存じ居候。然らざれば、乍恐、天人萬有をして、均しく此の如  
くに信ぜしめ、此の如くに言はしめ、此の如くに行はしめんと期期する愚痴も  
のにて有之候。

一 維れ我れ凡兒の鈍根劣機にして、至愚至痴なる、直に以て自他を救済すること  
能はずとするも、凡兒としての一分は、聊か盡し得たると共に、併せて他にもそ  
の一分を盡さしめたる者と確信仕候。

一 凡兒は誓て天人萬有と共に、その分分の分を盡し、(愚は愚としての)分分の本  
体成格を天照活躍しつゝ、天人萬有を慰藉感化し、人生宇宙を攝理統一し、以て  
その根本大極たる本体大本體に同化還元し、超樂無窮たらんとする者に有之  
候。畢んぬ。恐惶謹言。以上。

明治三十九年丙午四月三日 皇祖 神武天皇祭

東京谷中、春風輪蕩、櫻花將に發かむとするの頭。  
鈍根劣機 凡 兒 五  
至愚至痴 七





明治三十六年癸未卯八月八日

いま汝は何を爲しつゝあるか。その念ふ所、その言ふ所、その行ふ所は、神と共に念ひ、神と共に語り、神と共に行ひ得るものか。さりとは、汝の前途は幸なり、亦、那等の危と懼とを抱かざれ、心廣く體胖に汝の事を勵み勤むべし。

馬城山頭凡兒

全趣神 大日本世界教宣明書目錄

第一書 信仰

第壹章 信仰と人生宇宙

人生宇宙發願の源泉……一言一行一事一物と信仰目的實行……一家一國一世界の信仰目的實行……大宇宙と大信仰大目的大希望。

第貳章 信仰の終局

信仰中の信仰……目的中の目的……希望中の希望……人生宇宙終局の根本大極……人生と宇宙との關聯……人生の信仰目的と大宇宙の大信仰大目的。

第參章 根本信仰と人生の行動

人生百般の組織行動と其終局する大宇宙的根本大極の大信仰大目的との關係……根本信仰……疑惑、危懼、不平、不満と慰藉、安泰……成格の天照と活動飛躍。

第一節 信仰の發顯、及、満足

心體不二一身の天照活動……心體の背展阻隔……觀照致一……釋然融會……満足と不満足。

第二節 信仰の發顯と缺陷 ..... 五

我と心體致一的活動 ..... 信仰と成格發顯との阻礙 ..... 目的希望と怨恨 ..... 不快 ..... 煩悶。

第肆章 心體致一の信仰發顯と人類處世の大經 ..... 六

心體不二の天照的活潑 ..... 我の吾たる成格本領。

第三節 信仰之發顯と人格 ..... 六

言行致一の人 ..... 健全なる人格 ..... 各自特有の成格本領 ..... 英靈 ..... 品節 ..... 天真風致 ..... 信仰薄弱の人と忿怒、怨恨、慚悔、煩悶。

第四節 信仰之發顯と家庭 ..... 八

同心同體の和合團結 ..... 健全なる家庭 ..... 同心同體の信仰發顯 ..... 英靈發顯の家風家格 ..... 病的家庭 ..... 同心同體と家庭組織の大經。

第五節 信仰之發顯と國家 ..... 一〇

健全なる信仰と健全なる國家 ..... 統治者と臣民との同心一體の信仰目的實行 ..... 邦家建設の大經 ..... 病的國家 ..... 内憂外患の禍機危態。

第一項 統治者と臣民との同心同體 ..... 一

君民相互の休戚 ..... 犧牲 ..... 擁護 ..... 統治者と萬民全體の身 ..... 敬愛と必然の結果。

第二項 國家と臣民と統治者との關係 ..... 一三

國家 ..... 生活集合的民族的獨立の統一體と血族的種族の統一體 ..... 個人的資格 ..... 人格的代表者 ..... 國家民族統治者の一體的不可分割 ..... 細胞的有機體 ..... 個人的資格の分割と義務責任 ..... 護國愛民と邦家鎮護の道 ..... 愛國と忠君。

第三項 信仰の同心同體と忠君愛國 ..... 一七

崇高雄大硬直擊實なる理性情靈の爆發 ..... 信仰の同心一體的天照發顯 ..... 國民的自由安寧幸福と個人的自由安寧幸福 ..... 無紀律無秩序と弱肉強食 ..... 個人家庭國家の平和 ..... 天職責任と自然の性情。

第四項 信仰の異同と君民の關係 ..... 二〇

精神肉體の信仰異同と影響 ..... 異心的統治者と自己の代表者 ..... 日夕不安 ..... 感情意思の背反衝突。

第五項 異心合體及國家と統治者との區別 ..... 二一

體制と心服 ..... 同心一體と異心合體の君民 ..... 干戈法律的體制と機會的內容の心服 ..... 萬有の離合集散 ..... 利害休戚と人類の離合集散 ..... 降服と忠誠 ..... 相互の交讓と意思感情の疏通 ..... 法律的干戈的國家と體的統一の半面 ..... 國家一統治者一民族との分立 ..... 統治者と一私人 ..... 義務責任の分割 ..... 信仰の威嚴と統治者の命令。

第五章 信仰發達に於ける二道の潮流 ..... 三〇

國家的信仰より個人的信仰化する者 ..... 個人的信仰より國家的信仰化する者。

第六節 國家的信仰と個人的信仰……………三〇

國家本位……………國家的主權者と民族の族長と信仰的代表者との不二不三の一體の統治者……………原人人種……………根本民族……………原人本族の信仰習慣と分族支流の變化……………移住開拓……………山河風土の影響……………仇遇敵視と征伐……………體としての國家と、心としての國家……………心體致一的發顯の國家……………體的祖國……………心的祖國……………立國本旨の常經と墮落的の罪報……………根本民族の直系……………人類自然の發達……………一般民族の師表……………前途大興隆の寄運……………三五

第七節 個人的信仰と國家的信仰……………三五

個人本位……………遠流の混濁と多數的勢力……………個人的信仰の多數……………信仰の多數的威嚴と國家生命の動脈……………國家と信仰……………個人的信仰の國家的信仰化する場合の(D)(C)(H)(I)(四)……………國家的心體統一の常經と權道……………君主政體と民主政體との同心同體的統治の歸一……………四〇

第八節 信仰の遺傳と子孫の訓練……………四〇

祖國的信仰の遺傳と子孫の責任……………衰微と發顯……………前世後世卓出の信仰發顯……………修養發實行的究明訓練實踐……………四〇

第陸章 人類的、萬有的、世界的、宇宙的、信仰と宗義との完全、及其一貫的融會……………四二

信仰的成格大成格……………信仰の極致と完全なる信仰……………形式の變化と歸順の大極致……………個人化する宗義……………國家化……………國家化……………世界化……………宇宙化……………狹隘固陋の信仰……………完全なる宗義宗教……………融會通達の教義……………四二

第質章 信仰發顯の感化と成格天照の膨脹……………四五

信仰發顯と成格天照との關係……………天人萬有相互の信仰同化……………本來一體の天照發顯……………天人萬有の一體同根……………四五

第九節 天人萬有の活動と信仰の發顯……………四六

信仰と概念公準……………科學的信仰公準……………豫定認識と信仰の極致……………物質不滅……………勢力不滅……………理化學心理學道學哲學等の各自主觀的同化……………競爭の起因……………信仰と内外の修養鍛鍊……………信仰の發顯と成格の發達膨脹、及其活動飛躍……………人生宇宙と自己としての我……………愚一賢一聖一神……………本體神……………主腦神……………大本體神……………誤認と人生の輕視……………不會得と人生の重視……………及一蔑視……………四六

第十節 信仰と自滅不滅……………五二

信仰と恒有的實在的活動飛躍……………自滅と天人萬有の性體……………自滅の半面……………信仰と自滅自殺……………信仰變勢の動念動機……………信仰と不生不滅の根本大極……………生滅と現象的折半の術語……………不滅の半面……………不滅の妙境……………法體恒有……………佛性不滅……………勢力恒存……………物質不滅……………我としての性體……………成格……………天職……………現象的差別の折半的名稱……………不生不滅の大本體……………萬有的自己としての我……………大本體としての我……………油斷懈怠……………五二

第十一節 信仰成格の發顯天照と各自の關係競爭……………五七

成格天照の活動と個人的、家庭的、國家的、人種的、民族的關係……………劍銃的兵馬の競爭……………生産、起業、經濟、貿易の競爭……………學究的科學の競爭……………個人、家庭、國家の競爭……………智情意の競爭……………力一策一德一言一行一涙一笑一怒一喜一樂の競爭……………信仰の競爭……………分分の天照發顯……………五七

第十二節 成格競争の結果と信仰の到達……………五九

萬有各自の性體……………必然の結果……………我と他との同化……………根本大極の一定……………進歩と退歩……………自律他律の發達……………各自相應の實力的發達……………

第十三節 相互同化の由來と其終局……………六一

我と他との分際名稱……………同化不同化と天照的現象……………本來の同化……………實量―用―實在……………我と他との主宰非主宰的範圍……………我の大なる我……………善惡醜美眞偽の超絶……………本來同性一體……………同化中の我としての成格……………我たる成格の不滅……………魂體……………宇宙と大精魂……………五千萬人魂と日本魂……………愛蘭土魂―蘇蘭土魂―英蘭土魂―大不列顛魂……………無數の魂と一魂……………細肥魂と人魂……………一大魂の活動飛躍……………現象魂と本体大本體魂……………魂體の同化と不滅……………

第十四節 其のものと信仰の薰發……………七三

性體自然の醜態……………自己と信仰……………信仰の源泉活火……………天地と究明……………信仰と自國他國……………印度の梵天佛陀―支那の蒼天上帝……………歐米亞弗の猶太―基督―回回―拜火―埃及―希臘の大神多神……………各自相應の信仰……………信仰の結晶體……………信仰と大極……………薰發的信仰……………信仰的解釋……………解釋的實行……………

第十五節 信仰の發顯實行と心體の擁護發達……………七六

信仰と内外の發達……………全き信仰と心體の慰藉安泰……………信仰と時代……………信仰と自己としての我……………世界列國信仰の萎靡不振……………信仰と舊習古慣……………尊古排今……………天人調和の神道……………狹隘固陋の信仰……………信仰解釋實行の卓出……………恬慢輕薄の我見……………至誠先妄……………

愛と節制……………彼我の見……………列國の運命……………宇宙の大勢……………盛衰消長の大權……………絶大無比の我……………壓制と薄弱なる信仰……………自他平等の擁護……………成格天照の大極……………勤勉と懈怠……………

第十六節 信仰解釋實行の異同と個人家庭國家……………八七

根本大極の異同と歸一……………人生宇宙と本位……………人生宇宙の守護神……………人類相應の信仰教導……………信仰と調和……………調和と個人家庭國家世界……………人類目的應用の學理……………迂遠なる信仰教導……………個人家庭國家世界の取捨悦服……………新舊優劣の宗義學說……………一日の懈怠苦痛……………信仰の改善大成……………唯一の大道……………唯一の大本體……………古今究明の未定……………

第十七節 信仰的解釋實行と各自本体の天照的發顯……………九五

大本體と大還元……………自己信仰の威嚴……………彈撥―攝理……………懺悔―感化―同化……………分分の天職責任……………還元超樂の道……………

第捌章 大本體神と大なる我……………九八

本體的個人―家庭―國家―世界―大宇宙……………天人萬有と感化救濟……………人生宇宙と攝理統一……………信仰主體の究明會得……………信仰主體大主體としての實質……………附―幼年の舊作……………

## 第二書 信仰の主體

### 第玖章 終局目的と感得名稱の異同

大公準……………大目的

#### 第十八節 信仰の主體と各自の目的

信仰と主體……………感得……………慰安……………大目的大公準……………本體大本體……………還元超樂……………最終目的……………天人萬有の動靜……………活動飛躍と無爲乾燥……………

#### 第十九節 各自の信仰と主體の感得

信仰と生活的人類……………信仰と智情意……………經驗風俗……………歷史逸話……………感得……………直覺……………概念……………認識……………觀念……………悟……………入開悟……………天然自然の感應……………歸納演繹……………向上向下……………

#### 第二十節 主體感得の異同及其名稱

梵天……………佛院……………一神……………多神……………神火……………三位一體……………萬有神……………自然神……………汎神……………無神……………唯心……………唯物……………唯理……………一元……………二元……………多元……………一元二元觀……………預定說……………機會說……………合理說……………感覺說……………知識說……………常識說……………原子說……………單子說……………思辯說……………名目說……………混合說……………折衷說……………器械說……………目的說……………不可思議說……………解說……………人格的靈性……………無人格的立論……………主觀……………客觀……………先天……………後天……………信仰……………神秘……………實驗……………認識……………本能……………怪疑……………外道……………惡覺……………迷信……………墮落……………唯一無上の根本大極……………絕對無比の本體大本體……………

#### 第二十一節 根本本體大本體と各自の解釋

無數の根本大極……………過多の本體大本體……………研究的本體……………解釋的大本體……………習慣言語の文野高卑と四圍……………

## 目錄

目錄

### 第二十二節 各自の水掛論と三千年前後の現象

我のみの信仰解釋實行……………各自信仰解釋實行の大小長短……………不二同一の根本本體大本體……………山河萬里……………雲烟漠漠……………世界列國一目の中……………信仰解釋實行の起因……………範疇……………結果……………狹隘固陋的信仰の持續……………

### 第二十三節 信念の致一と各自相應の果報

信の一念……………二致……………彼我歸一……………道交超樂の道程……………同化と時間空間……………信仰と宗義の優劣……………目的と手段……………學問と實踐……………乾坤獨露と信念の蕭發……………冷嘲と墮落……………根本大極と神……………佛……………真理……………法性……………大道……………惡覺外道……………神と山河草木……………山河草木と感性覺性……………佛教の差別……………猶太基督教の殘酷……………各自同一目的……………運速の道程……………早晚歸一……………

### 第二十四節 救濟の道心と實義及、一方面觀

同一救世の道心……………實獻……………尊敬……………一局部の自覺……………會得……………究明……………

### 第二十五節 古今信仰の範圍と解釋實行の廣狹

完全の信仰解釋實行……………時代精神の動念動機……………完全なる信仰と後世の經驗發見……………信仰の矛盾動搖……………範圍廣狹……………

### 第二十六節 教條究明に於ける相互の敬禮と寬

容感化

比較的完全なる宗義學說……前宗義前學說……相互の立論……相愛の恩義情靈……前義説の刺激感化……評論と禮節……應分の眞實義……正義と邪道……同化外の同化……活感化……活教導……

第二十七節 大本體の不變と解釋の進歩

時代相應の信仰解釋實行……唯一無上の信仰的宗義……各自應分の信仰的宗義……人生の進歩と信仰の發達……事實上の自白……猶太教……基督教三位一體——新舊兩派——波羅門教——佛教——上座部下座部——小乘——大乘——論部の發達……印度佛教……支那佛教……日本佛教……東西古今學說の進歩……固陋自滅と進歩自覺……風發電擊……

第二十八節 時代相應の改善と後世子孫の責任

時代の變遷と弊害の改善……改善派……革命派……立教開宗……古人今人の分割……祖國的神話……萬宗教前學說の脱出……各自相應の果報攝理……遠志遠言……

第拾章 極成之信仰と終局之勝利

英靈的天照發顯……二十五億年の發達……三千年の遺傳……感應道交……世界列國古今の信仰解釋實行……批判論議と一局部……唯一無上の大極大本體と照應攝理……増補大成……總合統一……千百萬億の信仰解釋實行と融會致一……神——佛——眞如法性——眞理——自然——大道——元素——單子……内證の本來の一致……實の平等……量の差別……總合統一の代表者……反對の猛烈活火……圓滿極成的信仰の統一攝理……天照的代表體……感應會得の發顯……

自家成格の發達……快然同化……唯一無上の天照實義……正當體としての天職責任……天照尊顯中の天照發顯體……歡喜と憂愁……恩寵と大なる我……

第二十九節 信仰の薰發と内外の醞酵

人生宇宙と道交觀照……世界開闢……天祖降臨……人類發生……皇祖建國……列國興廢……道修調陶……宗義學說の比較……日本の當代……列國の趨勢……人生宇宙の活機……大本體の會得——救濟——攝理……感謝と恩寵……

第三十節 本体大本體之寵兒と造化秀靈之結晶

古今の變遷……純機劣機と大寵恩……感激と慚愧……勝絶推到……聖賢君子と某……發憤同化……遲疑兩態……根本大極化……

第三十一節 大本體天照の我と遺傳及前聖先哲の遺志と大成

異同分別……同一目的の同化……感想自覺……全身と人生宇宙……本体大本體其の……大寵兒……天人萬有と大寵兒……絶對不二の最高位……按群の大丈夫大烈女……虛心恒懷……信仰解釋實行の歸一……

第三十二節 大本體天照發顯の我としての所期

天照的英靈……人生宇宙唯一無上……天人萬有絶對不二……天照尊顯中の天照發顯……個人家庭國家世界宇宙の擁護啓發……天人萬有の攝理安全……責任天職……神明、佛陀、天使、豫言者、菩薩、羅漢、仙人、道士、聖者、賢人、哲士の同工異曲、總合統一の神勅天命……純機劣機至愚至痴の凡

兒……………天人萬有の成格責任天職。

第三十三節 列國古今の信仰解釋と某の信仰解釋……………六〇

東西古今の信條と差別……………野蠻未開の不成文的信條……………四書、五經、華嚴、阿含、經、律、論、教典、聖書、哲學科學の百科全書と、我としての信仰解釋實行の一部分……………根本大極の發顯したる我……………根本大極化したる我……………先頭第一の花冠……………自他の競争優劣……………自他の還元歸一……………瑞の大天照宮……………靈の最高位。

第三十四節 信條實行に於ける反對者の寛容と信仰發顯の競争……………六五

同一の根本大極……………同性同體……………體用と異相異別……………反影着色……………各自成格の保有と宣明感化……………實としての體……………量としての用……………自然の性體……………進歩發達の中絶……………大實在……………成格の大成。

第三十五節 有意味の競争……………七〇

對立の活潑と必然の結果……………警戒と盲動無意味……………一としての大なる我……………彼我一に歸するの道……………同根一體の現象……………蘭菊の雙美……………統一以外の統一……………大本體自然の大統一……………同外の同……………化外の化……………自然の大同化……………我としての天照發顯……………虚待と尊敬……………愛感と感化……………拘泥執着

第拾壹章 相互の開戦と信仰教條の實行……………七六

同一の信仰……………各自自國の擁護……………本有成格の天照的顯彰……………人奴奉國……………出刃閃劍……………

…三界の係疊……………枯木寒巖……………君王父母兄弟姊妹朋友天人萬有の敬愛……………信條發顯の根本國。

第三十六節 教條に發顯する我……………七七

彼我同化の我……………本體現象致一の我……………過程範圍の活動現象……………逆戈と仇恩……………自國と生死。

第三十七節 信仰と其國家の擁護……………八〇

大本體化したる我の信仰と各自の君父妻子兄弟姊妹朋友……………現在境遇の尊重……………信仰發顯の一印象。

第三十八節 信仰の自由と君父妻子の安養感化……………八一

信仰自由の理由……………自由と束縛……………一方の超出感化……………天人萬有の向上化……………終局の一致……………愛情理致。

第三十九節 信仰と恩愛……………八四

應用的權道……………同心同體の神咒……………安養的自覺……………我と五倫の關係……………樂園……………恩愛友誼……………報本反始……………信仰の犠牲。

第四十節 一人の心體致一と萬人の心體致一……………八八

羅群の一鰭……………成格威嚴……………言行品節……………釋然一體……………道心道行……………活火噴泉。

第拾貳章 平等差別の發展終結と個人家庭國家世界の分裂と統一時代……………九〇

平等—差別—統一—分裂……………同一の活動……………半面と全面。

第四十一節 平等差別、交叉と一致……………九一

平等中の差別……………差別中の平等……………平等歸差別……………差別歸平等……………轉化無極……………分質分量的名稱。

第四十二節 人類的分裂、統一と其進歩……………九四

人類と萬有との軌道……………本來の統一……………天上萬有の向上統一。

第四十三節 個人統一の時代……………九六

人類としての禽獸……………矛盾放埒……………學理實踐の整理。

第四十四節 家庭統一の時代……………九六

個人集合の代表體……………産業、勞働、道德、宗教の主觀客觀の整理。

第四十五節 國家統一の時代……………九七

家庭集合の代表體……………統一なき國家の運命……………列國の獨立。

第四十六節 世界統一實驗實修の時代……………九八

世界としての統一的主裁權……………個人家庭國家としての世界統一……………世界統一の第一期……………世界代表の人格的大主權者……………個人、家庭、國家的成格と、世界統一の關係……………健全なる信仰と實行、信仰と動脈主腦……………人生の複雜……………總合調和の衆力衆德……………世界統一の失敗……………其間の進歩發達。

第四十七節 世界統一の時代、及統一と混同との差別……………一〇五

世界統一と形式の變化……………對憲制度と郡縣制度……………世界唯一の大主權者……………各自の自治……………神智神德の大大主權者……………平等の成格……………秩序的平和的統一……………黃金時代—千福年—無政府……………世界と唯一人……………新形式新着色……………暗黒時代と人類の墮落……………統一と混同……………統一の半面……………分裂の半面。

第四十八節 時代變遷の歲月と、統一の終局、及地球體の進歩發達……………一〇九

個人統一と百千萬年……………家庭統一と百千萬年……………國家統一と百千萬年……………世界統一の百千萬年……………世界交通の時代……………群星界との競争と統一……………一太陽系統一の時代……………夢想と實踐……………大宇宙の統一……………統一の終局……………地球の進歩……………家庭の進歩……………國家の進歩……………地球の生命と人類生活との關係影響……………人地不二一體の大國魂命……………國常立尊……………地球と群星界との進退消長……………道德律の嚴格。

第四十九節 世界統一と信仰統一……………一一七

世界統一としての信仰統一……………原理原子としての制裁威力……………狐狸としての威力制裁……………宗教としての威力制裁……………超越の威嚴……………根本信仰の統一……………大競争……………大統一……………公明正大の活動飛躍。

第五十節 根本信仰の統一と各自の宗義學說との關係分際……………一二〇



統一と整理……………混同的誤認……………精神的學究的信仰の統一……………肉體的信仰の統一……………生命の灌頂……………到頭感化。

第五十一節 心體致一の發顯實行と宗教及科學の合體……………一二二

心體致一的統一……………哲學科學的の壓伏と同化攝理……………宗教と科學との一致……………宗教と科學の衝突……………別物と合體……………今日、我等としての責任天職……………信仰統一の一大花冠。

第拾參章 人生の天職と天照太神……………一二四

天人萬有の天職責任……………生命不變の鎮座靈境。

第五十二節 天職的五責任と後世子孫の模範……………一二四

統一と統一との關係……………人生宇宙の經過と茫然閉却……………個人の天職責任……………家庭の天職責任……………國家の天職責任……………人類の天職責任……………萬有の天職責任……………後世子孫の模範……………羽化登仙……………絕大不二の太神界……………人生宇宙天人萬有の不滅……………神の不滅……………大稜威天照の大覺悟大實行。

第五十三節 原子と成格と一致的稜威煥發……………一二七

絕對無比の清淨明靈……………唯一不二の大成格……………光明遍照十方世界的天照太神……………稜威普照盡宇宙の大天照太神……………小天照太神……………痛恨……………崇高幽玄の太天照……………宏壯雄大の太天活躍。

第拾肆章 本體現象と大本體及美醜善惡の發顯終結……………一三〇

一體……………二體……………一體としての二體……………二體としての一體……………生命の有無……………生滅……………不生滅。

第五十四節 現象本体の發顯と大本體との大天照……………一三一

現象本体の關係……………現象本体と大本體との關係……………天照大天照、活動大活動の極致。

第五十五節 大本體實在と生命及本體現象の活躍……………一三二

大生命と大實在……………實と量との兩面觀……………本體現象の轉廻歸一。

第五十六節 美醜の關又と一致……………一三四

美醜の相待と不二一體……………人身美……………形體美……………精神美……………歷史美……………一定の時間空間と變化……………裸體美……………淫猥の感……………南洋土人と文明の極致……………裸體的個人家庭國家世界……………立貨坊……………向上的表本……………形體美と精神美との交叉……………裸體美の誤認……………全美……………形式—宏壯—幽玄—崇高。

第五十七節 善惡の交叉と一致……………一四〇

善としての善人……………善としての惡人……………善惡の執着と解脱。

第五十八節 善惡兩性の實在的發顯と其歸一……………一四四

善惡の同巧美曲……………強守盜—毒殺及殺—自刃自害—善事大善事……………放任取捨の自由……………向上向下と超越……………停止一定……………一體の變化。

第五十九節 善惡の歸一と必然的結果……………一四七  
到頭向上同化……………善惡質最超越の至聖……………人類の平凡……………實踐實行。

第六十節 大本體としての大天照の兩面及其生滅不生滅……………一五〇  
空中の聲……………無善無惡の半面……………有善有惡の半面……………生不生……………滅不滅……………實量と體用……………水一波一風一不是。

第六十一節 大本體に對する諸説の缺陷と最後の汎心論……………一五八  
大本體の比喩……………究明の不足……………唯物一唯心一心物二元一缺陷と缺陷……………抱合と一致……………有形無形の葛藤……………調和と預定説一機會説一不可思議説一多元説一汎心論……………解答煩悶……………遁走自滅。

第六十二節 心物の融會一致と千古論争の一拭……………一六一  
英靈……………五官の分域……………有形無形の葛藤打破……………不二一體……………調和一完全なる調和。

第一項 心肉不二一體……………一六三  
心肉一體抱合の疑問……………詰問窮辯……………渾身英靈……………氣態……………固態……………有形無形の變化……………思想行為の矛盾と解決……………一體の英靈……………英靈變化……………前後の英靈……………感官的英靈……………同一不二の心肉融會。

第二項 良心と智情意の調和……………一六七  
古今東西良心論の不完全……………誤謬と訂正……………知識論一感情論一意思論一神心論一公準論……………古今慣用の名目文字……………是非判断の活動範圍……………半觀吟味の活動範圍……………實行決定の活動範圍……………活動強度の抽象……………智情意調和の活動狀態……………殘忍一暗愚一狐疑……………此心の不安……………調和と安心……………部分範圍の活動狀態……………全部全體の活動狀態……………此心と本心一本性一本善の性一佛性一神の心……………分準的原則と忠孝……………作用と調和……………心としての解釋……………體としての解釋……………心物致一の解釋……………氣態の活動狀態……………固態の活動狀態……………觀照致一の活動狀態……………英靈としての活動狀態……………心肉二元の誤謬……………常心と真心との誤謬。

第六十三節 本體大本體としての神に對する古今の諸信仰、諸解釋……………一七七  
本體神一現象神一物質神一心性神一理性神一原子神……………唯物一唯心一唯理説の破滅……………同一體の活動……………活動の或る範圍……………主宰の活動……………軌範的の活動……………堅硬的の活動……………獨立の物心理なし……………氣態固態の變化……………英靈の一體と感官の構衡……………小英靈……………大英靈……………大小不二の英靈……………神の實質。

第六十四節 庶物教と多神教……………一八三  
太古未開の時代……………日月星辰奇巖古木怪鳥怪獸……………人智の進歩……………神の所爲……………祖先偉人の崇拜……………天神地祇。

第六十五節 一神教と萬有神教……………一八四

最上の神……………唯一神……………一切神……………宇宙と神……………神と世界……………世界と神……………有神無神の反對觀……………神と世界との不二一體。

第六十六節 諸國の唯一神教と三教の唯一神教……………一八六  
別に神あるを認むる……………別に多神を認めず……………汎心論と汎神教。

第六十七節 唯一神教と汎神教……………一八七  
内存說……………超絶說……………人格的神……………無神論—自然神教—萬有神教と信神教……………萬有神教と汎神教との形式變化……………無神論と物質萬能主義—理性全能主義—崇高敬虔の情靈。

第六十八節 自然神教と萬有神教……………一八八  
嚴格なる意義……………唯一神教の超自然……………自然神教の萬有的軌範……………理性の宗教……………理性と論理的絶體……………哲學的見解……………眞如法性說。

第六十九節 諸教義の調和融會と總合統一……………一九〇  
唯一神教の偏黨……………生命なきの神……………活動なきの神……………一神—多神—本體—現象—同一の神……………人間神—一微塵神—日月風雨神……………分の神徳……………關係影響……………神徳應分の消長……………大小の神教……………不變的自然法則……………必然的良能……………萬有神教—汎神教—自然神教—唯一神教—多神教—庶物教—理性教—物質教……………或る程度……………同根一體……………動靜相待……………同質異體……………争論の愚……………抽象分別の範圍程度……………概念—觀念—合理—實驗……………矛盾衝突……………總合統一……………本來融會……………眞神……………眞神教……………人生の貢獻……………人—物—同靈……………同一英靈……………同一神……………天人萬有の極致……………信仰の異同と歸一……………全神—全神教……………實質の融會統一……………活動的範圍の狹隘固陋……………前途の大覺悟

大實行。

第七十節 信仰主體の大本體に對する諸學諸教の究明と不完全……………二〇四

最後の大問題……………大本體神の實在。

第一項 唯一神教の不明……………二〇五  
神と宇宙との關係……………不可思議……………神秘……………缺陷。

第二項 汎神教の不明……………二〇六  
宇宙の外……………無邊無限……………腹内臟腑……………内存說の妖怪……………天人萬有の無表準……………缺陷。

第三項 萬有神教の不明……………二〇六  
神の四圍……………宇宙の外の宇宙……………面貌を有せざる怪物……………天人萬有の表準點……………進退なき神……………活動なきの神……………自滅の神……………不完全の曝露……………缺陷。

第四項 庶物教多神教の不明……………二〇七  
庶物教と本體神……………進歩したる多神教……………一神と多神との分際……………實在的解釋の缺陷。

第五項 無神教の不明……………二〇八  
眞如法性說……………理性教……………物質教……………怪疑說……………因果的、細胞的、無人格、人格的信仰……………佛教の因果無人……………周易大極說—一氣說—一氣說—氣中有理說、理中有氣說……………

……道學の自然無爲説……………哲學的科學的物質恒存—勢力又は理性不滅……………難問窮答  
……一部の解釋……………缺點……………全般の解釋……………全元的解釋……………全神的究明。

### 第七十一節 日本民族の信仰、解釋、實行

全神的發達……………天御中主太神と大木體神……………本體神と二尊……………理象神と八百萬神……………  
彼此應分の神威神徳……………水火の體用と効果……………同一神……………同殿共床……………親本反始……………  
……天人感應の神道……………支那、希臘、埃及等、全神的の萌芽……………神國的信仰と渡來の傳教佛教……………  
……體察同化……………國家と大國魂命……………地球と國常立尊……………天體と天常立命……………和魂  
——荒魂——奇魂——幸魂……………實質的解釋の不明……………全神教的の進步。

### 第七十二節 歴史的異名と同一の解釋、及、特寵と

#### 證明

同一大極の分斷……………同質異量……………東西古今民族各自の感得的尊稱と言語風俗……………根本大極の  
同一……………目的の同一……………人生宇宙の同一……………同一人類……………發願身—天照體……………  
平等の恩寵……………感得—證明—實行……………放逸惰慢……………自覺的信仰……………自覺的解釋……………  
……躬踐的實行。

### 第七十三節 恩寵と天誅神罰

天地秀靈の中國と支那民族の墮落……………一天四海の名門と婆羅門族の末路……………十方諸佛の贊歎教と釋  
迦族の滅亡……………混合的印度教……………天帝特寵の猶太民族と亡國……………特寵ある基督教 公法の恩  
澤……………基督教徒としての露國の連敗—天事人事の失敗……………非基督教徒としての大日本國の興隆……………  
……天孫神子としての日本民族……………永久的特寵の專有……………特寵と勤怠……………後世子孫の光榮。

### 第七十四節 當體正身の二天照と愚兒偉人

精神の天照……………肉體の天照……………神として當體正身……………世界唯一無比の信仰……………實行—  
感化—推服……………心體不二の天照……………四圍上下の文物究明と同化……………特寵と自己……………言  
語名稱の執着……………天人救済の大旭旗……………萬有の隨一としての位置……………古今一貫の大威嚴……………  
信仰主體の解釋實行。

### 第拾伍章 全神教と全神教趣としての大日

#### 本世界教

三千年以前の信仰解釋實行……………三千年以後の人類生活發達の狀態……………全神教出顯と時代必然の結果……………

### 第七十五節 全神教と世界の將來

諸學諸教の總合統一……………一大表顯體……………分分活動……………釋然融會……………新生命の大靈潮  
……各目的復活飛躍……………反抗と自滅……………世界の大勢……………大嘉樂—大法樂—太大神樂……………  
……全神教の大威力……………天人萬有の慰藉—感化—救済—攝理—同化—還元—超樂—天照……………  
全神教としての大主體と名稱—信仰解釋實行の神典神儀神律。

### 第七十六節 全神教趣と大日本世界教

本體大木體の會得……………自己の那的—何事を爲すべき乎……………宇宙萬有の何物……………教へつ教へら  
れつ……………各目的激勵……………各目的天照……………本體顯彰教……………天照大神教……………全神教  
趣大日本世界教……………萬有攝理發露教……………大木體神と鏡根劣機至愚至痴の凡兒……………大木體神の天  
照當體……………大日本世界教大照天神宮……………全身宮—家庭宮—國家宮—世界宮—宇宙宮—自己神—家庭

神—國家神—世界神—宇宙神……………大日本皇國と世界の天照感化統一。

第七十七節 全神教趣としての冠國的世界教……………二三四

大日本世界教と自貢尊大の誤解……………恩愛紀念の地……………萬有通有の性體……………名と實との取捨……………大瀆世界教—大不列顛世界教—大獨逸世界教—大印度世界教—大米世界教……………列國的世界教……………自我的自國的自他平等的世界教……………人生教—萬有教—宇宙教—全神教の極意……………大日本世界教の大本意。



大日本世界教宣明第一書第二書目錄了

大日本世界教

川面凡兒謹述



宣明第一書 信仰

第壹章 信仰と人生宇宙

「信仰は人生宇宙發顯の源泉なるぞ。人生は一言一行一事一物なりとも、信仰なくしては發顯せぬものぞ、信仰なくては目的定らず、目的定らずば希望も起らず、希望起らずば實行もせぬものぞ。その一言一行は信仰する所の目的希望のあればこそ發しもし、起りもすれ、一事一物も信仰する所の目的希望なくては、成就すべきものでない。」「信仰は人生萬業の源泉なるぞや、人生の花園は、實に信仰の源泉に潤澤して、萬業の精彩芳香を煥發する者ぞ。」

人生はその一言一行一事一物に信仰目的希望のなくてはならぬが如く、其の一身にも

一身の信仰目的希望なかるべからず、一家には一家の信仰目的希望なかるべからず、一國には一國の信仰目的希望なかるべからず、一世界としては一世界の信仰目的希望なかるべからず、大宇宙としては、亦固より大宇宙たるの大信仰大目的大希望のありて存するものぞ。

## 第貳章 信仰の終局

故にその一言一行一事一物に對して、一身一家一國一世界に對して有する所の信仰目的希望は、亦その終局する所なくてはならぬものぞ。換言すれば、その一言一行一事一物一身一家一國一世界に對して有する信仰目的希望の終結する所の「大信仰」大目的「大希望」のなくてはならぬものぞ。是れ實に「信仰中の信仰」目的中の目的「希望中の希望」にして、「人生宇宙終局の根本大極」たるものぞ。今夫れ我がこの一身は、獨り一言一行一事一物に關聯するばかりでなく、一家一國一世界に關聯すると共に、萬有と宇宙とに關聯しつゝあるものなるぞ。されば、單に人生に對する信仰目的希望のなくてはならぬばかりでなく、更に宇宙萬有に對する信仰

目的希望のなくてはならぬと共に、亦その「人生宇宙の萬般に對する信仰目的希望の終局する大信仰大目的大希望」のなかるべからざる所以なるぞ。

## 第參章 根本信仰と人生の行動

今越に宣明する所の「信仰」とは、這的「大信仰」を意味するものなるぞ。這的「大信仰」とは、「人生宇宙の終局する根本大極」を目的とする大公準なるぞや。人生の一言一行一事一物は云ふまでもなく、個人としても、家族としても、國民としても、人類としても、更に家庭としても、國家としても、世界としても、渾て這的「大信仰」より割り出し來るものぞ。亦その茲に歸り宿るものなるぞや。されば、天人萬有の成格は、這的「信仰の如何」に依りて、發顯活躍し進退消長する者にして、人生百般の行動は、這的「大信仰の如何」に依りて決定發顯するものなるぞ。這的「大信仰」は、實に天人萬有が隨處に於ける、各自の成格を天照發顯する大主腦大動脈なるぞ。允に是れ人生宇宙に於ける「信仰中の信仰」なり、「信仰中の信仰」たる根本信仰なりと知れや。

「人生」は「宇宙の證明」なり、「個人」は「萬有の左券」なり、個人を以て萬有を知り、人生を以て宇

宙は知らるゝものぞ。個人を知り、萬有を知り、人生を知り、宇宙を知らざれば、人生宇宙としての個人萬有が天照發顯する分際に於て、百般の疑惑は、その分分際際毎に惹起して解け去らぬものぞ。然り、我身の一舉一動に先づ以て危懼と疑惑との存するものぞ、不平不満の盡きせぬものぞ。疑惑し危懼しては、立命すること能はず、不平不満にては、安心すべきものならず。さりとは、何條その精神肉體の慰藉安泰が得らるべきものぞ。是れ實に人生の最大不幸にあらずや。されば、この疑惑と危懼とを一拭し、不平と不満とを盪滌して、慰藉安泰の安身立命を得るのは、實に這的、根本信仰の信仰と解釋と實行とに依りて護得せらるるものなるぞ。護得しては、人生宇宙の危懼疑惑よ、廓然融會し、夷然洞達し、其處に無限の慰藉あり、安泰あり、心廣く體<sup>からだ</sup><sub>に</sub><sup>あ</sup>け<sup>か</sup>か<sup>か</sup>り、その成格を隨處に天照發顯し、八方に活動飛躍し、その根本信仰の目的公準とする終局<sup>しうきよく</sup>に、根本大極の本体大本體<sup>ほんたいほんたい</sup>に到達還元することを得る者なるぞ。されば、信仰の如何は、最も其の成格の發顯天照に大影響する者たるを忘れなよ。

第一節 信仰之發顯及満足——又手その信仰目的希望と云ふ者は、いかにすれば満足する乎と云ふに、如何なる信仰でも、目的でも、心に信仰する所を體に發

顯し心に目的とし希望とする所を體に發顯し、體に發顯する所は、悉く心に妥協融會し、心と體とに、一點の障礙なく、阻隔なく、釋然として、觀照一致する時は、心廣く體<sup>からだ</sup>に<sup>あ</sup>け<sup>か</sup>か<sup>か</sup>り、心と體との二致なく、不二一身として、全然満足するものぞ。心に信仰して目的とし希望とする所を體に發顯するを得ず、體に發顯する所のものは、心に背戻して妥協せず、心と體との全然別途に出で、表裏相互に障礙し、前後相互に阻隔して、融會致一すること能はざる時は、其の身は決して満足すること能はざるものぞ。

第二節 信仰之不發顯及缺陷——「我」とは、或る意味に於ては、心と體との致一的活動を云ふものぞ。心體致一の活動を爲すこと能はずば、我の吾たる成格本領を發顯天照すること能はぬものぞ。そは其の心に思ふ所は、體に行ふこと能はず、體に行ふ所は心に戻るなり。思ふ心は體に行はれず、體に行ふ所は心に戻るものとせば、其の不快不満は、いかゞであらうぞ。是れ決して、我の吾たる本領成格を天照發顯し得たるものでない。

かく心と體との常に阻隔し背戻して、融會致一の活動を爲すこと能はず、我の吾たる成格本領を天照發顯すること能はぬものとせば、よしや、其の身に什麼なる信仰

目的希望を有するとも、朝な晝な夕なとも、そら限りなの怨恨を抱きて、不快不満の絶えざることいかにばかりぞ、其の胸中は常常窃に悶え苦しむこといかにばかりぞや。

#### 第四章 心體致一の信仰發顯と人類處世の大經

信仰とは、獨り心にばかり有するにあらで、直に其の體に天照發顯せねばならぬものぞ。其の信仰を心と體とに妥協融會して、致一的天照發顯あるは、是れ正敷、心體不二の天照的活動飛躍にして、我の吾たる成格本領を天照發顯したるものなるぞ。切言すれば、心體致一の活動飛躍を以て、我の吾たる成格本領を天照發顯するは、人類處世の大經なるぞ。

第三節 信仰之發顯と人格——心に信仰目的希望する所を體に發顯し、體に發現する所は、心に妥協融會して、心體不二一身の天照活動を爲し得る者は、これぞ是れ、言行致一の人にして、我の吾たる成格本領を遺憾なく天照し發顯し活動飛躍したる者なるぞ。此を之れ、健全なる人格とは云ふぞよ。其の、信仰に大小廣薄深淺高低こそあれ、人格としては、各自皆それ相當の英靈あり品韵あり、潑潑として

活躍し、颯爽として氤氳し、恰もそれ百花の春風に薫するが如く、千草の秋露に光るが如く、天真爛熳たり、風致玲瓏たり、各自隨處に、その特有の成格本領を天照發顯しつゝあるものなるぞや。

夫れ既に「健全なる人格」とは、言行の致一を意味するなり、その「言行の致一」は、「心體満足」の極致なるぞ。心に信仰する所は體に發顯活動し、體に發顯活動する所は心に妥協融會し、心體相共に全然一致して満足する極致に達したる者ならでは、斷じて「健全なる人格」とは云はれぬものぞ。

言行不一致の人人は、心廣く體からだに満足することの出来ないものぞ。そは其人必ず信仰の薄弱なる缺陷あるに由來するものなるぞ。見よや、信仰薄弱なる人人の常として、其の心に信仰することの的確堅固ならざるを以て、必ずしも體に發顯すべしとはせず、發顯せしむる所の信仰猛烈ならず。故に其の心に信仰する所も體に發顯せしむること能はず、活躍せしむること叶はず。従ふて體に發顯活動する所は、心に矛盾し背戻し。その心と體とは日に夜に時時刻刻に、障礙し阻隔し、障礙しては怨恨し、阻隔しては忿怒し、忿怒怨恨の極は、不平不満に堪えず若しくば、



八  
慚悔煩悶にかりまくられつゝ、我と吾が身の處置に苦しむ者にして、哀と云ふも愚かなりや。是れ實に信仰薄弱にして、心體致一の活動飛躍を爲すこと能はざるよりして、健全なる人格を天然發顯すること能はざる者なるぞ。

第四節 信仰之發顯と家庭——健全なる人格は、健全なる信仰の發顯に依りて天照するが如く、健全なる家庭も、亦健全なる信仰の發顯に依りて成立する者ぞ。全體——一家は夫婦、親子、兄弟、姉妹等の同心同體なる和合團結あるにあらずば、健全なる家庭は成立し得べきものでない。その同心同體の和合團結とは、正敷信仰の發顯を意味する者なるぞ。一家に於ける夫としての信仰目的希望及び其實行を同ふする婦にあらねば、夫婦の和合は期しかたきものぞ。父母としての信仰目的希望及び其實行を心とし體とする子孫ならでは、親子の平和は期しがたきものぞ。夫としての信仰目的希望及び其實行は、直に是れ婦としての信仰目的希望及び實行にして、婦としての信仰目的希望及び其實行は、亦直に夫としての信仰目的希望及び實行にしてこそ、茲に初めて、同心同體の夫婦とは云ふべき者ぞ。父母の信仰目的希望及び其實行は、直に是れ子孫たる者の信仰目的希望及び實行にして、子孫の信仰

目的希望及び實行は、亦直にその父母たる者の信仰目的希望及び實行にして、茲に初めて、同心同體の親子兄弟姉妹とこそは云ふべきものぞ。此の如き、同心同體の信仰發顯は、實に是れ、健全なる家庭の基礎なり、成立なるぞ。さりとは、亦夫婦としての不和も起るべき餘地なく、親子としての衝突も生ずべき餘地がない、内は已に此の如く和合團結するものを、何條その外に對して危険のあるべきや、外に對しては其の步調、亦井然として紀律あり秩序あり、毫も他より乘ぜらるべき寸隙がない、見よ、その家風は嚴然として巖の如く、徐に郷黨を推服し、町村を感化するに足るものぞ、健全なる家庭とは、此の如き英靈發顯の家風家格を意味するものなるぞよ。若し夫れ夫の信仰目的希望及び其實行と、婦たる者の信仰目的希望及び其實行とが和合一致せず、兩者相互に背戻阻隔する時は、雙方の不平不和忿怒怨恨あるは、自然の現象なるぞ、當然の結果なるぞ。父母の信仰目的希望、及其言行と、子孫たる者の信仰目的希望、及其實行との和合一致せずして、常に背戻し阻隔する時は、其の意思感情は亦伴ふて背戻し、一舉一動の言行も阻隔し、彼れ我れ相互に衝突の絶間なく生ずると、亦それ自然の現象として、當然の結果なるぞや。是れ猶一人として、其の心

と體とが、表裏阻隔し、前後一致すること能はずして、健全なる人格を天照發顯し、活動飛躍すること叶はぬのと一般ぞよ。さりとは、健全なる家庭を斷然組織すること能はぬものぞ。蓋はその内に於ては、各自の感情意思言語動靜が相互に衝突し混亂し背戻し阻隔すべく、外よりは乘すべき破隙の絶間がなきものぞ、之を稱して、病的家庭とは云ふぞや。かゝる家庭は、尤に信仰の薄弱にして、其家庭的精神としての統一的和合的團結力の魔痺消耗したるに由來する者なれば、その郷黨町村に向て畏敬愛慕せらるべき英靈なく紀律なきものぞ。是れ決して威嚴なる家風家格を發顯し活動し得るものならず、知れや、同心同體は、正に是れ、家庭組織の大經なるぞや。

第五節 信仰之發顯と國家——健全なる家庭は健全なる信仰の發顯に依るか如く、健全なる國家も、亦健全なる信仰の發顯にあるものぞ。一國の統治者たる人の信仰目的希望及實行との其の臣民たる者の信仰目的希望及實行とは、同一不二たらざるべからず。統治者としての信仰目的希望及實行は、直に是れ臣民としての信仰目的希望及實行にして、臣民としての信仰目的希望及實行は、

亦直に統治者としての信仰目的希望及其實行たらざるべからざるものなるぞ。換言すれば、統治者の心は直に是れ臣民としての心、臣民としての體は、直に是れ統治者としての體たるが如く、同心同體としての統治者と臣民とにして、茲に初めて、國家の統一は期すべく、健全なる國家は建設せらるゝ者ぞ、知れや、同心同體は、實に是れ、邦家建設の大經なるぞ。

若し夫れ統治者の信仰目的希望及其實行と、臣民の信仰目的希望及其實行との妥協一致せず、雙方の意思感情が、相互に背戻し、相互に阻隔しては、上下の衝突不和、常に續出群起するものぞ、常に續出群起せずとするも、一旦邦家緩急の際には、必ずや爆發し、外患の禍機ある毎に、内憂の危機は伴ふて止まざるものなるぞ。其外貌は如何に勇壯活潑たるか如きも、其内部は常に衝突の慢性痼疾して、一種の不快憂鬱は、絶えず統治者と臣民との腦中に潜伏し、胸底に秘藏しつゝ、あるものぞ。是れ之を稱して、病的國家とは云ふべく、健全なる國家とは云はれぬぞよ。

第一項 統治者と臣民との同心同體——統治者の心と體とは、臣民の心と體として、臣民の心と體とは、統治者の心と體として、茲に初めて、同心同體の君民と

は爲す者ぞ。此の如き同心同體は、上下信仰の致一不二にして、初めて天照發顯する者なるぞ。此の如き同心同體の統治者と臣民とはまさしく同心一體なるぞ。統治者は直に是れ臣民、臣民は直に是れ統治者にして、臣民と統治者との差別はない。統治者の休戚は臣民の休戚にして、臣民の休戚は統治者の休戚なるぞ。故に臣民としての休戚を見ては、直に統治者としての休戚とし、統治者としての休戚を見ては、直に臣民としての休戚とし、上下相互に擁護するの行動に出で、臣民は其心と體とを犠牲として統治者に貢獻し、統治者としての安泰を擁護すべきものぞ、擁護するものぞ、擁護せねばならぬものぞ。統治者は亦其心と體とを犠牲として臣民に賦與し、臣民としての安泰を擁護すべきものぞ、擁護せねばならぬものぞ、擁護するものぞ。統治者としての一舉一働は總ての臣民に影響する者にして、總ての臣民の一舉一働は亦悉く統治者に影響するものなるぞ。已に統治者と云ふ時は國家其物ぞ、國家と統治者との別はなきものぞ。そは統治者としては國民一般を代表したる身なり、千百萬人を合體したる身なり、直に是れ國民其的の身なりけり。故に國民たる者は統治者を我身として之を愛し之

を敬せねばならぬぞよ、統治者としては亦その國民を我身として之を愛し之を護らねばならぬぞよ、相共に他人視すべからざることを、必然の結果ならずや。

第二項 國家と臣民と統治者との關係 全體國家とは地域を一定して民族の集合獨立したる生活の統一體なるぞ。人類としては、心の慰安と體の健康とを保有し發達して、その自由幸福安寧を護得せねばならぬものぞ。故に其血脈言語習慣風俗を同ふし、其信仰目的希望實行を同ふする者が、茲に集合し發達して民族を爲し、其民族の居住する所の地域を一定守護して國家を建設し、心の慰安と體の健康とを保有し發達ならしむるが爲に、更に秩序規律を設定し、其民族生活の獨立的威嚴を發顯するものぞ。故に、國家とは一定したる地域に民族集合して獨立の紀律威嚴を發顯したる生活的統一體にして、其統一體を「人格的に代表したる者が」、統治者其人なるぞ。されば統治者と云ふ時は、直に國家其物なるぞ、民族其物なるぞ、民族其物と統治者とを別物とは見るべからず、國家其物と統治者とを別物とは見るべからざるものなるぞ。已に民族と云ふ時は國家なるべからず、已に國家と云ふ時は必ず統治者のあるべきものぞ、なかる

べからざる者なるぞ。

只それ「民族」とは、集合的生活の團結體なるを以て、個個別別に分離する時は、其資格は變じて、個人個人たるの資格を出し來るなり。然れども、個人」としては、個個的分立の資格にして、民族」としては、集合的團結の資格なり、全然相反するものぞ。故に民族と云ふ時は、集合的團體にして、個人としての資格は認めぬものぞ、且つ夫れ民族とは血族的種族の統一體にして、未だその統一體としての實を擧るの活動力はなきものぞ。統一體としての實を擧るの活動力は、其、統一的獨立の國家を組織せねばならぬぞよ。國家を組織し得て、初めて獨立の活力を有し。その統一體としての實を飛躍することを得るものぞ。知れや、未だ國家を組織し得ざる民族は、其、獨立の活力を有し得ざるものたることを。故に「國家」と云ふ時は、集合的の民族の獨立の統一體にして、個人としての資格はなきものぞ。奚ぞ矧んや、統治者としては、其民族國家の全體を人格的に代表しつゝ、ある者なれば、一個人と云ふ資格は斷じてなきものぞ。

最も不可分割なり。蓋し國家は、大なる有機體なるぞ。個人として民族として、及び其所有する山河風土、牧畜生産起業等は、悉く之れ細胞也、筋肉也、骨格也。國家」とは、實に個人民族山河風土、牧畜生産起業等の細胞、筋肉、骨格等を以て成立活動する者なるぞ。成立して、獨立自營、外交不羈等の五官的肉體、意識的精神作用を發顯する者なるぞ。その國家を、人格的に代表したる者は、統治者是也。統治者」とは、直に是れ、國家其物なるぞ。只それ民族中個人としては、分割的なり、分割的なるが故に、個個別別の資格を生ずるなり、譬へば各細胞及五官手足等の各自が、各自に個個の個性を有して、分分に發顯活動するが如きものぞ。故に個人として、國家に對し統治者に對する時には、個個別別の資格あり、道德彝倫、權利義務等の生じ來る所以なるぞ。是れ猶ほ眼識とし、鼻識とし、耳識とし、舌識とし、筋識としては、各自にその官能の存するが如きものぞ。

然れども、國家としては、分割すること能はず、猶人身としては、分割すること能はざるが如きものぞ。眼を分割し去れば、不具となる、鼻でも耳でも手でも足でも分割すれば、人身としては、不具なるぞ、健全なる人身とすべからず、人身としての

分割すべからざるが如く、國家としては分割すべからず、分割すれば健全なる國家としての發顯活動は爲すこと能はざるものぞ。是れその「統治者」と云へば、直に「國家其物」にして、一個人としての資格は、斷然之れなき所以ぞや。

民族が國家を組織して國民となりたるからには、其統治者は直に是れ自己集合生活の獨立的統一の代表體なるを以て、其休戚は方にそれ國民としての休戚なるぞ、其一舉一動は直に是れ國家としての一舉一動なるぞ。故に統治者としては、其身の心體を以て常にその國家としての心たることを失ふことなく、國家としての體たることを自重して、よしや、その一言一行だも謹嚴正直ならざるべからざると共に、その臣民としての一舉一動を監視督勵して、其一舉一動を喜憂し、其の休戚禍福に向ては、全身の心體を犠牲としてまでも、守護せざるべからざる次第なるぞ。是れ蓋し其臣民を守護するは、其の反面に於ては、亦是れ自己其の的を守護するものなるぞ。「護國愛民」とは、正に是れ這底を意味するものぞ。「邦家鎮護の道」とは、確に這的を意味するものなるぞ。國民としては、亦その一舉一動を忽にせず、其の身の心體を以て、常に克く國家の一細胞一精神として、各自の

心と體とを愛重すると共に、統治者としての一舉一動を望視して、其の一舉一動を喜憂し、其の休戚禍福に向ては、國民一般の心體を犠牲に供してまでも、貢獻せざるべからざる次第なるぞ。是れ蓋し統治者を擁護するは、亦必竟其の反面に於ては、自己其物を擁護するものなるぞ。「愛國」とは正に此の的を意味するものぞ、「忠君」とは確に此の的を意味するものぞ。更に、邦家擁護の道とは、正に這的なるぞや。

第三項 信仰の同心一體と忠君愛國、忠君愛國とは、君民同心一體の崇高なる雄大なる、更に硬直摯實なる理性情靈よりして感應煥發するものなるぞ。これこの崇高雄大硬直摯實なる同心一體の理性情靈ありてこそ、至誠克く其君に忠忱を盡し、愴慨允に其國を愛護し、君國の爲として、全然其の心體を貢獻し、渾身直にその犠牲たることを辭せず惜まじとして永棄するに至るなれや。而後、初めて健全なる國家は建設せらるゝ者なるぞ。

さて、その崇高雄大なる、硬直摯實なる同心一體の理性情靈は、いかにして發顯し、いかにして養成せらるゝ者なる乎と云ふに、是れ全く、信仰の同心一體的に天照

發顯したる結果なるぞ。統治者の信仰目的希望實行と、臣民の信仰目的希望實行との夷然融會し、廓然同化して、致一不二なる時は、正に是れ、同心一體の信仰なるを以て、殆ど統治者と臣民との差別がない。その同心同體の信仰を、人格的に代表發顯し居るは、統治者にして、一般國民はその統治者としての人格中に包有含蓋せられあるものぞ。然り、一般國民は山河風土生産牧畜等と共に、細胞として、骨骼として、皮肉として、五官精神として、國家的人格の統治者を形成しつゝ、あるものなるぞ。故に一般國民は臣として民として、其統治者を奉戴し擁護する以て、唯一無上の天職責任なりと心得居らねばならぬぞや。然り其臣民としては、是れ、唯一無上の天職なり責任なるぞ。その心體を犠牲としても、其天職を盡さねばならぬものぞ、責任を果さねばならぬものなるぞ。然らざれば、其民族として國民としての、集合的獨立の生活的統一體を維持すること能はず、其獨立を失ひ、秩序を失ひ、網常茲に亂れて平和の光なく、遂には一般國民の心體に於ける自由安寧幸福等をも、個人としての自由安寧幸福までも、毀損するに至るぞよ。さすれば、必竟國民としてよりも、寧ろ個人としての自己其物の成格さへ發

顯すること能はざるに至るなり。故に「忠君愛國」とは、同心同體の信仰的發顯にして、茲に初めて全き稜威立明をば、照らし輝かすことを得る者なるぞ。是れ蓋し君王なき時は國家なき時ぞ。國家なき時は、是れ紀律なし秩序なし。紀律なく秩序なくんば、兇徒直に横行し、世は忽地弱肉強食の魔界に化するものぞ。かくては獨り家庭としての平和を維持すること能はざるのみならず、個人としての自由幸福をも保有すること能はざるものぞ、心としての慰藉さへ、體としての安泰さへ期すること能はざるに至るものぞ。さればさて、君王あるは個人の爲めなり、國家あるは家庭の爲めなるぞ。「忠國愛國」とは決して獨りその君王國家の爲めのみならず、盡すものと思ふべからざるぞ、統治者としての君王は、家庭國家を代表し、個人家族國民を代表しつゝ、ある者なれば、其君其國に盡すは、却て是れ其家其身に盡す所以のものなるぞ。是れ其身に盡すは個人としての天職責任を果すものにして、個人としての天職責任を果すは、是れ家族としての天職責任を果す者ぞ、家族としての天職責任を果すは、是れ國民としての天職責任を果すものぞ。國民としての天職責任を果すは、是れ人類としての天職責任を果す

ものぞ。人類としての天職責任を果すは、是れ萬有としての天職責任を果すものなるぞ。更にその分分の天職責任を果すは、其實 $\parallel$ 又それ個人としての我を發顯し、家庭としての我を發顯し、國家としての我を發顯し、世界としての我を發顯し、宇宙としての我を發顯する天人萬有、自然の性情體用なるぞ、天職責任なるぞ。されば「忠君愛國」とは單に其君に盡し併せて其身に盡すてふ一種の感情感想より發したる者とは思ふべからず、天人萬有、自然の性なるぞ、情なるぞ、體なるぞ、天職責任なるぞ、そのいかに崇高雄大にして硬直摯實なる理性情靈より薰灼煥發したるものなるかを知るべきぞよ。

第四項 信仰の同異と君民の關係 $\parallel$ 統治者と臣民との信仰にして同じからざる時は、是れ異心なり、同心でない。同心でないとすれば、各自は各自の信仰する所に向て、公準を尋ね、慰藉安泰を求め、心體發顯活動の動念動機を茲に惹起するものぞ。それ已に信仰する所の根本本體に於て異なる者ありとせば、相互の精神的慰藉は異にして、その肉體的行動に影響することも尠からざる次第なるぞ。國民としては、現在信仰を異にする統治者をば、同心なりと認むること能はず、同

心でない以上は、その異心たる統治者を以つて、直に是れ $\parallel$ 自己なりと、 $\parallel$ 自己の代表者なりとして $\parallel$ 認むることも能はぬものぞ。而も今この異心の人を奉戴して統治者なりと尊敬し擁護せざるべからざるは何故ぞ。其の國民としては、いかにその心の不快なるよ。統治者としても亦現在信仰を異にしたる國民を視て、同心同體の臣民とは思はれず、日夕不安の念に堪えぬものぞ、而して雙方とも一種異様の關係を生ぜざらんとするも能はず、いつとはなしに積り積りて、相互に意思の背戻し、感情の阻隔し、遂に卒に衝突の已むを得ざるに至るものぞ。

第五項 異心合體と國家、及統治者との區別 $\parallel$ 其の信仰を同ふする者が相集りて一團一團と團結するは、人類としての性情なるぞ。而も同心なる者同體たること能はずして、異心なる者と合體たらざるべからざるに至る場合は、是れ實に「已むを得ざるに出でたる現象」にして、其の性情の自から求めて然るにはあらざるものぞ。 $\parallel$ いかに信仰を異にする者なりと雖、その體的制裁の猛烈苛酷にして、自己を壓伏し來る時は、如何ともすべからず。その外容の體は、壓伏的制裁者に服従せざるべからず、いかに其の心には安んぜずとも、已むなく服従して其臣民

とはならざるを得ず。而も是れ心服にあらざ、體のみの追従なりとす。其の亦他を壓服し得たる統治者は、統治者として、其民衆を臣民とするも、是れ唯だ體制し得たる迄にして、心服し得たるにはあらぬぞ、是れ之を、異心合體の君民とは云ふなるぞ。

「異心合體の君民は、其の統治者を一人として觀ずるには甚だ困難なるものぞ、その合體とは、外部丈にして、内心は別物なればなり。心の別別なる者をして、體を一致せしめんとするは、尤に、六ヶ敷次第なるぞ。而も體を一ならしめざれば、國家と云ふは成立せぬものぞ、統一なければなり。統一なき民族山河は國家にあらざ。故に統治者としては、干戈を以て其體を制裁し、法律を以て其行爲を制裁し、以て其統一を期するなり。其臣民となりたる一方の者は、干戈に抗する能はずして臣民とはなりたるなり、法律に制裁せられて臣民とはなりたるなり、敢て心まで臣民とはなり居るにはあらぬものぞ。されば、機會だにあれば、必ずとも、別に、信仰を同ふする同心同體者を尊敬して、其の「統治者」に奉戴せんとするの一念あり、その一念は常に間斷なく生じつゝあるものぞ。さて又一方の干戈

を以て、若しくは、法律を以て、他を制服し得たる統治者としても、其の「外貌的肉體」のみを制服し得たるにて満足する者にあらざ、機會だにあらば、自家の信仰する所に歸順せしめて、内容的精神をも安服せしめ、共に以て、同心同體の臣民たらしめねば已まれぬものぞ。

抑も萬有は分離すれば集合するの性ありて亦集合し、集合しては分離するの念を發して、亦復、分離するものぞ。萬有の一たる人類も、異心異體に分裂したる時は、必ずや亦各自に、同心同體たらんことを期す、同心同體たること能はざれば、少くとも、異心合體たらんとして其の實行を期するものぞ。故に根本的信仰の同心同體たること能はざる時は、少くとも、他の利害休戚を同ふする主義問題を以ても合體せんとするものぞ。目前に利害休戚を同ふする主義問題あれば、假令以異心者なりと雖、その目前に利害休戚の急なるが爲には、相互に抱擁して合體するものぞ。例へば政治問題に於ても、科學的學術問題に於ても、將た實業上設計問題に於ても、目前の利害を同ふし、直下の休戚を均ふするが故に、彼我合體するものぞ。異人種の間にて、國を異にする民族間に於ても、目前の利害休戚に



迫せられては聯合もするぞ、同盟もするぞ、爰ぞ矧んや、同國同族同人種の關係ある間に於てをや。それ已に一局部の利害休戚にても、目前に於て其影響を同ふする時は、人類の總ての種族階級を論ぜず、悉く皆その異心者たるをも寛容して、相互に合體するものなるぞ。

されば、いかに、異心合體の君民なればとて、立國的秩序平和の爲には、君としては其民を愛し、民としては其君に忠ならざるべからず、いかに力足らずして征服せられしと雖、力足らざるの罪は我にあり、其際、我は國家と共に打死すること能はず、難を免れて、表面なりとも、公然敵手に生を托する以上は、是れ一日の安を得たるものぞ。一日の安を得たるは、是れ敵にあらざ、是れ恩人也、是れ全く其君の恩賜なるぞ。降服せざれば已む、苟も降服する以上は、其義に報いて忠誠ならざるべからず。奚ぞ矧んや、公然反抗すること能はずして、隱然誹議する如きは、誹議して竊に其國其君の秩序を擾亂せんとする如きは、婦女子の事なり。男子服すること能はざれば、大聲疾呼、公公然として反抗すべし、何ぞ竊に誹議怨言すべき、是れ斷じて國士として執るべきの道ならぬぞや。さて亦一方の君としては、他

を征服せざれば已む、已に征服せざるべからざる大義名分ありて征服したる以上は、均しく之れ我が臣民なり、臣民としては、其の臣民としての精神的慰藉を與へ、肉體的安寧を保護し、最も我が赤心を其の腹中に推して愛護せねばならぬものぞ。苟にも是れ征服地なりとして虐待するが如きは、斷じて爲すべきの道にあらざるぞや。要するに、異心合體の君民は相互に交讓寛容し、常に以て注意し、常に以て戒飾する所なかるべからず。いかに、異心合體の君民なりとも、相互に交讓して、相互に寛容すれば、雙方の意思も、自然と疏通し、感情も自然と融會し、いとはなしに、その根本信仰まで同化一致して、茲に、同心同體の君民ともなることを得るものぞ。されば先づその統治者たる一方より、最も其の心して戒飾注意あるべきものぞ。

今夫れ、異心合體の君民は、其信仰異なるを以て同心たらず、同心たらざるが故に、其合體としても、已むを得ざるの合體なるぞ。蓋し同心ならざるものは異體なり、その異體者を強て干戈に依り、若しくは法律に依りて、合體ならしめたるものなるぞ。故に其臣民と統治者と國家とは一致すること能はずして、三者對立の

資格を生ずるに至ると共に、統治者其人を以て、直に國家其物也とは云はれないものとなる。此に所謂「國家」とは、民族集合獨立の統一體なるには相違なきも、其統一は、干戈若くは法律に依りての抑制的統一なるを以て、是れ「干戈的國家」なり。「法律的國家」なり、干戈的國家、法律的國家は、「一日干戈なく、一日法律なき時は、其心をも同ふせず、其信仰を異にする人人として、亦何等の義務責任を負担せず、其國民としての義務よ、責任よ、本來、干戈より來り、干戈に征服せられたるものなれば也。法律より生じ、法律に規定せられたるものなれば也。その干戈若しくは、法律の制裁たるや、獨り外部にのみ止まるを以て、其統一も亦外部の統一たるに過ぎない、肉體的、外部の統一たるに過ぎない者ぞ、是れ未だ心服なき國家なるぞ、精神的統一なき國家なるぞ。されば、「法律的國家」「干戈的國家」は、「體の統一」を代表したる迄なるを以て、「心の統一」を代表したるにあらざるを以て、「其國民は其國家を以て全然、自己を代表したる國家なり」とは承認せず、其半面的、肉體をのみ代表したる者と爲すに過ぎない。これ其の國家と一種の民族とは、相互に心の阻隔して融會一致せざるを以て、彼我の觀念存し、彼我の資格を生ずるものなる

ぞ。「國民」としては、干戈的に法律的に其の國家を奉ずるも、信仰の上よりは、國家としては認めず、自己を代表したる國家としては認めぬなり、自己の信仰する精神を代表したる國家にはあらぬからなるぞ。「信仰」より云へば、一種の民族と國家とは、全然別物なりき。故にその統治者に對する觀念も、亦復、此の如く、干戈的逼迫、法律的規定の君主として之を奉ずるに過ぎないものぞ。さりとは、國家と統治者とは全然同一物なりとして認むることは出來ない、統治者の一舉一動を以て、悉く國家其物の舉動なりとは云れない。何となれば、其國家は、肉體的統一の發顯體に過ぎない、體の統一の干戈的、法律的國家は、未だ、心的統一なきものぞ、精神的國家としての信仰は、未だ統一する所なきものぞ。然るに統治者其人は、信仰を有するなり、而も其信仰は國家としての信仰にならず、國家としての信仰を代表しての信仰にあらざるぞ。夫れ已に國家としての信仰にあらざる、國家としての信仰を代表しての信仰にもあらざれば、統治者其人の有する信仰は、國家としての信仰にはあらざり、統治者一個人としての信仰なりき。統治者一個人としての信仰なりとせば、是れ其信仰は統治者としての信仰にあらざる、統治者

にはあらざる、一私人としての信仰たるものとなるなり。均しく之れ國民としての一私人たる資格にて有する所の信仰とはなる者ぞ。されば、一方の國民よりは、其信仰上に於ては、統治者其人を以て、一國民一私人たるの信仰として之を遇し、統治者としての信仰としては之を遇せざるなり。國家としての信仰にあらざればなり。國家としての信仰を代表したる者にあらざればなり。故に統治者其人は、體的統一の法律上干戈上には、國家代表の資格を有する國君なれども、心的統一なき信仰よりは、均しく之れ一國民たるものぞ、一私人とはなるものぞ。是れその統治者其人を以て、全然國家其物なりとは云ふを得ず、國家と統治者其人とは、別物となり、國民としては、其國家に對する責任と、統治者其人に對する責任とは自から別ならざるを得ざるに至る所以なるぞ。國家としては服従するも、服従せざるを得ざるも、國家を代表しての帝王大統領としては、之に服従するも、服従せざるを得ざるも、信仰を異にしたる統治者其人としては、均しく之れ一の國民たるに過ぎず、國民としての一私人たるに過ぎず、服従するの義務はなきぞよ、服従的觀念の發すべき理由もなく、動念動機の起るべき道なきものぞ。

「精神的信仰の下」には、國王大統領の命と雖、奉せざるに至るぞよ。故に、異心合體の國家「干戈的國家、法律的國家體的統一の國家」としては、其「國民統一」は、國家と云ふ名の下に於てこそ統一することを得れ、其の國家を代表したる帝王大統領の名の下に於ては、之を統一せんとするに於て已に既に危機あるものぞ「信仰を異にしたる民衆は不服なり、我等が選出したる黨派以外の民衆は不服なり、是れ理に於ては然るべからざるが如きも、情に於ては最も然るものなればなり」奚ぞ矧んや單に、其人のみの名稱にては斷じて統一するを得ず、國民は一私人として其人を待遇すれば也。且つその國民統一も、體的統一なるを以て、心的精神の統一でない、故に内憂の際は、勿論、外患の時にも、舉國一致の大飛躍は行はれない、同心同體でないからなるぞ、その國家と統治者と國民とは、相互に融會して渾然一致すること能はず、國家は、國家としての資格を有し、統治者は、統治者としての資格を有し、國民は、國民としての資格を有し、分分各自に對立對抗する所あるに至るぞや。

されば、異心合體の國家「法律的規定の國家、干戈的制服の國家、肉體的外部統一

の國家には、眞誠切實なる忠君愛國は發顯せぬものぞ、崇高なる雄大なる更に硬直摯實なる同心同體的致一不二の大理性大情靈は煥發せぬものぞ。根本的信仰の相互に異なれば也、信仰異なれば心和せず、心和せざれば體一致すること能はぬものぞ。心的信仰の下には、國王大統領の命令と雖、遵奉せず、遵奉せずとも、國王大統領はその威力のみにて之を如何ともすべからざるものぞ。信仰の發顯は同心同體的信仰の發顯が、いかにその國家としての成格に關係あるかを知るべきぞや。

## 第五章 信仰發達に於ける一道の潮流

大凡、信仰發顯の發達に、二道の潮流あるものぞ、其一道は、國家的信仰より、個人的信仰化する者にして、其一道は、個人的信仰より、國家的信仰化するものなるぞ。

第六節 國家的信仰と個人的信仰——是れ國家的信仰の個人的化する者にして、建國の初より、國家本位を以て發達し、國家としての主權者は、その民族としての族長にして、民族信仰の代表者としても、亦其の族長なるぞ、是れ其の民族統

治の主權者——其民族の精神的肉體的統一統治の主權者は——實にその族長なると共に、其の國家は直に是れ、信仰と主權との源泉なるぞ。族長の子孫は國民として、國民はその子孫として、滿腹の精神を發して其信仰を仰ぎ、全幅の肉體を貢獻して其主權に奉ずるものぞ、奉ぜざるべからざるものなるぞ。

主權者の心を心として體を體とし、一に唯その、同心同體たらんことを期するのみ、亦他に餘念あることなし、晝日晝夜、何より第一に、國家の信仰を基礎として、自己の信仰を養成發達し、以て之を國家の用に發顯せんことを誓ふばかりなるぞ。之を「國家的信仰が、個人的信仰化する者とは云ふぞ。健全なる個人も、健全なる家庭も、健全なる國家も、實に此の、國家的信仰の個人的信仰化したる實國に實在するものぞ、是れ國家としての建設と發達とに於ける、常經にして、いづれの民族も、統治者も、國家も、均しく皆是れ之を希望して已まざるものなるぞ。然れども、人類は蒸蒸としてわき出でたるものにあらず、地上に生じたるにもせよ、天邊より天降りたるものにもせよ、太古、原人時代に遡れば、一原種なり、(原人發生の事は、大日本世界教、その一、天照大神宮第六棟に辨彰す)原種の次第次第に繁殖發達して、漸漸四方に移轉開拓し、遂に以て今日の各人種各

民族を變出したるに過ぎざるものぞ。而も人類發生以來、已に幾億年を経過し來るものなれば、そのいづれの人種民族を以て、原人人種、根本民族なりとは、猝に斷ずべからず、亦斷ぜざるべからざるの必要もない、いづれも皆同一種族の發達にして、いづれか之れ、原人人種たらざらん、根本民族ならざらんや。唯その時代の古今に拘はらず、父祖は長者として其子孫に推服せられしものぞ、長者はその子孫を擁護したるものぞ、子孫繁殖しては、生活の必要に迫り、各自轉轉、他に移住したると雖、亦その各自の父母を先頭とし、各自の父母は、亦復、その父母中の長者を推して、一民族を爲しつゝ、移住したる者なるぞ、是れ蓋し分族的一民族なり、その子孫の繁殖は、此の如く分族し、分族は更に分族し、四方八方に轉轉分族交流したるものたらずんばあらず。故にその分族は均しく皆それ原人本族の信仰習慣を、性とし、體とし、亦模範として、その分族中の長者を奉じて君とし、其統治の命をば拜して、其分族の秩序安寧を擁護したる者ぞ。その分族としては、いづれの分族も、皆その此の如くにして一部落を爲し、此の如くにして一國家を建設し、その部落その國家の代表者として、亦その信仰の福音者として、其族長を奉戴したる者なるぞ。然るに、その分族支

流は、自然自然に變化し、其分族分分族、更に其の分分分族等は、その移住開拓したる處の山河風土氣象寒暖等の影響よりして、其變化は次第次第に甚しく、遂に卒に種を異にし、族を同ふせざるの觀を爲し、さては、相互に仇遇敵視し、相互に征服を始めたるものなるぞ。故にその多くは、他より干戈を以て、征服せられ、或は他の移住民に其實力を制せられき。然らざれば、自己の部落、自己の國家は、その發達の遲緩にして、從來奉じ來れる信仰は、他に比しては薄弱にして、信仰する丈の價値を失し、心を慰藉し、體を擁護する丈の靈光的威嚴の缺乏よりして、或はその靈光を發顯し、威嚴を認むること能はざるよりして、已むなく、他の部落、他の國家に、發達したる信仰及制度等の渡來感化を求めて、或は他より渡來感化して、遂にはその「祖國としての獨立を失ひ、或は祖國としての信仰を自から棄てたるものなるぞ。故に、體としての獨立的國家を失ふにあらざれば、心としての信仰的國家を失ふたるものなるぞ。或は、體としての國家を失ふと共に、心としての國家をも併せ失ひ。心としての國家を失ふと共に、體としての國家をも併せ失ふたる者なるぞ。故に心としての國家を失ふと雖、體としての國家を維持し得たるもの、幾許かある。體としての國家

を失ふと雖、心としての國家を存續し得る者、幾許かある。奚ぞ矧んや、心としての國家と體としての國家とを併せ有して、心體致一的天照發顯の國家として儼立する者に於てをや。此の如くその體としての祖國、心としての祖國を失ひたるものは、いづれにしても、皆その自家の放逸懈怠よりして、體としての威力、心としての信仰を發達究明すること能はざるより、内外の趨勢に壓伏せられ、萬已むことなくして失ひたる者にして、好んでその本心本性より出でたる者ではない。自家にして勤勉精進し、心としての信仰を發達し、體としての威嚴を養成し、毫も他の干戈に制服せられず、却て我より擊退し、或は他より移住するものもあるも、我としての實力を失せず、我の信仰に他を感化し、我の風俗に他を教化し、我としての信仰は、常に他を推服するの稜威を有し、我としての體力は、常に他に打ち勝つ丈の威嚴を有し居りたる者とせば、それ何人か喜びて、體的祖國を失ひ、心的祖國を滅ぼし、以て祖國的國家と祖國的信仰とを自棄する者あらんや。是等は皆、原人時代よりの、立國本旨の常經を忘却して、日に月に、時時刻刻に放逸墮落したる罪報たるものぞ。故に克く、原人時代よりの、立國本旨の常經を心とし體として遺忘することなく、日

夕勤勉し精進し、その信仰の發顯を究明鍛鍊し、其の體勢の飛躍を訓練發達し、茲に「君民同心同體の國家」を建設し存續しつゝ、ある人種民族ありとせば、その人種民族は允にそれ「原人種」根本民族の直系として、人類自然の發達を自然に遂行したる者にして、「一般人種」一段民族の師表たる者ぞ、前途大興隆の奎運は其國家に天降らずして已むべきよ。抑も國家として、國家的信仰なきの國家は、その國民は四分五裂す、いかにぞ健全なる同心一體的國民統一を爲すことを得べきや。知れ、前途大に興隆すべき國家は、同心同體の君民を以て、建設する國家なることを。是れ實に、人類自然の發達、立國自然の常經なれば也。世界茫茫、幾千の列國中、抑も是れいづれの國家なるぞ。

第七節 個人的信仰と國家的信仰——是れ、個人的信仰の、國家的信仰化する者にして、個人本位として發達したるものなるぞ。そは其の種族は遠流混濁し、いづれの系統を以て、その長者に推すべき乎、明瞭ならず、唯その多數的勢力を得る者が、其族の長者とはなりしものぞ。換言すれば、部落の長者となり、一國の君主となりしものぞ。その多數的勢力とは、個人的信仰の多數を占有するを意味する

六  
ぞ。何となれば個人的信仰の多數を占有する者は、其勢力猛烈にして、其の部落、其の家の主裁者と爲り得ればなり、是れ人心を得る者は興り、人心を失ふ者は亡ぶ。その人心を得るとは、多數の同信仰者を得たるを意味する者ぞ。多數の信仰者とは、同心同體の發顯にして、同心同體者は、其の心的作用も、體的行動も、一心一體にして一心一體としての活動飛躍が、他に對して、他の小數者<sup>ニ</sup>に對して強ければなり。故に、人心を得るとは、個人的信仰の多きを得たる者ぞ、個人的信仰の多きを得れば得るほど、直に同心同體者となるを以て、假令ひ小數なりとも、其威力は却て彼の多數なる輩を推倒するに足るものぞ。いかに矧んやその多數を得たる場合に於てをや。その信仰は、その部落國家の過半を同化するに足るものぞ。かくては、その初めは、一個人としての信仰も、今は、國家としての信仰に化成するものぞ。然れども、五に對する五の半數では、未だ國家的信仰としては發顯せぬものぞ、國家と云ふ以上は、總ての國民を包含しあればなり。四に對する六の多數にても、猶且國家的信仰としては發顯するに足らざるものぞ、未だ四分の異信仰者のあるありて國中に存すればなり。少くとも三分の二<sup>ニ</sup>七以上<sup>ニ</sup>の多數を占めねば、國家的信

仰は發顯せぬものぞ。七以上の多數を占めたる信仰者は、その、同心同體の信仰者として、同心同體の行動をなすこと、一心一體にして、その勢力威嚴は、猛然他を推倒し得るに至るぞや。已にその多數を以て小數を制し、更に其の多數的勢力威嚴を以て之に當る、是れ其の國家に於ける優先者として、最强者として、その國家を統治し、その國家の生命動脈を主裁するよりして、其信仰は自然と、國家的信仰に化するものぞ、<sup>ニ</sup>その信仰を以て國家を經營するが故に、國家は自然と其信仰に化するこゝと當然ならずや<sup>ニ</sup>それ而して後に、國家的信仰として、初めて發顯するものなるぞ。よし、他に三分、若しくは、一二分の異信仰者ありとするも、常に彈撥せられ、推倒せられ、感化せられて、その國家を左右する<sup>力</sup>の實力權能を有すること能はぬものぞ。されば、七以上の多數を占むる信仰者は、常に、國家建設擁護の主動者として、其信仰は直に、國家的信仰に化し、其信仰と共に國家を守護し、國家と共に亦その信仰を擁護するものぞ。由來國家的信仰なき國家は、國家としての信仰なき國家は、國家として永く存續すること能はぬものぞ。國家として永く存續する國家は、必ずや國家としての信仰、その生命主腦を爲して活動飛躍し、國家自らを擁護するもの

ぞ。擁護せざれば其信仰を維持し、其成格を發顯すること能はざればなり。故に「國家的信仰なき國家は、個人的信仰を相集め相合して、必ずしも、國家的信仰を建設結晶せざるべからざるものなるぞ。亦必ず、國家的信仰を結晶せざれば已まざるものなるぞ。それ此の如きは、個人としての信仰發顯して、國家的信仰に化成したるものなるぞ。而もそのいかにしても、國家としては信仰なかるべからず、猶個人として信仰なかるべからざると一般なるぞ。國家と信仰とは相依り相待つものぞ、故に國家は信仰を擁護し、信仰は國家を擁護す、國家は必ず信仰を待て永續し、信仰も亦國家を待て永續す、國家として信仰なき國家は、是れ國家としての生命主腦なき國家なるぞ、いかにぞ永く存續するを得べきや。

今夫れ個人的多數を占むるものが、一の國家を主裁するに至りて、其信仰を國家の信仰となし、國家的信仰として發顯するは、是れ實に、個人的信仰より、國家的信仰化する者にして、是等は左の場合に於て出顯する者なるぞ。

(一) 甲の信仰を有したるものが、乙の國を征服し、若しくは、甲の移住して、其土着たる乙人を甲の信仰に感化したる時。

(二) 土着たる乙人を征服して甲の信仰に感化したるにあらざるも、甲の種族多くして、若しくは蕃殖し、移住して、土着人たる乙としての民族に優るの信仰的實力を發顯し得たる時。

(三) 他より、民族の移住し來るにはあらず、丙の信仰のみ、丁の國に渡り、丁の國人が之を信仰して、次第次第に其の信仰者の多數を加へ來り、遂に七分以上に達したる時。

(四) 他より移住民のあるにもあらず、渡來の信仰に歸したるにもあらず、其國古より多數の信仰發することありて、相互に優勝劣敗し、其の中の一信仰が全然三分の二以上なる多數を制し得て、國家主動の實力者となりたる時。

とす。而も是等は、個人的信仰の、國家的信仰化したるものは、邦家の建設と發達との本旨常經にはあらず、自他の勤怠強弱と、時代精神の潮流とに制せられて、多くは是れ已むを得ざるに出でたる、權道なるぞ。則ち權道なりと雖、人類の蕃殖分族したる潮流として、實に、已むを得ざるに出でたる權道なれば、其の權道に順應して、心體統一の常經に復せざるべからず、同心同體の立國的常經に復せざるべから



ざるものなるぞ。「同心同體の君民」とせば、假令民主政體なりとも、其國民統一の大統領と民衆との同心同體的統一を發顯實行して、健全なる國家を建設擁護するを得るものなるぞ。されば、民主政體にせよ、君主政體にせよ、其の「同心同體的統一」を發顯實行してこそ、健全なる國家を建設するを得るは則ち一也。「常經」としても「權道」としても、歸する處は則ち一なるぞ。(論じて此に來れば、其を以て、政教一致時代にあらざる乎と疑ふ者なきを期しがたし、某は斷言す、決して政教混合制度を復古せんとする者時代の陋態を再演せんとする者にあらず、委細は別著大日本政界教天照太神宮第九棟第十棟に詳す。)

### 第八節 信仰の遺傳と子孫の訓練——信仰の潮流は、そのいづれの邊より出るにもせよ。

その祖國は祖國としての信仰既に發顯し、父母は父母としての信仰成格を天照し、其の子孫に遺傳したるものなるぞ。されば、その子孫は子孫として、漫然その信仰を維持すべきものでない、まして之を衰微するに於ては、正敷子孫たる者の責任なるぞ。祖先としては祖先としての時代に於て、その最も完全なりと悟入し開悟し大觀正覺したる所の信仰を以て、自己を天照發顯し、家庭を天照發顯し、國家を天照發顯し、世界を天照發顯して、その心と體との全身を慰安擁護す

ると共に、他を感化救済し、若しくは感化救済せんとしけるものなるぞ。故に後世子孫としては、更にその信仰を發達して、一層之を堅固常盤ならしめ、當代及び前世後世に卓出超絶する所の天照發顯なかるべからざる次第なるぞ。他の信仰を推服する丈の自己を發顯天照し、家庭を發顯天照し、國家を發顯天照し、世界を發顯天照して、其の心と體との全身を慰安擁護すると共に、亦他をも此の如くに感化救済せねばならぬものなるぞ。他をも感化救済する丈の信仰威嚴實行ならでは、自己を維持することをも能はざるに至るぞよ。然り、自己としての家庭、自己としての國家をも、自己としての家庭、自己としての國家として維持すること能はぬに至ると共に、その信仰はその心を慰藉し、その體を擁護することも能はざるに至るものぞ。他より壓伏せられ、他より推服せられて、その自由を得ざれば也。これ其信仰は、祖先の遺傳あると共に、子孫は子孫としての、修養的、啓發的、實行的、究明訓練實踐なかるべからざる所以なるぞ。

## 第六章 人類的萬有的世界的宇宙的信仰と宗

四二

### 義との完全、及其一貫的融會

個人は個人として、家族は家族として、國民は國民として、家庭は家庭として、國家は國家として、の信仰なかるべからず。個人としても、家族としても、國民としても、家庭としての信仰、國家としても、個人としての信仰、家族としての信仰、家庭としての信仰、國民としての信仰、國家としての信仰なくんば是れ決して、個人としての成格、家族としての成格、家庭としての成格、國民としての成格、國民としての成格、國民としての成格、國家としての成格を、健全圓活に天照發顯することを得べきものでない。故に亦、人類としての信仰、萬有としての信仰、世界としての信仰、宇宙としての信仰なくんば、人類としての成格、萬有としての成格、世界としての成格、宇宙としての成格を、健全圓活に天照發顯することを得べきものならぬ。然るに、個人としての信仰、家族としての信仰、家庭としての信仰、國民としての信仰、國家としての信仰を有する者はありとするも、人類としての信仰、萬有としての信仰、世界としての信仰、宇宙としての信仰を有する者は稀なるぞ。よし人類として

の信仰、萬有としての信仰、世界としての信仰を有する者ありとすれば、亦、復、國家としての信仰を有せず、家庭としての信仰を有せず、國民としての信仰、家族としての信仰、個人としての信仰を有せず。さりとは、そのいづれも未だ以て其信仰の完全ならざるものぞ、完全なる信仰に達せざるものぞ。完全なる信仰とは、そのいづれをも一貫して天照發顯するものぞ、斷じて一方にのみ存在すべきものならぬぞ、その信仰の極致、完全なる信仰は一也、不二也。圓滿極成なるぞ。只その形式を變化して、個人と發顯し、家族と發顯し、國民と發顯し、民族と發顯し、人類と發顯し、萬有と發顯し、家庭と發顯し、國家と發顯し、世界と發顯し、宇宙と發顯するに過ぎざるものぞ。一なる極致は形式によりて成格を變化するが如く、信仰も亦、其成格相應に發顯飛躍し、その形式を同ふせざるに過ぎざるものぞ。究竟すれば、いれの信仰も、亦、その歸着するの大極致のあるものぞ。蓋しいづれの宗教も、宗教とし云へば、その宗義は必ず個人的、家庭的、國家的、世界的、宇宙的ならざるべからざるものぞ。家庭を無視して、單に國家的たらんとするの非なるが如く、亦、國家を無視して、單に世界的たらんとするも非なるぞ。個人化して個人を救ひ、家庭化して家庭を救ひ、國家化して國家を救ひ、宇宙化し

て宇宙を救ひ得るものにあらざるぞ。個人化し得る宗義ならば、同時に家庭化し得ざるべからず、家庭化し得る宗義ならば、亦同時に國家化し得ざるべからず、國家化するも國家化する能はず、國家化するも世界化すること能はずとせば、是れ其の宗義としては未だ共に完全なる宗教に達せざるものぞ、従ふてその信仰は狹隘固陋の信仰たるを知るべきぞや。現在家庭として國家として存在するものを、直にその家庭を無視し、その國家を否定せんとするは、現實に實在する個人成格を無視し否定せんとすると一般、是れ云ふべくして行ふべからざるものなるぞ。現實に世界は實在するものを、その國家化するより以外は、亦世界化して宣明感化すること能はずとせば、その狹隘固陋たる亦知るべく、それ將た何の貴ぶべき所かある、宗義としては未だ共に「完全なる宗義宗教」とは云ふべからず、斷じて「完全なる信仰」と云ふべからず。云ふに足らざるものなるぞ。

「完全なる信仰宗義」とは、そのいづれをも一貫して融會通達するものぞ。融會通達して一貫せざるべからざるものぞ。そのいづれをも之を感化し之を救済せんとする

にあればなり。

## 第七章 信仰發顯の感化と成格天照の膨脹

「信仰の發顯」は、成格の天照にして、自己の成格と信仰との如何は、其信仰成格の如何によりて、決定するものなるぞ。信仰野卑なれば、成格は野卑となり。信仰高尚なれば、成格は高尚なると共に。成格高尚なるものは、亦信仰も高尚にして、成格野卑なるものは、亦復、信仰も野卑となるものぞ。その實、成格と信仰とは常に一致しつゝあるものなるぞ。而して其信仰は、如何なる信仰なるにもせよ。いづれも皆その信仰を發顯して、自己たるの成格を天照らさんとするが故に、自己たるの成格を發達膨脹せしめんとするが故に、他の總てをして自己の信仰に化し、自己の成格に化せしめんとするものぞ。自己としての自己、天人萬有、その一有なりとも、皆その「自己としての信仰」を人生に發顯天照し、自己としての成格を宇宙に發顯天照せざれば、満足せぬものぞ。「自己としての人格」を家庭に發顯し、自己としての家庭を國家に發顯し、自己としての國家を世界に發顯し、自己としての世界を宇宙に發顯し、更に自己としての

大宇宙を大發顯大天照せざれば已まざるの「大信仰」を有し、大實行を有し、大成格を有するものなるぞ。故に家庭を自己に化し、國家を自己に化し、列國を自己に化し、世界を自己に化し、同胞を自己に化し、種族を自己に化し、人類を自己に化し、更に宇宙萬有を自己に化せんとするものぞ。理學を自己に化し、化學を自己に化し、光學を自己に化し、數學を自己に化し、曆學を自己に化し、氣象、地理、礦物、植物、動物等の諸科學を自己に化し、倫理、道德を自己に化し、哲學を自己に化し、宗義、宗教を自己に化し、人生、宇宙、天人萬有の一切、合切を自己に化せざれば満足せぬものぞ。そは本來、一體より天照發顯し來れる自己なれば也、天人萬有なれば也。自己は天人萬有と共に一體化せざれば已まざるものなるぞ。それその一體化せざれば已まざるものは、以てその一體より發顯天照し來れる自己たるを知るべく、天人萬有たるを知るべきものにあらずや。

**第九節 天人萬有の活動と信仰の發顯**——獨り人類のみならず、天人萬有の活動、飛躍は、總てその信仰の發顯天照なるぞ。天人萬有は、均しく共に其の信仰を有して活動、飛躍しつゝあるものぞ。我は我の信仰に他を化せざれば、他は他の信仰に我を化せんとするものぞ。「信仰」とは獨り宗教、宗義に止まるものなら

ず、人生、宇宙に於ける萬事、萬物よ、悉くその「信仰」なくては活動し得るものならず、飛躍するものでない。例へば一切の科學も信仰なるぞ、其「概念、公準」は、信仰によりて發顯し來れるものぞ。科學中にも最も現實實驗なる數學とて、亦是れ信仰なるぞ、三に五を乗ずれば十五となる、是れ豫め信仰せねば十五と云ふ數は出でざるものぞ、その一より十までの數を以て加減乗除すれば、更にその加減乗除に方式を一定して施せば、天人萬有を分析、吟味すること亦難からざらんとす。然れども、「その一」なるものは孰れより出で來るや、亦いかなる實質を有するものなりや、「一」とは文字なり、「イチッ」とは聲なり、文字、聲音以外、其的の實質は如何なる體像を有するものなりや」と詰問せば、彼等は直に窮して答辯すること能はぬものぞ。彼等が答辯するものは、答辯し得るものは、「一」としての以下以上の數のみ、「其的の數」と其數の「實質」とに至りては、單に「公準」として信仰しつゝあるのみ、説明することは能はざるものぞ。豈に唯だ數學のみならんや、萬般の科學は、皆その「極致」に歸しては説明すること能はず、只、信仰して、それ以下を説明しあるに過ぎざるものぞ。信仰なくしては、向上、向下とも、一事一物として活動、飛躍すること能はざるものぞ。何ぞ獨り科

學なりとも、信仰なくて活動することを得べけんや。只その「極致」に於て信仰なかるべからざるのみならず、極致以下に於ても、信仰なくては究明發達すること能はぬものぞ。例へば理學化學力學等の「豫定認識」も、信仰するからなるぞ、電力を信仰しなければ、電信電話は起らぬものぞ、無線電信の如きも起り來らぬぞ。火力を信仰しなければ、鐵道は起るまいぞ、甲鐵艦も起らぬものぞ、此等は二三の類例に過ぎざれども、天人萬有は、悉く此の如くに信仰よりして天照發顯し、活動飛躍しつゝあるものなるぞ。而してその天照發顯する各自の信仰は、相互に他の總ての信仰を推服感化して、我としての信仰を發達膨脹せしめんとしつゝあるものぞ。科學は理學にせよ、化學にせよ、力學にせよ、數學にせよ、醫學にせよ、各自自己としての我が信仰に、他の總てを同化せしめんとするものぞ。更に喩へば、「化學」は天人萬有の一切を物質不滅に歸して、之を實驗的に説明し、天人萬有を悉く物質化せんとするものぞ。「理學」は天人萬有の一切を勢力不滅に歸して、之を實驗的に説明し、天人萬有の總てを勢力化せんとするものぞ。乃至「光學」、「力學」、「數學」、「醫學」等、均しくその信仰する所に、天人萬有を同化せんとするものなるぞ。哲學をも其信仰に化し、宗

教をもその信仰に化し、「光學」としては、光の外は他を認めず、「數學」としては、數の外は他を認めざらんとするものぞ。而して「哲學」は亦自己としての信仰に、理學を化し、化學を化し、數學を化し、光學力學等一切の科學を化し、宗義宗教をも哲學化せんとするものぞ、哲學としての自己たる我が信仰に同化せんとする者なるぞ。「宗義宗教」は、亦復、その自己としての信仰に、哲學を同化し、倫理道德を同化し、生理衛生を同化し、乃至科學の一切を同化せざれば已まざるものなるぞ。是れ唯だ、他を自己としての我に、我としての信仰に同化せしめんとする例證に過ぎずと雖、天人萬有は、大小の別こそあれ、相互に他を自己としての我に同化せしめて、我としての成格を天照發顯し、活動飛躍し、發達膨脹せしめんとしつゝ、あらざるはなきものぞ。「競争」の已むべからざるは、此故なるぞ、競争の起るは蓋し此に基くものなるぞ。

故に「什麼」なる信仰にても、常に怠りなく、朝な夕なに勤め勉めて、内「心」に修養鍛錬しつゝ、外「體」を健全靈活ならしめ、更にその四圍に於ける他の渾てを推服し感化し同化し、自己としての我たる信仰成格は、間斷なく、他より以上に究明發達して、天照膨脹しつゝあるにあらざれば、自己としての我たる信仰成格を、人生に發顯し、宇

宙に天照して、大活動大飛躍すること能はざるのみならず、遂にはその信仰成格さへ維持することも叶はぬに至るぞよ。

今夫れ天人萬有が自己としての我に他を化し、自己としての成格を、一より多く、一より大に、一より廣く、一より高く、一より遠く、一より長く、一より盛に、一より強く、一より壯に、一より堅く、一より深く、一より善に、一より真に、一より美に、一より幽玄に、一より崇高に、一より永久に、一より達發膨脹し、一より活動飛躍せんとするものは、正敷それ丈の信仰發顯なるぞ、成格の天照なるぞ。彼等は人類より觀じては、語らず動かざるか如き者もあり。然れども、靜にその性體を究明吟味すれば、僉それ發達膨脹しつゝ、あらざるはなきものぞ、活動飛躍しつゝ、ある者なるぞ。是れその信仰の自然と、其性に發顯し、其體に天照しつゝ、あるからなるぞ。人類は特にその那物たるを悟入開悟し、その成格の活動飛躍を欲して、一より多く、一より大に、一より廣く、一より高く、一より遠く、一より長く、一より盛に、一より強く、一より壯に、一より堅く、一より深く、一より善に、一より真に、一より美に、一より幽玄に、一より崇高に、一より永久に、一より活動飛躍し、一より發顯天照せんとする所以のものなるぞ。知

れや、天人萬有は、皆それ人生宇宙を、自己としての我に化し、我としての天人萬有人生宇宙たる本体大本體を發顯天照せざれば、満足せぬものなることを。換言すれば、愚は愚にして、已むべきものならず、賢たらざれば、已まず、賢は賢として、已むべきものならず、更に、聖たらざれば、已まず、聖は亦聖として、已むべきものならず、更に進んで、神たらざれば、已まざると同様の意味なるぞ。而もそれ、自己としての我が成格は、そのいかに發達を期し、層層段段と進行して、已まざると雖、宇宙を化するに至れば、已むものぞ。「我としての宇宙」宇宙としての我を發顯天照し得るまでに達すれば、満足するものぞ。是れそれ以上の進歩發達はなきものぞ、進歩發達するの要なければ也。我としての愚は、その如何に賢たり聖たるを望みて、歩歩段段と發達進行するを期すれども、而も神たるに達しては、満足するものぞ、我としては神以上を理想すること能はず、亦理想するの必要もなきものぞ。「神は、理想の極致なり、宇宙は、成格の極致なり、宇宙の實質は、神なり、神の實質は、宇宙なるぞ、否、神と宇宙との二あるに、あらず、神としての宇宙なり、宇宙としての神なるぞ、之を稱して、本体神とは申すぞや。「天人萬有は、この本体神より發顯天照したる者なり。故にその「本体

神たるに到達せざれば満足せざる所以のものなるぞ。只、その宇宙は直ちに神なりと雖神たるに相違なきも、更に神の神たる、主腦神あり、之を稱して、大本體神とは云ふぞ。是れ實に人生宇宙、天人萬有、成格理想の大極致なるぞよ。或る一類は、此の主腦神を、誤認して、現象たる人生宇宙を、輕視し、或る一類は、此の主腦神を、會得せずして、現象たる人生宇宙を、重視する者と共に、亦、蔑視する者あり。いづれも皆その究明感得の足らざるものなるぞ。(五棟細は本論、大日本世界教天照太神宮第四棟、第五棟第六棟乃至第五十棟第六十棟等に彰明す。就てその意義分、實際を究明せよ。)

第十節 信仰と自滅不滅——信仰とは、不滅にして自滅にあらず、信仰の極致は、發達なり、活動なり、恆有なり、實在なるぞ。自滅を期して、信仰の發顯すべきものならず、自滅を樂んで、信仰するものでない。信仰は、恆有的實在的活動飛躍を目的として、發顯するものなるぞ。天人萬有は、その直に自滅する者とせば、亦何をか信仰し、發顯し、活動飛躍するの必要あるべきぞ。さりとは、その自暴自棄に墮落せざるもの幾許かある。さなくば、無味に乾燥して、無爲に寂亡せざるもの幾許かある。自滅は、萬有の性にあらず、人類の性にあらず、性としての希望にあらず、目的に

あらざるぞ。されば、その自滅あるが如きは、是れ、半面の活動たるに過ぎざるものぞ。それ唯だ半面なり、その自滅するが如きは、眞個の自滅にあらず、其の實は自滅として亦是れ活動しつゝあるものぞ。然り、その自滅は、發達せんが爲めの自滅にして、實在恆有に達せんが爲めの自滅にして、眞個自滅するものにあらざるぞ。見よ、その「自滅」とは、半面の外容に過ぎず、形骸に過ぎず、形骸としての變化に過ぎず、性にあらず。體にあらず。性の發達する手段にして、體の進歩する形式にして、外容的形骸の變化する過渡期たるに過ぎざるものぞ。究明すれば、自己たる我として活動する半面の現象に過ぎざるぞよ。本來自滅し盡るものにあらず、自滅するものではない。「信仰の極致」信仰の目的は、斷じて自滅にあらぬものぞ。「本來不生不滅の本体大本體」其的の信仰なるぞや。もし夫れ天人萬有は、自滅するを以て、その本性本体本能とせば、自己としての我が成格を發顯天照するの要はない、活動飛躍する要もない、發達する要もないければ、膨脹する要もない、從ふて信仰の起るべき要もない。さりとは、その生ずるや、直に萎縮し、頓挫し、自殺し、自滅して、その成格を他に施し、他に供養せぬばならぬものぞ寧ろ始めよりして生生せざるに如かざるも

然れども、自己としての我は、生じたり、生ぜんとして生じたり、生ぜざるを得ずして生じたり。その孰にもせよ、已に生じたる我は、亦直に萎縮するを欲せず、頓挫するを望まず、自殺するを好まず、自滅するを喜ばぬものぞ。已に生じたる我は、我としての到達すべき歸着點を信仰するの動念動機、自然と内外に氳氣薰習し、熾灼煥發すると共に、その歸着すべき終局地に向て、我としての成格を發顯天照し、活動飛躍し、發達膨脹し、其の歸着すべき終局地に到達還元せざれば、已まざるを以て、性として居る者なるぞ。その歸着すべき終局地とは、本來、不生不滅の根本大極たる本体大本體其的なるぞ。されば、我として生じたる我は、その信仰の大極根本たる本体大本體其的に到達せざるべからざる者にして、若し我を生ぜしめたる其的ありとせば、其的は、亦我をして、此の如くに、發顯天照し、此の如くに活動飛躍し、此の如くに發達膨脹せしめざれば、已まざる者なるぞ。到達還元せしめざれば、已まざるものなるぞ。そのいづれにもせよ、已に生じたる我は、直に萎縮し頓挫し自殺し自滅すべきものならぬぞよ。亦直に萎縮せしめ、頓挫せしめ、自殺せしめ、自滅せし

ひるは、我を生ぜしめたる其的の期する所にもあらざるを知るべきぞよ。

知れや、生滅とは、我としての現象たる過渡期を折半したる術語に過ぎざることを、此の生より彼の生に轉ずる現象の過渡期にして、その轉轉する現象の變化態を意味したる者に過ぎざるぞ。よしや、その現象の過渡期に於て、生じたる者は必ず滅する者と云ふ乎。然り、生としての現象あれば、滅としての現象なしとはせぬぞ。而も、滅としての現象や半面なり、生としての現象も亦半面なり、その兩面を合して、茲に初めて、本來の面目本体を知り得るものぞ。半面の滅のみを以て、直に、本來の面目とせば、滅なるもの、何故に生し來る乎、不通の申條ならずや。故に曰く已に生じたる我は、直に滅する者ならず、直に滅する者ならば、初めよりして生ずるの必要なきと共に、人生宇宙、天人萬有は、夙に滅し盡して、其の跡なきに歸せざるべからざる者ぞ、天下何の處か此の理あらんや。いかに寂滅爲樂を密呪する者も、亦、不滅の妙境は認めざるを得ず、法體恆有、佛性不滅、勢力恆存、物質不滅の極境は信仰せざるべからざるにあらずや。然則その已に生じたる我は、徒に生ずるものでない、必ずや、それ其の性、其の體を、我としての性體を、發顯天照せざるべからず、活動飛躍



せざるべからず、發達膨脹せざる可らず。發顯天照して、活動飛躍して、發達膨脹して、其の生の生の時間空間に對する、自己としての我が成格を全ふし、而して後に滅せざるべからず。これ自己としての我が天職なり、責任なるぞ。而もその滅たるや、此に滅し盡すにあらず、自滅の意味にもあらず、此の生より彼の生に轉轉する形態の變化にして、變化とすれば、生も亦此の生より彼の生に轉轉する形態の變化なるが故に、均しく共に眞實眞の生滅にはあらず者ぞ。唯だ是れ自己としての我が成格が、發顯天照する現象、活動飛躍する現象、その現象の變化する容態を折半區分して、之を稱するに過ぎざるものなるぞ。生とは、滅とは、現象的差別の折半的名稱にして、本体大本體よりして觀すれば、本來生滅とはなきものぞ。

されば、自己たる、我としての成格は、其形態容態のいかに變化する現象ありとするも、恆にその、我としての成格を發顯天照し、活動飛躍し、發達膨脹せざれば、已まざるものなるぞ。是れ我としての自然の性なるぞ、體なるぞ、生命大生命なるぞ、信仰大信仰なるぞ。我を生ぜしめたる其的より云へば、其的自然の性なるぞ、體なるぞ、威嚴なるぞ、大威嚴なるぞ、稜威大稜威なるぞ。我としての信仰性體は、我としての成

格、我としての家庭、我としての國家、我としての世界を、人生宇宙に發顯天照し、活動飛躍し、發達膨脹し、天人萬有一切を攝理し統一し同化せざれば、已まざらんとする所以なるぞ。更に、大宇宙としての我を大發顯し、大天照し、大活動し、大飛躍し、大發達大膨脹する迄の本体大本體たらざれば満足すること能はざる所以なるぞ。

夫れ已に、我としての信仰は、自滅を欲せず、我としての成格は、必ずや發顯天照する者なりとせば、他も亦信仰あり、成格あり。各自に皆その發顯天照を期するものなるぞ、他は亦我を同化し、我が家庭を同化し、我が國家を同化し、更に世界萬有を同化せんとする發顯天照ありて、其活動飛躍、發達膨脹を期しつゝ、已まざるものぞ。乃至、天人萬有は、總て皆此の如きものなるぞ。是れ亦天人萬有ともに、自己としての我を發顯發達するに、須臾も油斷懈怠あるべからざる次第なりと知れ。

第十一節 信仰成格の發顯天照と各自の關係競争 天人萬有は、

此の如く相互に其の信仰を發顯し、其成格を天照するの活動あり、こゝに於て乎、個人の關係、家庭の關係、國家の關係、人種民族の關係を始として、萬有一切の關係等起りて、各自その分際を占有し、益その信仰を發顯し、その成格を天照し、共に與に以て

發達膨脹し、活動飛躍するの競争生ずる所以なるぞ。天人萬有の各自は、各自としての我を發顯し、發顯したる我は、我としての個體個性を發顯し、我としての家庭を發顯し、我としての國家と、我としての世界と、宇宙とを發顯し、更にその發顯したる個人家庭國家世界宇宙等の發達膨脹を期し、活動飛躍を爲して已まざるものなるぞ。

人生には獨り兵と兵との競争あるのみならず、劍銃と劍銃との競争あるのみならず、厚生の生産起業の競争あるのみならず、利用的經濟貿易の競争あるのみならず、學究的諸科學の競争あるのみならず、一藝一能悉く是れ競争ならざるはなし、萬事萬端、その關係分際に對する競争なきはなし。個人として競争し、家庭として競争し、國家として競争し、智ある者は智を以て競争し、情多きものは情を以て競争し、意思強き者は意思を以て競争し、力を以て競争し、策を以て競争し、徳を以て競争し、行を以て競争し、言を以て競争し、涙を以て競争し、笑を以て競争し、怒を以て競争し、喜びを以て競争し、樂を以て競争し、一舉一動、萬事萬端、競争ならざるはなきぞ。而して其の競争たるや、悉く是れ自己の信仰に同化し、自己の成格を膨脹せしめんとす

る、強制的、感化的、分分の天照發顯なるものぞ。獨り人類のみならず、宇宙萬有が萬有として、其成格分際を保有し、各自相互の關係を生じつゝ、ある者は、いづれも皆その信仰を發顯し、その成格を天照し、以て發達膨脹し、活動飛躍せんとする競争的發顯天照なるぞ。人生宇宙の天人萬有は、渾てその信仰を發顯し、其成格を天照し、その發達膨脹を欲し、活動飛躍を期せざる者はない、然り、之を期して競争に競争せざるものはなきぞ。

### 第十二節 成格競争の結果と信仰の到達

「競争は、萬有各自の性なるぞ、體なるぞ。苟も天人萬有として發顯する以上は、各自の性なきを得ず、體なきを得ず、各自の性あり體あるが故に、性として體としての信仰ありて之を發顯し、その「成格」を天照發達せざるべからず、成格を天照發顯するが故に、各自の競争ある所いぞ。競争は天人萬有の性として體として免かるべからざる、必然の結果なるぞ、必然的性體の結果として競争せぬばならぬものぞ、競争しつゝ、あるものぞ。各自相互に競争しつゝ、ある間に、共に與に以て發達するものぞ、競争に堪えざるほどの性體は、他に同化しつゝ、發達膨脹するものぞ。そのいづれにしても、競争したる結

果は、空しからず、やがては、均しくその信仰する歸着點たる、終局の根本大極的本体大本體に到達還元するものなるぞ。

我は我として他を同化せぬば、他は他として必ず我を同化するものぞ。同化して到達するも、同化せられて到達するも、その信仰の歸着點に到達するは同一なるぞ。天人萬有の到達すべき、終局の位置たる根本大極は、本來一定しつゝあるものなるぞ。他を同化もせず、他に同化せられもせずして、止まるは愚也、また止まり得らるべきものでもない。大凡、天人萬有は、進歩せざれば、必ず退歩するものぞ、進歩して他を同化せざれば、必ず退歩して他に同化せらるゝものなるぞ。故に猛然奮然進歩して他を同化するの實力威嚴なくんば、寧ろ深く喜びて他に同化せらるべし。均しく之れ發達膨脹するの道なるぞ。「自律」「他律」の別こそあれ、自己としての我が成格が、更に進歩發達するは同一なるぞ。それ既に他を同化すること能はざれば、必ず他に同化せらるゝものなれば、茲に彼我の別あるが如きも、その自己として發達するは同一なるぞ。他を同化して共に發達するも、他に同化せられて共に發達するも、その發達するには別なきものぞ。要は唯、相互に發達するにあるのみぞ。

自己としての我が成格の發達することならば、自律にても、他律にても、そは厭ふ所にあらず、その當時に於ける自己としての我が實力次第、威嚴相應に、其の發達を期すべきものぞ。然り、天人萬有の各自は、その當時に於ける實力威嚴に相應して、自律にても、他律にても避くる所にあらず、必ずや發達膨脹せんとしつゝあるものなるぞ。一に唯だ發達膨脹せんとしつゝあるばかりぞ。

第十三節 相互同化の由來と其終局——天人萬有が、自己としての信仰を發顯し、自己としての成格を天照發達せんとするに於て、他を自己に同化せしめんとするは何故ぞ。更にその委細を宣明すれば、他なし、その相互に同化せしめんとするは、本來、同性同體の者より發顯すれば也。その實、我も其的なれば、他も其的なるぞ。其的より云へば、我もなれば、他もなきものぞ。我と云ひ、他と云ふは、其的の發顯、天照的現象容態の分際を折半區域して名稱するものなるぞ。故に同化して後は、誰が同化した、誰が同化せられたと云ふことはない、同化するも其的なれば、同化さるゝも其的なるぞ。必竟すれば、其的の大發顯、大天照なるぞ、大活動、大飛躍なるぞ。故にその大發顯、大天照、大活動、大飛躍に於ける、天人萬有、相互の同化、不

同化は天人萬有相互の發顯天照的現象にして其的の大發顯大天照より觀すれば天人萬有相互の同化は其孰れが同化し得ても同化されたりとも同じきことなれば其的自身に於ては分ちはない隔てもない其的自身より觀すれば天人萬有は本來同化し居るものぞ只その的の大活動大飛躍よりして萬有相互に同化し同化されつゝあるものなるぞ。然り其的の大發顯大天照よりして萬有となり天人となり人類となり人種となり民族となり個人となり家族となり國民となり家庭となり國家となり世界となり人生となり宇宙となるからには亦其的の大本性として大本體として大本性の發顯大本體の天照として大活動大飛躍するの頭茲に異同を生ずるものなるぞ蓋し其的の性として體としての質は一質なり全質なり平等なり不二なるぞ。然れども其の大發顯大天照大活動大飛躍するや量を爲す質は平等なれども量は差別なり異同の生ずるは其のもの本來の質と天照の量とに由來して發顯するものなるぞ。もしそれ大本體のみにして大發顯大活動することなれば是れ質ありて量なきものぞ量なき質は用なし大活動なき大本體は亦何の用かある。然れどもその已に質あるものは量あること必然の結果ぞや已に大

本體として實在する以上はその大天照大活動あること亦必然の結果なるぞ。是れ大本體其的の大發顯大天照よりして天人萬有的異同の生ずる所以なるぞ異同的天人萬有の發顯せずんば斷じて大本體其的の大天照大活動は見るべからざるものなるぞ。故に天人萬有として同中異を生じ異中同に復し同となり異となり異となり同となりつゝあるは是れ正しく大本體其的の本來の大發顯大天照なるぞ大活動大飛躍なるぞ。故に其的より發顯したる天人萬有の異同は亦その自然として必然の結果として大同に復歸還元する所以のものなるぞ。然則天人萬有の各自相互に發顯天照あるは活動飛躍するは獨り天人萬有各自の性體たるのみならず亦天人萬有を發顯せしめたる大本體其的の性體なるぞ性體としての大發顯大天照なるぞ大天照大發顯としての大活動大飛躍なるぞや。

是を以て天人萬有はそのいづれにしても我としての信仰を發現し我としての成格を天照し相互により廣くより強く發達膨脹し活動飛躍せざるべからず。その我としての信仰を發顯し我としての成格を天照して更にそのより廣く發達膨脹しより強く活動飛躍せんとするには各自相互に以て他を同化せざるべからず是

れその各自が他の一切を我としての信仰成格に同化せしめんとする所以なるぞ。人生宇宙天人萬有の一切を我に化し、我としての大信仰大成格を大發顯大天照せんとする所以のものなるぞ。且其れ他と云ふは其實<sup>ニ</sup>他にあらざ、我なるぞ、全體「我」とは自己として支配し主宰し得る範圍を我と云ひ。「他」とは自己として支配主宰することを得ざる範圍を云ふものぞ。而も我の發達するほど、我としての主宰支配は擴張して、その他と認めしものは、自然と我たるに至るものぞ。他よ決して他にあらざ、其實<sup>ニ</sup>我なるぞ。天人萬有を一體とすれば、其一體は即ち、我の大なる我なるぞ、我の大なる我たるには、善なる我たらざるべからず、真なる我たらざるべからず、美なる我たらざるべからず、強且壯なる我たらざるべからず、長且深なる我たらざるべからず、高且遠なる我たらざるべからず、永且圓なる我たらざるべからず。寧、それ善惡醜真偽を超越したる我たらざるべからず、強弱廣狹深淺永短方圓等を解脫發顯する我たらざるべからざるものぞ。否とよ、更にその善惡真偽醜醜等を陶冶吞吐し得る我たらざるべからず、強弱廣狹深淺永短方圓等のあらゆる形式を斡旋し收納し開闔し得る我たらざるべからず。是れ實に人生宇宙天人萬

有其的を我化する本体大本體其的に到達し、還元し、更に發顯天照する道なれば也。活動飛躍なれば也。人生宇宙天人萬有は、悉く此の信仰を有し、此の道を實行して、我としての我を發顯天照しつゝ、各自相共に、その我としての我を大なる我たらしめんとしつゝ、あらざるはなきものぞ。されば、そのいづれにしても、善なる者、美なる者、真なる者等は、必ず惡なる者、醜なる者、偽なる者等を同化する者ぞ、其の劣れりとする一方は、必ずその優れりとする一方に同化せらるゝ者ぞ、同化せざらんとするも能はぬものなるぞ。「その根本大極」は、本來、一體同性なるを以て、自然と同化されるものぞ、同化するものぞ喜びても同化し、喜ばざるも同化せられ、いづれにしても、到頭同化は免かれざる現象なるぞ、他に同化さるゝを厭は、茲に、卓然として他を同化する丈の信仰成格を發顯天照すべきものなるぞ。

且その他に同化せられたりとも、同化せられたる他の中に於て、猶「我としての成格」は存するものぞ。勿論、同化せられては、他の部分の要用を爲すと雖、その部分に於て、猶且「我としての成格」は存するものぞ。例へば子は親に同化せられあれども、子としての成格は、兄弟姉妹とも兄弟姉妹として、各自各自に兄弟姉妹としての我を

有するものぞ、只父母の教訓に同化し感化して同心同體の言行を發顯するに過ぎざると一般なるぞ。亦我を同化したる他としても、我を同化して、我たる部分を併有し、その併有したる我なる部分<sup>部分</sup>は他の支配主宰に屬するを以て、同心同體的に我を行動せしむることは得べしと雖、その全然、我たる成格を自滅せしむることは能はぬものぞ。假令<sup>レ</sup>我を同化し得たる他なりとも、その同化中に於て、猶且つ「我たるの成格」を存せしめざるべからざるものぞ。若し我たるの成格を存せしめざるものとせば、我たるの成格はなきものとなるを以て、我たる<sup>部分</sup>の活動をなし得ず。我たる<sup>部分</sup>の活動をなし得ずんば、他も亦同化し得たる効なし、他としての活動も、亦それ<sup>部分</sup>の勢力威嚴を缺くものなればなり。故に同化せられたる我は、同化せられても、猶且つ、我たるの成格を存して、他をそれ<sup>部分</sup>發達膨脹せしめたるものなるぞ。發達膨脹せしめて、兩者の信仰を一致し、その信仰成格を一致合體して、更に「大なる成格信仰」として、更に又、亦、他の總てを同化せんとする者なるぞ。此際に於ける成格信仰は、他もなく我もなく、他と我との「同心同體」したる一心一體にして、その一心一體なる者としての天照發顯なるぞ。已に同心同體たることを得る時は、一

體にして足る。亦他と我とを論ずるの必要なきものぞ。是れ本來同一一體なるものが、茲にその同一一體に「復活」したるものなればなり。且その他と我との同心一體は、未だ以て天人萬有と共に、同心同體たる大なる一體たること能はざるが故に、未だその大本體としての大發顯大天照なきまでなるぞ。

更に「魂魄」を以て、同化不同化の消息を宣明すべき乎。それ魂魄とし云へば、宇宙は直に是れ大精魂なるぞ。同一の精魂は、化して同一の精魂となるものなるぞ。我としての精魂、茲に他としての精魂を化するは、我のみ他を化したるにあらず、我たる精魂と、他たる精魂との相互に同化一致したるが故に、如何なる方法によりても、相化して同魂となりたるものぞ、是れ蓋し他たる精魂の我に化せられたるにもあらず、他たるの精魂と、我たるの精魂との同化一致したるが故に、茲に相化して同魂となりたるものぞ。それ已に相投じ相化して同魂となりたる以上は、他たるの精魂あるにあらず、我たるの精魂あるにもあらず、相合したる一體としての精魂あるのみぞ。例へば、五千萬人の魂魄合して、一の日本魂<sup>日本魂</sup>に化成し、日本國としての成格を發顯するが如し、大不列顛國<sup>大不列顛國</sup>は、幾千萬の魂あるにあらず、愛蘭土魂<sup>愛蘭土魂</sup>として、蘇

蘭土魂として、英蘭土魂として成立するにもあらず、大不列顛として、大不列顛としての一精魂あるのみぞ。而もその大不列顛魂は、その民衆無數の魂魄、相集り相合して化成したるものなるぞ。然れども、已に合し已に化したる以上は、箇箇團團の精魂あるにあらず、一體の大不列顛魂あるのみぞ。更に一身に喩ふれば、胃魂、腸魂、肺魂、肝魂、皮魂、筋魂、肉魂、骨魂、等無數の細胞魂の茲に集り茲に合して、一の魂を化成しつゝある者と一般ぞよ。同一の働きを爲すものは、必ず同一に化して、同一の魂とはなるものぞ。是れ其の實は相化し相化せらるゝにあらず、本來、大宇宙の一大魂が發顯天照し、活動飛躍して、分分の發顯活動あるが故に、活動飛躍するが故に、その分分の活動が、茲に相集り相化して、同一の活動を發顯するが故に、その魂魄の相集り相化したる丈は、其處に融會して、茲に一塊とこそ化成しつゝあるものなるぞ。是れその一方が化するにもあらず、化せらるゝにもあらず、魂魄投合すれば、茲に同化して一塊とはなる所以ぞよ。我としての魂も、他としての魂も、本來一大魂にして二魂あるにあらず、其活動の一樣に歸すれば、相互に投合して一塊たらしむるを得ざれば也。他としての魂も、我が魂也、我としての魂も、他の魂也。本來同魂

一體にして二魂二體あるにあらず、一塊たるものなればこそ、茲に相互に投合して、亦、一魂とはなりつるものぞ。豈に嘗に彼我の魂のみならんや、千百人の魂も、千百萬億の魂も、相互にその活動の投合すれば、忽地化して、一大魂となり、同一の活動を爲し得る所以なるぞや。且夫れ同化したればとて、依然分分の活動を爲すを以て、分分の魂は存するものなるぞ、一の大日本魂中、五千萬人の魂は、亦依然として、五千萬人の魂として、各自分分に活動しつゝあるものなるぞ。蓋し分分の活動を爲すが故に、その活動の同一なるが故に、分分同一に相化するほど、その活動のそれ丈、亦大活動するの大威嚴を發顯する大魂とはなる所以なるぞ。更に喩へば、猶骨魂、腸魂、肺魂、胃魂、肝魂等の細胞魂の相化して人魂を爲すと一般ぞよ。我れ他を化するると云は、我を主としての解説にして、我に化せられたりと云ふ他を主として云へば、他は我に化して、亦我を化しつゝあるものぞ。他は我の威力活動を助成すると共に、亦我の威力活動を吸集して、その成格を維持發顯しつゝあるものなれば也。さすれば、他を化したるの我は、却て他に化せられつゝあるものぞ。故に化するとか、化せらるゝとか、云ふは、共に以てその大成格を天照活顯せんとする過程に

して、共に以てその分分の活動を爲しつゝ、以てより大なる活動飛躍を爲さんとするものなるぞ。化するも、化せらるゝも、共に是れ分分の活動にして、より大なる活動を爲さんとする所以の活動にして、その活動たる效能は、相待て均しきものぞ。そのいづれを缺きても、より大なる活動飛躍をすること能はぬものぞ。化するとて半面にして、その半面は化せられつゝ、あるなり。化せらるゝとて半面にして、その半面は亦化しつゝ、ある者なるぞ。要するに化して化せられ、化せられて化しつゝ、共に以て大なる天照發顯を爲し、大なる活動飛躍を爲さんところしつゝ、あるものなるぞ。究明すれば、化すると、か、化せらるゝと、かに拘泥して、一有一人としての魂のみを、永久に墨守し得べき者ならず。進歩せざれば退歩す、進歩する者は相互に化す、化せざるを得ず、退歩するものは化せらる、化せられざるを得ず。化すれば、茲に同一の魂となる、同一の魂となるが故に、忽地、彼我の見を去りて一體となり、一致の活動あるものぞ。本來一有一人として孤立し得べきものでない、化して同魂となるか、化せられて同魂となるか、いづれにしても、一有一人として孤立し、孤立して活動し得べきものでない。大とならざれば大活動すること能はざるぞ。故に

天人萬有は、其當時當時の本体相應に、化して同魂となる乎、化せられて同魂となる乎、いづれにしても、大魂となりて大活動大飛躍せんとしつゝ、あるものぞ。故に一人にても自覺すれば、是れ一人の自覺にあらず、千百萬人の自覺となるものぞ、一人にても實行すれば、是れ一人の實行にあらず、千百萬人の實行とはなるものぞ。そは何人も正直なる方に、善良なる方に、眞誠なる方に、美致なる方に、自覺し實行せんとしつゝ、あるものにして、只その未だ自覺し實行するの動念動機が、熾灼として霹靂觀照し、薰發せざるが爲めのみ。霹靂觀照せざるが爲めに、薰習煥發せざるが爲めに、自覺すること能はず、實行すること能はざるものぞ。何人もその動念はあるものなれば、只その動機を興ふれば、必ず自覺實行するものぞ。是れ何人も相互に一日も早く一刻も早く、より多く自覺し實行して、他の動念を啓發し、他の動機となりて、千古萬古、千今萬今、一世萬世を救濟せざるべからざる所以なるぞ、救濟すべきの天職責任を有するものなるぞ。本來同化せざるべからざる精魂なれば也。同化しつゝ、ある精魂なれば也、本來同一の精魂なれば也。只その大宇宙的一大精魂の大天照大發顯として、大活動大飛躍として、分分の魂を發顯天照し、さてその分



分の魂魂は、亦相互に投合して一大精魂たらんと活動しつゝあるものぞ、飛躍しつゝあるものなるぞ。是れ蓋し天人萬有、分分の魂魂が、大宇宙的一大精魂に復歸するの道にして、萬有各自が各自の現象魂として、本体大本體魂に復歸せざるべからざる、性なり體なればなるぞ。

それ已にいづれの方面より究明するも、其的としての本体大本體には、我もなし、他もなしと雖、其的たる大本體本体としての量より、量としての天照發顯より、天照發顯としての活動飛躍よりして、我としての成格、彼としての成格は發顯したるものなるを以て、その發顯したる彼我の成格は、そのいかに反對の關係、衝突の分際あるが如きも、そは發顯活動的の現象にして、究竟すれば、同一體に歸着し、彼我の關係分際は、やがて融會一致するものなるぞ。而して我としての彼としての對峙的競争は、其極に達したるものなるぞ。そは我と彼とが同化一致して、其的となりたる次第なれば、茲に我として彼としての萬有たる成格は、變じて、更に其的としての同一大成格と成りたる者なれば也。是れ我としての成格、彼としての成格の滅したるにあらず、我としての成格、彼としての成格が、同化一致して、其的と云ふ大成格に到

達したるものなるぞ。然かり、彼我本來の本体が觀照して大本體に復活したるものなるぞ。信仰發顯の終局は、此處なるぞ、成格發達の大極は、此處なるぞ。此處とは抑も何的なるぞ。

第十四節 其的と信仰の薰發——其的とは何ぞ、是れ、人生宇宙の終局根本也、天人萬有の本体大本體也。そのいかなるものなる乎を感得發見して信仰發顯せねばならぬものぞ。目的公準とせねばならぬものぞ。之を感得し發見し信仰して、之を目的公準とし、更に之を實行發顯して、其的に到着還元せねばならぬものぞ、大活動大飛躍を要する所以なるぞ。さなくば、我としての我は満足せぬものぞ、心と體との慰藉安泰を得ぬものなるぞ、萬有としては、天人としては、彼としては、我としては、その性自然と此の如くに醱酵薰灼し、その體、自然と此の如くに發顯活動するものなるぞ。

然則、その之を感得し之を發見し更に、之を信仰發顯するには、いかにすべき乎と云ふに、我と吾躬に吟味究明すれば足るものぞ。その之を吟味究明する者は自己其的なるぞ、自己たる我を棄て、は、吟味することも、究明することも、能はぬものぞ、我

としての自己を除きては、信仰は得らるべきものならず。「信仰」とは、我としての自己が、吟味究明して、悟入開悟するにあらねば、他よりのみ注入し得らるべきものでない、いかなる大聖者大知識の説明宣示ありとも、自己としての我が我と吾躬に感應自覺して、悟入開悟する所あるにあらねば、氤氳熾灼として、感得發見せぬものを、我たる自己は、信仰の源泉なるぞ、活火なるぞ。自己あれば—自己としての我あれば、信仰は得らるゝものなるぞ、自己たる我には、我としての身あり、心あり、體あるぞ、家あり國あり天地あるぞ、我の全身たる心體は、その我としての心と體との一致的全身を感應會得すると共に、其家とする處、國とする處、天地とする處に、接着觀照しつゝ、朝な晝な夕なに、吟味究明の際、吟味究明して已まざれば、いつとはなしに、忽然として、我の憧憬彼的に感應し、道交し、其處に信仰は、穆穆醇然として湧き出る者なるぞ。必ずしも他人他國に發する信仰に同化するを要せない。見よや、印度には、梵天、佛陀の信仰發し、支那には上帝、蒼天の信仰發し、猶太、波斯、亞刺比亞、及歐米には、猶太、基督、回、拜火等の信仰發し、埃及、希臘等にも、當時相應の信仰は發しつゝ、ありたる者ぞ。苟も人類の住する處には、今古を問はず、東西を論せず、世界列國、到る

處に於て、其深淺厚薄大小高卑の程度こそあれ、必ずや、それ相應の信仰は、氤氳し、醗酵し、薰發しつゝ、ある者なるぞ。是れ其人、其家、其國に於て、自然と我と吾身が天地萬有に俯仰接着する間に於て、觀照會得しつゝ、吟味究明したる者で、よしや、その未だ仔細に吟味すること能はず、究明し得ざる所ありとするも、各自自然と感應道交し、悟入開悟し、忽然として、醇然として、それ相應なる概念的、觀念的、無念的、公準信仰の薰發湧出し、薰發湧出すると共に、更にその信仰を發顯天照しつゝ、あるものなるぞ。されば、其の信仰感得は、必ずしも、他人を要せず、他國を要せず、何處、いかなる人にて、家にて、國にて、我と吾身に、其の家、其の國、其の天地にて、吟味究明するとを得るものぞ、悟入開悟することを得るものぞ、感應會得することを得るものぞ。そは、其躬が直に感應會得せんとする信仰其的なるぞ、信仰の主體其的なるぞ、神なるぞ、八百萬神なるぞ、佛なるぞ、十方諸佛なるぞ、上帝なるぞ、ゴットなるぞ、孔子なるぞ、釋迦なるぞ、ソクラテスなるぞ、摩西、基督、マホメットなるぞ、マヂーなるぞ、然り、其人自ら感應會得し、氤氳醗酵し、悟入開悟して、信仰する所の、根本大極其的の發顯體なるからなるぞ。故に、信仰とは、自ら常に人人家家國國にて、氤氳醗酵し、薰習薰發

しつゝあるものなるぞ。其躬の那的なるかを知れば、少くとも知らんとすれば、信仰は直に其身に、其心に、其體に、其全身に鬱然沛然穆穆然として、氤氳醱酵し、薰發湧出し來るものぞ。知れや、其躬其儘が、信仰其的の結晶體なるぞよ。其躬は必ず其身を信仰するものぞ、其躬其身を信仰せずんば、其躬は其身として發顯活動すること能はざるものなるぞ。故に其躬の更に大なる身たることを欲せば、宇宙萬有化しての大なる其身の何物たることを會得して、信仰せざるべからず。信仰としては、如何なる信仰も、必ずや、この大極に發達到達せねばならぬぞよ。さなくば、未だ小なる其身にして、満足するには足らず、満足すること能はぬものぞ。故にその薰發顯したる信仰と、其の信仰の宣明的解釋と、宣明解釋の實行的感化とは、他に超絶するものたらざるべからず、内には健全不壞なる稜威光明を有し、外は他の總てを同化し得るの天照的信仰解釋實行なくてはならぬぞよ。さなくば、他人の信仰に推倒せられ、他國の信仰に同化せられざるべからざるものたるを覺悟せよ。いづれにしても、汝等の擇ぶ所にあるものぞ。

第十五節 信仰の發顯實行と心體の擁護發達——信仰は獨り内に充

滿するのみならず、内に充滿するのみを以て足れりとはすべからず。更に外にも感化し得る者たらねばならぬぞよ、外をも感化し得る丈の者ならでは、外に向て發達膨脹すること能はざるのみならず、内をも維持發顯すること能はざるに至るものぞ。全き信仰とは、獨り心に慰藉を與ふるもののみならず、更に體をも安全に擁護するに足る者たるべからず。さなくば、自己としての我が成格を發達せしむること能はぬものぞ、我が成格としての活動飛躍を爲すこと能はぬものぞ。是れ其信仰は内に心に修養訓練する所あると共に、外は體にその威嚴勢力を發顯するを寸時も怠るべからざるものなるぞ。然り、信仰としては、如何なる物をも、その周圍に於ける渾ての者をば、感化し得るの稜威光明を有して、其心體は之を發顯天照し、之を活動實行して、天人萬有の渾てを感化し同化せしめねばならぬものぞ。換言すれば、其信仰は、常に其の時代時代の出來事を感化し、同化し、寧、私の信仰よりして、時代時代の出來事を天照發顯して、個人的、家庭的、國家的、世界的、宇宙的の主動者、先導者たらざるべからず、私の信仰は、常に主動して、個人的、家庭的、國家的、世界的、宇宙的、時代を發顯天照せざるべからざるものなるぞ、時代時代の現象出來事を

ば發顯天照しつゝ、更に之を啓發し誘導して、より多く、より高く、進歩發達せしむるの主動者たらねばならぬものぞ。「自己としての我が信仰よりして、時代を發顯すること能はず、時代時代の現象出來事をも、私の信仰に同化すること能はずとせば、私の信仰は、必ずや、時代に後れ、時代より放逐せらるゝものなるぞ、かくては、いかに其の信仰の内にも燃ゆるが如く熱烈するも、外、時代に容れられず、時代をも化する能はず、時時刻刻に、日に、月月に、歳歳に、時代精神に劣る者となり行くを以て、時代よりは推倒せられ、壓服せられ、外に向て、其の體を擁護すること能はざるのみならず、内に省みては、その心の慰藉さへ破れて、攪亂し、自己としての我が成格、個人としての我が成格、自己としての我が家庭、自己としての我が國家をも、充分に發顯天照し、活動飛躍すること能はざるに至るものぞ。奚ぞ矧はんや、自己としての我が世界、自己としての我が宇宙を大發顯大天照するをや。

古來世界列國の教義的各信仰が、次第次第に衰亡し、或は萎靡不振に傾きつゝ、ある者、甚だ以て尠からざるは他なし。各自いづれも皆常に、自己としての信仰を修養訓練しつゝ、他の宗義學說をも切礎究明して、其等の信仰を私の信仰に化し、其時代

を、我としての時代に化しつゝ、進行すること能はぬからなるぞ、寧ろ、その「信仰」よりして、其時代を發顯し、時代精神を活動飛躍せしむること能はぬからなるぞ。思へや、時代としては、孰れの時代も、歳に月に、日に夜に、時時刻刻に、進歩發達しつゝ、ある者ぞ。然るに、我としての信仰は、其時代に卒先して發達すること能はず、更にその時代を化することも能はず、又その時代に伴ふて進行することも能はず、依然、在來のまゝを墨守して、舊習古慣に感染拘泥し、却て、新時代の現象を痛罵し、新時代の出事事を嫌忌し、獨りその「自己」としての信仰のみに熱中して、いかに克く猛烈強熱なりとも、是れ唯だ内に熱中するの信仰猛烈なるのみ、外は殆ど時代の何物たるさへ顧みる所なきに至るを以て、時代よりは自然に疏せられ、自己よりも自然に遠ざかり、共に以て時代を忘却し、時代に忘却せられつゝ、あるものぞ。古を尊び今を排するは、悉く非なりとは云ふべからず。然れども、其の多くは、古に倣して今を欺かざる者、幾許かある。古のみを尊びて、今を排するは、道にあらざる、是れ天人萬有、進歩發達の性體を阻害するものなれば也。亦今のみを尊びて、古を排するも、道にあらざる、是れ遠きを追ひ、終を慎む、根本支流の關聯を阻害する者なれば也。そのいづれも

以て古人に報じ、今人に忠なる所以の道でない、道化の道ならず、人道でない。「天道」でない、天人調和の神道でない。

大凡、信仰と云ふからには、向上の信仰にあれ、向下の信仰にあれ、其信仰にして、當時の時代を發顯すること能はず、亦その時代を我に同化することも能はぬものとせば、少くとも、責めては、其時代と共に進行して、活動飛躍する所なくてはならぬものぞ。さなくては、他に同化せらるゝは、當然なる結果なりと知れ。天人萬有は我に他を化せざれば、他は必ず我を化するものなるぞ。

且夫れ我は只だ吾のみ信仰し、我のみ發顯實行すれば、他に關せずとは云はれない。若しや吾のみ信仰し、我のみ發顯實行すれば、毫も他には關せずとして安着する信仰なりとせば、是れ其の信仰は、未だ取るに足らない信仰なるぞ、狹隘固陋の信仰なるぞ、未だ以て、全き信仰なりとは云はれぬものぞ。大凡、信仰と云ふ者は、内心にのみ信ずれば、足ると云ふものでない、外に體にも其の信仰を發顯天照せざれば、全からぬものぞ。我のみ信ずれば、足ると云ふものでない、他にも我の如く信仰せしめねば、已まぬものぞ。内心にある信仰を外に體に發顯し、我の信仰し實行

して、我としての成格、我としての個人的成格、我としての家庭的成格、我としての國家的成格、我としての世界的成格を、人生宇宙に發顯天照する如く、他をして、亦我の如く信仰實行せしめて、其成格を、個人的成格、家庭的成格、國家的成格、世界的成格を、人生宇宙に發顯天照せしめねば、満足せられないものなるぞ。故に、我の信仰、我としての信仰解釋實行は、總て他の信仰解釋實行に超絶する丈の稜威光明、天人萬有、總てに打ち勝て卓出する丈の成格威嚴なくては、他を感化し、他を同化することは出来ぬものぞ、我れ克く、他の總ての信仰解釋實行に打勝つ丈の成格威嚴ありとせば、其の超絶卓出したる成格威嚴には、他はいかに感化せず、同化せざらんとするも能はぬものぞ。自然と、我の信仰に感化し、我の實行に同化し、我の成格に統一せられ、攝理せらるゝものなるぞ。他も亦我を化すること能はずとせば、寧ろ、喜びて我に化するものなるぞ、我の愛に感じ、我の威に化して、我と同心一體たらんとするに至るものぞ。何となれば、我を化すること能はざるの彼は、勢として、其の愛の我に及ばざるを知り、其の威の我に如かざるを知るに至るものぞ、眞實に、その信仰を求め、その成格の發達を期するものは、其至誠よりして、必ず然る

ものぞ、僥慢輕薄の我見は發せざればなり。僥慢輕薄の我見にして横發するものは、未だ其の至誠足らざるものぞ、未だ克く眞實信に、道を求めんとするものにあらざるぞ。眞實信に、道を尋ね、信仰を求むる者は、必ずや、その至誠無妄なるを以て、自然と、彼我の優劣を知りて、僥慢輕薄我見は、烟の如く消え去り、水の如くに流れ來るものぞ。それ既に我に及ばざるを知り、我に如かざるを知りたるの彼は、必ずや、**「我が愛の彼れ自身を愛するの愛たるを知り、我が節制の彼れ自身を節制するの威嚴なることを知るに至ると共に、更にその已に既に自己を愛するの愛たるを知り、自己を節制するの威嚴たるを知りたるの彼は、必ずや、亦、自己を空ふして、殆ど自己たることをも忘れて、我の愛に感じ、我の威嚴に同化するものぞ。苟もその信仰を求め、成格の發達を期する者は、その赤誠の公平正直にして然らざるを得ぬものぞ、自からして然るものなるぞや。然り、他としての彼は、其彼たるを忘れて、我と、同心一體たらんとする者ぞ、たらざらんとするも能はざる者ぞ。その已に既に愛と感ずるの愛は、彼たるを忘るゝと共に、亦我たる者もなし、同心一體の愛とはなるものぞ。それよ、愛とは、本來彼我の見なく別なきものぞ、故に既に愛と感じたる彼は、**

自然と彼たるを忘れ、我たることを忘れざるを得ざれば也。それ已に愛の愛たる愛を知りたるの彼は、亦その節制に就ても、自己の爲めの節制たるを知るべく、自己と他との節制たることを知るべく、亦それ彼たり我たるの見なく別なきに至るものぞ。**「節制とは、愛の半面にして、愛とは、節制の半面なるぞ。愛は節制を以て知り、節制は愛を待て知るものぞ。是れ共に以て、自己としての信仰成格を發顯天照する全面なり、稜威なり光明なるぞ。何人も萬有と共に、自己としての信仰成格を發顯天照するに就ては、必ずや愛なかるべからず、節制なかるべからず、彼我の見地を以て愛を廢し、節制を怠るべからざるものなるぞ。故に亦他を同化すると云ふに就ても、固より、彼我の見あるべからず、他と云ふは他にあらずして、その本來は我なるぞ。我なるが故に、我なる他を我に同化せんとするものにして、その彼を愛し、彼を節制するは、他として然るにあらず、全然、彼我の見なく、同一の我として然るのみぞ。且つその他と云ひ、我と云ふは、共に以て活動飛躍するの働能たる形容に就て然るものなるぞ、心は決して然るものならざるぞ、然るべからざるものなるぞ。我那物ぞ、我那物ぞ、天地萬有と共に、同根一體の者にして、化せざれば化するの性體を**

具足するものぞ。その性體の自然に反しては、天人萬有、一として進退すること能はぬものぞ。優れる者は劣れる者を化し、劣れる者は優れるものに化せらるゝこと、天人萬有自然の攝理なるぞ。「勤怠は、天人萬有自然の報酬あるものと知れ。よしや、直ちに他をして悉く我に感化し、我に攝理すること能はずとするも、勤めて已まざれば、其範疇に於ける過半以上は、感化し得るものなるぞ、統一し得るものなるぞ。而して後こそ、我としての信仰は、心にも、體にも、全身の内外に、天照發顯して、發達膨脹して、我の吾たる成格、我としての個人、我としての家庭、我としての國家、我としての世界を、人生宇宙に天照發顯し、發達膨脹し、活動飛躍し得たる者ぞ、少くとも得つゝあるものなるぞ。それ此の如くにして已まざれば、獨りその一身一家一國の統一あるのみならず、世界列國の命運、人生宇宙の大勢をも、支配統一することを得るに至るものぞ、正邪曲直、治亂興廢、及び、その盛衰消長の大機大權は、自から我としての掌中に歸し來ればなり。かくてこそ、更に、大宇宙たるの大成格に同化還元して、その大成格たる絶大無比なる我をば、人生宇宙に大發顯大天照することも難きにあらざるぞ。然り、一切天人萬有をも、漸漸次第と救済し攝理し、更に大發顯大

天照することを得るにも至るものぞ。故に曰く、信仰とは、獨り我心にばかり慰藉あれば足ると思ふは、大なる間違ひで、其心に感得したる信仰を、直に體には發顯實行して、我たるの成格を天照活躍せしめねばならぬものぞ。内々心へのみ修養訓練するばかりでなく、外々體にも發顯發達せしめつゝ、單に、自己としての成格を維持するのみならず、更に他の總てをも感化し同化し得る信仰活動ならでは、全き信仰、全き成格とは、云はれぬものぞ。外は他より壓制する逼迫を受けながら、獨り内にのみ信仰するばかりでは、斷じて、我としての成格は、天照し發顯し得るものではない。他に壓制せられ、逼迫せらるゝ位にては、其信仰は、未だ以て其成格を守るに足らず、薄弱なる信仰なるぞ、他より逼迫壓制せられては、獨りその體に苦痛あるのみならず、更にその心の慰安さへ、亦、内に得ること能はざる悲境に達するものぞ。もしそれ、我の吾たる成格を人生宇宙に天照發顯すること能はざると共に、他をも救済超樂せしむること能はざる信仰解釋實行なりとせば、我としての本性本體は、斷じて満足大満足すること能はぬものなるぞよ。

故に内に省みては、益その信仰解釋を究明し、啓發し、修練し、外に向ては其信仰解釋

を發顯實行して、心と體との、全身的發顯天照あると共に、其の、天照發顯としての活動飛躍とを鍛鍊せざるべからず。常に怠りなく究明啓發修練したる信仰解釋の發顯する所は、獨りその肉體を強壯健全ならしむるのみならず、更にその四圍に於けるありとあらゆる科學的文物制度をも、進歩改善して、内外觀照し、表裡照應し、その當時に於ける、第一の主動者先導者として自由自在に活動飛躍し、自己としての我が成格、個人として、家庭として、國家として、世界としての我が成格を、遂次に天照發達しつゝ、自己を擁護し、他を擁護し、自他平等に、その、心體致一的全身の安泰、康福を得ざるべからざるものなるぞ。然り、其の信仰解釋實行を以て、心を慰藉し、體を擁護し、心體致一に活動飛躍して、自己たる全身の成格威嚴を發顯天照し、自己としての個人、自己としての家庭、自己としての國家、自己としての世界を發顯天照し、發達膨脹し、獨りその當時當時の社會的現象を同化するのみならず、發顯天照するのみならず、進んで、天人萬有一切を救済同化し發顯天照し、更に以て、自己としての大宇宙を大發顯大天照するまでに達せざるべからず。是れ實に、信仰發顯の終局なるぞ、成格天照の大極なるぞ。この終局大極に到達する迄は、其信仰解釋實行を

日日夜夜、時時刻刻に、其の心と體との全身に發顯天照し、發達膨脹し、活動飛躍せねばならぬものぞ。勤勉精進し、進取敢行せざるべからざるものぞ、秒時微刻も油斷懈怠あるべからざるものなるぞ。

#### 第十六節 信仰解釋實行の異同と個人家庭國家世界の恒懷雅量

其の、信仰こそ、解釋こそ、實行こそ、異同あれ。其の、目的とする所は、均しく之れ、人生宇宙の終局目的なるぞ、根本大極なるぞ。而して其の終局目的に到達同化し、其の根本大極に歸宿還元するには、孰れも皆以て先づ其の人生を全ふし、個人を全ふし、家族を全ふし、國民を全ふし、人類を全ふし、家庭を全ふし、國家を全ふし、世界を全ふし、更に宇宙を全ふし、その天人萬有一切を全からしめねばならぬ者ぞ。されば、そのいづれの宗教宗義學說立論も、悉く是れ、人生宇宙を本位として、立脚發軔せぬものはない、皆以て人生を守護し、個人を守護し、家庭家族を守護し、國家國民を守護し、世界人類を守護し、宇宙萬有を守護しつゝ、その改善教導發達進歩を經營せねばならぬものぞ。故に、什麼なる宗義學說も、總て皆、人生宇宙平和の守護神として、高く其の旗印を翻がへし、個人を守護し、家庭を守護し、國家を守護し、世界を守護



し、宇宙萬有を守護せんとするにあらざるものぞなき。此點に於ける各自の義説は、均一にして、彼此の輕重なきものぞ。〓よし、其の信仰解釋實行は、その一方に偏重する所ありとするも、然れども、其の之を實際に應用活動するに於ては、果していづれが克く、人生宇宙を全ふし得る守護神なる乎、そのいづれが克く個人を守護し、家庭を守護し、國家を守護し、世界を守護し、宇宙萬有を守護し得る者なるぞ。もしそれ、個人を認めず、家庭を認めず、國家を認めずして、一超直入、只その人類のみを救はんとするは不可なるぞ。先づその個人、家庭、國家を救はずして、獨り、人類のみ救ひ得らるべきものでない。猶、人類を認めずして、獨り、國家のみ救はんとし、若しくは、獨り、家庭のみを救はんとし、又は、獨り、個人のみを救はんとするの不可なるが如し、人類を認めずして、獨り、國家のみ、若しくは、獨り、家庭のみ、若しくは、獨り、個人のみを救ひ得らるべきものでもない。知れや、人類としては、個人を發顯し、家庭を發顯し、國家を發顯し、世界を發顯する者なるぞ。發顯したる世界、國家、家庭、個人は、人類と云ふを主體として、活動飛躍しつゝある者なるぞ。故に人類を救ふには、人類相應の信仰教導なかるべからず、あるべきものぞ。いかに、個人としてに利

益あればとて、家庭に調和せざれば、未だ、全き信仰教導とはするに足らず。いかに「人類」としてに利益あるが如きも、國家に調和せざれば、未だ、全き教也、道也、信仰也とするに足らず。「人類」に相應する全き信仰教導としては、必ずや、その個人、家庭、國家、世界に、調和すると共に、人類としてを、救ひ得る者ならざるべからず。然らざれば、人類〓個人的人類、家庭的人類、國家的人類、世界的人類〓は、永く、悦服歸順するものならず。個人として之に反對し、家庭として之に反對し、國家として之に反對し、世界として之に反對し、人類として之に反對し、永くその信仰教道をして、人生に活動せしめざるものぞ。蓋し、人類としては、單に人類としてのみ發顯し得るものでない、その發顯するや、人生宇宙に關聯しつゝあるものぞ、個人を除きては、家庭、國家、世界の成立せざるが如く、家庭を除きては、個人も、國家も、世界も成立する能はず、國家を除きては、亦、個人も、家庭も、世界も成立する能はず、更に、個人、家庭、國家を除きては、「世界」も、人類も成立すること能はず。此と一般、人類を除き、世界を除きては、亦、個人も、家庭も、國家も成立すること能はぬ者ぞ。是れ皆相共に相待て成立しつゝあるものなれば、その孰れをも、調和して、いづれをも救濟する處なかるべからず。是れ

實に、人類としての生活的發顯體に相應なる信仰教道なるものぞ。而も世には、個人家庭國家を外にしての學理を究明せんとするものあり、是れ人類を目的とせざる學理なれば、個人家庭國家を目的とせざる學理なれば、其の人類以外、個人家庭國家以外に求めて究明するは不可なし。然れども、直接にあれ、間接にあれ、その人類を目的とし、個人家庭を目的として、更に之に應用實行せんとするものならば、必ずや、それ人類を目的とし、個人家庭國家を目的として、究明するの學理たらざるべからざる者ぞ。個人家庭國家以外に究明したる學理は、斷じて個人家庭國家に應用實行すると能はず、個人家庭國家に應用實行すること能はざる學理は、亦、人類としてにも應用實行すること能はざる學理なるぞ。人類に應用せざる學理は、個人家庭國家に應用すること能はざる學理は、人類に益なき用なきものぞ。人類に益なき用なきものは、人類としては究明するに足らず、究明するの暇なきものぞ。而も小は一微塵より、大は宇宙に至る迄、その未だ人類と關聯せざるものなき故に、天人萬有、一として人類に用あり、益あり、未だその無用なる者あることを發見すること能はざるぞよ。奚ぞ矧はんや、その究明する所は、假令、個人家庭國家世界を

外にして究明するの學理教條なりとも、其實は個人家庭國家世界に應用せんが爲めの學理的教條なりとせば、是れ最も不可なるぞ。人類を外にして、人類の教道を求めんとするは、人類を立脚とせずして、人類救済の信仰を求めんとするは、假令ひ求め得るの信仰教道ありとするも、そは必ず人類に、迂遠なる信仰教道たらざんば、ならず、個人家庭國家を外にして、個人家庭國家の教道を求めんとするは、個人家庭國家を立脚とせずして、個人家庭國家を救済せんとするの信仰を求めんとするは、假令ひ求め得るの信仰教道ありとするも、そは必ず、個人家庭國家に迂遠なる信仰教道たらざんば、ならず。寧ろ、空想空論に歸することなくんば幸ぞよ。現在人類としては、個人家庭國家と發顯しつゝあるものを、その先づ個人家庭國家を救はずして、直に人類のみとして、救はんとし、個人家庭國家以外に、教道を求めんとするは、「見公平なるが如きも、其の實は、偏僻なる空議空論たるを免かれざるものぞ。直に個人としてに衝突し、家庭としてに衝突し、國家としてに衝突し、獨りその個人家庭國家としてを救ふこと能はざるのみならず、亦、人類としてをも救ふと能はず、却て、個人家庭國家としての秩序平和を攪亂し、遂には、人類としての安寧自由康福を

も殘賊するものぞ。故に曰く人生宇宙としては、天人萬有としては、その天人萬有に相應なる、人生宇宙に相應なる信仰教道にして、其の現在實顯しつゝある個人を救ひ、家庭を救ひ、國家を救ひ、世界を救ひ、宇宙萬有を救はざるべからず。是れ實に「人類を救ふの教道なり、信仰なり。人生を全ふするの教道なり、信仰なり。天人萬有を救ふの教道なり、信仰なり。宇宙を全ふするの教道信仰なり」と知れや。

而もそのいづれの宗義學說が、果して克く人生を全ふし、個人を全ふし、家庭を全ふし、國家を全ふし、世界を全ふし得る者なる乎。その之を裁斷し、選擇し、取捨するは、人生なるぞ、個人なるぞ、家庭なるぞ、國家なるぞ、世界なるぞ。「個人は私なし」、家庭は黨せず、國家世界は公平なり。その克く我を守護し、我を啓發し、我を改善し、我を進歩發達せしむるに足る者せば、必ずや克く選擇し、裁斷し、取捨して、之に信賴するものぞ。我を教道し、我を訓練し、我を活動飛躍せしむるに足る者せば、必ず克く選擇し、裁斷し、取捨して、之に悦服するものなるぞ。而もその已に既に信賴し、悦服しつゝありと雖、更にそれにも卓出超絶したる宗義學說のありと知る時は、亦復、直に翻然として、其の劣等なる舊來の宗義學說を放擲して、其卓出超絶したる所の新宗

義新學說に、假令其の宗義學說は、舊きものなりとも、其の人の新に知り得たるものとせば、その人の爲めには、新宗義新學說たるものぞ。〓謳歌歸依して、信賴悦服するものなるぞ。然らざれば、自己としての本体大本體を發達し、自己としての性命動脈を興奮し、其の心と體との全身的慰藉安泰を得ると能はぬからである。一日遲疑し、一日懈怠すれば、一日劣敗し、一日苦痛するの悲境に墮落すればなり。而も人生宇宙、天人萬有は、特に人類としては、最もその人類としての生活發顯體たる個人、家庭、國家、世界は、此の如き悲境に墮落するを好むものでない、時時刻刻利利那那、其の改善進歩を期し、圓滿極成の發顯天照を期して已まざるものなるぞ。そは其の根本大極に遡りて達觀すれば、均しく之れ根本大極より天照發顯し、活動飛躍しつゝある者にして、舊と云ひ、新と云ひ、共に是れ同一根本大極たる本体大本體よりの天照發顯に過ぎざれば、活動飛躍に外ならざれば、初めよりして、彼此の別はない。故に只その當時當時に最も適切にして、將來に最も剋禁にして、更に最も克く衆に卓出超絶したる信仰教道を選擧取捨すれば足るなり。本來、人生其的が根本大極たる本体大本體の天照發顯なるを以て、活動飛躍なるを以て、人類其的が

個人家庭國家世界其的が、各自に協同選擇して、その當時の時代精神に適的融會し、將來改善の動念動機に剴切篤實なる信仰教道に歸依同化するは當然なるぞ、その解釋實行の他に卓出超絶したる宗義學說に信賴悦服するは必然なるぞ。是れ直に人生其的の本性本体にして、其の根本大極たる本体大本體の亦その此の如くに天照發顯し、此の如くに活動飛躍する所の者なるぞや。されば、劣等なる舊來の宗義學說は、その卓出超絶する所の新宗義新學說に向ては、そのいかに反抗せんとするも、自然の大勢として、打ち勝つと能はぬものぞ、劣等なる新宗義新學說も、亦然り、優等なる舊來の宗義學說に向ては、そのいかに反抗せんとするも、自然の結果として、打ち勝つこと能はぬものぞ。そはその反抗せんとする劣等なる宗義學說も、均しく之れ根本大極たる本体大本體の天照發顯活動飛躍に過ぎざれば、其終局は自然と、其の優れる所の宗義學說の信仰教道に歸順同化せざることを得ざるに至るものぞ。一義は一義つゝ、一説は一説つゝ、行行節節に、句句字字に、其の物自から、その義その説を改善刪輔大成せざるを得ざるに至るものぞ。一念は一念つゝ、一言は一言つゝ、一行は一行つゝ、念念言言行行に、其の人自ら感化し、改善し、歸順し、

同化するに至るものぞ。古に今に、宗義學說の漸漸次第に萎靡衰亡しつゝ、ある者の尠からざるは、正敷其の證左なるぞ。是れ其の卓出超絶したる宗義學說には、不知不識の間に於て、歸順同化しつゝ、あるの、自白ならずや、證明たらずや。

數多しと雖、究明すれば奇偶に過ぎず、道多しと雖、究明すれば兩道に出でず。更に奇偶を究明すれば、唯一に歸着すると共に、兩途に出る者は、亦必ず、一途に歸着するものぞ。何人も一以外に數を得ること能はざるが如く、一途以外に道を得ること能はず、大道は一也、大本體は一也、その唯一の大道、唯一の大本體を感得究明し得て、信仰解釋實行する者ありとせば、それ何物か亦之に反抗するを得べきぞ、反抗するも、窮して永續すること能はざるものぞ、古に今に、宗義學說の紛紜として決せざる者は、未だ其の唯一の大道、唯一の大本體に達せざれば也。達せざるが故に、新宗義新學說の層層として續出羣起する所以なるぞ、未だ其の根本大極としての本体大本體の感得究明が一定せざれば也、一定すること能はざれば也。

第十七節 信仰的解釋實行の競争と各自本体の天照發顯——是を以て、いづれの宗義、いづれの學說も、皆其の克く人生宇宙を解釋し、個人、家庭、邦家、世界、

宇宙萬有を守護しつゝ、其の改善進歩發達飛躍を促がし、我が信仰のみ、獨り、唯一無上の信仰にして、眞實信に、人生宇宙終局の目的を達し、其の本体に復活同化し、大本體に還元超樂することを得る者なりとして、其の宣明解釋に勵精刻苦しつゝある所以なるぞ、是れ亦自然の天照發顯で、活動飛躍で、いづれも左なくてはならぬものを、豈に當だ宣明的解釋の然るのみならんや、更に以て各自が「實行的訓練感化」を要する次第なるぞ。

其の選擇取捨は、人生にあり、個人にあり、家庭にあり、國家にあり、世界にあり。人生は其の是とする所の者を選択し、個人として、家庭として、國家として、世界として、其の現在及び將來に、最も克く適的劃切にして、亦最も克く永久の大慰安大康福を得ると共に、その根本大極たる本体大本體に大還元大超樂するに足る者とする宗義學說に信賴悅服する者なるぞ。之を防止せんとするも、斷じて能はず、防止せんとすれば、却て自家の瑕瑾こそ曝露するなれや。故に徒に外に向て防止せんとするよりも、寧ろ先づ内よりして、自家の信仰公準を鍛鍊修養し、天照發顯し、宣明解釋し、實行活躍すれば足るものぞ。自家信仰の威嚴を天照現前すれば、發發威あり、靈あり

り、熾灼として、自然に他を彈撥し、攝理し、その劣れる者は次第次第に畏避降服する者ぞ、漸漸慚悔し感化し同化する者ぞ、せざるを得ざるものぞ。個人は私なし、家庭は黨せず、國家世界は公平なり。必竟すれば、いづれも皆その卓出超絶したる宗義學說なりと裁決したる者に向て、信賴悅服するに至るは必然なるぞ。されば、いづれの宗義も、學說も、共に競ふて其の「信仰公準」を「宣明解釋し、實行感化し、以て、他に卓出超絶する所以の大慰安大康福」を天人萬有に賦與潤澤せしめねばならぬものぞ。各自としては、勿論、夙に相競ふて、其「信仰」と「解釋」と「實行」とを宣明感化しつゝある所以なるぞ。是れ蓋し宣明感化する人人として、其の人人より云へば、寧ろ其人人各自が各自としての本体を天照發顯しつゝあるものぞ。亦その感化せらるゝ人人として、其の人人より云へば、寧ろ其の人人各自が亦その各自としての本体を天照發顯しつゝある者なるぞ。そのいづれにしても、皆是れ「分分の天職責任」を盡しつゝ、根本大極たる本体大本體に到達同化還元超樂するの道なると共に、是れ實に、根本大極たる本体大本體其的の此の如くに大天照大發顯する所以の者なるぞ、此の如くに大活動大飛躍する所以たるぞ。

## 第八章 大本體神と大なる我

九八

されば、世界列國とも、古に今に、人人相競ふて信仰しては更に信仰し、解釋しては更に解釋し、實行しては更に實行し、以て、我としての本體的個人を發顯し、我としての本體的家庭を發顯し、我としての本體的國家を發顯し、我としての本體的世界を發顯し、日に夜に、時時刻刻に、發達膨脹し、活動飛躍し、更にその「我としての本體の本體たる本體」を證入證出し、進て其の「本體の本體たる本體の本體」に還元同化し、根本大極たる本體大本體としての「大宇宙」を大發顯し、根本大極たる本體大本體としての「大なる我」を「大發顯大天照して、茲に天人萬有を感化救濟し、人生宇宙を攝理統一しつゝ、悉く之を同化還元超樂せしめざるべからざる者なるぞ。然れども、是は之れ其の信仰の主體、信仰としての主體、更にその信仰主體としての「那的」たるかを會得せざれば能はず、然り、信仰の主體たる主體其「那的」なるかを證入證出して會得せずんば、その解釋はいかに解釋し、その實行はいかに實行すべきか、判然せざればなり。是れ更に信仰の主體大主體を究明して、その果して「那的」たるかを會得せざるべからざる所以なるぞ。あゝ、信仰の主體大主體

としての實質は、抑もそれ如何の「那的」なるぞや。

髮萬丈亂纒纒。眼三角光炯炯。意氣蓋乾坤。而力弗勝扛鼎。殺躬取仁。  
萬苦弗辭。抱劍枕書。獨臥茅茨。豪放狂生。迂愚男兒。才疎學淺敢不自  
量。欲亦克救天人萬有之百罹也。」

投之激水。而弗溺弗滅。擲之烈火。而弗碎弗熱。石乎匪石。鐵乎匪鐵。  
厥紅如日。厥潔也如雪。」噫吾五尺短身之胸。果是那物之恠封也夫。」

是吾十七歲之舊作。當時胸中多事已如此。而未能殺躬取仁。廻顧既往。撫然久之。慚愧慚愧。嗚是那等痴漢。雖然。焉知後世無亦思道的痴漢之人也乎哉。

明治丙午春三月吉旦

凡兒識。

## 大日本世界教宣明第一書 了

宣明第一書 信仰

九九

# 大日本世界教

川面凡兒謹述

## 宣明第二書 信仰之主體

### 第玖章 終局目的と感得名稱の異同

「信仰の主體」とは那的<sup>註</sup>ぞ。是れ「信仰」としては缺くべからざる大公準なるぞ。而もその信仰の主體たる大公準とは外ならず、人類各自が公準目的として信仰する所の者は、正に是れ「信仰の主體大主體」<sup>其的</sup>なるぞ。

第十八節 信仰の主體と各自の目的——天人萬有としては、特に「人類」としては、「人生の那物たる、宇宙の那物たる、天人萬有の那物たる乎を感得會辨して、其の發顯終局に於ける根本大極たる本体大本體を究竟するにあらねば、眞實の信仰、眞實の慰安は、得らるべきものでない、是ぞ之れ人生宇宙發顯終局の根本大極たる大目的大公準大主體なるに因るものと知れや。故に、人生宇宙、天人萬有、發顯

終局の根本大極たる目的公準とは、其信仰と共に、信仰の天照光被と共に、之を宣明解釋し、之を躬行實踐し、更に之を活動大活動、飛躍大飛躍しつゝ、其根本本体に到達同化し、其大極大本體に還元超樂するを意味するものぞ。信仰の主體大主體とは、即ち是れ此の、本体大本體なるぞや。

故に東西古今、文野高卑の差別なく、均しく之れ人生の那物たるを宣明解釋し、宇宙の那物たるを宣明解釋し、天人萬有の那物たるを宣明解釋し、其の根本本体を究明會得し、其の大極大本體を感得信仰し、之に向て向上活動し、直入飛躍し、更に還元超樂せんとするを以て、各自の目的——最終の目的——根本目的——とはなしつゝ、あるものぞ。天人萬有の那的たるを究明會得し、人生宇宙の那的たるを究明會得し、更に其の發顯終局の根本大極たる本体大本體を究竟證得するにあらずんば、天人萬有の動靜舉止は、殆ど無意味に歸すべく、無意味に歸するは不可なしとするも、其實無意味にては、那等の動靜舉止も爲し得るものでない。奚ぞ矧んや、その活動大活動、飛躍大飛躍せんとするに於てをや。萬有は特に人類は斷じて無爲乾燥を以て満足するものにあらざるぞよ。

第十九節 各自の信仰と主體の感得——蒼蒼たる天下、厚厚たる地上、苟も人類として生活する處、家庭國家の組織ある處、其の未だ家庭として國家として組織すること能はざる蠻族野人なりとも、苟も人類として生活する處には、必ずや、それ相應なる知識情感意思、經驗風俗、及、逸話歴史等のあるありて、其の知識情感意思、經驗風俗、及、逸話歴史等につれて、それ相應なる根本本体、大極大本體を憧憬感得し、豁然直覺し、或は概念制約し、認識究明し、觀念攝理し、若しくは、薰發悟入し、熾灼開悟し、更に向下向上に天照發靈しつゝ、穆穆信仰し、潑潑實行しつゝ、ある者ぞ。是れ蓋し人生宇宙、天人萬有は、悉く其の根本大極たる本体大本體の發顯、天照する所なるを以て、活動飛躍する所なるを以て、更にその攝理統一しつゝ、ある所なるを以て、天人萬有、特に人類其的の性情が、天然自然と、其の天照發顯活動飛躍する本体、攝理統一する大本體其的を感得し、直覺し、認識し、觀念せざるを得ざる者なるぞ。必ずや、我と吾が身に薰發感應し、我と吾が身に憧憬れて悟入し、若しくは、我と吾が身に豁然と開悟し、其處に崇嵩颯爽、穆穆潑潑として此處に感得し、直覺し、又は概念し、認識し、觀念し、會辨しつゝ、之を制約歸納し、之を演繹歸結し、更に之を實行躬踐し



つゝ、向上同化せざれば已まれざるものぞ。只その宣明解釋實行等に文野高卑、長短厚薄等こそあるべけれ、均しく之れ人類として、人生宇宙に對する感應道交なるものぞ、活動飛躍なるものぞ、天照攝理なるものぞ。而も亦是れや其の實、その根本大極たる本体大本體の此の如くに天照大天照し、發顯大發顯し、此の如くに活動大活動し、飛躍大飛躍して自から然らしむるものなるぞ、然るものたるぞや。唯その信仰解釋實行等に、いかに大小長短文野高卑等のありとはせよ、いづれの人類社會としても、皆之れ均しく然るものなるぞ、然らざるはなきものぞ。

第二十節 主體感得の異同と名稱 故に支那は之を感得觀念して、蒼天若しくは上帝と信仰名稱し、印度は之を直覺悟入して、梵天若しくは佛陀と信仰名稱し、希臘は多神若しくは一神を感得し、波斯は神火也と感得し、埃及、巴比倫、亞刺比亞一帶も、亦多神及、一神を感得し、羅馬以來の歐米は、三位一體を感得觀念したるが如く。一方は多神也と觀念すれば、一方は唯一神也と直覺し、或は萬有神也と觀念し、自然神也、汎神也と認識すれば、更に無神也と制約する者あり。別に唯心也、又は唯物也、唯理也との一元を觀することあれば、否、物心二元なりと立する者あり、更に

一元二面觀を爲すあれば、却て多元觀を爲す者もあり、預定說—機會說—合理說—感覺說—知識說—常識說—原子說—單子說—思辨說—名目說—混合說—折衷說—器械說—目的說—不可思議說—解脫說—等數—來れば恆河砂數、逐一枚擧するに遑あることなし。更に人格的靈性ありとすれば、人格的靈性なしと破するあり、それは、忙しきこと、殆と底止する所がない。主觀的に、客觀的に、演繹的に、歸納的に、合理的に、實驗的に、先天的に、後天的に、さては、直覺的に、信神的に、神祕的に、概念的、認識的、觀念的、本能的、怪疑的等に、益々出で、益々多く、彌々顯はれて、彌々煩はしく、それ將た孰れが、是ぞ非ぞ、眞ぞ偽ぞ、人人適從するに迷はざるもの殆と幾許ありや。然れども、是れ皆人生宇宙の根本大極に向て、其の本体を尋ね、大本體を求め、各自その求めて尋ね得たる所を以て、是れ唯一無上の根本大極也、是れ絶對無比の本体大本體也と信仰するにあらざるものはない。然り、いづれも皆その認識制約し、觀念會辨し、直覺證了したる所の者を以て、人生宇宙發顯終局の根本大極也、本体大本體也と、信仰し、解釋し、實行しつゝ、あるものなるぞ。而して他を目しては、是れ外道也、是れ惡魔也、是れ迷信也、是れ墮落也と痛罵冷嘲し、若しくは攻撃排斥しつ

つあるものなるぞ。

六

第廿一節 根本大極たる本体大本體と各自の信仰解釋——然れども此の如く各自が信仰解釋する所を以て、皆悉く唯一無上の根本大極也、絶對無比の本体大本體也とせば、人生宇宙には、其の根本大極、本体大本體が允にそれ澤山なもので、さりとては、根本大極たる本体大本體が餘りに多くあり過ぎるかと思はる、ぞよ。根本大極たる本体大本體とは、左様に多くあり餘るほど澤山あるべきものではない。然れば、各自が以て根本大極也、本体大本體也と云ふ者は、是れ蓋し人生宇宙の根本大極たる本体大本體ではなくして、各自各自にその人生宇宙を究明したる解釋其的に過ぎざるぞ。然り、各自が以て是れ人生宇宙の根本大極たる本体大本體也と究明したる、各自の解釋其的なるぞ。換言すれば各自が研究解釋したる根本大極其的なるぞ、研究的の本体、解釋的の大本體其的なるぞよ。夫れ已に、各自の研究解釋なりとすれば、各自、各人、各國の知識情感意思——山河風土——經驗風俗——逸話歴史等——の習慣言語につれて、習慣言語の文野高卑、及びその四圍の刺撃照應等につれて、それ相應に異なるものぞ、異ならざるを得ぬものぞ。さ

れば、各自が研究して尋ね得たる信仰解釋の此の如く澤山に顯はれ出るも、蓋し無理ならぬ現象なるぞ、當然の結果なるぞよ。而して其の相互の間に一勝一敗の興廢あるも、亦それ必然の現象なるぞ、結果なるぞ、固より以て怪しとするにも足らざるぞや。然則、各自が以て根本大極也、本体大本體也と云ふ者は、其の實に人生宇宙の根本大極にあらず、本体大本體にあらず、各自が各國各人、是れ根本大極也、根本大極たる本体大本體也として研究し得たる解釋其的なるぞ。人生宇宙の根本大極たる本体大本體とは、決してその人その國につれたる知識情感意思、山河風土、經驗風俗、逸話歴史等の言語習慣につれて、言語習慣の文野高卑、及其の四圍の刺撃照應等につれて變ずる者ではない、東に顯はれ西に隠れ、南に出て北に走る者ではない、その人その國につれ、外國の日本の、日本の外國の時代時代につれて、一興一廢する者ではない、一勝一敗する者でもない、古往今來、不變の者なるぞ。その人その國その時代の潮流につれて、一となり、二となり、三となり、四となり、或は有となり、無となり、多となるものでもない、無始無終、無經無緯に、全元極成なる者たるぞ。唯それ其の人、其の國、其の時代が、之に觀照道交し、接着感應し、會得究明して、一と觀、二

と觀、三と觀、有と感じ、無と感じ、多と感ずるに過ぎない者ぞ。根本大極たる本体大本體其的は、依然其的なるぞ。只それ各自各人各國が感得究明して、其的を一と觀、二と觀、三と觀、四と觀、或は無と感じ、有と感ずる者なれば、是れその人その國その時代の知識情感意思、山河風土、經驗風俗、逸話歴史等の卓出超絶したる者が、東に興れば則ち西が廢たれ、西に興れば則ち東が廢たれ、彼れ此れ一勝一敗する所以のものなるぞ。而も是れ信仰解釋實行の一興一廢で、一勝一敗で、人生宇宙の根本大極たる本体大本體其的の興廢ではない、勝敗でもない。されば、人生宇宙發顯終局たる根本大極の本体大本體と、各自が之を、信仰究明する所の研究解釋とは、自から別物なること判然したるべきぞ。然り、人生宇宙發顯終局たる根本大極としての本体大本體と、各自が研究したる所の解釋とは、自から是れ別物なるぞよ。勿論、その一と觀、二と觀、三と觀、或は無と感じ、有と感じ、多と感ずる等は、根本大極たる本体大本體の大天照大發顯する所の者なるを以て、其の天照發顯する活動現象、飛躍變態なるを以て、各自各人、各國の究明解釋も、亦それ根本大極の本体大本體たるには相違なきものぞ、其の多種多様なる究明解釋の發顯するは、正敷是れ根本大

極としての本体大本體が、此の如くに天照大天照し、此の如くに發顯大發顯する所なればなり。然れども、それなる多種多様の究明解釋は、根本大極たる本体大本體の天照的現象にして、活躍的變態にして、現象的一分分の分象にして、未だ全き大現象にわらず、容態的一分分の分態にして、未だ全き大容態ではない。故に亦その根本大極たる本体大本體を未だ以て完全に究明解釋すること能はざりし所以なるぞ。然り、未だ以て完全なる究明解釋の發顯せざる所以なるぞよ。勿論、人生宇宙の根本大極たる本体大本體は、不斷に人生宇宙に天照大天照し、活躍大活躍しつゝありと雖、何人の前後左右にも、何國の上下八塞にも活動飛躍しつゝありと雖、未だ克く何人も何國も、その之を完全に究明解釋し得たるものあることなし、是れ紛紜の論辯、西に東に古に今に、嗷嗽と發顯して已まざる所以なるぞや。

第廿二節 各自の水掛論と三千年前後の時代現象——今夫れ、人生宇宙の根本大極たる本体大本體と、各自が究明會得したる所の解釋とは、別物なりとせば、其の究明解釋は、いづれか克く、人生宇宙の根本大極たる本体大本體を、最も完全に究明解釋し得たる者なる乎は、是れ第二の問題なるぞよ。さるを何ぞや、各

自いづれも皆その感得究明したる所の解釋のみを以て、是れ唯一無上の解釋也、眞實眞の根本大極也、根本大極としての如實なる本体大本體也と信仰し居るは不可なしとするも、さればとて、他の信仰解釋實行を目しては、直に以て是れ外道也、魔法也、迷信也、墮落也と、痛罵し、冷嘲し、更に攻撃排斥し、唯だ獨り「我のみの信仰解釋する所に歸依し、實行せざれば、人生宇宙の根本本体に照鑑攝理せられず、大極大本體に還元超樂すること能はず」と云ふは何事ぞ。是れ決して其の當を得たるものとは云はれぬぞ。是れ決して完全なる信仰、完全なる解釋とは云はれぬぞ。知れや、その各自が信仰解釋實行には、大小厚薄、深淺長短、精粗純雜、文野高卑等こそあるべけれ、いづれも皆その感應直證し究明會得したる所を以て、是れ「人生宇宙の根本本体、大極大本體なり」として、之を信仰し之を贊美し、之を目的公準として、宣明し解釋し實行しつゝあるものなれば、其の目的公準とする所は、均しく之れ「不二同一の根本本体、大極大本體なるぞや」。

若し夫れ強て我の信仰解釋實行のみを以て、唯一無上の眞實義也、絶對不二の根本本体、大極大本體也と云はば、他も亦その信仰解釋實行する所のみを以て、是れ唯一無上の眞實義也、絶對不二の根本本体、大極大本體也と云ふであらう。さすれば、いづれも僉之れ共に均しく、唯一無上の眞實義たる譯なるぞ、絶對不二の根本本体、大極大本體とはなる次第なるぞ。然ればいづれも僉その目的公準とする、人生宇宙の根本大極たる本体大本體に照鑑せられ、攝理せられ、共に均しく同化還元し、超樂することを得る譯なるぞ。之を稱して、我田引水の水掛論とこそ云つべく。

此の如き、水掛論は、昔は兎も角も致方なし。山河萬里に懸隔して、雲烟漠漠たりし、人種民族の交通とはなく、知識經驗等の交換とてもなき時代故、彼れ我れ相互にその人情風俗、習慣經驗、マツタ、地理氣象、山河風土、及その逸話歴史等より、更にその彼我原人立國等の過渡變遷も承知すること能はざりしものぞ、他には什麼なる現象動態の發達消沈等のありしかを承知すること能はざりしものなるぞ。而も今は然らず、世國各國交通して、彼我往復し、其の原人の状態より、立國の本末に於ける人情風俗、經驗習慣、山河風土、地理氣象、歴史逸話等に至るまで、各自相互に知り得る時代なれば、世界列國、一目の中に瞭然たるにあらざや、彼れ我れ相互に比較參證して、之を徐に打算究明すれば、彼我各自が信仰解釋實行する所の起因—範疇—

無上の眞實義也、絶對不二の根本本体、大極大本體也と云ふであらう。さすれば、いづれも僉之れ共に均しく、唯一無上の眞實義たる譯なるぞ、絶對不二の根本本体、大極大本體とはなる次第なるぞ。然ればいづれも僉その目的公準とする、人生宇宙の根本大極たる本体大本體に照鑑せられ、攝理せられ、共に均しく同化還元し、超樂することを得る譯なるぞ。之を稱して、我田引水の水掛論とこそ云つべく。

此の如き、水掛論は、昔は兎も角も致方なし。山河萬里に懸隔して、雲烟漠漠たりし、人種民族の交通とはなく、知識經驗等の交換とてもなき時代故、彼れ我れ相互にその人情風俗、習慣經驗、マツタ、地理氣象、山河風土、及その逸話歴史等より、更にその彼我原人立國等の過渡變遷も承知すること能はざりしものぞ、他には什麼なる現象動態の發達消沈等のありしかを承知すること能はざりしものなるぞ。而も今は然らず、世國各國交通して、彼我往復し、其の原人の状態より、立國の本末に於ける人情風俗、經驗習慣、山河風土、地理氣象、歴史逸話等に至るまで、各自相互に知り得る時代なれば、世界列國、一目の中に瞭然たるにあらざや、彼れ我れ相互に比較參證して、之を徐に打算究明すれば、彼我各自が信仰解釋實行する所の起因—範疇—

結果一等の直下に現前して、歴歴指點するに足るを以て、亦夫れそれ丈仇遇敵視して、相互に口角泡を飛ばしつゝ、水掛論を爲すの必要はない。有史以來、四五千年餘の長き歲月の間に進歩發達したる躬を以て、而も未だ進歩發達なき四五千年以前の草昧時代に遡りて、其の未開當時に於ける、狹隘固陋なる信仰を其儘に持續せんとするは、餘りに迂濶千萬ならざる乎。其信條教理としては、已に既に幾度か世につれ、人に應じて、幾變遷しつゝあるものを、然り、時時刻刻、次第次第に、當時當時の世界的趨勢と時代精神とに化しつゝ、改善發達しつゝあるものを。獨り其の「信仰」のみは、依然として、いついつ迄も、狹隘固陋の心を其儘に存續せんとするは、受け取りがたき思惑ぞよ、その人生を感化救済し、個人、家庭、國家、世界等を教導攝理せんとする者としては、餘りに迂濶千萬ならざる乎、此處一番の大覺悟なくては叶ふまじ。宇宙は活動し、人生は飛躍し、時代と共にその精神は進歩して、生活状態の時時刻刻に發達しつゝあるものなるぞ。而も、猶其の信仰は依然として、四五千年以前なる未開時代たれ、精神たれとは、蓋し無理なる注文ぞや。

第廿三節 信念の致一と各自相應の果報——達觀すれば、いづれも僉

その「目的公準とする所の主體大主體は、均しく之れ、人生宇宙發顯終局する所の根本大極たる本体大本體なればよしや、其の信仰解釋實行に大小長短、厚薄深淺、精粗純雜、文野高卑等のあればとて、信ずる信の一念には二致ある事なし、各自僉その信仰する所に向て、是れ實に、人生宇宙發顯終局する所の根本大極たる本体大本體也」として歸命道交しつゝあるものぞ、その歸命道交する専心專意の一念は、彼我同一なるものぞ。されば、いづれも皆その其れ相應なる信仰解釋實行につれて、それ相應なる應現果報のあるものぞ。他なし、是れ僉いづれも均しく、人生宇宙發顯終局する所の根本大極たる本体大本體に歸命道交し、還元超樂する所以の道程なればなり。よしんば、其の信仰解釋實行する所は、大小あり、長短あり、厚薄あり、深淺あり、精粗純雜あり、文野高卑等のあることありと雖、そは亦歲月と共に、その太甚しきは、生を更め世を代へ、歩歩段段に進歩し發達し、晚かれ早かれ、やがては、遂に卒に皆以て共に、均しく其の根本大極たる本体大本體に到達し同化し還元超樂することを得る者なるぞ。信ずる信の一念と共に、解釋實行する所なくんば、それも容易に叶はぬものなるぞよ。その到達同化することに、なか／＼の時間を要し—歲月を要

一四  
するぞ、空間を要し一生を要し世を要するものなるぞや、信ずる信の一念と共に、解釋し實行する所なくんば、いかに比較的高尚なりと云ふ宗教者でも、道學者でも、學究者でも、破德亂倫の人人は尠からぬで。信ずる信の一念だにあれば、其の一念と共に、解釋實行することの切なれば、いかに比較的劣等なりと呼べる。宗教者でも、道學者でも、學究者でも、道徳彝倫の堅固なる人人は、多き者なるぞ。人生宇宙發顯終局の根本大極たる本体大本體とは、之を究明解釋するばかりが、目的ではない、之を信仰し、之を實行して、天照發顯し、活動飛躍し、還元超樂するのが目的なるぞよ。その究明解釋するのは、其の目的を達せんとする方法手段に過ぎないものぞ。いかに深刻警拔なる言詮を以て、斬新陸離の解釋ありとするも、信ずる信の一念たる信仰にしてなくんば、實行すること能はぬものぞ。夫れ已に信ずる信の信仰なく、實行することも能はぬものとせば、是れ決して還元超樂の目的希望を達し得べきものならず、還元超樂の目的希望を達すること能はぬものは、亦以て、人生宇宙の根本大極たる本体大本體を感得し究明し得べきものでない。然り、かゝる人人は、その方法手段たる解釋究明を巧に言詮口辯する迄にして、未だその根本大極たる

本体大本體には感應道交すること能はざるものとこそ云ふべく。未だその根本大極たる本体大本體に感應道交すること能はぬものとせば、いかにその方法手段たる解釋究明に巧妙なりとするも、是れ必竟その人の想像演技に止まるものぞ。恰もそれ電氣を會得せずして電氣を解釋し、靈光を感得せずして靈光を想像究明するのと一般、何條その根本大極の大電火に同化し、本体大本體の大靈光に還元超樂することが出來得るものぞ。只その知識學問經驗修業に富むと云ふばかりにては、是れ決して根本大極に同化安立することを得べきものでない、本体大本體に還元超樂することを得べき者ではない。よしや、いかに知識學問經驗修業等に乏しくとも、信ずる信の一念と共に、實行躬踐する所あるなれば、その心體の慰藉安泰は猛烈雄大にして、一文不知の老婆少年なりとも、それ相應に道交感應し、次第次第に到達同化し、還元超樂することの出來得るものなるぞ。是れ蓋し其躬其儘が根本大極たる本体大本體其的の天照發顯なるからなるぞ、乾坤獨露の其躬其儘が、人生宇宙に道交觀照しつゝ、いつとはなしに、其の信念と共に自から醱酵蒸發して、其の根本大極に同化一致し、本体大本體に還元超樂するものなるぞ。是れ何人も然

一六  
らずとは、否定すること能はざるものぞ、否定せんとするは、未だ以て這間の消息を  
會得せざるものなるぞや。

されば、我のみの信仰解釋實行を以て、唯一無上の眞實義也、と自ら念じて信仰する  
は可なれ共、念じて信仰せざるべからずと雖、獨り其の信仰解釋實行のみにあらね  
ば、人生宇宙の根本大極に安身立命すること能はず、本体大本體に還元超樂するこ  
と能はず、我のみの信仰解釋實行以外は、悉く之れ外道也、惡魔也、迷信也、墮落也。」と  
して、他の總てを痛罵し冷嘲し、更に攻撃排斥せんとするは、不可也、最も不可也。さ  
りとは、寧ろその人の迷信なるぞ、墮落なるぞよ。

神を根本大極とすれば、人生宇宙、天人萬有は、悉く之れ神の天照發顯する所ならざ  
るべからず、神の天照發顯する所の者は、神なり、神體なり、人生宇宙、天人萬有は、悉く  
之れ神なるぞ、神體なるぞ。外道も神なり、惡魔も神體なり、神より外に、神體より外  
に、何の惡魔かある、外道かあるぞ。佛を根本大極とすれば、人生宇宙、天人萬有は、悉  
く之れ佛の天照發顯する所ならざるべからず、佛の天照發顯する所の者は、佛なり、  
佛性なり、人生宇宙、天人萬有は、悉く之れ佛なるぞ、佛性なるぞ、外道も佛なり、惡魔も

佛性なり、佛より外に、佛性より外に、亦何の惡魔外道のあるべきぞ。眞如法性を根  
本とし、眞理大道を大極とすれば、人生宇宙、天人萬有は、悉く之れ眞如法性の天照發  
起する所たらざるべからず、眞理大道の發顯陶冶する所たらざるべからず。眞如  
法性の天照發起する所の者は、悉く之れ眞如なるぞ、法性なるぞ。眞理大道の陶冶  
發顯する所の者は、悉く之れ眞理なるぞ、大道なるぞ。天人萬有は、悉く之れ眞如な  
り、法性なり、人生宇宙は、悉く之れ眞理なり、大道なり。外道も眞如法性なり、惡魔も  
眞理大道なり。眞如法性の外に、眞理大道の外に、亦復、何の外道かあるべきや、亦復、  
何の惡魔かあるべきや。神より以外に、惡魔を認め、佛より以外に、外道を認むると  
せば、其の惡魔は何の處より來りたりとする乎、其の外道は何の邊より顯はれたり  
とする乎。その外道と惡魔とは、神の發顯する所にあらず、佛の發顯する所にあら  
ずとせば、惡魔と外道とは、神の範疇以外となるぞ、佛の領分以外となるぞ。さりとは、  
その神と云ふ神は、未だ人生宇宙の根本大極とはするに足らざるに歸着するぞ  
よ、その佛と云ふ佛も、未だ以て天人萬有の根本大極とはするに足らざるに歸着す  
るぞよ。乃至、眞如法性、眞理大道も、亦復、この難局に歸着する者ぞ。故に魔佛本來

二致なく、外道も亦一種の佛なりとせざるべからず、神魔本來一體なり、惡魔も亦一種の神也とせざるべからず、然り佛の教としては魔佛本來二致なきなり、山河國土悉有佛性なり。而も猶太教、基督教等としては未だ這間の消息明瞭ならざるなり、寧、神と山河草木等とは別物視してある者ぞ。佛の教とて亦然り、山河國土に佛性ありとするも、唯是れ感性あるのみにして、覺性はなきものと、論結せられたるを見るぞよ、換言すれば、山河國土は、人間以上の者の佛果に順じて成佛するのみにして、人間等の如く覺性を有して、我と吾が身に自から佛となるとは能はぬと定めあるぞよ。故にその人生宇宙を一切平等視するにも拘はらず、亦却て差別の執着強し、その已に山河草木に覺性なしと觀念するが如く、佛教以外は殆ど仇敵の如く遇して、之を外道と痛罵すること、最も強熱なり、奚ぞ矧んや、猶太教、基督教等に至りては、其教以外の教を見ること、全然惡魔として、神以外に放逐し、之を遇すること、一層最も殘酷なるぞや。是れ皆その根本大極を忘却し、或は未だその根本大極を明了に究竟すること能はざるより來るの弊害なるぞ。神より云へば、均しく之れ神子なり、佛より云へば、均しく之れ佛孫なり、只その根本大極に同化し、本体大極に還元

する道程に、大小長短、厚薄深淺、精粗純雜、文野高卑等のあるのみにして、究竟すれば、いづれも皆その漸漸次第に進歩し發達し、やがては、均しく之れ人生宇宙の根本本体に到達同化し、天人萬有の大極大本體に還元超樂せざるべからざるものぞ、するものなるぞ。只その知識學問經驗修業と信念實行との足らざるが爲に、未だ高尚深遠なる、幽玄微妙なる道程に入定昇天すること能はざるに過ぎざるのみぞ。是れ迷心に非ず、是れ墮落に非ず、彼等は彼等相應に其根本大極を信仰し解釋し實行しつゝあるものぞ。されば、その道程の未だ小短淺薄にして、粗雜野卑なるをこそ、愍みに憐みて教導啓發すべきものなれ、何條是れ外道なり、是れ惡魔なりとして仇遇敵視し、痛罵冷嘲し、更に攻撃排斥せんとするに忍びんやは。(本書第拾肆章參看、更に大日本世界教天照太神宮第四十機、乃至五十機參看。)

某は決して某の信仰解釋實行のみならず、天人萬有の根本本體に安身立命すること能はず、人生宇宙の大極大本體に還元超樂すること叶はぬとは申さない。東西古今、いづれの宗教宗義、道學倫理も、僉是れそれ相應の信仰解釋實行につれて、それ相應なる應現あり果報あるものぞ、晚かれ早かれ、やがては均しく皆、その同一目



的たる「人生宇宙發顯終局の根本大極たる本体大本體」に歸命し到達し同化し還元し超等超樂する者なり、然り、人生宇宙、天人萬有は、その「發顯終局の根本大極たる本体大本體」に統一照鑑せられつゝ、晩かれ早かれ攝理救濟せらるゝ者なりと確信する者なるぞ。そは未だ以て其の根本大極と云ふことすら知らず、根本大極たる本体大本體を信仰すること能はざる者すら、一生二生乃至千百萬生の間には、遂に卒に我と吾が身に薰發自覺して信仰することも得つゝ、實行することも得つゝ、到頭――還元超樂することを得るに至るものを。その已に既に天人萬有の根本本体と云ふことを、粗雜ながらも、感應悟入し、人生宇宙の大極大本體と云ふことを、淺薄ながらも開悟信仰しつゝある者は、いかにいかに、その信仰解釋實行に、大小長短、厚薄、深淺、精粗、純雜、高卑、文野等のあればとて、遂には以て何條その安身立命し、還元超樂することを得ざるべきや。そは、人生宇宙、天人萬有は、均しく之れ其の「根本大極たる本体大本體」より天照發顯し、照鑑攝理する所にして、本体大本體其のより觀すれば、同質なり同體なり、本來彼此の差別はなきものぞ、只その天人萬有としては、量として、量の活動飛躍として、大小長短あり、深淺厚薄あり、精粗純雜あり、文野高卑等の

あることありとするも、其の信仰解釋實行する所の量に照應して、それ相當なる果報は應現するものなるか故に、人生宇宙、天人萬有は、其の一信仰、一解釋、一實行に、相應したる一果報を護得しつゝ、小より大に、短より長に、淺より深に、薄より厚に、粗より精に、雜より純に、卑より高に、野より文に、醜より美に、偽より眞に、惡より善に、進みに進み、達しに達し、漸漸次第と、歳歲月月、時時刻刻に進達向上し、更に生を更め、世を代へ、進歩し發達し、向上昇天し、晩かれ早かれ、卒には僉いづれもその終局歸着する所は、均しく共に其の目的公準とする所の「根本大極たる本体大本體」に到達還元して同化超樂する者なるぞや。

第廿四節 救濟の道心と實義、及、一方面觀――古今遼分、幾億年所や經過しぬらむ。現在世界の開闢し、人類の發生して以來、殆、二十五萬年餘、有史逸話以來、亦、殆、三四千年餘の發達進歩につれて、東西古今、百千萬の信仰あり、解釋あり、實行あり、各自その信仰する所に相應して、解釋を異にし、實行を同ふせざるもの尠しとせず。さればとて、某は亦その此等に對して、是れ外道也、是れ惡魔也、是れ迷信也、是れ墮落也、とは冷嘲し痛罵する者にあらず、仇遇敵視して攻撃排斥する者にも

あらず。詮じ來れば、いづれも皆その多くは、救世の道心大道心より醜醉薰發したる者にして、慨然その躬を人生宇宙の爲に、天人萬有の爲に、犠牲として貢獻盡瘁したる者なれば、肅然容を改めて、之を畏敬し、之を尊敬するものなるぞ。某は其のいづれの信仰解釋實行に向つても、愈々それ相當の眞實義を得たるものなりとして、敬意を拂ふものなるぞ。その一言一行なりと雖、信仰する所なくては發言し得るものならず、實行し得るものでもない。ましてや、人生宇宙の根本大極たる本体大體なりとして、信仰し解釋し實行するには、それ相應に信仰信頼する所なくては斷じて能はぬものなるぞよ。

然れども、その信仰解釋實行は僅に一方面に止り、其の自覺究明會得は、一局部に滯りて、未だ其の全き信仰、全き解釋、全き實行たること能はざる者ぞと斷言するは、敢て憚らざる次第なるぞや。

第廿五節 古今信仰の範圍と解釋實行の廣狹——併しながら、信仰者其人、解釋者其人に於ては、始よりして、その一局部一方面的を信仰し解釋したものではない。當時はそれを全方面全局部なりと信仰して解釋したるものなるぞ。

されども、人生の進歩し、世界の發達するにつれては、諸局部諸方面の發見され來るが爲に、昔時は全局部全方面的の信仰なりとして解釋されたりしものも、今日には一局部一方面的の信仰解釋たるに至る者尠からざる次第なるぞ。然り、一切の宗義學説は、愈々それかくの如く、その多くは後世に及ぶほど、完全なる信仰と解釋と實行とが出て來るものぞ、出て來らざるべからざるものなるぞ。是れ當時の先覺者が敢て及ばざる所ありて然るものではない、當時は當時の時代に相應して、未來永劫と云ふよりも、寧ろその當時に於ける世道人心の紊亂墮落を救濟せんとすることを主位主眼としたもの故、その當時に於ける信仰解釋實行は、其信仰解釋實行にして足れるものなるぞ。其の上、更に究明解釋すべき信仰的動念の煥發せざると共に、之を煥發せしむべき時代精神としての解釋的動機も活躍せざりしものなるぞ。その道交觀照的信仰解釋實行の發顯活動せざること、亦宜ならずや。

勿論、昔時に於ても、夙にその全局部を感得悟入し、全方面を發見開悟し、其の全局部全方面を信仰解釋實行したる者ありとせば、よしや、後世亦全局部全方面的の感得開悟ありとするも、昔時の信仰解釋實行は動かすこと能はざるものぞ。故に今日新

に全局部全方面を感得悟入し、發見開悟する者ありとせば、その亦後世子孫たる者は、いかに幾千萬億年を経過するとも、斷じて其の信仰解釋實行を變ずること能はぬものなるぞ、益々その信仰解釋實行の眞實義たることを信仰尊崇して躬踐實行せざるべからざるものなるぞ。蓋し此の如き全局部全方面の信仰解釋實行とは、「人生宇宙の根本大極たる本体大本體其的なるを以て、其的の大當體なるを以て、その根本大極たる本体大本體其的と共に、無始無終にして、無經無緯にして、千古萬古萬萬無量古に變化することなければなり。されば古今東西を論せず、此の如き全局全面の信仰解釋實行に至りては、後世種種なる經驗と、種種なる發見とのあるにつれて、却て益々その信仰解釋實行の崇高雄大にして、幽玄森穆にして、闡滿極致たることを證明するにこそ至るものなれ。之に反して、後世種種なる新經驗新發見ある毎に、その信仰解釋實行が衝突收括して、之をその信仰解釋實行に同化せしむること能はず、さればとて、その信仰解釋實行を、その新經驗新發見に煥然同化すること能はず、進退此谷りて、益々狹隘固陋の頑底に陥り、其主義主張の前後に矛盾し、左右に動搖することを免れざる者あるに於ては、是れ其の宗義學説は、未だ以て

全局部全方面を感得悟入し、發見開悟することの能はざりしものなるぞ。さりとは、其信仰、其解釋、其實行の範圍廣狹こそ、以て知るべきものなれや。

### 第廿六節 教條究明に於ける相互の敬禮と寛容感化——さて、亦、後

世完全なる宗義學説——比較的完全なる宗義學説——が、出で來れりとして、その前義前説の不完全なることは、輕蔑せられぬものぞ、痛罵せられぬものなるぞ。そは後世の義説なるや、多くは是れ愈々その前義前説、前前義前前説等より、薰せられ、促がされ、更に啓發せられ、彈撥せられ、若しくは、參較商量して、茲にその未だ足らざる所を補成し、その未だ能はざる所を増加しつゝ、發顯興起し來れるものなるぞ。寧ろ是れ他山の石として切磋琢磨し、或は輔仁の師友として激勵盡瘁し、いづれにしても、その恩澤にこそ沐浴しつゝ、あれ。いかに反對の立論なりと雖、反對なれば反對なるほど、思あり義あるものぞ、已に思あり義あり、豈に相愛の情なかるべけんやぞ。思へ、反對たる彼れなくんば、我としての立論は成立せず、彼としての説あるが故に、我としての論あり、彼れ我れ相待て、相互の論議は成立するものなるぞ。彼のみ、若しくは、我のみにしては、相手なし、相手なくんば、いかんぞ、論議の成立すべけんや、是れ

その義あり恩あることを、相互に勘辨すべき者ぞ、油然霽然として相愛の情發すべく、いかにぞ仇遇敵視し、輕蔑痛罵するが如き不敬無禮のあるべきものぞ。後代は前代、前代は前前代の刺戟感化を受けつゝあるが如く、其の宗義學説は、必ずや前説義前前説義の感化刺戟を受けつゝあるものなるぞや。

例へば佛教の婆羅門より出て、基督教の猶太教より出てたるが如く、のッびきならぬ連鎖關輪のあるものぞ。よしや、佛教が猶太教に連鎖なく、基督教が拜火教に關輪なしとするも、其の均しく同一「救世の大道心」より薰發して、同一本体大本體。其の信仰解釋する所の本体大本體は、相互に異なる所ありとするも、一その人生宇宙發顯終局する根本大極たる本体大本體也として念ずる一念の信仰は、則ち同一なり。一亦その人生宇宙の根本大極たる本体大本體は、いかに解釋論辯するとも、其の解釋論辯的名稱理由の如何に依りて變ずる者ならず、依然として根本大極なり。本体大本體其的なり。〓に照鑑せられ攝理せらるゝ者なれば、各自相互に尊敬の意を表して、苟にも冷嘲痛罵すべきものならぬぞ。只その義、その説は、彼我相互に評論品騰して、其の高卑優劣を決すべきものぞ、それには亦それ相當なる道あり、禮

あり、表準あり、相愛の情致、尊敬の義趣を以て、君子相見るの宏懷雅量あるべきぞ、なかるべからざるものぞ。乃至、一切の學説は、相互に對峙して、其義其説を評論品騰して切瑳究明するも、總て愈かくの如き心を要し、禮節を要するものぞ、要せざるべからざるものなるぞや。故に某は東西古今、一切の宗義、一切の學説に向て、絶對の反抗を爲し、之を仇遇敵視し、之を冷嘲熱罵するの必要を認めない、其のいづれも愈これ「各自應分の眞實義」也として、尊敬の意を表するものなるぞよ。

蓋し天人萬有の發顯は、そのいかなる事にて、いかなる物にて、眞實義でないこと云ふものはない、愈それ〓、應分の眞實義を有しつゝあるものぞ。直言すれば、眞實義なればこそ、いかなる事も、いかなる物も發顯するものなれ。されば、亦、反對者なればとて、之を塵殺し盡さんとするは、蠻族の戰なるぞ、而も亦塵殺し盡し得べきものではない。奚ぞ矧んや主義學説の究明實行には、固より以て蠻族の血戰を要せない。他を殺すよりも、他を活かして發動飛躍せしめねばならぬ者ぞ。邪を斃して後の正義は如何、邪道なくば、正義も顯はれぬなり、正義の存する間は、亦邪道も存するものなるぞ。只その主動的威權を我に制すれば足るものぞ。知れや、宗義

學說等の西に東に古の今の紛紜嗽嗽として群出雜集するは、方に是れ人生の發顯活躍する所以なるぞ。されば、全然一方のみを助長して、其一方のみを全滅し得べきものならず、彼我相互に寛容し刺戟し教導感化すべきものなるぞ。教導感化とは、必ずしも自己に同化せしむるをのみ云ふにわらず、其的の性を善なり惡なりとも全ふせしめつゝ、更に發達向上せしむるも、亦これ反面の教導感化たるを知らざるべからず、之を同化外の同化とは云ふぞ。苟も根本大極に感應し、本体大體に道交して、人生宇宙を攝理し、天人萬有を救濟せんとする大道心者は、尤にそれ這般の活殺自在なかるべからざるものぞ、活かすが如くにして死脈を制し、殺すが如くにして活脈を與ゆる底の活教導活感化なかるべからざる次第なるぞ。特に教條の究明としては、彼我の敬禮及び相互の寛容感化は、須臾も缺くべからざるものなるぞよ。

第廿七節 大本體の不變と解釋の進歩——抑も某が茲に東西古今總ての宗義學說を以て、各自均しくいづれも、皆應分の眞實義也とするは、他なし、その國その人その時代相應の信仰解釋實行としては、それ相應なる眞實義なりとするも

のぞ、その國その人その時代相應に、各自が信仰する所のを以て、各自に、唯一無上の者也と信仰すれば、其信仰する各自には、是れ各自の信仰に相應したる、唯一無上の眞實義を有したるものぞ。假令ひその信仰に反對する者なりと雖、只それ自己等のそれを信仰せざるまでにして、他の之を、唯一無上也と信じつゝ、ある者の、信仰的實義的は滅却すること能はざるものぞ。各自が各自に、唯一無上の眞實義也として信仰する信仰其的の、信仰其的としての眞實義なること、はいかなる反對者と雖、否定すること能はず、是れ尙各自應分の眞實義ある所以にあらずや。且夫れ其の信仰解釋實行に卓出超絶する所の信仰と解釋と實行とのなき間は、更にその信仰解釋實行に卓出超絶したる者なしと信念する間は、是れ亦當時に於ける其國其人として更に其時代としての、唯一無上の信仰解釋實行なるぞ、その信仰解釋實行としての眞實義なるものぞ。

然れども、人生の進歩し、時代の發達するにつれては、自然と、それ等に卓出超絶する所の信仰解釋實行が生ずると共に、其の信仰も解釋も實行も、一層更に高まる者ぞ、高まらざるを得ざる者なるぞ。従ふて更に亦復、唯一無上の信仰解釋實行が出て

來たるものなるぞや。されば、そのいつれの信仰解釋實行も、人生の進歩し、時代の發達すると共に、生生世世次第相應に、甚深微妙となり、崇高幽玄となり、猛烈壯大となりて、天照發顯し、活動飛躍し來るものなるぞ、天照發顯し、活動飛躍せねばならぬものなるぞよ。そは其の人生の進歩し、その時代の發達して、その知識情感意思、經驗風俗、言語習慣、逸話歴史等の漸漸次第と向上昇天するを以て、人生宇宙の根本大極たる本体大本體を感得し直覺し認識し觀念し、會得彰辨することが、亦漸漸次第に甚深微妙たらざるを得ず、崇高幽玄たらざるを得ず、更に猛烈壯大に、活火噴泉たらざるを得ぬものなるぞ。然り、科學の進歩、文物制度の發達と共に、人生宇宙の根本大極たる本体大本體の信仰解釋實行は、漸漸次第と、更に發達進歩せざるべからず、必ずや、彌益層一層進歩發達するものなるぞよ。いかにも、人生の進歩し、時代の發達するにつれて、其の根本大極たる本体大本體の信仰解釋實行が、層一層益々進歩發達しつゝある現象は、東西古今、何人も之を認めて首肯せざるを得ず、事實は何よりの自白なり、自白は何よりの舉證なるぞ。例へば佛教の漸漸進歩し、基督教の次第次第に發達して、其信仰解釋實行の時代時代に相應せざるべからず亦

せしめざるべからず、將たその相應せしめつゝあるが如きは、正敷その自白なり、舉證なるぞ。蓋し、根本大極たる本体大本體其的は、固より以て進退消長する所なしと雖、その信仰解釋實行は、自からは、是れ人と共に、世と共に、時代と共に、國と共に、世界と共に、進退せざるを得ぬものぞ。之を既往の歴史に顧み、今日、今日の現象に徴し、更に將來の趨勢に致ふれば、何人も亦その然らずとは否定すること能はぬものぞ。知れや、其經典聖書こそ其儘の文章字句なれども、其の内容的精神は、非常に發達進歩しつゝあるものぞ。例へば猶太教が基督教に變じ、羅馬以來の基督教が更に三位一體を稱道し、或は新舊兩派の分立となり、或は今日の「ユニテリアン派」が三位一體を逸埒せんとするが如き。佛教の波羅門教より出で、その教主世尊の入寂するや、直に上座部下座部の分立となり、或は小乘に代ゆるに權大乘、權大乘に代はるに大乘教理の出で來れる如き、その俱舍—唯識—起信—三論—等の論部が、次第次第に顯はれ來れるか如き。更に印度の佛教は、支那に入りて支那的に變化し、支那の佛教は、日本に入りて日本的に變化したるが如き、既往の歴史は、柄として争ふべからざる左券を執りて之に押印證明しつゝある者ぞ。乃至、一切百科の學說も、總て

皆此の如くに層一層、彰著明確なる發達進歩を爲しつゝ、あるを見るにあらざるや。知れや、いついつ迄も、依然四五年以前の信仰解釋實行、其儘通りでなくてはならぬと云ふことのなきを。人生百般、時代時代の發顯現象は、歳歳月月、日夜夜に、時時刻刻、秒秒微微に發達進歩し、活動飛躍して、其の遲滯無爲を許さぬ者ぞ。人生時代の總てが悉く是れ此の如くに發達進歩し、此の如くに活動飛躍しつゝ、あるものを、獨りその根本大極たる大体大本體としての信仰中の信仰、目的中の目的、解釋中の解釋、實行中の實行が、發達進歩することなく、活動飛躍すること能はずば、其解釋實行は、自然自然に阻隔遲滯して、次第次第に淘汰忘却せられ、其信仰目的は、彌々益々狹隘固陋に陥りて、漸漸自滅自亡せざるを得ざるに至る者ぞ。さりとは、如何なる人も、如何なる國も、亦漸漸次第と、その信仰解釋實行を以て是れ未だ、根本大極たる本体大本體としての信仰目的たる能はず、解釋實行たること能はざるを發見し、遂には以て是れ猶、人生宇宙の發顯終局する目的大目的、根本目的を達するに足らざる者たるを達するとの遲滯緩慢たる者なることを自覺するに至るべきぞ。自覺しては其信仰、及、目的公準を更に崇高甚深ならしめ、宏壯森嚴ならしめ、更に幽玄

妙靈たらしめ、其の解釋實行を層一層、猛烈雄大に、活動飛躍して、層一層、大發達大進歩せしめんとするに至るものぞ。いかんぞ、其れ狹隘固陋なる信仰解釋實行にて、永く世道を風發し、人心を電撃し、人生社會を教導感化することを得べきぞや。

**第廿八節 時代相應の改善と後世子孫の責任**——且夫れ人生の進歩、時代の變遷と共に、信仰解釋の應用實行にも、亦幾多の弊害を生ずる者なれば、當時當時の人生時代に相應して、其の應用を改修し、其の實行を改善せねばならぬ者ぞ。さらでは、其の信仰解釋實行の人生に衝突し、時代に矛盾して、活動飛躍すること能はず、我と吾躬に自殺自滅せざるを得ざるものぞ。是れ亦いづれの宗義學說にて、も、前代よりの弊害を見て、後代、改善派の續出する所以なるぞ、革命者の發顯する所以の者なるぞよ。例へば波羅門教を改革して佛教の出顯し、その佛教に亦幾十百派を出し、猶太教を改善して、基督教の出顯し、その基督教に亦幾十百派を生じたる如き、其の實、多くは此に基く者にして、皆その前代の信仰解釋實行に於ける弊害を認めたるより、慨然猛然、公憤を發して、蹴起したるものなるぞよ。その教條としての上にも、信仰としての上にも、將た解釋としての上にも、實行としての上にも、

悉く之れ時代精神に相應せず、時代精神に衝突矛盾し、時代精神を感化啓發すること能はず、時代精神を進歩發達すること能はず、更に活動飛躍せしむることも能はざるを憤慨激昂して猛然出馬したるものなるぞ。

其の newly 立教開宗する者は、云はば、この改善主義の一層高且大なる者なるぞ。知や、前人已に信仰解釋實行する所ある者を。薰發觀照し、感應道交して、悟入開悟しつ、宣明感化しつゝありしものを。獨り今人は何故に薰發觀照すること能はざるぞ、感應道交すること能はざるぞ、悟入開悟すること能はざるぞ、信仰解釋實行すること能はざるぞ、更に宣明感化活動飛躍すること能はぬぞや。人生宇宙の根本大極たる本体大本體は、決して今人古人を直截分斷して、此の如き濠郭を築き與へざるものぞ。現に佛教が波羅門教より出て、基督教が猶太教より出て、囉嘛教が佛教より出て、回回教が亞刺比亞教より出てたる如き、乃至、一切宗義學說の祖國的遺傳神話若しくは、前宗義前學說等より胚胎脱出し、卓越超絶したるが如き、それいづれかその左券印證たらざるものぞ。

さればぞよ、某は今ま一切の宗義、一切の學說を以て、いづれも僉是れ、各自各自の信

仰に相應したる眞實義なり」として、更にその時代、當時當時の眞實義なり」として、全幅の至誠より尊敬の意を表はすものぞ。更にその各自各自の宗義學說は、均しく之れ、人生宇宙の根本大極たる本体大本體よりして、その宗義學說は、其宗義學說相應なる照鑑攝理を蒙り、それ相應なる果報應現ある者ぞ、と、寛容肯定し、決して絶對的に反抗彈撥し、絶對的に仇遇敵視し、是れ外道也、惡魔也、是れ迷信也、墮落也として、冷嘲熱罵せず、打壓排斥せざる者なるぞ。夫れ已に絶對的に反抗彈撥せず、絶對的に仇遇敵視せず、絶對的に冷嘲熱罵せず、打壓排斥せざると共に、亦絶對無限の同情を表することは能はぬものなるぞや。

それよ、後世子孫たる某等には、某等の天職あり、責任あり、人生宇宙天照發顯の軌程として、天人萬有活動飛躍の行程として、今日現在、時代精神の相應に、亦其將來に於ける時代精神の啓發前哨として、前聖先哲の信仰解釋實行したりける、人生宇宙根本大極たる本体大本體に向て、更に層層多くの進歩發達なるべからず、活動飛躍なる可らず、層層崇嵩なる、層層幽玄なる、層層甚深微妙なる、層層雄大宏壯なる、層層天照大天照的稜威大稜威、威嚴大威嚴を薰發觀照し、感應會得し、其の根本大極たる



本体大本體を層一層熾灼明晰に拜せざるべからず。然り層層多くの進歩發達を爲し、活動飛躍を爲し、根本大極としての本体大本體を、本体大本體としての大稜威大威嚴を、天照大天照發顯大發顯活動大活動飛躍大飛躍すべき天職大天職責任大責任を有する者なれば也。前聖先哲は決して之を拒むものでない、寧ろその遺志遺言たるをこそ認むるぞよ。前聖先哲にして今日に出てしめば、亦それ此の如くなる者たるを知る、此の如くならざるべからざる者なるを確信するぞや。

### 第拾章 極成之信仰と終局之勝利

某は某の信仰解釋實行を以て、我と吾躬の英靈的天照薰發を以て、世界開闢、天祖降臨、人類發生より二十五億年來の發達を以て、皇祖建國、列國興廢、有史以來三四五千年餘の遺傳感化を以て、人生宇宙、天人萬有に接着し觀照し感應道交し、直覺靈顯し、概念認識し、觀念制約しつゝ、忽然悟入し、廓然開悟したる信仰解釋實行を以て、世界列國、古往今來の信仰解釋實行を歴觀歴視すれば、いづれも皆その眞實義なりとは雖、それ然れども、未だ以て其のいづれも全き者にあらず、全き信仰、全き解釋、全き實行

とはするに足らぬぞよ。某が今日現在安立しつゝ、ある英靈的天照より批判論斷すれば、皆是れ或る一部分、或る一方面にして、未だ以て全局部全方面とはするに足らぬぞや。而もその當時當時に於ては、いづれも僉その一部分一方面的の信仰解釋實行たることを會得すること能はずして、慙むべし、是れ正敷、全部全方面の者なり」と信仰し解釋し實行し、各自いづれも皆均しく之れ、唯一無上の根本大極なり、絶對無比の本体大本體なり」として、其の照鑑攝理を求め、同化還元を期したる者なることを斷言して憚からざるぞよ。只その一部分一方面的を信仰し解釋し實行したるに過ぎねばなり、猶未だその全部全面に到達すること能はざるものあればなるぞ。

されば、茲に東西古今、各自各別の信仰信念を總合し、各自各別の解釋實行を統一し、之を陶冶斡旋して、更に増補大成する時は、それ初めて全き者に歸し、全き信仰、全き解釋、全き實行たるに至る者なりと確信する者なるぞ。某の英靈的天照薰發したる、觀照感應したる、超覺會得したる所の信仰解釋實行に徴すれば、世界列國、古往今來ありとあらゆる信仰解釋實行は、然らざるを得ず、然り、世界列國、古往今來ありとあらゆる各自各別の信仰解釋實行を總合統一し、更に斡旋陶冶して増補大成せざれば、某の英靈

的天照の信仰解釋實行に會心合契せず、解釋實行せんとする所に融會合體せぬである。且夫れ各自各別の信仰解釋實行も、亦それ必ずや相互に總合融會する所なかるべからず、統一合體せざるべからざるものぞ。そのいかに千百萬億の信仰解釋實行ありとするも、その信仰解釋實行は、必ずやそれ各自とも、均しく融會一致すべきものぞ、釋然渙然、同化合體せざるべからざるものなるぞ。その根本大極は同一なれば也、同質なれば也、同體なれば也。いかにその名稱、解釋、信念、實行等を異にするとも、均しく之れ人生宇宙なるぞ、天人萬有なるぞ。神と云ひ、佛と云ひ、將た眞如法性と云ひ、眞理なり、自然なり、大道なりと云ひ、元素、元元素、單子、單單子なりと云ふも、其名稱こそ異なれ、信仰解釋實行こそ異なれ、其の目的とする所は、均しく之れ人生宇宙の根本本体なるぞ、天人萬有の大極大本體なるぞ。根本大極としての目的は同一なるぞ、同一ならざるべからず、その目的とする所が、均しく之れ、人生宇宙、天人萬有の根本大極たる本体大本體なればなり。是れその釋然融會し、渙然一致せずして止むべきぞ、人力を以て之れを防遏し得べきものでない。それ既に融會せざるべからず、一致する者とせば、亦是れ何人が之を、より早く一致せしむるも不可なし。そは其の一致たるや、

其の人の之を一致するにはあらで、其的自身が一致するものぞ、只之れ其の人を假りて一致するに過ぎざるものぞ。換言すれば、其人は其的を代表して、代表せしめられ、之を一致するに過ぎざるものぞ。然則、今ま之を總合統一せんとする某は、それ其の代表者なる乎。且夫れ更にその「一致」と云ふことを究明内證すれば、各自各別の信仰解釋實行は、天人萬有と共に、その實に本來一致しつゝある者ぞ、今更ら一致するの要もなきものぞ。而も茲に尙「一致せざれば止まずとするは何ぞ、各自各別に本來一致しつゝあるものたるを知らずして、相互に異なるものなりと拗執するが故に、その決して異なるものにあらざり、同じきものぞ、本來釋然融會し、渙然一致しつゝあるものぞと云ふことを知らしめんとするに過ぎざるものぞ。而も是れ亦知らしむるにあらざり、知らしめらるゝにもあらざり、其的自からがその天照發顯よりして活動飛躍よりして然るものなるぞ、此の意味より内證すれば、固より亦某もなく他もなく、亦何の代表する所かありべきや、某も其的なり、他も其的なり、均しく之れ其的にして、其的天照發顯より、活動飛躍よりして、之を知らざるものぞ、之を知らしむるものぞ。是れ其的としての質より質の天照活躍より立證したる平等性なるものぞ。某と云

ひ他と云ふ、彼我の見は、其的としての量より、量の天照活躍より論辯したる差別體なるぞ。只其的の量としての差別體より云へば、某はそれ各自各別の信仰解釋實行を總合統一せんとする、せしめられんとする代表者なるかな。

抑もそれ各自各別よりして某を觀すれば、某の信仰解釋實行を觀すれば、亦それ一部分一方面的見地にして、猶未だ其の全きに達せざる者ぞと云ふべき乎。そは其の人の自由なるぞ、某は決して厭ふものにあらず、忌み罵る者にもあらず、寧ろ、其人人の反對論破あることの層層猛烈活火ならんことこそ希望するものなれや。彼我此の如く切磋琢磨する間に於てこそ、漸次第に、天然自然と、人生宇宙、天人萬有の根本大極たる本体大本體の天照活躍することを發見もし了會もすることを得る者たれ。それよ、その克くいづれか允に、人生宇宙、天人萬有の根本大極たる本体大本體を、最も完全に、最も圓滿に、信仰解釋實行しつゝある者たる乎の判然熾灼するものぞや。某は斷じて信ずるぞよ。今日以後、いかに多く某に反抗する人人のありとするも、其の終局に至りては、必ずや、亦某に同化す、同化せざるべからざるものたることを。是は其の、人生宇宙、天人萬有の根本大極たる本体大本體の亦それ必ずや、此の如くに天

照活躍し、此の如くに人生宇宙を陶冶し、此の如くに天人萬有を驅逐しつゝ、此の如くに自から然らしむる者たるを確信して疑はざればなり。而して亦その某に反抗する人人のありとせば、其人人の確信も、亦それ此の如くならざるべからず、此の如くあるべきものなるぞ。そのいづれにしても、自他共に均しく之れその目的公準とする所は、人生宇宙、天人萬有の根本大極たる本体大本體なりとして、各自各別に信仰解釋實行しつゝある者なれば、其の信仰、目的、解釋、實行の最も克く圓滿極成して、亦最も克く完全大完全に、根本大極たる本体大本體を信仰解釋實行し得たる者が、直に是れ根本本体の其處に天照し、本体大本體の此處に活躍して、其の圓滿極成たることを立證するものなるぞ、完全大完全なることを證明するものなるぞ。それ其の根本大極たる本体大本體の天照證明する所の信仰解釋實行は、その何人の信仰解釋實行なるにもせよ、層層最も早く最も克く圓滿完全に、其の根本本体に照鑑せられ、大極大本體に攝理せられて、最も速かに最も善く還元同化し、超等超樂するとの疑なきと共に、亦最も先頭に、終局の大花冠を戴くものなるぞ。勿論、そのいづれの信仰解釋實行なりとも、悉く、根本大極たる本体大本體の天照發顯なれば、いかなる卑下劣等の信仰解

釋實行なりとて、亦その漸漸次第に發達進歩し、漸漸次第に生を更め代を代ゆるとも、其の根本大極たる本体大本體に到達還元するものなれども、照鑑攝理せらるゝものなれども。その最も早く圓滿極成し、最も克く完全大完全したる者が、先頭第一の大花冠を頂戴するものなるぞよ。其の未だ克く完全たるを得ず、圓滿極成たること能はざる信仰解釋實行は、勢として自然に淘汰せらるゝものぞ、感化せらるゝものぞ。同化し感化せざるを得ぬものぞ。いかに頑張りて其の頑態を維持し、他の優勝なる者と對立し反抗せんとするも能はざるものなるぞ。物僉兩途ありとは云へ、兩途ある者は、必ず終局歸着する所あり、その歸着終局する所は、必ずや、その一途に攝理統一せらるゝものぞ、歸順同化するものなるぞ、せざるべからざるものなるぞ。人生いかに千百萬の信仰解釋實行ありとするも、その中、最も善く圓滿極成したる完全大完全したる信仰解釋實行に攝理統一せらるゝものなるぞ、然り、我と吾が身よりも、謳歌歸順しつゝ、同化するものなるぞ、同化せざるを得ざるものなるぞよ。是れ蓋し圓滿極成の信仰解釋實行は、其の根本大極たる本体大本體その的なるが故に、其の的としての最も克く圓滿極成に天照發顯したる代表的正當體なるが故に、其の根本

大極たる本体大本體としての天照代表的正當體の發顯活躍する信仰解釋實行には、人生宇宙ありとあらゆる天人萬有、各自各別の信仰解釋實行が攝理統一せらるゝは當然なるぞ。それよ、ありとあらゆる各自各別千百萬億の信仰解釋實行が、漸漸次第と悔む改めて、猛然奮然、その根本大極たる本体大本體としての天照代表的正當體の發顯活躍する信仰解釋實行に隨喜歸順して、大聲謳歌しつゝ、同化大同化するは、必然の結果なるぞ、各自各別の目的は、均しく之れ此の根本大極たる本体大本體としての天照代表的正當體の發顯活躍する信仰解釋實行に存すればなるぞ。されば圓滿極成の信仰解釋實行は、根本大極たる本体大本體の天照中の天照發顯中の發顯活躍中の活躍なるを以て、そのいかなる世界に起り、いかなる國に生じ、いかなる人に發するとも、天然自然と、天人萬有を感化し、人生宇宙を同化し、更に之を照鑑し、攝理しつゝ、統一救済するものなるぞ。亦何的か之を拒み得べきや、他界他國に起り、他人他種に發したりと云ふ淺薄なる事故を以て、之を拒むことは、斷じて能はぬものなるぞ。それよ、根本大極には、彼國此國と云ふ差別はない、本体大本體には、彼人此人と云ふ分別はない。天人萬有、均しく之れ根本大極の發顯なり、人生宇宙、均しく之れ

四四  
本体大本體の天照なりき。只その天照發顯の量として、量の活動飛躍として、活動飛躍の行程として、彼國此國ありとするも、彼人此人ありとするも、均しく之れ彼國此國なり、均しく之れ此人彼人なり、均しく之れ人なるぞ、均しく之れ國なるぞ。故に、此の宗義學說も、人生宇宙、天人萬有、一切を感化し同化し救濟攝理せんとする者は、その信仰解釋實行を、共に均しく、根本大極たる本体大本體を代表したる者なりとするが故に、せざるべからざるが故に、亦その人生宇宙、天人萬有、一切を平等慈眼視するものぞ。せざるべからざるものなるぞ。人生宇宙、天人萬有としては、亦その根本大極たる本体大本體より天照發顯したる者なるを以つて、いづれの信仰解釋實行にせよ、その信仰解釋實行する所が、最も克く、根本大極たる本体大本體を代表活躍したる者也」と承認明覺するに至れば、歡喜踴躍して、彼や此やの差別あるなく、均しく共に、謳歌讚歎して歸順し同化し還元超樂せんとする者なるぞ。そのいづれの世界——國——人——時——歲月——方位——等を以て、厭ふものにあらず、忌み避くるものにもあらず、寧、是れ朝な晝な夕なに、寐ても寢ても、起きても座しても、夢現幻の隔てなく、只その根本大極たる本体大本體を感應道交し、感照會得することこそ發願熱望しつゝあるばかりぞ。

知れや、いづれの世界も、いづれの國も、いづれの人も、人生宇宙、天人萬有と共に、同一根本大極たる本体大本體より天照發顯しつゝある者なるに相違なければ、其の根本大極に照鑑救濟せられ、其の本体大本體に攝理統一せられて、同化し還元し、超等超樂するは、人生宇宙、天人萬有、自然の性情として動體として、如何とも爲しがたし、寧、その多くは歡喜踴躍して、我と吾が身より謳歌歸順し、同化安立するものなるぞ、勇みに勇みて、我と吾が身より攝理統一せらるゝものなるぞ。是れ蓋し我と吾が身に我としての信仰解釋實行を發顯活躍することの能はずんば、完全なる信仰解釋實行を天照飛躍すること能はずんば、寧、斷然、層層、完全なる信仰解釋實行に歸順同化すべきものなるぞ、同化合體せざるを得ざる者なるぞ。這間、豈に彼我の拗執を以て、自己成格の發達進歩を傷害殘賊すべきものならんや、道は私なし、苟もその我としての自己成格を發達進歩すべき者なれば、猛然快然、超入同化せざれば已むべからざる者なるぞ。某は某の信仰解釋實行を以て、人生宇宙唯一無上の天照實義なり、絶對無比の根本本体大極大本體なりと確信する者にして、是れぞ允に、人生宇宙、天人萬有の根本大極たる本体大本體、其的の信仰解釋實行なる。それよ、根本大極たる本体大本體としての

天照代表的正當體の發顯活躍しつる信仰解釋實行也、信仰解釋實行中の最も完全したる信仰解釋實行にして、寧ろその根本大極たる本体大本體其的の某に發顯天照して、唯一無上の眞實義、絶對不二の信仰解釋實行を、最も完全に天照發顯したる者なりと念ずる者なるぞ。故に某は某の唯一無上絶對不二と念ずる信仰解釋實行を以て、人生宇宙ありとあらゆる總ての宗教宗義學說に卓出超絶したる者なりと確信し、頂天立地横行縦歩、猛然烈然行然として、人生宇宙、天人萬有の一切を感化し同化し、攝理統一しつゝ、共に與に、人生宇宙、天人萬有の根本大極に觀照道交し、本体大本體に還元超樂すべき大信仰大解釋大實行を期する者なるぞや。某は某として此の如く、人生宇宙の根本大極たる本体大本體に向て、信仰し解釋し實行し、更に感應道交し、還元同化し、超等超樂せんとする者は、是れ正敷、根本大極たる本体大本體其的の某に天照發顯して向下向上する者たるにあらで何ぞや。さりとは、某は固より、根本大極たる本体大本體としての自然的天照發顯の代表體にして、その天照發顯の代表的正當體たる某としては、亦是れその自然の天職責任としての活動飛躍なりと雖、衷心竊に歡喜踴躍の情靈轟發せざるを得ぬぞよ。是れ蓋し、天照發顯の代表的正當體としての

某が生世、世、信仰解釋實行して、その結果の漸く今日に醱酵蒸發し、醱酵結晶したるを思へばなるぞ。且やその既に已に、根本大極たる本体大本體其的の某に天照蒸發して、此の如くに活動飛躍する者なりとせば、某は正敷、是れ、根本大極其的の發顯正當體なるぞ、本体大本體其的の天照結晶體なるぞ、天照發顯中の天照發顯的正當結晶體なるものぞ、歡喜踴躍せずして、それ如何せんや。歡喜踴躍すると共に、四圍上下を俯仰顧盼すれば、憂念愁歎せざるを得ず、さりとは、亦某としては、某としての我としての、小なる我としてののみ、その恩寵を私するに忍びず、忍ぶこと能はざると共に、それいかに大なる我たらざるを得む、大なる我となりて、四圍上下に於ける憂念すべき者、愁歎すべき者を教導扶翼し、感化啓發し、救済得樂せしめざるを得んや。それよ、某としての天職責任は、自からは是れ然らざるを得ざるぞよ。

第廿九節 信仰之蒸發と内外之醱酵——某は某の全身を以て、全身英靈の天照發顯を以て、其の家とし、國とし、世界とし、宇宙とする八表上下に對し、感應道交し、觀照超覺しつゝ、世界開闢、天祖降臨、人類發生、二十五萬年來、皇祖建國、列國興廢、三四五千年來、生生世世、某としての祖國、及、祖家より遺傳訓陶せられた

る信仰解釋實行と、世界列國、東西古今の宗教宗義學說とを比較參商し、之を現在日本皇國の當代と、現在世界列國の動脈趨勢とに、對照照鑑し、進んで人生宇宙過去久遠未來永劫の活機活運とに、微明判斷し、更に無始無終、無經無緯の人生宇宙其の威應道交し、その亦人生宇宙の發顯終局たる根本大極に證入證出し、本体大本體に同化合體しつゝ、茲に活動飛躍し、茲に還元超樂せんとすると共に、其處に熾灼颯爽として、其の根本大極たる本体大本體を、かけまくも、稜にかしこく、三拜會得し、三拜會得すると共に、其の根本大極たる本体大本體の稜威大稜威に天照大天照、薰發大薰發せられつゝ、あることを、今更らの如くに歡喜踴躍し、歡喜踴躍すると共に、我と吾が身の現象は、根本大極其的として、本体大本體其的として、穆然信仰し、穆然解釋し、穆然實行する者なるぞ。穆然、爽然、穆然、信仰解釋實行すると共に、更に玄として、森森として、肅肅巖巖として、閃電轟雷活火的に、長虹飛雲蒼天的に、千紫萬紅山嶽的に、長江大河蒼海的に、森羅萬象大宇宙的に、人生宇宙、天人萬有ありとあらゆ一切合切を教導し、感化し、啓發し、救濟し、攝理し、統一し、還元超樂せしめんとする者なるぞや。

然れども、退て亦竊に反省みれば、愈是れ根本大極たる本体大本體天照薰發の英靈を經とし、人生宇宙の發顯現象終局を緯とし、祖國家祖の遺傳訓陶を骨とし、髓とし、世界列國の歴史風俗を皮とし、肉としつゝ、東西古今、前聖先哲の宗義學說を參商品騰し、増補大成し、以て更に人生宇宙を斡旋陶冶し、天人萬有を究明制約し、其の根本大極たる本体大本體を悟入開悟したる信仰解釋實行に過ぎざるものぞ。而も亦世界開闢、人類發生、廿五萬年來、東西列國有史三四五千年來の信仰解釋實行を、より發達進歩せしめ、祖國家祖の遺傳訓陶と、列國古今前聖先哲の宗義學說とを、より發達進歩せしめたるとは、確信して疑はざる所なるぞ。是れ蓋し根本大極たる本体大本體の天照的英靈と、千百萬年内外よりの遺傳感化と、東西古今宗義學說の刺戟教訓と、且や現在日本皇國の時代精神と、世界列國一般の動脈趨勢とに驅られつゝ、更に人生宇宙過去現在未來永劫の活機活運とに、促かされて、漸漸次第に、氳氳醲醲し、橫逸湧出したる者にして、決して某としての力あるにはあらぬぞよ。換言すれば、根本大極なる本体大本體の天照大天照して、人生宇宙、天人萬有の發顯終局しつゝ、あるまじく、信仰解釋實行したるものぞ、せしめられたるものなるぞ。

さりとは、某の信仰解釋實行したるものでなく、直に是れ根本大極たる本体大本體其的の信仰解釋實行したるものぞ、人生宇宙天人萬有其的の信仰解釋實行したるものなるぞ、斷じて某としての力でない。某としては、只その衷心に何限の感謝を表し、生々世世、生を更め世を代ゆるとも、その實行發願を期し、活動飛躍を期し、日夜夜に時時刻刻に實行發願し、活動飛躍し、必ずとも、天人萬有に率先して、根本大極たる本体大本體其的の大恩寵に報ひ奉らんとするばかりなるぞ。

### 第三十節 本体大本體之寵兒と造化秀靈之結晶——皇御國の天

祖 皇祖 及 太祖 台父母 台師友は申すもかしこしや。聖孔子、哲ソクラテス、釋尊、基督、マジ、マホメット、乃至世界列國ありとわらゆる前聖後賢には、勿論某の企て及ぶべき所ならしな。然れども、如上の諸聖諸賢よりも、人生宇宙、本体大本體の寵兒たるを信じて感涙に堪えざるものぞ。そは孔子は堯舜禹湯文武周公の言行と、當時の逸史學說等とを鑑とするに過ぎず、ソクラテスは希臘古代の神話逸史と、當時の怪疑的詭辯派の立論とを鑑とするに過ぎず、釋尊も其の國波羅門教典と當時諸流の外道等とを鑑とするに過ぎず、基督も亦猶太教典と當時諸流の異

論者等とを鑑とするに過ぎず、マジも、亦復、メヂヤ國教と當時諸流の異論者等とを鑑とするに過ぎず、マホメットも、其の土、阿刺比亞一帶の神話、及アラビヤ教と基督教とを鑑とするに過ぎず。勿論、そのいづれも、主として人生宇宙を横斷縱截し、天人萬有を觀照參確したるものなれども、それ然れども、その克く世界各國を一望中に達觀して、各自各別の開境立國、人情風俗の推移變遷、風土氣候の等分差別、及その宗義學說の出處と異同等とを、眼下に歴歷として參確指點することは能はざりしものぞ、參確指點して批判裁決することは能はざりしものなるぞ。而も某は均しく人生宇宙に驅逐鼓舞せられながらも、三四五千年來に於ける内外の遺傳、感化、刺戟、訓陶を受け、ありがたや、一望の中、一目の下に、歴歷として、世界列國、東西古今の宗義學說等を委細に參確品騰することを得たる者なるぞ。聖也賢也と雖、その人類社會に向て鑑とする所は、彼が如く短なり狭なり。愚也鈍也と雖、その人類社會に向て鑑とする所は、此の如く長なり廣なり。某は實に人生内外に於ける遺傳、感化、刺戟、訓陶と、世界列國、東西古今の神聖賢哲仁人君子と、天人萬有造化稜威の秀靈とが、一時に鬱然沛然として、某の一身に扶輿磅礴し、凝集結晶したるかの感あるな



り、然り、某は全く此の如く感想し、此の如く確信するものぞ。かしこしや、鈍根劣機、至愚至痴なる不肖某に、此の如きの大天寵大恩錫あらむとは知らざりしと共に、知りては、深く感激奮勵せざるを得ず、特に前聖後賢に對しては、痛く慚愧せざるを得ぬぞかし。今ま某と世を同ふする當時内外列國の人人、及、某と世を異にする後代の人人にして、その某に卓出優絶する人人は、更にその感想感激の層層剗切猛烈なるべきを信ずるぞよ。されば、後世に生れたる人人は、その何人たるを論ぜず、人生に於けるの經驗は、層層廣大に、層層延長しつゝあるを以て、總て是れ前聖先哲に超絶するものなるかと云ふに、左様ばかりには參らぬぞ。獨りその信仰解釋を有し、實行を期する者ならば、此の如き感想は浮ばぬと共に、感激することも能はぬものなるぞよ。いかに、その後世に生れ出ればとて、其の信仰解釋の超絶する所あるものならば、前聖先哲を推倒する實行は期しがたきものぞ、亦期し得らるべきものでもない。知れや、只その信仰解釋の薰發活動する者は、いかに至愚至鈍なりとも、必ずや、それ的の實行飛躍を期するを以て、其の感想は我と吾身に自から醗醸湧出するものなるぞ。若し夫れ人人にして、總て然りとせば、人人均しく總てそれ

なる感想感激は、我と吾が躬に自から醗醸湧出するものなるぞよ。根本大極たる本体大本體は、決して其の何人たるを選ぶべきものでない、亦固より多數と少數とを擇ぶものでもない、更にその愚と賢と、才と不才とを取捨するものでもなし、それよ、一人も層層多からんことを希望せられつゝあるものぞ。されば、その信仰解釋實行さへ、我と吾が身に感應會得しつゝ活動飛躍する者は、一人も百人となり、少數も多數となるものぞ、不才も才となり、愚も賢となり、聖となり、更に神ともなり得るものなるぞよ。世に鈍根劣機、下愚底凡なる某さへ、猶且此の如き感想感激ある者を、奚ぞ矧んや、某に千百萬倍する聰明睿智を保有し給ふ上品上流たる世上拔群の大丈夫、大烈女的なる人人は、勿論、内外ともに、その感應感激の層層多く高く深く、廣く厚く、猛烈神妙に醗醸湧出すべき者なるぞ、醗醸湧出せざるべからざるものなるぞ。而も是れ此の感想感激は、其の人亦自から久しき以前より、昔し昔しの其の又むかしの以前より發憤精勵して求むる所ある者ならば、容易に醗醸醱酵して薰發湧出するものならず、昔し昔しの其の又むかしより、最も猛烈に、最も痛切に、根本大極化しつゝあるものならば、その本体大本體の天照發顯して、茲に天人萬有

造化秀靈の凝集結晶體たるの大龍兒たることは、能はざるものなるぞ。然則、一日も早く奮然猛然、此に發憤し、此に激勵し、此に向上同化するの信仰解釋實行なかるべからず、一日遲疑して怠れば、一日劣敗の陋態を有せざるべからざるぞ。

### 第三十一節 大本體天照之我と遺傳及前聖先哲之遺志と大成

且夫其の信仰解釋實行には各自相應の異同分別ありとするも、其の目的公準とする所の終局は、均しく之れ、人生宇宙の根本大極に到達同化し、天人萬有の本体大本體に、還元超樂せんとしつゝあるものなれば、知れよ、世界列國、東西古今の前聖先哲は、此の界彼の界に於ける生生世世の信仰解釋實行の漸漸次第と進歩發達して、既に今に將に、其の根本に照鑑せられ、其の大極に攝理せられ、其の本体大本體に復活同化し、還元超樂し、將たしつゝあるものにして、其の各自各別の英靈は、亦既に今に將に、爽然融會して、根本大極化したるものなるぞ、釋然一致して、本体大本體化したつゝあるものなるぞ。それ既に今に將に、各自各別の英靈の根本大極化し、本体大本體化したつゝあるものとせば、我國及世界列國に於ける内外の遺傳、感化、刺戟、訓陶と、其の東西古今の神聖賢哲仁人君子とが、鬱然沛然として、一時某の身に扶輿磅

礴し、凝集結晶しつゝる者かと思感するも、亦無理ならぬ次第にして、その感想たるや、亦直に是れ、根本大極たる本体大本體其的が、熾灼煌燿として、某の身に天照發顯し活動飛躍したるものなりとこそ自覺せらるゝも、當然ならずや。されば某としての我は、我としての全身は、直に是れ三世を直截し、十方を橫斷し、人生宇宙を陶冶吞吐し、天人萬有を幹旋卷舒する根本大極其的の發顯體なり、本体大本體其的の天照體なるぞ。然り、此に我としての我てふ其我は、絶對不二の本体大本體其的にして、無上無比の根本大極其的にして、それその人生宇宙を幹旋卷舒し、天人萬有を陶冶吞吐する根本大極たる本体大本體其的の天照發顯的の正當代表體なるぞと感想自覺するも、是れ亦、其根本大極たる本体大本體其的の此の如くに、天照發顯したるものなるぞ。さりとは、幸なるかな某よ、某はいかに、たふとき天錫の大龍兒也哉と感激せられつゝ、何限の感涙に嗚咽ざるを得ざる次第なるぞや。而も是れ、根本大極たる本体大本體其的は、決して只某一人のみを此の如くに特寵し、獨り某一人ばかりを此の如くに照鑑攝理するものでない、人生宇宙、天人萬有の一切に對して、愈その此の如きものなるぞ、某は人生宇宙、天人萬有と共に、均しく

此の如くに根本大極たる本体大本體其的の恩寵に拜接し、その大寵兒たらんこと希望して已まざるものなるぞ。而して相共に亦、天祖降臨、世界開闢以來の遺傳と、我國及び列國、その建國以來の遺傳と、無始無終、無經無緯に天照開闢しつゝある人生宇宙の大遺傳とを大成して、東西古今、前聖先哲が苦心慘愴として經營したる其の遺志とを修正し増補し大成し、茲にありとありゆる宗義學說を總合統一し、以て更に天人萬有を教導し啓發し感化し、人生宇宙を同化し救済し攝理しつゝ、その根本大極たる本体大本體其的の大廣前に大凱歌を奏せんとする者ぞ、奏して唯一無上の寶冠を戴き、絶對不二の最高位に鎮坐せんとする者ぞ。鎮坐ては、更に亦人生宇宙に歌舞しつゝ、活動飛躍し來らんとする者なるぞ。世に鈍根劣機、下愚底凡なる某さへ、此の如き信仰解釋を有し、此の如き目的希望を有し、その天照發顯の實行活躍を期する者なれば、矧してや、某に千百萬倍する聰明睿智を保有し給ふ上品上流たる世上拔群の大丈夫、大烈女的なる人人は、その信仰解釋實行の目的希望、宣明教化、活動飛躍の層層卓出優絶に、層層宏遠雄大に、層層甚深微妙に、層層崇嵩森嚴に、層層猛烈活火、溫和照煦に、發顯薰灼する者たるを知るぞや。茲に虚心坦

懐にして、相對し相評せば、彼我相共に、根本大極化し、本体大本體化して、參確究明する所あらば、必ずとも、其の信仰解釋の同ふして異なる者にあらざるを證入證出すると同時に、亦相互に誓約して、其の天照發顯活動飛躍の實行を期すべく、期して人生はおろかよ、宇宙萬有一切を教導感化し、攝理統一しつゝ、やがては、均しく其の根本大極たる本体大本體に還元同化し、超等超樂するに躊躇する者ならざることを確信して疑はざる次第なるぞ。

第三十二節 大本體天照發顯の我としての所期——某は某としての天照的英靈が、感應觀照し、道交會得したる信仰解釋實行を以て、人生宇宙唯一無上の者なり、天人萬有絶對不二の者なり、根本大極たる本体大本體其的の天照發顯なり、天照發顯中の最も圓滿極成に完全したる信仰解釋實行の天照發顯也と確信し、以て個人を擁護啓發し、家庭を擁護啓發し、國家を擁護啓發し、世界を擁護啓發し、必ずしも、人生を全からしめ、宇宙を全からしむるの信仰解釋實行を期する者なるぞ。獨り自國に宣明し、同族を擁護し感化し救済せんとするばかりでなく、世界列國に宣明し、人類同胞を擁護し感化し救済し、更に宇宙全般に宣明し、天人萬有、一

切を擁護し感化し救済し、悉く是れ之を攝理統一すべき信仰解釋實行を期する者なるぞ。是れ蓋し某としての「根本大極化したる我」にして、「本体大極化したる我」にして、その「根本大極化し、本体大極化したる我」としては、更に其の「根本大極たる本体大體其的」の天照發顯したる正常的代表體の「我」としては、人生宇宙を一貫し、天人萬有を包括しつゝある者なるを以て、其の擁護啓發、其の感化救済、其の攝理統一は、是れ正に「我」としてに天照發顯したる根本大極の本体大體其的の自から然らしむる者にして、根本大極たる本体大體其的の天照發顯したる我としては、亦自から然らざるべからざるの所期責任、天職あるものなるぞよ。

勿論、東西古今の宗義學説は、其實質たる人生宇宙と共に、總て是れ「根本大極の發顯する所」なり、「本体大體の天照する所」なり。故にその主張者たる各自は、各自各別に、神明としては天照發顯し、聖哲としては天照發顯し、佛陀としても天照發顯し、道者仙士としても發顯天照し、菩薩阿羅漢としても天照發顯し、天使豫言者等としても天照發顯したるものなるぞ。されば、「根本大極の本体大體化したる我」としては、茲に默念冥想すれば、曾ては命として、人として、かけまくも、かしこくも、日出國に

天降りもし、誕生もしぬ、「文宣王」としては支那にも出現し、釋尊としては、印度に出現し、ソクラテスとして希臘にも出現し、マジーとして波斯にも出現し、摩西としては猶太にも出現し、基督としてはユダヤのベテレヘムにも出現し、マホメットとしては、亞弗利加一帶なるメッカに出現し、或は菩薩となり、或は羅漢となり、或は聖者、賢者、哲人、君子として、或は道士、仙人として、或は提唱者、豫言者、革命者として、世界列國到處に出現し、今亦如上の宗義學説を改修融會し、總合統一する神勅天命を蒙りて、鈍根劣機、下愚底凡なる凡兒として、凡兒の天職責任として、此の世界に特に大日本皇國に出現したるものなりとの感想あると共に、其の神勅天命に對し奉る天職責任の重且大なるを思ふて已まざる次第なるぞ。更に人生の益々發達し、人類の彌々進歩して、將來、亦復、此の教趣を改善すべき必要生ずる時は、千百萬度、其幾度となく東西到處の列國に出現して、改修正整すべく、故に將來幾百千萬歳の後に於て、「這般の教趣を其の時代相應に改修整正する者は、亦その必ずや我たることを」根本大極の本体大體化したる我たることを豫言し置くぞや。

蓋し人生宇宙、天人萬有には、根本あり、大極あり、本体大體あり。人生宇宙、天人萬

有の一たる某としても、其の根本大極的の本体大本體より天照發顯したる者なれば、人生宇宙、天人萬有の一たる人としての某が、此の如き救世の道心大道心を奮發するは、是れ亦根本大極たる本体大本體其的<sup>そのもの</sup>が、人としての某に天照しての發顯なると共に、是れ人としての某が、人生宇宙、天人萬有の一としての人たる某が、直に是れその根本大極たる本体大本體化したる我とはなりたる所以の者なるぞ。豈に翹だ某のみならんや、何人と雖、一日も早く人生宇宙、天人萬有と共に、亦この根本大極的の本体大本體化する大なる我となかて、均しく僉<sup>みな</sup>これの如くに天職として其所期責任を實行せざるべからざるものぞ、然り、均しく共に、實行し得るの成格天職を有するものなるぞよ。

第三十三節 列國古今の信仰解釋と、我の信仰解釋——勿論、世界列國としては、列國それ自身として、世界到處に發顯發達したる信條教義が、各自各別に、それ、古に今に、西に東に、天照活躍しつゝあるものぞ、よしその自國に發顯したる者は滅亡して、他より勸請<sup>くわんせう</sup>し、もしくは輸入したりとも。且その範圍程度としては、大小深淺、厚薄長短、精粗純雜、文野明暗等の差別等分こそあれ、列國何處か信條

教義のなかるべきや。假令ひ未だ國としての社會的組織あること能はずとするも、苟も人類として生活する所には、それ相應の信條教義は、不成文的にも存するものなるぞ。茲に靜に冥想開眼すれば、その信條教義たる、亦是れ根本大極たる本体大本體其的<sup>そのもの</sup>の天照發顯なれば、共に均しく我としての信仰解釋實行の一部分なるぞ、根本大極的の本体大本體化したる我としての信仰解釋實行の一部分なるぞ。四書、五經、老莊、諸子百家の書も、我としての信仰解釋實行の一部分なるぞ、華嚴、阿含、方等、般若、北華、俱舍、唯識、起信、三論等の經律論も、我としての信仰解釋實行の一部分なるぞ、猶太教、基督教、アラビア教、回教、拜火教等の教典聖書、及その諸種註釋も、我としての信仰解釋實行の一部分なるぞ。乃至、東西古今のありとあらゆる宗義學說たる宗教的、哲學的、道學的、美術的、政治的、經濟的、文學的、論理的、地質地理的、動物植物礦物的、氣象的、天體的、數學的、化學的、理學的等の百科全書も、亦是れ悉く我としての信仰解釋實行の一部分なるぞ。我としての大なる我は、斷じて之を他人の所有視するを得ず、我としての所有たる一部分とはするものぞ。只是れ東西古今、時代相應の信仰解釋實行にして、その未だ全き天照發顯ならざるを愛感しては、茲に

之を改修融會し、増補大成し、總合統一せんとするものなるぞ、總合統一して、層層同化安立の信仰解釋實行<sup>ニ</sup>を與へんとするものなるぞ。是れ我は我としてのみ、獨りその我としての信仰解釋實行に安堵すること能はず、他をしても、亦此の如くに信仰解釋實行せしめざれば満足せざる所以なるぞ。それよ、根本大極たる本体大本體の「我」と發顯して、自から然らしむればなり、我の根本大極たる本体大本體化して自から然ればなり。いづれにしても、其の克く卓出超絶したる信條教義が、その何人の立義主張なるにせよ、正に是れ、根本大極の本体大本體化したる我にして、本体大本體の根本大極としての我化したる者が、此の如くに天照發顯するものなるぞ。故に克く本体大本體の根本大極化したる信條教義實行が、根本大極の本体大本體の最も克く我化したる信條教義實行が、亦最も完全に、本体大本體の根本大極の天照發顯なるを以て、終局最後の勝利を占め、先頭第一の花冠を戴く者は、その最も克く完全に、根本大極の本体大本體化したる大なる我其的なるぞや。されば、某の信仰解釋實行が、未だ本体大本體化せずして、他の信條教義の全く克く本体大本體化したるものなる歟、他は自然と某を啓發感化し、某は自然と他に歸

順同化するものぞ、せざるべからざるものぞ。某の信條教義、全く克く本体大本體化したる者にして、他は未だ本体大本體化せざる信仰解釋實行なる歟。某は自然と他を啓發感化するぞ、他は自然と某に歸順同化する者ぞ、せざるを得ざるものなるぞ。そのいづれにしても、均しく之れ、根本大極たる本体大本體の天照發顯なるを以て、その完全なる天照發顯に感化し同化し安着終結するは、人生宇宙、自然の現象なるぞ、天人萬有、自然の體なるぞ、用なるぞ、相なるぞ。其の體に順じ、用に應じ、相を全ふせしめて、茲にその各自各別を總合大成し、攝理統一せんとする某は、是れ直に各自を總合大成し、攝理統一せんとする、根本大極たる本体大本體化したる我にして、根本大極たる本体大本體其的の我化して、各自各別を總合大成し、攝理統一せんとする天照發顯にあらずして何ぞや。然り、今や某が東西古今、各自各別の信條教義を總合統一し、天人萬有を攝理統一せんとする信仰解釋實行は、正敷、根本大極たる本体大本體その的の此の如くに天照して、此の如くに證明するの左券印證たることを信ずると共に、是や之れ、根本大極たる本体大本體其的が古今東西の宗義學說を總合大成し、天人萬有を感化救濟し、人生宇宙を攝理統一せしめんとして、

茲に鈍根劣機、至愚至痴なる凡兒としての身を天降し、其の秀靈を鈍根劣機、至愚至痴なる凡兒としての身に傾注發顯し、遂に克く根本大極的自体大本體化したる大なる我とはならしめたるものにあらざりて、何ぞと自覺自信しつゝ、已むこと能はざる所以なるぞや。

然れども、某としては、獨り某のみ然る者なりとは申さぬぞよ。東西古今、その何人たるを問はず、その何人なりと雖、必ずや、僉茲に醞釀薰發し到達歸着して、根本大極たる自体大本體化すると共に、亦茲に他を感化救済し攝理統一するの信仰解釋實行あるに至るものぞ、至らざるべからざるものぞ。是れ蓋し、根本大極たる自体大本體其的の天照發顯として然るものなるぞ。知れや、自体大本體より天照し、根本大極より發顯したる人生宇宙、天人萬有としては、其宗教宗義學說として、信仰解釋實行として、その天照に反抗し、その發顯に逆行せむとするも能はざるものぞ。終局する所は、人生宇宙、天人萬有とも、均しく茲に歸着還元せざるべからざるものぞ、同化超樂せざるべからざるものなるぞ。然り、晚かれ早かれ、いづれも僉それ均しく茲に、その根本大極たる自体大本體其的の瑞の大天照宮に謳歌歸順し

て、大稜威燄熾の最高位に同化超樂するものなるぞ。

### 第三十四節 信條實行に於ける反對者の寛容と、信仰發顯の競

争——且夫れ某の信仰解釋實行は、反對者の出顯反抗を寛容して優待する者ぞ、斷じて虐待苛責する者でない。そは人生宇宙の根本大極は、唯一自体大本體にして、其天照發顯としての現象にこそ、人生宇宙として、天人萬有として活動發顯すれ、活動發顯して相互に反對なる行動飛躍あれ。而もその反對なる行動飛躍たるや、各自を各自として、各自の英靈を各自たる英靈として、活動飛躍せしむるものにして、其の亦各自を各自として、各自の英靈を各自の英靈として、反對に行動し、活動飛躍せしむるは、取りも直さず、其根本大極たる自体大本體の、根本大極として、自体大本體として、天照發顯しつゝあるものなるぞ、活動大活動、飛躍大飛躍しつゝあるものなるぞ。本來唯一自体大本體のみにして已むものとせば、亦その天照發顯すべき必要なし、活動大活動、飛躍大飛躍すべき必要なきと共に、人生なし、宇宙なし、天人萬有もなきものなるぞ。而も唯一「自体大本體」としては、大天照大發顯すべき大稜威を有するものぞ、有すればこそ大活動大飛躍して、人生宇宙の發顯し、天人萬有の萬有的英靈

として發顯し、千變萬化に發顯天照しつゝあるものなれや。本來「大本體其的」は、大生命なるぞ、大活動大飛躍するぞ、死物にはあらぬぞ。死物ならぬが故に、大活動大飛躍するものぞ、大活動大飛躍するが故に、人生宇宙、天人萬有の亦之れ活潑潑として天照活躍しつゝあるものなるぞ。故に、根本大極たる本体大本體其的の質としての體に收めて觀すれば、同一根本大極也、同一本体大本體也、同靈同體也、亦人生なく宇宙なく、天人萬有なし、唯一「根本大極」のみ、唯一「本体大本體」ばかりなるぞ。而もその天照發顯する量としての用を擴めて觀すれば、人生あり、宇宙あり、天人萬有あり、異相異彩なるぞ、千差萬別なるぞ。天人萬有として、相互に反對の行動あるは、蓋し當然なるぞ、その行動の反對あればこそ、天人萬有としての千差萬別はあるものぞ、反對なくば同一で、同一なれば天人萬有としての異相異別はなきものぞ。異相なく異別なきものとせば、是れその體としての用なき者ぞ。用なき體は活動せず、活動せざるものは生命なきものぞ、生命なきものは、自滅すべし、實在すること能はぬものぞ。「人生宇宙の根本大極としての本体大本體」たる者、豈にそれ此の如き無用の者ならんや、薄弱のものならんや。現在直下に、人生あり、宇宙あり、天人萬有あり、是れ

その根本大極の自滅するものたらざるを證明するに足るぞ、その本体大本體としての天照發顯するものたるを斷知するに足るぞ、その天照發顯は根本大極として本体大本體としての稜威なり、自性なり、自體なり、威嚴なるを知るべきぞ。されば、反對者なりとて、同一根本大極の發顯なれば、同一本体大本體の天照なれば、均しく之れ同一の天人萬有たるを以て、どこ／＼迄も、別物として憎惡すべき理由なし、仇遇敵視すべきの必要はなきものぞ。是れその反對者を寛容して、各自の信仰解釋實行の自由を認むべき所以なるぞ。反對者は反對者としての信條教義を以て信仰解釋實行しつゝあるものなれば、其實「某」の信仰解釋實行に對する反影着色なるぞ、此反對なる信仰解釋實行の反影なくんば、某としての信仰解釋實行も發顯天照すること能はざるぞ。活動飛躍すること能はざるぞ。故に某は某としての信仰解釋實行を發顯天照し活動飛躍すると共に、亦その反對者としての信仰解釋實行を寛容しつゝ、漸次第と、某の信仰解釋實行に感化し同化せしむれば足るものぞ。何條之を憎惡すべき必要かある。

されば、「某は某としての成格位置を保有すれば足る、彼は彼としての成格位置を



保有せざるべからず。故に態々他人他國にまで宣明感化するの必要もないと斷ぜん乎。」それは甚だ以て不心得の申條なるぞ。勿論、彼我一體なるは、唯一大本體に回光して、その質としての體に約言したる者に過ぎず、さればとて、大本體唯一のみにして已むべきものならず。更に現象に於ける我等天人萬有としても、亦直に大本體の量としての用たる稜威として、發顯天照しつゝあるものぞ。活動飛躍しつゝあるものぞ。已に大本體として、大本體の量として用として天照發顯し活動飛躍する天人萬有の現象としては、我として彼としての對立ある者ぞ、なかるべからざるものぞ。他なし、根本大極たる大本體としての量として用としての稜威なれば也、稜威としての天照發顯なれば也、天照發顯としての活動飛躍なれば也、活動飛躍としての現象大現象なれば也。是れ亦天人萬有が、その自然と、各自の成格を、各自に發顯活動し、各自の位置を各自に膨脹飛躍し、東に對し西に對し、南に對し、北に對し、更に上下四陲八塞十表に對し、各自相互に其の發顯活動の優劣を競争し、其の膨脹飛躍の曲直を主張しつゝ、與に共に、個人としての成格を發達進歩し、家庭として家族としての成格を發達進歩し、國家として國民としての成格を發達進

歩し、世界として人類としての成格を發達進歩し、更に宇宙として萬有としての成格大成格を發達進歩せしめんとするは、天人萬有、自然の性なるぞ、體なるぞ、天照發顯なるぞ、活動飛躍なるぞ。

然れども、本來一なるものは一に歸せざるべからず、天人萬有は均しく共に、其の一に歸せんとしつゝあるものぞ、然り、各自は先づ我れその一に歸して、我としての一を天照發顯するの信仰解釋實行ありと共に、他をして悉く我としての一に其の一としての我の信仰解釋實行に同化せしめんとするものなるぞ。若し夫れ自己の成格を保有するのみとせば、其の發達進歩は中絶し、自家成格の個人として、家族として、國民として、人類として、萬有として、更に家庭として、國家として、世界として、宇宙としての發顯活動も出來ず。其の實、自己としての成格も保有すること能はざるに歸するぞや。而して其の根本大極たる本体大本體としての天照大天照發顯大發顯も知るべからざるに至るぞ、活動大活動、飛躍大飛躍も見るべからざるに至るぞや。根本大極たる本体大本體其的の大天照大活動、大發顯大飛躍にしてなくんば、翅に天人萬有、人生宇宙の發顯活躍せざるのみならず、根本大極として

の本体大本體其的そのものも亦復實在するの必要なく、實在すること能はぬものとなるぞ。而も無は有とすることを得ず、有も亦無とすること能はず、根本大極たる本体大本體にして自滅し盡す者とせば、始よりして實在することなし、實在するの要なきものぞ。而もその已に實在するものとせば、是れ本來大實在して自滅すべき者にあらざるぞよ。本來大實在して自滅せざる者とせば、其の大實在の結果として、大發顯、大天照、大活動、大飛躍あること當然ならずや。されば、其の大天照の大活動よりして、大發顯、大飛躍し來れる吾人人類が、天人萬有の一として、亦その相互に發顯天照し活動飛躍しつゝ、自家の成格を發達し、其主義主張を競争實行しつゝ、彼我の正邪優劣を競争分斷し、各自相互に各自の進歩を期し、各自の大成を期するは、各自が自然の性なり體なると共に、其の性其の體の發顯活躍こそ、正しく是れ、根本大極たる本体大本體其的そのものの自然的大天照大發顯たるを知るに足らずや。

第三十五節 有意味の競争——夫れ已に、根本大極本体大本體の大天照大發顯として、天人萬有、各自の對立活躍あるものとせば、其の相互に活躍競争するは、是れ必然の結果なるぞ。則ち必然の結果なりと雖、亦慢然として對立競争すべき

ものにあらず、最も警戒を要する次第なるぞや。如何に必然的結果として對立競争するとも、其對立競争は斷じて盲動にあらず、無意味の者にあらず、意味あるなり、目的あるなり、信仰あるなり、解釋あるなり、實行を要するものなるぞ。その相互に對立競争するや、各自は各自として各自を持するに於て、常に我としての我は、根本大極化したるの我として、本体大本體化したるの我として、其の信仰を有し、解釋を有し、實行を爲しつゝ、その他に對しては、彼等は未だ根本大極化するの信仰を自覺せず、本体大本體化したるの教義を自覺せず、自覺せざると共に、其の根本大極化し、本体大本體化するの實行もなき者なれば、我こそは、彼等を教導啓發し感化救済するの天職責任あるものとして、競争活動すべきものなるぞ。是れ我としての我が「我としての」に歸するの道にして、亦彼としての一なる彼等を同化して、我としての「一」に歸し、共に「一」としての大なる我に歸せんとする者なるぞ。必竟すれば、彼我均しく同根一體なるを以て、同根一體の發顯現象として、相依り相待て、扶翼改善し發達進歩しつゝ、一せしめつゝ、一ある者なるぞ。故に決して彼等を仇遇敵視すべき者にあらず、虐待苛責するの必要もない。然も却て之を仇敵視し、之を虐待する

は、却て亦自家其的<sup>そのもの</sup>を仇敵視し、虐待する者ところなれ。其實<sup>二</sup>彼と云ふ彼は我にして、我と云ふ我も彼なり、彼を虐待するは我を虐待するに歸す、自他の徳を損ずること大なるものぞ。見よや、蘭菊相對して美を全ふし、萬有相待て秀美あり、彼此長短、相照らして精彩あるものぞ、一物のみとせば、何の美とすべき所かある、美と云ふ美も知るべからざるに歸す、相互に相對する者なければなり。されば、一時に悉く同化し盡すの必要はない、亦その一時に同化し盡し得るものならず、要は唯だ漸漸歩歩之を教導し啓發し攝理し統一し同化するにありのみ。之を統一以外の統一とは云ふ、是れ蓋し、大本體自然の大統一なるぞ。その反對者を寛容して、其の美を爲さしむるは、亦是れ我美を顯はす所以のものなるぞ。さりとは、是れ彼等は已に我に同化したつゝあると一般ぞよ、之を同外の同化外の化とは云ふ、是れ蓋し、大本體自然の大同化なるぞよ。我にして此心を存するからには、各宗義各學說の我に對立して、我に反抗しつゝありとするも、其實<sup>二</sup>已に我に同化し、我に統一せられつゝあるものぞ、統一とは混合にあらざる、各自分分、秩序を有して井然亂れざるを意味するものぞ、我の信仰解釋實行は、根本大極たる本体大本體其的<sup>そのもの</sup>を代表するの當體に

して、彼れその宗義學說は、人生宇宙、天人萬有と共に、均しく之れ、根本大極、本体大本體の代表的當體たる我としての發顯なり、天照なり。發顯天照としての活動飛躍なり、活動飛躍としての着色精彩なるものぞ。いかに反對者なればとて、之を憎惡仇遇すべき理由なきこと益々以て知るべきにあらずや。此の如き信仰と解釋と實行とのなくんば、其の信仰解釋は、未だ以て根本大極化し得ざるものぞ、其の實行は未だ以て本体大本體化し得ざるものぞ。さては、決して彼等を教導啓發し、彼等を攝理統一することは出來ざるものぞ。彼等も亦自然と我に同化し、漸漸と感化し來るものではない。是れ未だ我の眞實信に他を敬愛するの心と行とのなければなり、他を我と共に同一體とするの大本體靈なければなり。さりとは、未だ自他救濟攝理の道心、大道心、道行、大道行にあらざるぞよ。故に之を寛容して之を虐待せざるのみならず、深く之を尊敬し、之を愛戀すべきものなるぞ、その之を尊敬するは<sup>二</sup>我としての性なるぞ、情なるぞ、大極大本體としての天照發顯なるぞ。<sup>二</sup>他なし<sup>二</sup>彼あるが故に、<sup>二</sup>我の超絶する信仰解釋實行が判然するものぞ、<sup>二</sup>彼なければ我が信仰解釋實行の超絶することも見るべからず、<sup>二</sup>我の發

達進歩も望むべからざるに至るぞよ。彼等は我が爲めには反影なり着色なるぞ、我を琢磨せしむる他山の石なるぞ、寧、我を激勵する師保益友とこそ見るべきものなるぞ。その之を愛愍するは、我も曾ては大極大本體の天照發顯的分靈分體分象として、彼等が如き信仰の卑き、解釋の狭き、實行の拙き位置現象に往還流轉したるものなるぞ。而も今の我は幸なる哉、已に既に其の現象を解脫し、其の位置を進達し、均しく之れ大本體天照の分靈分體としても、嬉しや、此の如き宏壯雄大なる、崇高森嚴なる、甚深微妙なる、幽玄穆穆なる、信仰解釋あるに及び、其の實行も、亦、復、公明正大なる光輝精彩を顯彰發揚せんとするに至れる者ぞ。之れ已に其の信仰と解釋と實行との超出卓絶することを知りたるの我としては、其の信仰解釋實行の狹隘固陋なりと感ずる彼等をば、愛愍せざる得ぬものぞ。愛愍すると共に、亦、その同根一體なる各自本有の英靈を尊敬して、之を度し之を救はんとするの念は、念念發して已むと能はざる所以なるぞ、之を教導啓發し、之を感化攝理せざれば安ずること能はざる所以のものなるぞ。然れども、是れ彼等の我に化するにあらず、我の彼等を化するにあらず、彼等の彼等に化するものぞ。同根一體としての我より云へ

ば、彼等は我なるが如く、同根一體としての彼等より云へば、我は亦彼等なるぞ。彼としての「我」としての「我」、合すれば化して、大なる一となるばかりぞ。彼れ我れ同性同體として、いつかは、亦、同化一體たらざるべからざるものぞ、是れ獨り自己のみ慰藉安養あるを以て已むべからず、自國にのみ宣明感化するを以て已むべからず、人生宇宙に宣明飛躍し、天人萬有を感化し救済し攝理せんとする所以なるぞ。「根本大極化したる我」としては、本体大本體化したる我としては、其實、我と云ふ我あるを知らざると共に、他人他國と云ふをも認むること能はざるものぞ。根本大極より發顯し、本体大本體より天照したる彼我天人萬有は、亦、それ均しく共に與に活動飛躍し同化融會しつゝ、その根本大極たる本体大本體に到達還元し、超等超樂せざるべからざるものたるを確信すれば也。是れ蓋し量として用として發顯したる現象としての差別的彼我は、亦、その質として體として根本大極化し、本体大本體化しつゝ、その此の如くならざるべからざる同化性と平等體とを有する者にして、其の實、信仰解釋實行の主體、其的として自から然かるものなればなり、主體大主體たる根本大極、本体大本體の此の如くに大天照大發顯し、此の如くに大同化大

還元するものなればなり。|| 彼と我とは、その大天照大發顯に於けるの活動にして、大同化大還元に於けるの飛躍たるものぞ。いかんぞ、それ永く我として彼としての我と彼とに拘泥執着するの要あるべきや。執着固持するを得べきや。

### 第拾壹章 相互の開戦と信仰教條の實行

『他已に此教の信仰に同化し、若しくは、其の幾分同化しつゝあるの際。此國と彼國と、政治的戰爭惹起する時は如何。相互の同志教徒たるものは、いかなる行動に出づべき乎。』曰く其同志は各自相互に其の國を擁護すべく、甲國としての我同志たる者は、勿論其甲國を擁護すべく。乙國に於ける、我同志たるものは、固より乙國を擁護すべく、いづれも皆均しく同一の信仰の下に其國を擁護すべきものぞ。我教の信仰解釋實行は、人生宇宙を鎮護し、個人、家族、民族、國民、人類、萬有、乃至家庭、國家、世界、宇宙を擁護して、各自本有の英靈成格を顯彰活躍せしめんとする者なるぞ。決して其の人を奴とし、其の國を奪ひ、之を束縛苛責せんとするものにわらず、知れや、刃を出さんが爲に起りたる教にわらず、劍を閃かさん爲に出でたる者にもわらず、其君、其父母、其妻子

兄弟朋友に背かしめんが爲に起りたるものにもわらず、更に其の君、父、妻子、六親眷族を三界の係業として、之を疎んじ之を遠け、此の世、其の人を枯木寒嚴無味乾燥ならしめんが爲に出でたる者にもわらず。聞けや、其の君を君とし、其父母を父母とし、其の妻子兄弟姊妹朋友等を妻子兄弟姊妹朋友等として、之を敬し之を愛し、併せて天人萬有をも敬愛擁護せしめんが爲に||せしめて||相互に協同活躍し、各自本有の英靈成格を歩歩段段と改善進歩し、發達大成し、共に以て平和嘉樂の光と榮との大稜威を天照らしに天照らしつゝ、此世ながらの神國樂園を到處に建設し、後世子孫に||より多くの自由幸福平和嘉樂||を享受せしめつゝ、各國各人、一世界として、各有各界、一宇宙として、やがては、均しく、其の終局目的たる、根本大極の本体大本體に到達還元し、同化超樂せしめんとする者たるぞ。故に斷じて其國に背くべからず、其家に背くべからず、其君、其父母、其妻子兄弟姊妹朋友等に背くべからず、教義信條發顯の根本國たるの故を以て、窃に歡を我國に通ずることをも許さざるものなるぞ。

第三十六節 教條に發顯する我||教條に發顯する我とは、根本大極化したる我なり、本体大本體化したる我なり、根本大極たる本体大本體其的の天照發顯

したる我なるぞ。この我には、彼と此との別なき我を意味するものぞ、彼と此とを融會同化したるの我なるを意味するものぞ。而も猶我と云ふ者は、云はざるべからざる者は他なし、天人萬有に對して、その根本大極たるの我と云ふ意味ぞ、本體たるの我と云ふ意味なるぞ、更に亦現象としては、天人萬有中に於ける我としては、其の克く根本大極化し、本體大本體化して、天人萬有を代表し包含し攝理統一するの意味を發顯したるの我なれば、其の未だ信仰解釋實行の此に達するのと能はざる天人萬有に對して稱する、大なる我たるものぞ。

天人萬有を代表包含して、根本大極化し、本體大本體化したる我としての我は、寧ろ其の根本大極本體大本體其的としての大なる我なるが故に、天人萬有は、悉く之れ大なる我たる中の小なる我としての活躍現象なるぞ。而も是れ唯、大小の別こそあれ、それ亦同一活躍同一現象なるぞ、決して異類視すべきものでない。蓋し、現象たる天人萬有は、即ち根本本體の發顯にして、其の本體と現象とは、即ち、大極大本體其的の大稜威大天照なるぞ。されば、教條に於ける我と云ふ意味を極言表白すれば、曰く、本體と現象との一致したる大本體としての我なるぞ。萬有としても、天人

としても、悉く皆、萬有としての小なる我、天人としての小なる我を逸脱して、這般大體化したる大なる我たらざるべからざるものぞ。這般大本體化したる大なる我には、彼人此人、彼國此國と云ふ別はなきものぞ、只その彼國此國、彼人此人として認むる者は、天人萬有の各自が、各自としての大本體化しつゝ、ある過程範圍に應じて、其の過程範圍に於ける活動飛躍の彼國此國、彼人此人として認むるばかりぞ、同一なる人として、同一なる國としての活躍現象なりと認むるばかりなるぞ。換言すれば、其認むると云ふは、亦是れ、大極大本體其的の大天照大發顯が、本體として、現象として自から然るものにして、その大天照大發顯の更に大活動大飛躍する過程範圍を認めて、彼國此國、彼人此人とは云ふものなるぞ。而もその活躍過程に於ける範圍範圍を認めて、此國彼國、此人彼人と云ふものは、均しく之れ、天人萬有としての各自の英靈成格を、各自に改善進歩し、各自に發達大成せしめつゝ、その各自各自に、根本大極本體大本體化せしめんとする、根本大極本體大本體たる大活動大飛躍を意味するものなるぞや。この意味より外、彼此の差別はあるものでない。故に、各自の英靈成格を各自の英靈成格相應に全ふせしめずして、其の範圍過程の發

顯活躍を逆行せしめてまでも、其の君其父母其の妻子兄弟姊妹朋友等に背かしめても、其の戈を逆にし、其の恩を仇としても、我に同化せしめんとするものにあらず。奚ぞ矧んや、其の國Ⅱ各自が生國以外の國Ⅱに向て強て歸順同化せしめんとするものならんや。直言すれば、其の生國に背かしめて、我國に歸順同化せしめんとするものでは、斷じてない。其の國人としては、其の國と生死し、其國を擁護せざるべからざるものなるぞ。

**第二十七節 信仰と其國家の擁護**——若し夫れ我等と信仰を同ふする爲めに、其の君に背き、其の父母に背き、其の妻子兄弟姊妹朋友等を苦しむるものあらば、是れ我に背くものぞ、教條に於ける我に背くものぞ、大極大本體化したる我と云ふ我の大なる我に背くものなるぞ。夫れ、大極大本體化したる我と云ふ我の大なる我としての信仰解釋實行は、斷じて其君、其父母、其妻子兄弟姊妹朋友等に背くを許さざるものなるぞ。いかなる苛責をも忍容して、其の君父、其の妻子兄弟姊妹朋友等をば擁護感化すること、教條に於ける我と云ふ我の大なる我としての信仰解釋實行なれや。我の教條に歸依し、我と信仰解釋を同ふする者は必ずとも、其の

身、其の家、其の國家、其の世界、其の宇宙を擁護安養すべき實行のあるべきものなるぞ。是れ天人萬有とも、均しく皆現在の境遇を重じつゝ、その過程範圍に相應して進歩發達せざるべからざるものなればなり。其身其家其國を擁護扶掖するは、他なし、萬有の一たる人類として、其の現在の境遇を重じつゝ、その過程範圍に相應して、歩歩段段に進歩發達する所以のものなるぞ。蓋しそれ丈の道程を経過せずして、直に現在の境遇を逸越せんとするは、能ふべからざるものなるぞ。いかに發達進歩を欲すればとて、其の發達進歩には、歩歩段段の道程あるものぞ。「信仰」とは、實にその歩歩段段の道程に同化して、其的自然の現境を歩歩段段と發達進歩せしむべきものなるぞ。是れその信仰發顯の一象印として、現在各自の國家を擁護せねばならぬなり、猶現在の自己身を擁護せざるべからざると同一様なるぞ。

**第三十八節 信仰の自由と君父妻子の安養感化**——信仰は「自由」なり、各自の自由なり、何人も束縛箝制することは出來ない。其の信仰を實行する形體に向ては、よしや、束縛箝制することを得べしとするも、其證理悟入する精神は、いかに工夫計畫するとも、之を制伏防遏し得べきものでない。是れ其の「信仰の自由」

たる所以なるぞ。

其の「信仰」は、時に其の君父妻子とも同ふせざることをあるべきぞ。然れども、是れ直に其の君父妻子等に背きたるものとは云ふべからず、其の信仰の如何に依りては、最も苦裏の存する者なりとするぞ。そはその信仰の君父と異ふる時は、相互の心に於て、最も安せざる所なるぞ。然れども、いづれか、その一方の信仰にして超出する所あれば、超出せざるべからざるものなるを以て、必ずや、其の一方を啓發感化し、一方は必ず一方に歸順同化し來る者なれば、遂には會心釋意して、渙然同心一體となるものぞ、ならざるべからざるものなるぞ。抑も、信仰の發達は、其身の「進歩たる前兆」ぞよ、信仰の段段發達するは、是れ其段段と、根本本体化、大極大本體化するものにして、信仰已に「根本本体化、大極大本體化」しつゝ、あれば、其の身、其の言、其の行は、亦發發歩歩と、根本本体化、大極大本體化せざれば已まれぬものぞ。天人萬有は、相互に其の「根本本体化、大極大本體化」を求めつゝ、發顯活躍しつゝ、あるものなれば、誰れ彼れを待つゝの必要はない。一日證入すれば、一日向上せぬばならぬものぞ、一日開悟すれば、一日發達進歩するものなるぞ。是れ實に「根本大極本体大體自然の大

天照大活動」にして、天人萬有、自然の性なり、體なり、發顯飛躍なるぞ。亦それ何物か之を防遏することを得べきや。

蓋し天人萬有は、各自特有の成格あるありて、其成格の表顯たる精神と肉體との活動は自由なるぞ、各自特有の成格たる精神と肉體との、各自各自に、表顯活動することを得ればこそ、天人萬有の天人萬有たる成格光輝あるなれや。故に各自の信仰は、各自の欲する儘なりと雖、而も其の終局は一致せざるべからず、一致するものなれども、其の未だ一致せざるに當りては、一致せしむべき方法に依らずして、之を強制することは、是れ何人も能はざる所なるぞ。知れや、何人と雖も、其の方法によらずして、各自の特性に反し、各自の成格に反し、強制的に之を一致せしめて、自己の如くならしめ得べきものならず。是れその信仰の自由なる所以にして、自由ならざるべからざる所以ならずや。世に「信仰の自由」を主張するは、それ此に基くものぞ、其實「根本大極本体大體其的」の此くの如くに大發顯大天照「するものなるぞ。是れ其の信仰を異にすればとて、君父妻子等に背くと云ふ譯はない。各自相互に自由なる信仰の發顯に應じ、自由に信仰し、自由に活動して、一日も早く「一層多く發



達し、一層多く向上し、その君父妻子兄弟朋友等をも、更に一層多く一層高く發達  
向上せしめんとする愛情理致の表顯なるぞ、飛躍なるぞ。是れその君父妻子兄弟  
朋友等を憎惡して然るものではない、深く敬愛するよりして然るものなるぞ。そ  
れ其の信仰は、初めより君父妻子兄弟朋友等を敬愛するより起るものなりとせば、  
よしや、一時、その信仰を異にすればとて、何條、その家に仇し、其の國に仇し、其の世界、  
其の宇宙に仇すべけんや。益以て其の家を擁護し、其の國を擁護し、其の世界、其の  
宇宙を擁護して、其の君、其の父母、其の妻子兄弟姊妹朋友等を安養せざるべからざ  
る次第なるぞ、安養して、その君、其の父母、其の妻子兄弟姊妹朋友等を慰藉し感化し、自  
己としての信仰解釋實行に啓發同化せしめねばならぬものぞ。一に只、我が全身  
を傾注して擁護し安養し慰藉し感化すれば、其の君、其の父母、其の妻子兄弟姊妹朋  
友等は、必ずや教導せられ、啓發せられて、いつとはなしに、其の信仰解釋實行に歸順  
同化するものなるぞ。我は我と信仰を異にする者ほど之を感み之を救はざるべ  
からず、矧してや、其の君、其の父母、其の妻子兄弟姊妹朋友たる等に於てをや。

### 第三十九節

#### 信仰と恩愛

此の如くんば、我と信仰を同ふする甲國の同

志者は、よしや、一人なりとも、其の一人は必ず其の家庭、其の國家立脚の大本たる國  
民統一、家族統一に背くべからざるものぞ。されば、獨り其の體のみが法律上の臣  
民として服従するばかりでなく、全幅衷情より、其家、其國の臣子として之に歸順し  
居る心服とはなるものぞ。是れ實に我徒教條の、人生に處する常經なるぞ、是れ實  
に、同心同體の大經を、異心合體に、應用したる權道にして、其の、異心合體は、やがて、同  
心同體たらしめんとする前堤神呪なるぞよ。故に我と信仰を同ふすれば、するも  
のほど、益々以て人生を愛し、家庭を愛し、國家を愛し、世界を愛し、宇宙を愛し、其の君、  
其の父母、其の妻子兄弟姊妹朋友、乃至、同胞人類、天人萬有を擁護安養せざるべから  
ざることを自覺すべし、自覺せざるべからざる者なるぞ。

今夫れ君父妻子兄弟姊妹朋友等は、其の身と離るべからず、其身の君父妻子兄弟姊  
妹朋友等と合せざるべからざる同胞的關係あるは、云ふまでもなく、其君父妻子兄  
弟姊妹朋友、乃至、人類同胞、天人萬有の家とし、國とし、世界とし、宇宙とする所は、亦我  
が家とし、國とし、世界とし、宇宙として、均しく之れ其の身を安置し、其の心體を慰藉  
安泰ならしめつゝある樂園なるぞ。我を産みたる父母、我を守護したる君王とし

ての恩愛は如何にすべきぞ、我を助け我を慰はりたる妻子兄弟姉妹朋友乃至人類同胞、天人萬有の友誼は如何にすべきぞ。我としては、亦その父母君主を擁護して、其の恩愛に報ぜざるべからず、其の妻子兄弟姉妹朋友乃至人類同胞、天人萬有を擁護して、其の誼に酬ひざるべからず、擁護してその恩その愛に報じ、その情その誼に酬ゆるには、其全身を犠牲として之に貢献し、其家庭を擁護し、其國家を擁護し、其世界、其宇宙を擁護せざるべからざる所以のものぞや。父母なければ我なし、我として産れ出るを得ず、君王なければ世は亂れて秩序なし、我は發育することを得ず、妻子兄弟姉妹朋友乃至人類同胞、天人萬有なければ、我は孑孓として孤立し、世に立つこと能はざるものぞ。生れざるの我、發育せざるの我、世に立つこと能はざるの我、は、いかにして我の信仰を赫灼として、奮發すべきぞ、我の信仰赫灼として奮發するは、實に之れ父母之愛也、君王之恩也、妻子兄弟姉妹朋友乃至人類同胞、天人萬有之誼也、是れ允に「信仰」と「報恩」との併行表裏して一致せざるべからざる所以なるぞ。報本反始の已むべからざる所以なるぞ。

由來「信仰」とは、心の慰藉と體の安養とを求むるのみにあらず、而も自己の心體のみ

に、其慰藉、其安養を求むるばかりのものにもあらず。時には寧ろ自己の身體は、犠牲としても他に貢献して、他に慰藉安養を與ふるを以て尊しと爲すぞよ。されば自己一身のみを潔ふして、其の心體の慰藉安養を求めつゝ、君父を輕視し、君父に反抗するが如き言行あるべからず。若し夫れ自己一人、轉宗改説したるが爲めに、君父の信仰を輕蔑し、君父の意思に反抗し、子としての道、家族としての道、臣としての道、國民としての道を履行せず、其の家庭、其の國家に仇する如き言行あらば、是れ其の宗義學説は、未だ以て極致とするに足らず、全き宗教、宗義學説とは云はれぬものぞ。奚ぞ矧んや、我が宗義宗教乃至學説とする所に於てをや。我が學説宗義宗教とする所は、此の如きの言行動靜あるこそ、最も許容せざる所なれ。その改宗改説するは何故ぞ、是れ全く自己と君父妻子兄弟姉妹朋友等との慰藉安養を求めんとするにあるものぞ、而もいかんぞ轉宗改説の故を以て、自他を離隔し、君父妻子兄弟姉妹朋友等を苦痛ならしむべきものならんや。よしんば、我としては苦痛を感じずるとも、君父妻子兄弟姉妹朋友等に苦痛を感じしむべからざるものぞ。我の全身は、君父妻子兄弟姉妹朋友等の犠牲に貢献するとも、君父妻子兄弟姉妹朋友等をば、

八八  
私の信仰の犠牲とすべからず、是れ我としての信仰は、其の君父妻子兄弟姉妹朋友等を主として、之を慰藉し、之を安養し、之を救済し、之を攝理し、之を還元超樂せしめんとする信仰なればなるぞ。

第四十節 一人の心體致一と萬人の心體致一——一時、其の君其の父母、其の妻子兄弟姉妹朋友等と信仰を異にすると雖、其の信仰は、已に既に他に卓出超絶し、其行爲は自他を敬愛救済するより湧出したる者なれば、其の信仰の發顯實行する所は他と同じからず、その遙に卓出超絶する所あるを以て、卓出超絶せざるべからざる者なるを以て、個人としての成格、家庭としての成格、國家として世界としての成格を發顯活躍し、亦その克く家族、國民、人類乃至、天人萬有を擁護啓發しつつ、之を改善し、之を進歩し、之を發達するを以て、殆、鷄群一鶴の概あり、その信仰卓出したる者は、之を發顯活躍するに於て、必ずや然る者ぞ、然らざるを得ざる者ぞ。故にいつとはなしに、他をば推服感化せしむるものぞ。個人としても、家族としても、國民としても、人類としても、天人萬有としても、更に家庭國家世界宇宙としても、其の多數は、我が毅然凜然たる成格威嚴の劍の如く、霜の如く、紫電萬丈、乾坤を震動

し、其靄然熙然たる言行品酌の玉の如く、花の如く、溫容精彩、萬象を薫灼するそれの如く、自他を戒飭し、鞭撻し、訓陶し、啓發し、感化し、同化するを見つゝ、亦それいつとはなしに、私の信仰に歸依し、私の解釋實行に悦服するに至る者ぞ、歸依悦服せざるべからざるものなるぞ。それ而して君父も亦復、我を激賞し、我を嘉納し、自然と我が信條教義を信仰解釋實行し、我と信仰を同ふし、我と解釋を均ふし、我と實行を一にするに至るものぞ、至らざるべらざるものぞ。それ而して、後初めて君臣父子夫婦兄弟姉妹朋友同胞人類等の上下親疎、茲に相會して、心體釋然一致し、同心同體の慰藉安養を護得すると共に、益々以て是より更に其の根本大極たる本体大本體に向て、前進向上し、肉薄超入することの切なるものぞ。是れ、一人の心體致一は、やがて、萬人の心體致一とこそなりつるものたるぞ。

されば、一時、其の君父妻子兄弟姉妹朋友等と信仰を異にすることありとするも、大凡そ、信仰としては、いづれの信仰も、時時刻刻に、向上發達せざるべからず。故に先づ我が信仰を發達せしめて、其の君父妻子兄弟姉妹朋友等を發達せしめ、以て彼我同心一體の極致に到達せざるべからざるものなるに因るぞ。是れ最も苦衷の存

する所にして、必ずや、その苦衷を遂行し、同心一體の極致にこそ達せんとするものなるぞ、達せざるべからざるものなるぞ。世に「卓出したる信仰」としては、必ず這般の實行なくんば已むこと能はざるものぞ。是れ實に一人にて千萬人を救済する道心大道心、道行大道行なればなり。苟も信仰として信仰する以上は、必ずや、這般の大道心大道行なからざるべからざるものぞ、殊に卓出したる信仰解釋實行を以て自から任ずる神子天孫としての大丈夫大烈女たるに於てをや。その胸中の活火噴泉は、此の如く炎炎混混として、未來永劫止まるべからざるものなるぞ。

### 第拾貳章 平等差別の發展終結と、個人家庭

#### 國家世界の分裂、及、統一時代

平等のみにては活動せず、差別のみにては活動せず。平等のみの境あることなく、差別のみの境あることなし、平等なると共に差別なり。差別なると共に平等なり。平等の中に差別あり、差別の中に平等あり。蓋し平等なるは差別なる所以にして、差別たるは平等たらんとする所以なるぞ。而して平等たるも、差別たるも、均しく之れ活

動にして、同一の活動にして、一體が平等ともなり、差別ともなりて活動しつゝあるものぞ。故に天人萬有は、分裂して差別なると共に、亦統一して平等たらんとするものを統一して平等なると共に、亦復、分裂して差別たりつゝあるものぞ。究竟すれば、一體に歸するものぞ、千百萬體に開くものぞ、本來一體たるものぞ。千百萬體たるものぞ、大本體の天照、大天照、活動、大活動して平等たり差別たるものなるぞ。本體現象たりつゝあるものぞ。然り、本体となり、現象となり、現象となり、本体となりつゝある者ぞ。大本體としての全面は、半面本体となり、半面現象となりつゝある者ぞ。

第四十一節 平等差別の交叉と一致——道は多しと雖も兩途に出でず、兩途あるものは必ず一途に歸す。人生宇宙、天人萬有の差別態を有して、分分的個性を發顯活動するは、是れ直に平等性に復して、一體たらんとする自白なるぞ。その已に「差別」と云ふは、平等に對したる半面ぞ。平等なきものとせば、亦差別もあるべきものでない、その已に差別あるは、平等あることを自白したるものなるぞ。差別の半面なると共に、平等も、復、その半面なるぞ。差別に對したる半面なるぞ。彼此相待て「全面」をなすものたるぞ。

されば、已に差別なる者は、平等に歸せざるべからず、已に平等なる者は、差別たらざるべからず。寧ろ、平等なると共に、差別にして、差別なると共に、平等ならざるべからざるものぞ。故に天人萬有は、悉く平等性を有せざるものなく、差別態たらざるものなく、寧ろ、差別なると共に、平等なり、平等なると共に、差別たるものぞ。例へば人類と云へば、同一人類なり、平等なり。然れども、其の同一人類よ、個個としては、別別に、各自自分の特性成格を有して差別あり。是れ平等なると共に、差別あるものにあらずや。之を、平等中に差別ありとは云ふぞ。而して其の差別なる人類萬有は、個個別別に分立しつゝ、ありながら、個個分分に關聯して、抱合一致しつゝ、あるのみならず、其の抱合一致の實を擧げんが爲に、日日夜夜、時時刻刻、間斷なく相互に統一し相互に一體たらんとしつゝ、あるものぞ。是れ亦差別なると共に、平等なるものにあらずや、之を、差別中に平等ありとは云ふぞ。

夫れ已に平等なる天人萬有は、相互に、差別態を發顯し活躍しつゝ、ありと雖、其の差別を發顯活躍しつゝ、あるものは、是れ單に差別態を發顯するばかりではない、其實は平等性に復歸しつゝ、あるものぞ。換言すれば、差別態を發顯しつゝ、あるものは、

平等性たらんとする活躍なるぞ、天人萬有一切を我に統一し、我に化せんとする爲に活躍しつゝ、あるものぞ。その天人萬有一切を我に統一し、我に化し盡せば、是れ即ち平等に歸したるものなるぞ。猶その平等性たらんとするは、亦差別態たらんとする活躍なるが如し、平等性の活躍するは、差別態たるにあればなるぞ、平等性の活躍する活躍は、即ち差別態たりつゝ、あるものぞ。差別態を發顯すること態はざるの平等性は、亦平等たることも態はざればなり。

極言すれば、神は天人萬有を發顯し、發顯したるものは、更に復歸し、發顯復歸、復歸發顯、無始無終に、此の如く輪廻轉轉して究極する所なきものぞ。然れども、發顯したる後の天人萬有は、天人萬有にして、分身分體としての資格あるのみ、全き神としての威嚴活躍はなきものぞ。而も已に神に復歸したる後の天人萬有は、是れ神にして、亦天人萬有にあらず。全き神としての威嚴活躍を有するものぞ、是れ、神其的（まがまが）と化成立たる者なればなり。故に復歸したる後の天人萬有と、發顯したる後の天人萬有とは異れり、其の活動飛躍は、質として體としての活動飛躍と、量として用としての活動飛躍と、相互に異なるものぞ。復歸する時は、天人萬有として復歸する也。

神にあらざる也。發顯する時は、神として發顯する也、天人萬有にあらざる也。天人萬有とは、發顯して後の分質分量的名稱なるぞ。

是れ以て平等なる本体と、差別なる現象との相合して發顯し、相待て活動する所以と、本体现象、本來不二一體の者たる所以とを自覺すべきものなるぞ。本体现象、不二一體の者を稱じて大本體とは云ふぞ。(委細は十大日本世界天照太神宮、第五十棟、乃至第六十棟に辨彰す)

第四十二節 人類的分裂統一と其進歩——人類は萬有の一なり、萬有の一なる人類は、萬有たるの軌道を逸することは能はざるものぞ。萬有と共に分裂して、個個分分の成格を發顯活躍しつゝ、あると共に、亦その分裂したる差別態を相互に平等的に向て統一せんとしつゝ、ある者ぞ。個人としての統一を期し、家庭としての統一を期し、國家としての統一を期し、世界としての統一を期し、宇宙としての統一を期しつゝ、あるものぞ。其實は、本來統一しつゝ、あるものぞ、全然統一體なるものぞ。只、其の天人萬有としては、差別態に分立して、其の分立的表面のみを見て、未だその統一體の内容をば、知ること能はず。故に其身先づ統一體に向つて、漸漸同化せんとしつゝ、あるものなるぞ。されば、天人萬有としては、其一舉一止、悉

く之れ統一に向つて進行しつゝ、あらざるはなきものぞ。

個人として統一なきは、是れ發狂者なり、是れ白痴者なるぞ、其の思想、其の言語、其の行爲等の前後表裏に衝突矛盾して統一する所なければなり。統一なきの家庭は、家庭として獨立すること能はず。統一なきの國家は、國家として獨立すること能はず。統一なきの世界は、其の統一を期して已まざるものぞ。個人たる各自は、已に個人としての自我的自己を統一することを得つゝ、あるなり。家族としての家庭も、已に其の家庭を統一することを得て、各自にその秩序平和を保ちつゝ、あるなり。國家としての民族國民も、亦復、已にその國家を統一して、各自其の秩序平和を保ち得つゝ、あるものぞ。

然れども、獨り未だ世界としての統一はなき也。統一なき世界は、統一せられざれば已むべきものでない。世界を組織する細胞としての最要胞なる人類は、各自、已に既に個人としても、家庭としても、國家としても統一し得たと共に、更に進んで世界の統一を期しつゝ、あるものぞ。

第四十三節 個人統一の時代——原人時代は、未だ個人としての統一さへ

なかりしものぞ。其の思想、其の言語、其の行爲は、常に放埒散漫して、宛然、瘋癲白痴なる者と相去ること幾許もなく、寧ろ人類としての禽獸たりし者ぞ。而も其の漸漸と發達進歩するや、思想の言語行爲と、衝突矛盾する等に經驗して、先づ其の思想の整頓を期し、言語の整頓を期し、行爲の整頓を期し、散漫放埒を避け、衝突矛盾を厭ひ、主觀に反省し、客觀に實驗し、學理に、實賤に、あらゆる方面の歴史を爲し、習慣を爲し、更に之を應用參酌して、遂に克く個人としての成格、思想、言語、行爲、を整理統一することを得たるものぞ。已に自己を統一することを得たるの個人は、個人個人として、自己を主裁することを得るものなり、未だ明日の生死を必して主裁すること能はざるの不完全はありとするも、人類としての進退動靜、少くとも、人類たる個人としての自己をば、各自各自に、其の自己としての特性、成格、進退、舉止、其の思想、言語、行爲等を整理し、統一し、主裁することを得るには至れるものぞ。之れを個人統一の時代とは云ふ。

第四十四節 家庭統一の時代——個人統一の時代は、已に過ぎたり。而もその已に各自各自、相競ふて、個人としての自己を統一主裁することを得る迄に、進歩

したるの結果は、更に、個人の集合代表體として、家庭を組織し、家庭を統一せざれば、已まず、満足すること能はず、故に、亦産業に、勞働に、衝突に、調和に、道德に、宗教に、あらゆる主觀客觀の思慮、判斷、實驗等を應用して、家庭を組織し、家庭を整理し、家庭を統一し、家庭を主裁することを得たるものぞ。之を、家庭統一の時代とは云ふぞ。

第四十五節 國家統一の時代——家庭統一の時代は、過ぎたり。夫れ已に家庭を組織し、家庭を整理し、家庭を統一し、家庭を主裁することを得る迄に達したるの人類は、亦其の「自然の進歩」として、必然の結果として、其の「家庭集合の代表體」として、更に國家を建設し、國家を整理し、國家を統一し、國家を主裁するにあらざれば、已まず、満足すること能はざるものぞ。故に、亦産業に、經濟に、戰爭に、軍隊に、建築に、美術に、政治に、法律に、道德に、宗教に、ありとあらゆる主觀的客觀的の思慮、判斷、實驗を應用飛躍して、其の國家を建設し、整理し、統一し、主裁し得るに至れりき。「統一」と「主裁」とを有せざる「國家」は、國家として生存獨立すること能はざるものぞ。今日は實に國家としては建設し得たり、整理統一することをも得たるぞ。各自に建設統一したる國家、それ自身の主裁力を、各自に占有活躍する迄にも、發達したるものな

るぞ、進歩したるものなるぞ。列國の相對して獨立しつゝあること、尠からざるもの即ち是なり。是れ之を「國家統一の時代」とは云ふぞ。

九八

第四十六節 世界統一實驗實修の時代——國家統一の時代は漸く經過し去らんとしつゝあるなり。それ已に國家を整理し、國家を建設し、國家を統一し、國家を主裁し得たる人類は、自然の進歩、必然の結果として、亦復、世界を統一し、世界を主裁せざれば已まず満足せざるものぞ。然れども、未だ世界を統一し、世界を主裁する迄に、進歩せず、發達せず、然り、世界としての統一、世界としての主裁力は、未だ行はれざるものぞ、世界としての統一的主裁權は未だ施すこと能はざるぞや。然れども、已に個人としての統一を爲し、家庭としての統一を爲し、國家としての統一を爲したる人類は、亦、世界としての統一を爲さざれば、斷じて安心満足するものにあらざるが故に、國としては、列國相競ふて世界を統一せんとしつゝあるなり、家庭としても、相競ふて世界を統一し、個人としても、相競ふて世界を統一せんとしつゝある者ぞ。政治家は政治を以て、列國の政治を統一し、軍隊は威力を以て、列國の軍隊を統一せんとするが如く、經濟的誘掖、工業的扶殖、産業的貿易、美術的啓發、道德

的教訓、宗教的感化等を以て、世界の經濟、工業、産業、美術、道德、宗教等を統一せんとしつゝあるを見るぞ。然り、學理に實行にありとあらゆる、主觀的、客觀的、配慮實驗を以て、個人として、家庭として、國家として、世界統一を期しつゝあるはなきなり。是れ之を「世界統一實驗實修の時代」とは云ふぞ。今日は實に「世界統一の時代」に遷れり、世界統一を實驗實修しつゝある時代とはなれるなり。直言すれば、世界統一時代としての第一期なり初期なるぞ。

而も世界を統一して、其の主裁力を得んとするものは、世界を人格的に代表せんとする大主權者<sup>II</sup>は、健全なる國家としての腦力、細胞、成格。——健全なる家庭としての腦力、細胞、成格。——健全なる個人としての腦力、細胞、成格。——なかるべからず、是れ實に健全なる信仰と實行とを要する所以なるぞ。さなくては、統一せんとする自己<sup>其的</sup>的の主體たる統一すら能はざれば也、——家庭——國家——の統一すら能はぬに至ればなり。自己としての統一すらなきもの、いかにぞ家庭國家を統一するを得べきぞ、家庭國家の統一すら能はざるもの、いかにぞ世界を統一するを得べきや。故に「自己としての個人的成格」を統一するには、健全なる信仰と實行とのな



きを得ざる所以ぞよ。蓋し健全なる信仰と實行とを以て、其の思想、言語、行爲、を整理して統一する者は、是れ個人として、其の成格に統一あり、威嚴あり、品酌ある者ぞ。個人としての成格に統一あり、威嚴あり、品酌あるものは、是れ家庭としての家族を統一することを得るの成格あり、威嚴あり、品酌あるものぞ。家庭としての家族を統一することを得るの成格あり、威嚴あり、品酌あるものは、亦以て、國家を統一することを得るの成格あり、威嚴あり、品酌あるものぞ。家庭は、腕力を以てのみ統一すべからざるが如く、國家は、武力のみを以て統一し得べきものでない、家庭國家の腕力武力を以て統一すべからざるが如く、世界も亦、復、兵馬銃劍のみを以て統一することを得べきものならぬぞ。更に政治、經濟、法律、財政の優勢を要するぞ、倫理、道德の訓練、感化を要し、美術、文學の誘導、啓發を要するぞ、科學、究明の新知識を要し、純正哲學の最高規約を要するぞ、地理、氣象、天體等の運動變化をも參考とせざるべからざるぞ、人情、風俗、歴史、逸話等に至る迄、其の活動、飛躍には、悉く關係を有する者なるぞ。茲に、今を逐一枚擧するには、遑なし、主觀に、客觀に、ありとあらゆる思慮、判斷と實際、實履とを要するぞ、特に、信仰を以て、最もその動脈、主腦と爲し、その總ての整理を施

しつゝ、循々として統一せざるべからざるものなるぞ。「人生は複雑なり、單純のものならず、武力、腕力のみの世界にあらざり、科學、究明のみの世界にあらざり、財政、經濟のみの世界にあらざり、文學、美術のみの世界にあらざり、倫理、道德のみの世界にあらざり、純正哲學のみの世界にあらざり、宗教、宗義のみの世界にあらざり、勿論、政治、法律のみの世界にもあらぬぞや。道德は如何に高尚なりと雖、朝夕之のみを談論して、生活し得らるべきものでない、織らずんば、縫はずんば、寒熱を防ぐ能はず。耕さずんば、作らずんば、これその饑餓を如何せんや。朝夕、道德のみ談ずれば、滿腹するものと思ふべからず。宗教、宗義のいかに崇高、幽玄なりと雖、宗教、宗義のみ信仰すれば、食は求めずして、到り、衣は欲せずして、來ると云ふものにあらざり、奚ぞ、矧んや、其の他に於てをや。「人生は複雑なり、單純の者にあらざり、其の一事のみを以て統一せんとするも、蓋し、不可能の事なるぞ。萬事、萬端、調理、整頓して、茲に初めて、其の統一は、企て得らるべきものぞ。人生は複雑なり、單純のものにあらざり、人生社會は、總ての調和、整理するにあらざり、世界としての統一は、卒に實行すること能はざる者なるぞ。然るに、奇怪なるかな、世の人人よ。その一事のみを以て、世界を統一せんとす。而

もその武力は餘りあるも、財力足らず、財力餘りあるも武力足らず、武力財力ありとすれば、未だ以て學問の究明足らず、學問の究明ありとすれば、道德信仰足らず、道德信仰ありとすれば、武力財力足らじな。かくては、決して世界を整理し、世界を統一し得べきものならず。是れ猶個人として才辯あるも、知識學問なく、知識學問あるも、經驗乏しく、經驗あるも財力なく、財力あれば、德行なしとか等にて、他に模範たるの成格を具足せず、是れ猶個人として、その思想、言語、行爲の、前後に矛盾し、表裏に衝突して、其の成格を整理統一すること能はざると一般なるぞ。さりとは、いかにぞ他を整理統一するを得ん、亦いかにぞ他の歸順悦服すべきや、此の如くんば、個人としても、家庭としても、國家としても、世界の統一は斷じて能はざるぞよ。

然れども、差別態を有するの事事物物は、同時に平等性を有するか故に、個人として、其の知識あるものは、知識のみを以て自己の成格品節を統一せんとするのみならず、其の知識にて、更に妻子兄弟姉妹、朋友等をも統一せんとし、感情に深き者は、其の感情のみを以て、自己をも他をも統一せんとし、學問あるものは、其の長ずる所の學理を以て、藝術あるものは、其の長ずる所の藝術を以て、各自各自に、自己の成格品節を

統一し、更に他の父母妻子兄弟姉妹朋友等を統一せんとするが如く。「國家」としては、「國民」としては、兵馬に長ずるの國家國民は、其の兵馬を以て、列國を統一して一世界たらしめんとし、經濟財力に富むの國家國民は、其の經濟財力を以て、列國を統一して一世界たらしめんとし、工藝に長ずるの國家國民は、其の工藝を以て、列國を推服し世界を統一せんとし、學理に長ずるの國家國民は、其の長ずる所の學理を以て、列國を推服して、世界を統一せんとし、宗教信條に長ずるの國家國民は、其の長ずる所の宗義信條を以て、列國を推服して、世界を統一せんとするものなるぞ。現在、悉く個人としても、家庭としても、國家としても、各自は各自の長所を以て、此の如く列國を推倒し世界を統一せんと企てつゝ、あらぬはなきものぞ。只その之を公然と言語文字に自白して、列國を驚動し、其の嫉妬を受くるが如き愚を爲さざるばかりぞ。是れ蓋し各人各國とも、その胸底に秘藏しつゝ、ある密事なれども、是れ公然の秘密にして、よしや、未だその自白するの愚をなすものは、少しとするも、英雄英雄を知るで、その秘事をば、相互に承知しつゝ、あるものぞ。然れども、人生は複雑なり、單純にあらず、一の長所のみを以ては、列國を推服し、世界を統一し得べき者でない。

總てを整理調和したる象力。政治、經濟、法律、軍隊、工藝、美術、文學、歷史、地理、人情、風俗、倫理、道德、哲學、宗教等の總てを整理調和し得る衆力衆德を以てするにあらずんば、決して列國を推倒し、世界を統一し得べきものならず。人生は複雑なり、單純なるものにあらず、其の生活に必要な總ての方面を整理調和し、總ての方面の活動飛躍を進歩發達せしめつゝ、誘導啓發する丈の大威力大衆力を有して、更に之を實地に實行實施しつゝ、毅然、列國を推倒し、凜然、列國を感化するに足ると共に、列國の欣欣然として歸順悅服し來るにあらずんば、世界は統一し得べきものならぬぞ。列國は是迄、古に今に、東に西に幾度か「世界統一」を企てつゝ、幾度か蹉跌失敗したるものぞ。兵馬に於ても、財力に於ても、生産力に於ても、貿易、工業、藝術に於ても、文學に於ても、歴史に於ても、學理に於ても、信仰に於ても、幾度かその百千萬億の經驗を積みつゝ、各自に其の蹉跌を反省し、其の失敗を改善して已まず、相互に以て他に先づる所あらんとしつゝ、あるものたるぞ。かくて、亦、其の間に於てこそ、列國相互の兵力、財力、學力、工藝力、美術力、道德力、信仰力、實行力等は、漸漸次第に進歩發達し、遂に卒に其の最も克く信仰と實行とを有して、更に此の如き自他内外百千般の衆力衆

德を整理調和し得たるの國民國家は、茲に初めて列國を推倒し統一して一世界たらしむることを得るものぞ。然れども、是れ猶、遠き未來の事に屬するぞや。

第四十七節 世界統一の時代、及、統一と混同との差別——統一とは、混同にあらず、平等にもあらず。形式こそ異れ、形式としての着色こそ變ずれ、世界は、いかに統一せらるゝとも、列國としての形式は、依然として存するものぞ、勿論、その内容の意味は同じからず、外容の着色も變ずるなり。然れども、その列國としての形式は、依然存するものぞ、猶、封建時代に於ける覇者王者の如く、世界を人格的に代表し、「世界唯一の大主權者」として大君臨するなり、世界は唯一大主權者として、その一人を奉戴し、列國は推服し、世界は統一することを得べきぞ。然れども、その如何に統一せらるゝも、寒帶國と暖帶國とは、同等ならしむるを得ず、さりとて、其の言語風俗を同等ならしむること能はず、従つて法律規則等も一様なること能はず、各自の自治に一任して、各自の言語風俗に適應せしめざるべからざるものぞ。奚ぞ矧んや人間の知識情感、意思等の發顯活動には、高低深淺あり、明暗賢愚あり、是れ亦如何なる大主權者の出るとも、神智神德の太大主權者出るとも、斷じて平等の人

間たらしむることは能はぬものぞ。若し夫れ平等の人間たらしむることを得るものとせば、彼等の性格は同等一様にして、亦その言語さへ發するの必要なきと共に、多人數の性格あるを要せず、同等一様の性格なれば、一人にして足ればなり。一人なりとせば、亦何の主權者大主權者を要すべきぞ。夫れ已に寒暖氣象を平等ならしむること能はず、人間の性格たる智情意の發動をも平等ならしむること能はずとせば、其の言語、經驗、風俗、人情等には、文野高卑の別なきこと能はず。されば、「統一」とは「混同」にあらず、平等にもあらず、此等の差別ある者を整理し調和し統一するの意味なるぞ。只その差別的列國の中心的主腦的大主權者として、その列國的差別の矛盾衝突を整理し調和して秩序的平和的に統一せんとする者なるぞ。

人間理想の進歩すると共に、實行も發達し、所謂黄金時代の到來するとするも、如何なる黄金時代、千福年の到来するにもせよ、漸じて「無政府」の時代はあり得べきものならず、平等の人格風采、平等の寒暖氣候、平等の山河地味たらしむること能はざればなり。已に説明したるが如く、人間の成格權能を平等ならしむることを得

るものとせば、是れ其の思量言語、行爲は、同一ならざるべからず、人人にして其の思量、其の言語、其の行爲等の同一平等なるものとせば、亦その思量言語を發するの必要もない、寧ろ多人數を要せず、一人にして足れり、一人にして足るものとせば、亦何をか思慮し、何をか言語し、何をか行動するの必要あるべきや。故に世界人類は、いかに進歩發達するとしても、其の「生活的社會狀態」としては、形式を變ずるまでにして、形式的着色を變ずる迄にして、今日現在の列國は、幾度か加減乗除し、幾度か盛衰興亡するとも、列國的行政區域は、依然として變せず、唯その「新形式新着色」を以て出陣し、各自の地域地域を代表するに過ぎざるものぞ。例へば「封建制度」の變じて「郡縣制度」と爲るが如く、着色の變ずる迄にして、依然「行政區域」の形式は、其の地方地方を代表するものぞ。「世界統一」とは「此の地方的代表機關たる列國を整理統治するものなるぞ。」いかに「黄金時代」に進歩發達するとも、「無政府時代」は斷じてなきものぞ。「無政府」とは「無秩序」を意味す。「無秩序」とは、紀律なき混亂なり、紛擾なり、野蠻なり、是れ如何ぞ黄金時代と尊稱すべきものならんや。寧ろその「反面の暗黒時代」なるぞ。進歩どころか、人類墮落の極底ぞよ。

今夫れ「統一」とは、混同にあらざ、平等にあらざ、差別を秩序的に整理統一したるものなりとせば、其の整理調和を誤りたる時は、是れ其の統一を失ふたるものぞ。さりとは「統一」は忽地變じて「分裂」となるぞや。然則、已に「統一」と云ふ時は、又「分裂」をも意味するなり、已に「分裂」と云ふ時は亦「統一」をも意味するものぞ。そはその分裂あるが故に統一あるなり、統一あるが故に亦分裂するものぞ。統一は「分裂の半面」にして、分裂は「統一の半面」なるぞ、統一の中に分裂を含み、分裂の中に統一を有す、否、分裂と統一との二物あるにもあらざ、統一したるものが直に分裂し、分裂したるものが亦直に統一するに過ぎざるものぞ。故に統一したるものは、自然と分裂し、分裂したるものは、亦自然と統一するものぞ。されば、世界を統一するものあれば、亦分裂するものあるを忘るべからざると共に、分裂するものあれば、亦之を統一する者あるを知らざるべからざるものぞ。例へば、甲の國ありて「世界統一」を實現することを得るの日は、乙の國ありて、亦已に「世界分裂」を企てつゝあるの時なるぞ。乙の國にして「世界分裂」を實行し得たるの日は、丙の國ありて、已に其の統一を企てつゝあるの時なるぞ。甲國の統一したる世界は、いついつ迄も、甲國より統一し得るもの

と思はゞ、併事なるぞ、甲國の統一は、その情力自然に衰微して、いつとはなしに分裂し、更に乙國の代りて之を統一し、乙國の統一も自然に分裂して、亦復、更に丙國代りて之を統一するが如く、丁戊庚申辛癸、それいづれの國と雖、その「實力實權」を有し來るものは、必ずや、進取統一せざれば已まず、然らざるものは必ずや退嬰分裂し畢んぬ。是れ之を「世界統一の時代」とは云ふぞや。抑も是れ「一國統一の時代」が變じて「世界統一の時代」となりたるに過ぎざるものぞ。猶「家庭統一の時代」が變じて「國家統一の時代」と爲りたる如きものぞ。

#### 第四十八節 時代變遷の歲月と統一の終局、及、地球體の進歩發

達——「個人統一時代」は、百千萬年の歲月を要したるものぞ。「家庭統一時代」も百千萬年の歲月を要したるものぞ。「國家統一時代」も亦百千萬年の歲月を要したるなり。蓋し人類發生以來二十五萬年餘の經過ありとするも、その史的記録を有するは、三千年乃至五千年以前に過ぎざるを以て、その委細は詳かにすること能はず。則ち委細は詳かにすること能はざれども、天地萬有、特に人類的生活に必要な四圍の現象に對して、其のあらゆる現象の經過と發達とに徴して、人類發生の幾十百

千萬年に達しつゝあることゝ、その社會的進歩の時代と歲月とは攻證するに足るものぞ。かく個人統一、家庭統一、國家統一に要したる各百千萬年の間に於て、その社會的活動は、各自分分に進歩發達しつゝ、漸漸次第に、個人を統一し、家庭を統一し、國家を統一し得たる者なるぞ。されば、世界統一の時代に遷りても、更に亦幾百千萬年の歲月を要する者なるぞ。その幾百千萬年の歲月を要する間には、その社會的情態と共に、世界は益々發達進歩して、世界の完全に統一せらるゝと共に、其の交通の道も、亦獨り此の世界にのみ止むるべくもあらず、遠く水星、木星、火星界等にも交通するを得るに至るものぞ。而して更に群世界との競争と統一との起り來るぞや。恰も是れ各自各國、其の一國のみの分裂と統一とに、百千萬年間競争したる列國は、其の間の發達と進歩とを以て、いつとはなしに、交通の便は、發達進歩して、世界交通の時代となりたり、世界交通の時代となりては、殆んど井底より飛出したる蛙の如く、今更ら既往を廻顧して、慚愧に堪えず、亦その各國各自に、國內分裂の非なるを知ると共に、他列國と對峙する權衡上よりして、國內分裂の遠なきが如きものぞ。是れ之を一太陽系統一の時代とは云ふぞ。

抑も往時列國の均しく分裂して、其一國のみの統一に於て、各自王霸を争ふ時には、誰か亦火船、鐵道、電氣、光力等の運轉機關、發達して、今日、世界交通の時代あるべしと思はんや。今日、群世界との交通は、殆んど夢にも及ぶべからず、之を云ふは一の空想妄念に過ぎず、稗史、小説の脚色たるに過ぎざるが如きも、世人はその實顯するの難きを慮りて、殆ど一場の夢想視する觀あれども、是れ斷じて然らず、必ずや、此の如き實境の實顯するものなるぞ。今日に於ては、その現在の實境に遠かることの餘りに懸隔あるを以て、之を夢想視するは、猶往時各國共に推理して、この世界の廣大なるをば、知り得たりと雖、到底、其の交通は及ぶべからざる者と妄斷したると一般なるぞ。然ども、社會的生活狀態は、彌々益々進歩發達して、彌々益々交通の便を開拓し、千億萬里の交路も、必ずや歲月の間に收縮することを得べし、得ざれば已まざるものなるぞ。是れ猶、往時は、不可能と斷じたる航路山道も、今は火力電力を以て、一歲月をも要せずして、世界を一週するを得るに及べると一般なるべきぞ。而して此の、太陽系相互の交通、競争、分裂、統一には、復幾千萬年の歲月を要すべし。それ而して後、亦復、更に、他の太陽系と交通し、競争し、分裂統一するの時代に遷るも

のぞ。此の如くにして轉轉已む時なく、遂に卒に大宇宙を統一せざれば満足せざるものぞ。是れ實に統一としての大終局なるぞ。

今夫れ人類の進歩、其の生活的社會的發達は、個人を統一するに始まりて、宇宙を統一するに終る、是れ蓋し人類を主として其の發顯活動を説明したるものぞ。抑も、人類の進歩とは、即ち地球の進歩なり、地球を主として云へば、地球の進歩するが故に、人類等の地球に生息するものは、次第次第に進歩しつゝあるものぞ。地球進歩せずんば、地盤堅固ならず、氣象調和せず、四圍の群星と、遠近的距離の平均等を保有すること能はぬものぞ。さすれば、火脈は常に激動して、地盤は常に破裂し、海潮時時に變化し、氣象時時に惑亂し、風雨電雷已む時なく、寧ろ、火風刀雨の災害は絶えざるべく、惡疫兇疢、頻りに流行し、庶物は殆ど生息すること能はざらんとす。人類のみ、獨り之に抵抗して生息し發達することを得べけんや、是れ地球の漸漸と發達し、調和し統一しつゝあるが故に、人類の次第次第と進歩し發達し、調和統一することを得る所以にわらずや。換言すれば、人類の進歩とは、家庭の進歩なり、而も家庭を主として云へば、家庭進歩するが故に、人類進歩す、家庭紊亂すれば、人類は進歩するこ

と能はず。猶、人類の進歩とは、國家の進歩なり、而も國家を主として云へば、國家進歩するが故に、人類進歩するなり、國家紊亂すれば、人類は進歩すること能はざるものぞ。されば、國家と人類との二物あるかと云ふに、然らず、家庭と人類との二物あるかと云ふに、然らず、人類として、家族的生活を爲せば、其家族的生活態を代表したる者が、家庭なり、故に個人としての人類と、人類としての家庭とは、二物にわらず、別物にわらず、一物なるぞ。人類として、國民的生活を爲せば、其國民的生活狀態を代表したる者が、國家なり。故に民族國民としての人類と、人類としての國家とは、二物にわらず、別物にわらず、一物なるぞ。然れば、個人として有機體なるが如く、家庭としても有機體なり、國家としても有機體なり、均しく之れ、人類としての代表體なればなるぞ。豈に唯だ家庭國家の有機體たるのみならずや、地球も復亦、有機體なるぞ、あらゆる星界は、悉く有機體なり、究竟して、大宇宙は大有機體なるぞ。地球は、地球としての有機的大活體を以つて、時時刻刻に發達進歩しつゝあるものぞ。ありとあらゆる群星と競争しつゝあるものぞ、地球に密着しつゝある者は、其細胞として悉く地球體を組織しつゝあるものぞ。人類の如きは均しく其の細胞

の一にして、殆んど主腦的ニ少くとも五官的活動をニ爲しつゝあるもの乎。何となれば、人類にして淫逸的、驕奢的に、惑亂腐敗すれば、其の精神と共に、肉體も萎靡衰弱し、亦以て敢爲的、膨脹的に、活動飛躍すること能はず、子孫は繁殖せず、事業も發達せず、四圍は茫然漠漠として、荒原に化し、淫雨到り、旱魃續き、草木横生し、動物蕃殖し、氣象度を異にして、海湖驚き、地脈變動して、火脈怒り、地球としての生命は、次第次第に減縮し、殆ど、切火洞然の死期に迫りて、懷亂すべきぞ。之に反し、人類が正直公明に精進勤勉して、精神の慰藉と共に、肉體の安康を期し、その社會的協同生活を、より多く、日に夜に時時刻刻に、發達進歩せしむれば、せしめて、神たるの個人、神たるの家庭、神たるの國家、神たるの世界と化成すれば、其の生活の平穩なるにつれて、四圍の庶物も調和せられ、改善せられ、氣象等も、亦自ら平調に期し、地脈も順に、火脈も靜に、亦以て風雨電雷等の劇變もなく、地球としての生命は、次第次第に延長するものぞ、延長すると共に、他の群星界と競争して、其統一を達し得るに至るものぞ。人生と氣象とは、何等の關係なきが如きも、其實、朝夕を始として、其の生活状態に非常なる關係あると共に、人類の一舉一動は、亦克く氣象に關係して、其の影響を及ぼすもの

尠からざることを忘るべからざるぞ。地球としての有機體は、地球としての自己成格の發達よりして、人類を始め、總ての庶物を、自己成格の發達に順應せしめて、進歩せしめつゝあるものたるぞ。故に地球を構成する細胞としての庶物は、特に人類の如きは、亦その人類としての自己成格の發達と共に、地球の進歩に注意せざるべからず、地球は地球として、宇宙統一に向ひつゝあるなり、人類は人類として、宇宙統一に向ひつゝあるなり、寧ろニ人類と地球とはニ協同的に宇宙を統一せんとしつゝあるものぞ、否、協同一致的に一體不二として、不二一體たる大國魂命（おほくにたまのみこと）として、國常立命（とこたちのみこと）として、群星界を統一し、大宇宙を大統一せんとしつゝあるものぞ、あらざるべからざるものなるぞ。人體の細胞は、總て蟲也、英靈也、而もその分分の蟲、分分の英靈は、人體としての全成格を全知すると能はざるが如く、地球としての細胞の一たる人類は、その地球に對しては、均しく一分の細胞にして、一分の蟲にして、一分の英靈にして、未だ以て地球としての國常立命の全成格を全知すること能はざるものぞ、まして、他の群星界と競争しつゝある大英靈的行動に於てをや。然れども、この地球の漸漸次第と進歩發達するとともに、人類を始として、動、植、礦物



及、山河氣象等も亦復、一切發達進歩し殆ど今日の現象を一變するものぞ。亦今日の如き人類にはあらず、其心體と全身的成格とは、更に高等なる活動飛躍あるものと知れや。さりとは今日の人類動植礦物乃至山河氣象等は、遂に卒に、その跡を生宇宙に存せざるかと云ふに然らず。此の地球の進歩すると共に、他の星球は發達して、亦この地球體と同様の者こそ出顯し來り、それなる地球體に於て、猶今日の如き人類、動植、礦物乃至山河氣象等の生息し發達しつゝあるに至るものなるぞ。而して亦この現在、吾人人類の生息する地球體にして、怠歩すれば、自然に衰弱自滅しつゝ、他の劣等なる星球の如きものに變性するものなるぞ。此の地球に進退興廢あるが如く、亦復、他の群星球も均しく進退興廢しつゝあるものぞ。吾人人類の如きは、現在地球體に於ける細胞の一として、最も隨一の細胞にして殆んど、五官腦髓とも云ふべきものなれば、吾人人類の向上向下は、最も此の現在する地球體の發達に影響し、其の進歩退歩を促すの大動脈たるものぞ。切言すれば、其の念念の善惡、眞偽、美醜等は、直ちに地球體の進退に大影響する者なるぞ。奚んぞ矧んや、その言言行行の大なるものに於てをや。故に某が唱道する道德律の如

きものは、最も嚴格なるものに歸着すると知れ。（委細）は、大日本世界、天照太神、宮、第二十種、二十七八

棟に辨

#### 第四十九節 世界統一と信仰統一——太陽系統一——

是れ遠き未來に屬するものぞ、そは我等が子孫たる者の責任ぞよ。今の我等が務むべき責任は、世界統一としての實驗實修なるぞ。その統一としては、統一の實驗實修としては、先づ以て「信仰の統一」を主とせざるべからざるものぞ。蓋し人生宇宙萬事萬物、信仰なきはなし、一切科學も、悉く「信仰」より成立活躍するぞ、且その信仰に相當したる「制裁」もあり。然れども、宗義的信仰は、信仰中の信仰なり、根本信仰なり、故にその「根本的信仰」としてに相當するの「制裁」は、之を「科學的信仰の制裁」に比較し來れば、其威力たる、更に嚴肅にして強大なり、是れ其の信仰する所の「主體如何」によりて、其の制裁威嚴に強弱大小なきことを得ざればなり。例へば、原原子としての「制裁」と、原理として「制裁」と、狐としての「狸」としての「制裁」と、虎としての「豺狼」としての「制裁」と、小兒としての「制裁」と、大人としての「制裁」と、更に神としての「制裁」は、其主體を異にするなり。均しく之れ「制裁」ありとするも、其の威嚴には強弱大小あること怪むには足ら

ぬぞよ。「宗義的信仰」は「根本信仰」なり、「信仰中の信仰」なり、故に其制裁として、更に「他に超絶するの威嚴」ある所以なるぞ。光を根本として、割り出したる人生宇宙よりも、物質を主として、割り出したる人生宇宙よりも、勢力又は理性を主として、割り出したる人生宇宙よりも、神を主として、割り出したる人生宇宙は、その威力として、天照發顯に千百倍の制裁あり、活動飛躍あるものぞや。そのいづれにせよ、先づ以て根本信仰を一定せざるべからず、信仰中の信仰たる根本信仰の一定して、而して後に、一念一思、一言一行、千事萬事、千端萬端は、割り出さるるものぞ。個人的統一、家庭的統一、國家的統一、世界的統一、宇宙的統一、も實に根本信仰の統一に範を采りてこそ活動統一するものなれば也。是れ先づ根本信仰の統一を期せざるべからざる所以なるぞ。

且夫れ「統一」とは、他の分裂を整理するものなれば、勿論、競争なり、大競争なり。均しく之れ競争なり、大競争なれども、信仰的競争、大競争は、他の競争、大競争とは異にして、人生宇宙の平和嘉樂を目的とするものなれば、經濟的競争、政治的競争の如く私する所なきを得ざるものなし、勿論、政治も經濟も、渾て皆平和嘉樂を目的とするも

のなれども、其の間、自から私する所なきを得ざるは、其の國、其の家の立脚上、蓋し止むを得ざるものありて存すればなるぞ。獨り、宗教的信仰の統一として、人生的社會的活動飛躍として、最も公明正大にして、個人、家庭、世界、そのいづれの處に向つても、自由に提唱し、自在に實行することを得るものぞ、何人も何國も、之に向つて不平不満を訴ふることを得ず、訴て無理無體に之を強壓防止せんとするを得ず。もし夫れ不平不満のあれば、正堂堂之に對抗して、その信仰より、その實行より、之を攻撃退治すべきものぞ、然らずして、政治的手段より、干戈的強壓をかへんとすれば、却つて劣敗者の位置にこそ失墜するものなれや。信仰的競争、信仰中の信仰、根本的信仰發顯の競争、大競争は、人生的社會的活動飛躍として、最も公明なり、正大なり、世界列國、何處にても、自由自在に發顯實行することを得るものぞ、他の經濟的競争、政治的競争等の如く、法律的強壓、干戈的強壓を施し來ること能はず、施し來れば來る者、却つて必ず劣敗者の位置に失墜するぞよ。信仰的競争、根本的信仰たる其の發顯實行の競争、大競争は、人生的社會的活動飛躍としては、最も公明なり、正大なり、世界列國、その何處に向つても、自由自在に發顯實行することを得るなり。

是れ先づ「根本的信仰の統一」を期すべき所以なるぞ。

第五十節 根本信仰の統一と各自の宗義學說との關係分際——統一とは整理にして混同混一にあらず。故に「信仰の統一」とは、各自の宗義學說を混同混一するものと誤認すべからず、各自の宗義とし、學說とする處の分際を究明して、其の大小、深淺、高低、厚薄、等の分際相應に、之を寛容し、各自の分際と分際との關係を明確にし、明確にすると共に、更に其の關係と關係とを整理し、裁斷し、調和し、總括することを得れば、是れ「精神的學說的に於ける信仰の統一」なるぞ。必ずしも、各自の宗義學說とする所を退治放逐して、悉く一紀一樣たらしめざるべからざるの必要なし、悉く一紀一樣たらしめんとするは、是れ一物たらしめんとするものぞ、一物たらしめ得るものとせば、亦何をか整理し統一するの必要あるべきや。故に「統一」とは「信仰統一」とは、各自が宗義とし、學說とする所の分際を究明して、其の分際と分際との關係を明確に整理し、整理すると共に、更に調和統一し、調和統一すると共に、より雄大宏壯にして、より崇高幽玄なる大動機大生命を灌頂し、より雄大宏壯に、より崇

高幽玄に、活動大活動、飛躍大飛躍せしめんとするにあるものぞ、然り、最も卓出超絶したる信仰的發顯實行より、一切の宗義學說を究明して、之を整理し、之を截斷し、之を調和し、之を統一し、更に雄大宏壯なる大動機、崇高幽玄なる大生命を灌頂すれば、他は如何に反抗反撥せんとするも能はず、よしや反抗反撥するとも、其の反抗反撥は、亦是れ灌頂せられたる新動機新生命の活動飛躍なるぞ。然れば、其の反抗反撥も、亦それ自然に消磨し去りて、到頭、統一の信仰の發顯實行に復歸せざるを得ざるに至るものぞ。以上は是れ「精神的、學說的、信仰統一」の現象終結なるものぞ。然れども、宗義學說の「學說的」に統一せられ、「精神的」に歸順せざるべからざるのみならず、亦その「肉體的、實行的」にも統一せられ、歸順せざるべからざるに至るものぞ。さてその「肉體的、實行的」に於ても、「精神的、信仰」を發顯し、實行しつゝ、他の宗義學說の實行發顯を寛容し、寛容すると共に、之を教導し、之を訓戒して、より雄大宏壯なる大動機より幽玄崇高なる大生命を灌頂せしめつゝあるときは、他はいかに反抗反撥して首肯降伏せずと雖、それ然れども、その反抗反撥するさへ、灌頂刺戟せられたる結果にして、到頭、感化せられ、徹底、同化するに至るものぞ。是れ之を「肉體的、信仰の統一」

とは云ふなるぞ。

第五十一節 心體致一の發顯實行と宗教及科學の合體——夫れ「信仰統一」は、心的學究の統一にて、未だ以て足れりとせず、體的實行の統一ならざるべからず、寧ろ精神的にも、肉體的にも、心體致一の統一たらざるべからざるものぞ。「心體致一の統一」とは、心の信仰を體に發顯實行すると共に、その前後左右に於ける四圍の事物に應用して、其の哲學的、科學的、發達進歩をも期せねばならぬものぞ。左なくては、其信仰は内、獨り心にのみ熱する迄にして、外、體に發顯すること能はず、却つて四圍の哲學的、科學的、事物に壓迫せられ、内心の慰藉さへ得ること能はざるに至るぞよ。故に信仰の向上すれば、之を外に發顯して、四圍の事物をも、其の信仰に同化しつゝ、内外一致的に向上せしめねばならぬものぞ。換言すれば、其信仰を體に發顯し、個人に發顯し、家庭に發顯し、國家に發顯し、世界に發顯し、宇宙に發顯せざるべからず、發顯すると共に、亦その一切四圍の事物を究明しつゝ、其の信仰に同化し、更に之が發達進歩を促がさるべからざるものぞ。蓋し宗教と科學とは背戻するものならず、宗教と科學とは、||合體すべきものぞ||本來、一致合體

しつゝあるものぞ。宗教に一致せざる科學は、如何なる科學にせよ、未だ「全き科學」にあらず、科學に衝突する宗義は、如何なる宗義なりとも、未だ「全き宗義」にあらず、宗教にあらずるぞ。宗教と科學とは、別物にあらず、合體すべきものなり本來、一體なるものなるぞ。他なし、信仰の發顯したる者が、科學なるぞ、科學の發顯したる者は、信仰なるぞ。いかに信仰なりと雖、之を體に發顯せず、四圍の事物をも究明發達せざる時は、却つて四圍の事物に壓伏せられて、其の信仰すら發顯すること能はざるに至るぞよ。此の如きは、未だ全き信仰にあらず、全き信仰とは||其信仰が體に發顯して、内外致一の實行を爲し、四圍の事物を究明しつゝ、更に之を同化發達せしめ、以て主客觀照の間に、心と體と致一的全身の慰藉安泰を得るものなるぞ||故にいかに信仰のみを發表宣明しても、之を實地に應用し、實行し、活動飛躍して、心と體との全身的慰藉安泰を得るものならでは、世は歸順せず、人も承服するものでない。されば、信仰の天照とは、之を肉體に發顯活動すると共に、四圍の事物に應用飛躍しつゝ、個人を發達進歩せしめ、家庭を發達進歩せしめ、國家を發達進歩せしめ、世界を發達進歩せしめ、能ふ丈、それ丈、神の家庭、神の國家、神の世界たらしめねばならぬも

のぞ、是れ實に、今日我等としての責任天職ぞや。是れ實に、信仰の天照發顯にして、其の最も多く最も廣く最も長く最も大に、天照發顯して、實行的、實質的、功績偉勳を奏する者が、信仰統一の一大花冠を戴き得たるものなるぞ。是れその最も多く多數を制し得て、最も多く他を推服する丈の大威嚴大實力を有すれば也。

### 第拾參章 人生の天職と天照太神

天人萬有には、天人萬有の、天人萬有たる責任あり、天職あり。人生には、人生の責任あり、天職あるものぞ。故に人類は人類として、人生に於けるの責任を盡し、天職を盡さざれば、満足すること能はざるものぞ。その責任天職を盡して、子孫に模範たると共に、更に其の生命の歸着する所に向ふものぞ、向はざれば、亦満足すること能はざるものぞ。而して其の生命は、如何に歸着すれば、満足するものなるか。是れ實に生命の永久不變に安居鎮座する絶大靈境なるぞ。さても、人類の生命は、如何に安居鎮座すれば、満足するものなるぞや。

### 第五十二節 天職的五責任と後世子孫の模範——今日は、世界統一の

時代也、世界統一實驗實修の時代也。故に世界は未だ直に統一せらるるものにあらず、あらゆる方面に關聯して、あらゆる方面の調和なかるべからざるものぞ、その調和ありて後にこそ、初めて世界は統一せらるるものぞ。蓋し、世界統一は、國家的統一に關聯し、國家的統一は、家庭的統一に關聯し、家庭的統一は、個人的統一に關聯するが如く、個人的統一は、家庭的統一に關聯し、家庭的統一は、國家的統一に關聯し、國家的統一は、世界的統一に關聯すると共に、その各自の統一は、亦悉く、宇宙萬有の統一に關聯しつゝあるものぞ。故に人間としての吾等は、茫然として閑却すべからず、放埒無紀律に俗了すべくもあらず、自然の天職ありて、自然の責任を有するものぞ、人生宇宙の經過として、自から然らざるを得ざるものなるぞ。然るものなるぞ。

- 第一 個人としての天職責任あり。
- 第二 家族としての天職責任あり。
- 第三 國民としての天職責任あり。
- 第四 人類としての天職責任あり。

第五 更に萬有としての天職責任あり。

一一六

是れ實に「吾人人類の天職なり」責任なるぞ、その天職を勤め、この責任を盡さなければ、吾人人類は決して満足すること能はざるものぞ。故に個人としての天職責任を盡して、人格的質量品酌を發達大成し、家族としての天職責任を盡して、家庭的發達進歩を爲し、國民としての天職責任を盡し、國家的發達進歩を爲し、人類としての天職責任を盡して、世界的發達進歩を爲し、萬有としての天職責任を盡して、宇宙的發達進歩を爲し、以て他の個人的家庭的國家的世界的天職責任を教導し啓發し改善進歩せしむると共に、後世子孫の繼承すべき一大模範を遺さるべからざるものなるぞ。遺すと共に、人生を經過しつゝ、吾人人類は、亦、他界に羽化登仙し、神の御國に昇天往生し、更に第二第三等の神仙たる天職を奉じ、責任を盡さる可らざるものなるぞ。然り、その「絶大不二の太神界」に達するまでは。

萬有は不滅なり、宇宙も不滅なり、神としては更に不滅なり。人類のみ獨り現在一世にして自滅し盡す者と思ふべからず、よしや、人類としての身は死すとも、是れ形骸のみ、是れ自滅し盡すものにあらず、更に變じて他の身に化生轉生するに過ぎざるものぞ。生命は永久なり、我と吾身を神として、人生宇宙、到る處に發顯して、其の稜威大稜威を天照らしに天照らすの大覺悟、大實行なかるべからず、大活動、大飛躍なかるべからざるものなるぞ。

第五十三節 原子と成格と一致的稜威煥發——現在世界にて、原素原

原素としての最も明瑩清靈なるものより、絶對無比の清瑩明靈なる者」を求むれば、東天、太陽の稜威光明にあらずや、現在世界にては、亦東天、太陽の稜威光明に及ぶの清瑩、明靈なるものあることなし。若し原素原原素を以て本体とせば、東天、太陽の稜威光明の如きは、原素の原素なり、原素の本体なり、大本體なり、然則、我等人類は、この大本體的稜威光明に化するを以て、満足せざるべからず。而も何ぞ、我等は、此の絶對無比なる稜威的、光明に化するを以て、満足する者でない。稜威なり、光明なり、その如何に明瑩清靈なりとも、絶對無比なりとも、是に化して、那等の慰藉安泰ありとするか、吾人人類は満足すると能はぬぞ、よ、その満足すること能はざるものは、未だ以て全からざる所あるものぞ。さりとは猶、以て吾人人類が安着満足すべき大本體とはするに足らざるものぞ。現在世界に於て、「成格」としての

最も巧妙なる結構を有するものは、人格ならずや、現在世界に於ては、人格的結構の巧妙に及ぶものあることなし。現在世界に於ける人格は、成格中の成格なり、絶對無比の大成格なるぞ。然則、吾人人類は、此の大成格を有するを以て、満足せざるべからざるものなるぞ。而も何ぞ。吾人人類は、此の成格中の成格、絶對無比の大成格を有するを以て、足れりとせず、満足すること能はざるものぞ、その満足すること能はざる者は、未だ以て不完全なる所あればなり。

吾人人類は、太陽の稜威光明に化するを以て満足せず、成格中の成格たる人格を有するを以て満足せず。是れ敢て満足せざるにわらず、満足すること能はざればなり、満足するに足らざれば也。吾人の満足する所は他なし。

人格的にして、更に太陽的稜威光明を煥發しつゝ、盡世界を天照らしに天照らし得るの大靈格たるにあり。是れ實に、光明十方世界的の天照太神なるぞ。然れども、一太陽系的光明普照十方世界的の天照太神たるを以て満足する者ならず、更に盡宇宙的稜威普照の大天照太神たらざるべからざるものぞや。我等は天照太神として、太天照太神として、人格的に稜威光明を煥發し、人生宇宙、天

人萬有を陶冶斡旋し得る迄の絶大靈格に到達せざれば、満足するものにわらず、是れ實に大本體神に發達、同化、還元、超樂したるの曉なるぞ、吾人人類は、此の大極に大本體としての大天照太神に達する迄は、奮然、猛然、精進突貫して已まざるものぞ。豈に翅た人生一代を以て満足するものならんや。あゝ、豈に僅少なる五十年、乃至百年の人生一代を以て満足するものならんや。

且夫れ吾人人類が、此の如き信仰目的希望を有するは、有して、その發顯實行を期するものは、亦是れ大本體神としての大天照大發顯なるぞ。故に吾人人類は、常に天照太神として、大天照太神として、人生宇宙に處せざるべからず、人生宇宙を天照陶治する底の大天照大發顯なかるべからず、活動大活動飛躍大飛躍なからざるべからざるものぞ。是れ實に、現象として、本体としての天照太神に體化し、更に、大本體としての大天照太神に到達するの道にして、亦夫れ、吾人人類としての小天照太神なるぞ。吾人人類としての現象、本体、大本體を天照發顯しつゝ、あるものぞ、活動飛躍しつゝ、あるものぞ。然れども、是れ吾人人類としての小天照太神なり、吾人人類としての現象、本体、大本體なり。未だ大に人生宇宙に大天照大發顯すること能は

ず、大活動大飛躍すること能はず、是れ遺憾なり、是れ痛恨なり。是れ更に本体としての天照太神として、より大に活動飛躍せざるべからず、大本體としての大天照太神として、更により崇高幽玄に、より宏壯雄大に、太天照、太活躍なからざるべからざる所以のものなるぞ。

### 第拾肆章 本体現象と大本體、及、美醜善惡の

#### 發顯終結

天人萬有の現象たるは、いかにして、其の現象たるを知るか、その已に現象あれば、本体なかるべからず、更にその現象本体とは、いかにして發顯するものなるぞ。是れ二體なるものか、是れ一體なるものが、そのいづれにすると、二體としての根本、一體としての大極は、いかに、是れ生命あるものか、是れ生命なきものか。それ忽然發顯したるものか、それ本來實在するものか。特にその人生に於ける美醜善惡等は、いかにして發顯し、いかにして歸着するものか、之を明かに會得すれば、天人萬有の消長盛衰をも、亦以て會得するに足るものぞ。奚んぞ矧んや、その消長盛衰美醜善惡等の根本は、亦

それ天人萬有の根本なれば、其根本大極は、生滅ある者ぞ、生滅なき者ぞ。古今東西の信仰、解釋、實行は、いかに信仰して、いかに解釋實行したるものぞ。我は亦いかに之を信仰し、いかに之を解釋實行すべきや。

#### 第五十四節 現象本体の發顯と大本體の大天照——本体なくんば

現象なし、現象なくんば、本体はなきものぞ。現象あるに依りて、本体を知り、本体を知りて、現象たるを證入するものぞ。本体と現象とは、相依り相待つ、現象の外に本体なく、本体の外に現象はない、其の根本を尋ねれば、二體あるにあらざ、本來、一體の大極大本體其的なるぞ。大極大本體其的の大天照大活動よりして、本體と發顯し、現象とは發顯す。本体ともなり、現象ともなるが、大極大本體其的なるぞ。本体のみが大本體でなく、現象も亦大本體なり、本体が大本體の天照發顯なれば、現象も、亦復、大本體の發顯天照する所なるぞ。換言すれば、本体と現象とは、大本體天照發顯の兩面なるぞ。本体のみにては用を爲さず、現象のみにては功を了はらず、本体現象相待て、初めて用あり功あり、人生宇宙、天人萬有の大偉觀ありて活動飛躍するものぞ。奚んぞ矧んや、本体あればこそ、現象と云ふもあれ、現象といふものあればこそ、



一三二  
本体と云ふものもあれや。本体あり、現象あり、而して後、大本體の大本體たる大天照大發顯、大活動大飛躍は、其の「極致」に達するを見るものぞ。

第五十五節 大本體の實在と生命、及、本體現象の活躍——本体なく、現象なくば、大本體其的は、那等の活動飛躍なく、天照發顯なきに歸するぞよ。那等の發顯なく活躍なき者は、是れ生命なき者ぞ、生命なき者は實在するを得ず、實在せざるものは、勿論、活動なきぞ、天照なきぞ、發顯なきものぞ。天照なく活動なく發顯なき者は、亦以て實在するの必要もない。

大本體其的のみとせば、|| 大本體其的は、那等の天照發顯なき者とせば、|| 大本體其的は、何の爲めに實在する乎、實在せざるべからざるの必要なし、必要なしと共に、亦以て實在し得べき者でもない。さりとは、本來大本體として實在する者なきに歸するぞよ。大本體として實在するものなしとせば、亦固より本体の發顯もなく、現象の發顯もない。而も今日現在、現象あり、本体あり。已に既に現象あり、本体ありとせば、其の根本大極たる大本體の實在すること、彰明的確たるものにあらずや。之れ已に既に、大本體の大實在する者とせば、其の大本體には、生命あり、大生命ある

ものぞ。生命あり、大生命あるものは、大天照大活動するぞ、大天照大活動すれば、大發顯大飛躍なかるべからざるものなるぞ。是れ本體現象の發顯して、人生宇宙、天人萬有の活動飛躍ある所以なるぞ。されば、本体として發顯するのみが、大本體としての本意にあらず、現象として發顯するは、亦復、大本體としての本意なるぞ。故に曰く、本体も大本體の天照發顯なれば、現象も亦復、大本體の天照發顯なり。本來、本体と現象との二物あるではなく、質に約して平等觀すれば、本体にして、量に開きて差別觀すれば、現象なるぞ。現象とも發顯し、本体とも發顯するが、大本體其的なり、其的の天照大天照發顯大發顯なり、活動大活動、飛躍大飛躍なるぞ。

質として、本體として、天照發顯する其の天照發顯は、即ち量にして、現象にして、差別となるものぞ。其の量として、現象としての差別たる天照發顯は、其の天照發顯する毎に、漸漸質として體としての平等に歸しつゝあるものぞ、本体に復しつゝあるものぞ。故に本體の發顯は、直ちに差別となり、差別の發顯は、直ちに平等たるものぞ。知れや、その平等なるは差別たる所以にして、その差別たるは亦平等なる所以のものなるぞ、而してその平等たり差別たる其的が、直ちに是れ大本體其的なる

ぞや。

一三四

第五十六節 醜の關又と一致——本體現象の平等——對——差別は、移し

て人生に於ける美醜善惡等の分際を知るべき者ぞ。美醜善惡とは相待也、美なくんば醜なく、醜なくんば美もない。惡なくんば善はなく、善なくんば惡もない。醜あり惡あればこそ、美としての美善としての善あれ。醜と惡とのなくんば、美としての美とすべき者なく、善としての善とすべきものもない。さりとは、醜として惡としての功も亦大ならずや。醜としては美の反響なるぞ、惡としては善の反響なるぞ、醜としての反響、惡としての反響なくんば、美としての美善としての善はなきものぞ。さりとは、美たる者善たる者、それいかにぞ醜を醜として忌み嫌ひ、惡を惡として憎み厭ふべけんや。是れ忌み嫌ふべからず、是れ憎み厭ふべからず、是れ寧ろ尊敬せざるべからざるものなるぞ。

本來、醜は醜にあらざ、却て美なるぞ、美は美にあらざ、却て醜なるぞ。美も究明すれば醜となり、醜も究明すれば美となる、美醜、本來一體にして、二體あるではない、其の一體が美ともなり、醜ともなる者ぞ。例へば米 $\parallel$ 精米 $\parallel$ は美なるもの、而も之を食

ふて化して、糞と排出すれば、直に醜と變ずるものぞ、糞は醜なるもの、而も肥料として、之を早苗に施せば、亦直に化して精米の美なるものとはなるぞ。是れ一物にして、醜とも變ずれば、美とも化するものならずや、美醜、本來二致なく、一體たる者にあらずや。世多くは美はどこ $\sim$ 迄も美にして、醜はどこ $\sim$ 迄も醜なるものと誤解す、此處、最も工夫を用ゆべきぞや。

抑も美といへば、人身美は、最も美なるものぞ、而も美人の美も、死すれば腐爛して、醜人の醜態に變化し來る、更に醜人の醜は、自然美とする花月の美なるにも如かざるぞ。されば、人身美なればとて、どこ $\sim$ 迄も美なるにあらず、其美は一定の空間時間に限るものぞ。一定の時間空間に達せざれば、美も美として顯れざると共に、一定の時間空間を經過すれば、美も醜と化し去るものぞ。是は此れ、形態美に就て解したるものぞ。若し夫れ、精神美としては然らず、歴史美の如きは、精神美なり、時間に依りて變化せざるなり、比較的變化すること尠きものぞ。

古今東西、多くは「審美的究明」として、美は、人身美に如くものなく、人身美は、裸體美ならざるべからずとして、之を書き、之を激賞し、之を讚美するを見るぞ。而して其の

「裸體美」なる者を見るに、一種厭ふべきの痕蹟あり、臍以下兩脚近邊なるを、是れ「看者の審美眼、未だ劣等なるが故に、淫猥の感を發するのみ」と辯ずる乎。然らば、月に對して、何人が淫猥の心を生ずるや、尊き女神に對して、何人が淫猥の感を催すや。他をして淫猥の感を發せしむるものは、未だ以て全き美とするに足らず、美としての全きものにあらざるぞ。「美の全き者」とは、老若男女、文野高卑の別なく、之に對すれば、均しく共に、崇高幽玄にして、慈愛嚴肅にして、殆ど形容すべからざる無限の感にうたれ、只、偏に、之を渴仰し、之を讚美して、已むこと能はざるものならざるべからず。もしそれ「裸體美」を以て、それ「神聖なるもの」とせば、人人皆裸體にして相ひ會すべし、陰部なりとて神聖の一部分なり、已に神聖なりとすれば、何をか之を恥とらうて擁蔽するの要あるべきぞ、人人公然之を曝露して其神聖を競ふべきと共に、成るべく、より多くの人人に示して、其感化を興ふべき者ならずや。「南洋諸島の土人」の如きは、最も神聖者の表顯なり、文明の極致なるべきぞ。日本の如きは、いかに時候の寒暖異なればとて、盛夏は更なり、寒中猶温室あり、その神聖を發揮する點に於ては、多くの煖爐を用ひ、責めて宴會の如きは、主人も來客も、その幾隊の父母妻

子兄弟姉妹は、老も若きも、裸體として、何等一片の被布を用ひず、各自「裸體美の神聖」を誇るべきぞ、いかに神聖にして天國とも見るべきや。「裸體畫」にして其美「已に神聖なり」とせば、其「正身の裸體美」は、更に神聖ならざるべからず、繪畫は漫然抽出するものにあらざり、人人をして感化向上せしめんが爲めなるぞ、然らば、其の感化に依りて向上し、人人裸體的家庭、裸體的國家、裸體的世界を組織すべきものなるぞ、南洋土人を以て、人身美の標本とは爲すべきぞ、獨り狂人、及、寒念佛、寒行者を叱咤すべからず、相模の如きも、犢鼻禪の如きはし等を一切除却すべし、裸體の一部を蔽ふて、神聖たる一部を汚すの恐れあれば也。古今東西の審美觀たる人身美、裸體美を究明すれば、必竟、此の如き極致に達す、是れ吾人人類の満足する所なりや。

然も「裸體美」を抽出する者、必ずしも、其妻女を裸體にして、他人に面會せしめず、「裸體美」を好む者、亦その妻女を裸體にして、人人に面會せしめず。蓋し他人の妻女の裸體なれば、美として之を觀ずるも、自己の妻女の裸體なれば、醜として之を退くる乎、何ぞその嗜好と實行との矛盾することの太甚しきや。故に曰く、「人身美」なればとて、どこどこ迄も、美ではない、裸體美なればとて、どこどこ迄も、美ではない。「美」とは、

「美の全きものは、裸體なるから、美として全しと云ふべきものでない、裸體でないから、美として全からずと云ふべきものでない。」美の全きものは、裸體なると、裸體ならざるとには拘はらぬものぞ。裸體なればとて、立賃坊たていんばに何等の感興發するや、盛装したればとて、美女たるの艶麗は失はざるぞ。「美醜の判断は、此の如き處を裸體を表本として下すべきものでない、更に、向上的表本より究明せねばならぬものぞ。此等の人人は、未だ以て「形裸美と精神美との交叉致一」を辯せざるものぞ、辯せざるが故に、此の如き誤謬を來したるものぞ。茲に一女あり、彼の女は相容艶麗なり、菩薩の如し、然れども、彼の女の心術は、殘忍酷薄にして、夜叉の如し、是れ其相容の艶麗は美ならざるにあらず、而も全き美ではない。更に一女あり、彼の女の相容は、醜惡にして、夜叉の如し、然れども、彼の女の心術は、慈悲博愛にして、菩薩の如し、その心術の美は相容の醜を一拭するに足る、而も未だ全き美ではない。一は「形態美を以て勝ち、一は「精神美を以て勝つ、而もいづれも、共に以て未だ全き美とはするに足らず。全き美とは「形態美と精神美との合一發顯したるものぞ。精神美と形態美との合一發顯したる者が、人身美としては全き者ぞ。然るに、今、形態美

たる裸體を寫してのみ、全き美を求めんとすると、是れ誤謬にあらずして何ぞや。美の全きものは、形式的裸體のみによりて得らるべき者でない、美の全きものは裸體なると否とには依らぬ者ぞ、全部裸體ならずとも、よしや、半身なりとも、面貌手足等にも可なるぞ、その半身にても、その面貌にても、其の全部全身は示し得らるゝものなるぞ。且夫れ美と云ふものは、美の全き者は、幽玄微妙にして、崇高雄大にして、その餘りに露骨的に發顯し居るものでない。恰も美人の被布を蒙りたるが如きものぞ。蓋し精神美と形態美の最も克く調和合一したる者は、最早や精神美と云ふこともなく、形態美と云ふこともなく、寧ろ其の美と云ふことをば、超絶したる崇高幽玄の極致に達するものぞ、是れ之を「全き美」とは云ふぞや。この「崇高幽玄の全美」に達しては、老も若きも、男も女も、文明人も野蠻人も、古人も今人も、東も西も、南も北も、均しく共に、惚然、恍然、惚恍然として、崇高幽玄の興感を煥發し、亦美と云ふことさへ忘れ、唯唯、神韻縹緲として無限の興感を發しつゝ、其身の人間たることすら覺えず、一種の靈にうたれて、羽化登仙するのみなるぞ。此の際、亦精神美とか、形態美とか云ふの念あらんや。然るを、今、その形式たる形態的裸體にのみ就て、美の全

き者を求めんとすること、誤謬にあらずして何ぞや。美の全き者は、断じて男女老少、風俗習慣、古今東西、文野高卑等にて變ずる者にあらざるを知るべきぞや。要するに、美の全き者は、形式宮第六棟第七棟に宏壯第八棟、幽玄宮第六棟第七棟、崇高第八棟等の調和大成せられたるものならざるべからず。茲には評論するに違なければ略するぞよ。（委細は 大日本世界教 天照太神）

### 第五十七節 善惡の交叉と一致

善は善也、惡は惡也。然れども、亦善が善でない、却て惡で。惡が惡でなく、却て善で。善惡本來一體で、二物ではない。その功を論ずれば相同し、唯、それ惡としての惡は、到頭、善としての善に歸するものなるぞ。

大なる善人は、惡人を惡人として遇せず、善知識として之を遇す、善を教導する善知識として之を遇するぞ、更にそれを敬するぞよ。蓋し善人に對する惡人あればこそ、善人として、其の善徳を煥發することを得るものぞ。若し夫れ善人に對する惡人なくば、善人は善人として、其の善徳を煥發すること能はざるものぞ。惡人は善人の爲めの刺戟者なり、教導者なり、善知識なり、さりとは、何等の憎む所が

ある。惡人としての彼等は、殆ど善人としての我等の爲めに、惡人しはなりつゝ、ある者たらずんばあらず。善人を本位として云へば、善人たる我等は、惡人たる彼等に對して、善人たるなり、惡人たる彼等は、善人たる我等に對して、惡人たるものぞ。然れども、惡人を本位として云へば、惡人たる彼等は、善人たる我等に對して、善を爲さしむるの善人なり。善人たる我等は、惡人たる彼等に對して、惡人たらしむるの惡人とはなりつゝ、あるものぞ。されば、惡人たる彼等に、罪ありとせば、其の罪の半分は、善人たる我等の負擔すべきものぞ、負擔せざるべからざるものぞ。善人としての我等に、賞すべきの功德あるとせば、その功德の半分は、亦その惡人としての彼等が領得すべきものなるぞ。善人は、善人として、獨り其の善徳を占有することは出來ない、惡人は、惡人として、亦獨り其の惡業を負擔すべきものでない。我は善人なりとして、其善に驕る者は、是れ善人にあらず、是れ偽善なり、寧、是れ惡人なり、他を惡人たらしめたる大惡人なるぞ。我は惡人なりとして、其の惡を恐るゝ者あらず、是れ惡人にあらず、是れ正直なり、寧、是れ善人なり、他を善人たらしめたる大善人なるぞ。

悪も究明すれば善なり、善も究明すれば悪也。「善も善とすれば悪たるぞ、それは善も善とすれば善ならず、善たらずる者は、是れ悪なれば也。」悪も悪とすれば善たるぞ。それは悪も悪とすれば悪たらず、悪たらずるものは、是れ善なれば也。「悪も究明すれば、其極<sup>ニ</sup>善となり。善も究明すれば、其極<sup>ニ</sup>悪となり。到頭<sup>ニ</sup>善と悪との別なきに歸するぞよ。それは善の善たるを知らしむる者は悪なり、悪なくんば善の善たるを知る能はず、是れ善を顯すの悪なれば、悪にして悪でない、寧ろ是れ善なる者にあらずや。悪を悪として悪たらしむる者は、善なり、善なくんば、悪の悪たるを知るのと能はず。是れ悪を顯はすの善なれば、善にして善でない、寧ろ是れ悪なる者にあらずや。さりとは、善即ち悪にして、悪即ち善にして、究明すれば、善は善にあらず、悪は悪にあらず、悪即善、善即悪にして、善悪必竟不二一體たるぞ。

「善悪必竟不二一體なり、善と悪との二體あるにあらず。見よや、悪人も善を爲せば善人となり、善人も悪を爲せば、亦直に悪人に變ずるを。」善は、どこまでも善、悪は、どこまでも悪なるものと思ふなよ。而も古今多くは、悪を悪として、之を忌み之を憎み、未だ克く悪の善たることを知らず、善の悪たることをも辯せず、更にその善も善

たらず、悪も悪たらず、其の實<sup>ニ</sup>善悪必竟不二一體<sup>ニ</sup>なることをも解せず。善人は、どこ<sup>ニ</sup>までも善人として、之を賞讃し、悪人は、どこ<sup>ニ</sup>までも悪人として、之を忌み之を憎まんとするぞうたてき。更に思へや、その善人も悪人の爲めには、是れ悪人ぞよ、他を悪人として己<sup>の</sup>獨り善人たればなり、他を悪に排して、獨り己を救ひつゝ、善人たればなるぞ。「悪人も善人の爲めには、却て善人ぞよ、他に善を爲さしむるの隱徳者たればなり、よしや、隱徳の心なくして、悪を爲したる悪人も、其の實<sup>ニ</sup>不知不識の間に於て<sup>ニ</sup>此に歸着するぞ、是れ亦一種無知の聖人なり、權化なり、救世主なるぞや。されば、悪としての悪は、其の罪の大に恕すべき所あると共に、善としての善は、亦大に賞すべき所のなきものぞ。古今多くは、之れを辯せず、之を解せず、之を會得せず、善悪にのみ拘泥執着して、善悪を脱する能はず、恩怨永く結びて、人生を経過するを見るぞ、おはれと云ふも、おろかなりや。人人一番の覺悟を要するぞ。抑も是れ此の善悪は、本体として現象としての發顯活躍なりと雖も、相互に警戒して其の拘泥心、執着體を解脱して、其の善悪を超絶する所の大本體に達せざるべからざるものなるぞ。

第五十八節 善惡兩性の實在的發顯と其歸一——然則善人となるも

一四四

可なり、惡人となるも可なり、必ずしも善人たらざるべからず、必ずしも惡人たるべからずとの理由なきにあらずや。惡人となるも善人にして、善人となるも惡人たり、いづれも均しく本体として現象としての發顯にして、大本體としての大天照大活躍は、共に以て異なる所なければ也、同工異曲たるに歸すれば也。——然り——善惡、與に、本体として現象としての發顯なり、大本體としての大天照大活躍なり。その善人たるも可なり、惡人たるも亦可なり、須らく汝等の好惡取捨する所に向て去來適從すべし。大本體としての大天照大活躍は——その本體現象としての發顯は——汝等の好惡去來し、取捨往還する所に放任するぞよ。虛言者たらんとすれば虛言者たれ、詐偽師たらんとすれば詐欺師たれ、更に強盜盜者たらんとすれば強盜盜者たれ、荒淫亂醉、惡口兇舌、若しくは毒殺若しくは刃殺若しくは自及自害等、いかなる惡事大惡事にても、汝等の欲するまゝに、思へ、云へ、行へよ。而も亦此の如き惡事大惡事を欲せず、惡徒大惡徒たるを好まざれば、更に善事を爲せ、いかなる善事大善事にても、汝等の欲するまゝに、思へ、云へ、行へや。汝等の好惡去來する所に放任する

ぞや。則ち善惡ともに、汝等の好惡取捨する所に放任すると雖も、而も本体として、現象として、其發顯するや、漫然たる發顯にはあらぬぞよ、まして、大本體としての大天照大發顯あるに於てをや。故にその發顯の一たる善と惡とは、亦漫然として發顯するものでない。その發顯するの善は、蓋し善と發顯せざるべからずして發顯し、その發顯するの惡は、亦惡と發顯せざるべからずして發顯するものなるぞ。善は向下すれば惡となり、惡は向上すれば善となる。向上せざれば向下し、向下せざれば向上する者ぞ。然らざれば、向下向上を解脱超絶するものぞ。是れ、大本體の大天照大活動として、その大天照大活動的本體現象の發顯飛躍として、必ず然らざるべからざるものなるぞ。向上のみ、獨り大本體としての本體現象の天照たり發顯たるのみならず、向下も、亦その天照なり發顯なり、且その向上向下を解脱超絶するは、更にその大天照大活躍なるものぞ。故に天人萬有は、向下すると共に、向上し、向上すると共に、亦、向下し、善となり、惡となり、惡となり、善となりつゝも、遂に卒に、その向上向下を解脱して、善惡を超絶するに至る者ぞ。超絶せざる可らざる者ぞ。是れ、善としての活動なり、惡としての飛躍なり、善惡一體としての大活動大飛躍な

るぞ、是れ、本体として現象としての活動飛躍なり、更に、大本體としての大活動大飛躍なるものぞ。

且夫れ悪は悪として停止一定するものでない、停止一定すること能はぬものぞ。善も善として停止一定するものでない、停止一定すること能はぬものぞ。善悪は善悪として停止一定するものでない、停止一定することは能はぬものぞ。向下せねば向上し、向上せねば向下するなり。さなくば、向下向上を解脱して、善と悪とを超絶するぞ、超絶せざるべからざるものなるぞ。知れや、悪人も、勸めば善人となり、善人も、怠れば悪人となるぞ。賢も愚となり、愚も賢に化するぞ。それぞれの善と發顯する者も、悪と發顯するものも、賢と發顯する者も、愚と發顯する者も、均しく之れ本來、同根一體なる本体大本體よりの大發顯大變化にして、即ちその同根一體なる本体大本體よりの大發顯大變化なりと雖、然れども、善としては、悪と同じからず、悪としては、善と異なるものたるぞ。賢としては、愚と同じからず、愚としては、賢と異なるものぞ。されば、いかに善悪賢愚は、均しく同根一體としての大本體よりの大天照大發顯なりとするも、善人としては、悪人と異にして、其言行を同ふせず、悪

人としては、善人と同じからずして、其言行を異にするぞや。賢者としては、愚者と異にして、其言行を同ふせず、愚者としては、賢者と同じからずして、其言行を異にするものぞ。然れども、均しく之れ、不二一體の者より天照發顯するが故に、其發顯態は、均しく共に停止一定せざるが故に、賢者善人が墮落して愚者悪人となるも、愚者悪人たるの極は、亦必ず精進發達して、賢者善人となるものぞ。賢者善人の更に精進敢行して已まざれば、遂に以て至善に達するものぞ。至善に達したるの極は、墮落と精進とを解脱して、茲に善悪賢愚を超絶するものぞ、超絶せざるべからざる所以のものなるぞ。是れ善は善として、悪は悪として、其實は善悪共に、亦是れ「實在」するものなるぞ。實在すればこそ、善としての發顯あり、悪としての發顯あるものぞ。蓋し「善悪賢愚」は、現象なり、至善とは、本体なり、本体は平等性としての半面なり、現象は差別態としての半面なり、その差別的半面の現象を解脱し、平等的半面の本体を超絶すれば、是れその根本大極たる全面的大本體に到着還元するものぞ、同化超樂するものなるぞ。

第五十九節 善悪の歸一と必然的結果——善悪賢愚は、均しく之れその



「根本大極たる大本體の大天照大發顯なり」と雖、その大天照大發顯の大活動大飛躍として、到頭ニ悪は善に向上し、愚は賢に上達せねばならぬものなるぞ。夫れ已に到頭ニ向上上達せねばならぬものとせば、一日も早く愚者たるの境を脱して、賢者たらざるべからざる、更にその賢者たるの境をも解脱して、賢愚超絶の至聖たらざるべからざるものなるぞ。善は善として活動し、悪は悪として活動し、現象は現象として活動し、本体は本体として活動す、其の活動を究明すれば、均しく之れその「大極大本體」としての大天照大發顯なるぞ。均しく之れ大極大本體としての大天照大發顯なれども、その本体は現象となり、現象は本体に復歸するものぞ、その善は善と活動し、悪は悪と活動しつゝ、善は悪と變じ悪は善と化しつゝ、相互に輪廻轉轉しつゝありと雖、それ然れども、その悪としての活動は、遂に善としての活動となり、善としての活動は、更に善悪解脱の活動たらざるべからざるものなるぞ。之れ已に既に然るものとせば、然らざるべからざる者とせば、それなる悪は、悪としての活動は、一日も早く悔い改めて、善としての活動に遷り、それなる善は、善としての活動は、更に善悪超絶の大活動大飛躍たらざるべからざる所以ならずや。是れその悪人た

るも可也、善人たるも可也とは云へ、その善人たるにも道あり、悪人たるにも道あり、その道は逸脱すること能はぬものぞ。究竟すれば、到頭ニ悪人たるべからず、善人たらざるべからざる所以のものぞや。寧ろ、その悪人たり善人たることさへ忘るるの「至善」たらざるべからざるものぞよ。賢者たるも可也、愚者たるも可也とは云へ、愚者たるには道あり、賢者たるにも道あり、その道は逸脱すべからざるものぞ。究竟すれば、到頭ニ愚者たるべからず、賢者たらざるべからざる所以のものぞ、寧ろ、その愚者たり賢者たることさへ忘るゝの「至聖」たらざるべからざるものなるぞ。今夫れ善悪賢愚としての兩性が、向下向上すると共に、その向上向下をも解脱し超絶せざるべからざる所以や、炳として熾として日星の如し、光明遍照十方世界、亦何物か之を争ひ之を拒むことを得べきや。抑も善悪賢愚は、吾人人類を本位として割出したる名稱なれども、その消長進退の發顯活動は、天人萬有の一切に通じて同じきものぞ、天人萬有、亦それ何物か之に反抗し、之に背戻して逆行逆流するを得べきや。然り、斷じて能はざるものなるぞ。

吾人人類の多くは之れ平凡也、一に只だ「悪」の忌み憎むべき、ことのみを知りて、之を

根本大極たる大本體の大天照大發顯なりと雖、その大天照大發顯の大活動大飛躍として、到頭ニ悪は善に向上し、愚は賢に上達せねばならぬものなるぞ。夫れ已に到頭ニ向上上達せねばならぬものとせば、一日も早く愚者たるの境を脱して、賢者たらざるべからず、更にその賢者たるの境をも解脱して、賢愚超絶の至聖たらざるべからざるものなるぞ。善は善として活動し、悪は悪として活動し、現象は現象として活動し、本体は本体として活動す、其の活動を究明すれば、均しく之れその大極大本體としての大天照大發顯なるぞ。均しく之れ大極大本體としての大天照大發顯なれども、その本体は現象となり、現象は本体に復歸するものぞ、その善は善と活動し、悪は悪と活動しつゝ、善は悪と變じ悪は善と化しつゝ、相互に輪廻轉轉しつゝありと雖、それ然れども、その悪としての活動は、遂に善としての活動となり、善としての活動は、更に善悪解脱の活動たらざるべからざるものなるぞ。之れ已に既に然るものとせば、然らざるべからざる者とせば、それなる悪は、悪としての活動は、一日も早く悔い改めて、善としての活動に遷り、それなる善は、善としての活動は、更に善悪超絶の大活動大飛躍たらざるべからざる所以ならずや。是れその悪人た

るも可也、善人たるも可也とは云へ、その善人たるにも道あり、悪人たるにも道あり、その道は逸脱すること能はぬものぞ。究竟すれば、到頭ニ悪人たるべからず、善人たらざるべからざる所以のものぞや。寧ろ、その悪人たり善人たることさへ忘るるの「至善」たらざるべからざるものぞよ。賢者たるも可也、愚者たるも可也とは云へ、愚者たるには道あり、賢者たるにも道あり、その道は逸脱すべからざるものぞ。究竟すれば、到頭ニ愚者たるべからず、賢者たらざるべからざる所以のものぞ、寧ろ、その愚者たり賢者たることさへ忘るゝの「至聖」たらざるべからざるものなるぞ。今夫れ善悪賢愚としての兩性が、向下向上すると共に、その向上向下をも解脱し超絶せざるべからざる所以や、柄として熾として日星の如し、光明遍照十方世界、亦何物か之を争ひ之を拒むことを得べきや。抑も善悪賢愚は、吾人人類を本位として割出したる名稱なれども、その消長進退の發顯活動は、天人萬有の一切に通じて同じきものぞ、天人萬有、亦それ何物か之に反抗し、之に背戻して逆行逆流するを得べきや。然り、斷じて能はざるものなるぞ。

吾人人類の多くは之れ平凡也、一に只だ「悪」の忌み憎むべき、ことのみを知りて、之を

愛憎すべきを知らざると共に、更に之を尊敬すべきことをも知らず。一意||悪は悪として之を虐待し、これを排斥す、その克く悪人をして善人たらしめんとする慈悲心あるもの幾人かある。吾人人類のいかに平凡なるよ、一に只だ善の愛すべく、尊敬すべき者たることのみ知りて、更にその獨立すべき者でないこと云ふことを知らず、一意||悪を排斥し盡して後に、善のみとして立たんとするなるぞ、而して未だその悪なき時は、善も共になきものたるを知らぬぞよ。いかに矧んや、善人なりと尊敬する其の善人の、直に亦是れ悪人たる悪性の發顯する者たるを知らざる輩の多きに於てをや。賢||賢とするに足らず、愚||愚とするに足らず、悪||悪とするに足らず、善||善とするに足らず、恃むべきは、自己にあり、心すべきは、勸怠なり、策勵すべきは、心體致一の實踐實行なるぞ、活動大活動、飛躍大飛躍なるぞ。

第六十節 大本體としての大天照的兩面と、其の生滅不生滅||時しも、空中聲あり、是れ何の聲ぞ。あゝ夫れ何の聲なるぞ。

悪を惡とし、善を善とす、

其實は

惡も惡とするに足らず、

善も善とするに足らず。』

善善にわらず、惡惡にわらず

善も惡なり、惡も善なり、

向下せざれば向上し、向上せざれば向下す、

然らざれば向上向下を解脱す。』

善惡に轉轉するは向下なり向上なり、

向上向下を解脱するは

是れ善惡を超絶するものぞ。』

絶對なる善なく、絶對なる惡なし、

必竟すれば、善悪は相待にして、亦それ不二一體ぞ、  
到頭、善もなく、悪もなきものなるぞ。』

是れ大本體の大天照なり大活動なり  
天照活動の折半なり半面なるぞ。』

本來善悪なきもの、

善として、悪として、善悪一體として、  
善ともなく、悪ともなく、

善即悪として、悪即善として、

くしや、善善にわらず、悪悪にわらず、

善とするに足らずして、善とせざるべからず、  
悪とするに足らずして、悪とせざるべからず。』

善として悪として、

善は善として、悪は悪として、

發顯活動すなりけり。

發顯活動の態として、

悪となり善となる也。

究竟すれば無始無終に

善悪も亦實在するものぞ。』

是れ古今

善人は善人として、

悪人は悪人として、

發顯活動する所以なるぞ。』

是れ亦大本體の大天照なり大活動なり。

天照活動の折半なり、半面なるぞや』。

更に

向上向下を解脱したる盡頭じんたうはいかに、  
善と惡とを超越したる大極はいかに』。  
そのまゝ、不生不滅不變化の  
靈體大靈體として止る者か』。

否、

萬有本來、不生ぞよ、不滅ぞよ、  
不生生なり、不滅滅なり、  
滅不滅なり、生不生なり、  
生即滅ぞや、滅即生ぞよ、  
生生なれや、不生なりき、

滅滅なれや、不滅なりき』。

善と惡とを解脱して

而して後に

不生不滅なるにあらず、  
始よりして不生也不滅也、  
無始無終に不生不滅なり』。

見よ、生生、生、更に、生、生、生、

知れ、滅、滅、滅、更に、滅、滅、滅、

是れ

不生生なり、不滅滅なるぞ。

是れ

生不生なり、滅不滅なるぞ』。

知れや、

質と量との分際を、

體と用との分際を。

質は體なり

量は用なり』。

よし、

質と量とは悟るとも、體と用とは辯ずとも、

質と量との生ずる所以はいかに、

體と用との生ずる所以はいかに、

こゝ多少の工夫を要すぞや』。

體用の比喻として

水と波との關係は把握することを得べし、

而も

水と波との關係もて

直に

風の爲めなりと思はば

不是、大不是なるぞ』。

そもその風とはいかに、

いかなるものにして、いかなる處よりか起り來る、

こゝ更に工夫を要するぞ、最も工夫を要すぞや』。

風、風、風、風の神曰く

風、外より來るにあらず

風、水と波より起るなり』。

波、波、波、

汝、如何なる者にして、いかなる處よりか來れる。

波の神

荒鹽あらしほの鹽しほの八百道やっほちの八鹽道やっしほぢの鹽しほの八百合やっほあひに歌ふて曰く、

水よりは來り候ぞ。

いかにして來り候や。

曰く、水それ自身に尋ね候らへ。」

第六十一節 大本體に對する諸説の缺陷と最後の汎心論——抑もその「水自身」とは、「水—波—風」とは、勿論、比喩なるぞ、古今、水波の比喩を以て宇宙萬有を解釋せんとする者あるも、是れ固より一端のみ、この比喩を以て、直に人生宇宙、天人萬有を解釋し盡さるべきものにあらざるぞ。蓋し水とは「本體」也、波とは「現象」也、本體と現象との根本大極たる者は「大本體」也。然るを古今多くは、現象を尋ね、本體を

求めて、その「本體」と現象との根本たる大本體を究明する者なきぞうたてき。是れ未だ、人生宇宙、天人萬有としての根本大極の明瞭ならざる所以なるぞ。「本體現象」の關係分際が、明瞭ならざる所以ぞや、水波の比喩にては、水波の關係すら、未だ以て明瞭なること能はざるものぞ。いかに矧んや、本體現象の關係をや、本體現象の根本大極たる大本體「其的」に於てをや。是れ豈に絶世の恨事たらざらんや。然れども、古今多くの人人は、その本體を以て現象の根本と爲し、人生宇宙の根本大極と信じて居る者なれば、其の名稱は本體なれど、其の意味は大本體たるにちかきか。（委細は、大日本世界教天照太神宮第四機、第一は、五機乃至三十機六十機に辨彰す。）さて、その根本大極の本體大本體を以て、「物質」と爲す者あり、「精神」となす者あり。その「物質」を以て本體とするものは、「精神」を物質の發顯したる勢力とは爲すものぞ。その「精神」を以て本體とするものは、「物質」を精神の發顯したる結果とは爲すものぞ。彼此相對して降らず、同一の理由を以て、單に理由を反對にして相争ふばかりなるぞ。

於是乎、「物心二元」を以て、本體とするものあるに至る、物質と精神と兩立抱合して本

体たるものなりとの調和説あるに至れりき。而も心は無形也、物は有形也、有形と無形とは、全然反對なるぞ、全然反對なるものが、いかにして抱合一致しつゝある乎、さりとは、是れ未だ以て其説明や全からざるものなるぞ。

之を調和せんが爲に、預定説——機會説——不可思議説——多元説等の起り來るも、亦、未だ一として其の満足なる調和を得たるものなきぞや。

最後に、汎心論也者起りて曰く、物質も亦心也、精神也、草木金石も、人畜と共に、心意生活を爲しつゝある也。心と物との別はなく、是れ唯一不二也と唱道するものあるぞ。世は漸くにして心物二元の調和せられたる者なりとして、之を謳歌し、之を讚美する者多からんとはするぞや。然れども、唯一不二也者を、何故に心と云ひ物と云はねばならぬか、均しく之れ心なれば、均しく之れ心意生活を爲しつゝあるものとせば、物質も亦心と云へば足れるにあらざるや、而も心と物とは、其の相を異にし、用を同ふせず。さりとは、物と呼んで直に心とは云ふべからず、極言すれば「何故に心物の二元に發顯して、有形無形の反對觀を爲す乎」と詰問すれば、彼等は未だその有形無形に分出する所以の理由を明答すること能はざるぞ。然れば、是れ猶未だ調

和せられたる者とは云はれないぞ、調和に近づきつゝあるに過ぎざるものぞ。且夫れ物は心也と云ふは、語弊あるばかりでなく、意味に於ても全からぬぞ、猶、心と云ふに偏すれば也。已に物は心也と云ふことを得ば、亦心は物なりとも云ふことを得べきぞ。然れば、已に「不二一體なるものと會得する以上は、物とも心とも云ふべからず、由來、心とは無形なる作用を意味し、物とは有形なる體質を意味したる者なれば也。而も、猶、物は心也と云ふは、是れ、物は無形なり」と云ふに均しきぞ。さりとは、物は「何故に無形なる乎」の辯なかるべからず、其の未だ辯明する所のなければ、物其的を以て、直に是れ「無形なり」と云ふも、それ將た誰か之を信すべきや。抑も心物、已に「不二一體なる者」とせば、物は心也と云ふべからず、猶、心は物なりと云ふべからざると一様なるぞ。然則、先づその「一體也者」の「那的」たる乎の名と質とを求め、而してその「一體より、いかにして、心物二元の反對的兩面の發顯する者なるか」を究明説せねばならぬものぞ。是れ最も公平なる判斷にして、秩序的説明たるを信するぞよ。（委細は、大日本世界教天照太神宮、第一棟、第二）

## 第六十二節 心物の融會一致と千古爭論の一拭——某は其の一體



なる者を稱して、英靈と云ふぞよ。英靈が、いかにして、心物の二元に發顯する乎。曰く吾人人類の、五官を分域として、心物の二元觀を爲すものぞ。例へば識官、鼻官、聽官等に上るものを以て、無形とし、精神とし、理性とするに過ぎざるものぞ。有形無形とは、五官を分域として、之を觀じ、意識を境界線として、之を分別するものぞ。然れども、無形なる光熱聲氣態等を究明せば、其實波動あり、形狀あり、唯、その吾人人類の視官鼻官等に上ると能はざるのみぞ、無形決して無形にあらぬぞや。有形なる動物植物、乃至、礦物等を究明せよ、其實、時時刻刻に消磨して、氣態聲音光熱等に變化しつゝ、あるものなるぞ、唯だ、その吾人人類の視官等が看取すること能はざるばかりで、有形決して有形たらざるぞや。是れ有形なる者は、直に無形にして、無形たる者は、直に有形なるぞ、其實、有形たるものもなければ、無形たる者もなく、唯その英靈が、五官に發顯して、五官の作用を分域として、是れ無形なり、是れ有形なりと分稱するに過ぎず、その實、不二一體なるものたることを證明するに足らずや。その不二一體の者を、英靈とは云ふぞ。それ而して後、心物二元の發顯し來れる經過と理由とを領會し得べきなり、領會し得ると共に、心物二元の對立たる千古の論争

も、是に於てか、遺憾なく一拭し得たるにあらざるや。

第一項 心肉不二一體 且夫れ世は皆、心と肉體とを以て全然別物なる者とし、或は一體なる者とするも、未だその別物なる所以と、一體なる所以とを明確に辨彰すること能はず。更に「有形なる物質的肉體と、無形なる精神的心性とが、如何にして、抱合しつゝ、別物とはなり居るか、若しくは、一體となり居るか」と詰問すれば、一體と云ふ者も、其の答辯に窮し、二物と云ふ者も、其の答辯に窮し、いづれも、共に窮して、其の答辯に煩悶しつゝ、あるものぞ。是れその未だ眞實一體たるの所以をば會得せず、別物となり居る所以をも會得せざるがためなるぞ。聞けや、吾人は、渾身英靈なるぞ、其の視官觸官等に上る者を以て、肉體と爲し、有形となし、然らざる者を以て、心性となし、無形と爲しつゝ、あるものぞ。視官に上らざるが故に、空氣は形なしと云ふべからざるが如く、吾人の思想は、五官に上らざるが故に、形なしとは斷すべからざるものぞ。無形と云へば、吾人の肉體も、時時刻刻に、氣態に變化しつゝ、あるものぞ、肉體は有形なりとすれば、どこどこ迄も有形たらざるべからず、大なれば有形なれども、小なれば無形なりとは云ふべからず。

さりとは、是れ肉體は有形にもあらず、無形にもあらず、無形ともなれば、有形とも變化する英靈なるぞ。「有形」といへば、肉體の氣態に變化しつゝあるが如く、思想も氣態なり、一念一念、念念、是れ皆氣態なるぞ、有形なるぞ、微細なる有形たるものぞ。知れや、渾身是れ英靈なり。其の官感に上る者を以て、有形とし、肉體とし、然らざる者を以て、精神とし、無形とするに過ぎざるぞ。知れや、渾身是れ英靈なり、英靈は有形に非ず、無形に非ず、只是れ官感を分域として、有形と變じ、無形と化するものぞ。而も是れ二物なるに非ず、一體のみ、一體なる英靈のみなるぞ。曰く「然則、心に思ふ所と、體に行ふ所と、衝突して矛盾するは、何故ぞ。一體なる者が、何故に二様の道筋を爲して、此の如くに矛盾衝突するものぞ。」善哉——問ふことよ。來れ我れその間に答へん。今夫れ英靈の活動するや、其念念の氣態を無形と爲し、心性とし、其の無形の心性より思想する所あり、而して細胞的固態を有形とし、肉體とし、其の有形の肉體は、思想を實行し、或は實行せず、若しくは實行すること能はず、於是乎、心と體との衝突ありて矛盾するものと爲すものぞ。然れども、是れ心と體との二物ありと誤認するが故なるぞ。心も是れ英靈なり、體も

是れ英靈なり、同一の英靈なり、只是れ英靈の活動態なるぞ。五官を分域として、氣態の英靈を「無形」と爲し、心性と爲し、固態の英靈を「有形」となし、肉體と爲すに過ぎざるものぞ。而も是れ之を解得せず、會得せず、氣態的活動の英靈を心性となして、別に「精神」の存在するものと、誤信するものぞ。知れや、氣態の活動も英靈也、「固態」の活動も英靈也、同一の英靈なるぞ。されば、其の思想するも、此れ是の英靈なり。實行せざるものも、實行すること能はざるものも、是れ此の英靈なり。全然、是れ同一の英靈なるぞ。而もこの英靈は、思想することも得れば、思想せざることも得るぞ。實行することも得れば、實行せざることも得るぞ。故にこの英靈が思想すれば、其の思想を實行するも、依然〓此の英靈なるぞ。然るに、この英靈は思想すると共に、必ずしも實行せず。故に英靈が思想して、其の思想を實行せざるも、均しく之れ此の英靈なるぞ。されば、心と體との二物ありて衝突するにあらず、此れ之の英靈が、前後に、其の活動を矛盾するものなるぞ。始は思想して、後には實行せざればなり。然るを何ぞ、世は英靈が、始めに思想したる氣態の活動を以て、心性と爲し、後に實行せざる固態の活動を以て、肉體とは爲したるもの

ぞ。會得せよ、心性と肉體との本來二物存在するにあらず、只是れ英靈の活動を「感官的に分域して」心性と爲し、無形と爲し、肉體と爲し、有形と爲すに過ぎざるものぞ、一体の活動を、感官的に分斷して、前の氣態的活動を「心性」とし、無形と爲し、後の固態的活動を「肉體」と爲し、有形とするに過ぎざるものぞ。肉體の外に心性なく、心性の外に肉體なし、心肉不二一體の英靈あるばかりぞ。會得せよや、渾身、只、之れ英靈也、思想するも英靈なり、實行せざるも英靈なり、進むも英靈なり、退くも英靈なり、同一不二の英靈なるものぞ。思想するも實行せざるは、心性と肉體との二物ありて衝突するにあらず、英靈其の活動が前後に矛盾するものぞ。故に至聖大賢たらんとするものは、英雄豪傑たらんとするものは、この矛盾を打破し、この葛藤を融會して、蕞地に直入蹈破するぞよ。もし夫れ思想するとも、實行すること能はざる時は、更に實行し得るの方法を思想して實行せよ、思想し得る限りは、必ずや實行し得るものぞ、只其事の難易輕重に應じて、時間空間の長短廣狹あるに過ぎざるものぞ。思想し得る限りは、實行し得る迄に思想して、思想の進行するほど、着着と實行せよ、然れば、その生を代へ、世を更めても、必ず實行し得

るものぞ。只是れ前後に矛盾することなく、念念、言言、行行、間斷なく、猛然、奮然、直入、進行せよや。是れ實に英雄豪傑たるの道ぞ、大賢大聖至聖たるの道ぞ、更に神たり、太神たるの道なるぞ。

第二項 良心と智情意の調和 夫れ已に「心肉不二一體の英靈なり」とすれば、古今東西に於ける「良心論」の如きも、その古今東西に於けるありとあらゆる學説とは異なるぞ、是れ亦古今東西のありとあらゆる誤謬を訂正せざるを得ぬぞ。抑も「良心」と云ふことに就ては、古今東西の解釋紛紛として、棟牛管ならぬほど多きを見るぞ、今その重なるものを概括するも、羅馬のシセローを始として、俄に枚擧すべからずと雖、其の多くは「良心」とは「是非を判斷するものなるが故に、知識也」とする一派あり。いかに、知識にて、是非を判斷するも、情に於て安せざる所の者あり、故に良心とは「情感なり」とする一派あり。いかに、情に於て寛容するとも、實行せざれば、尙未だ安んずること能はず、故に良心とは實行せしむる「意志」なりとする一派あり。更に神の心中に宿り居るものありて、心と體との行動を裁斷する者なれば、良心とは其の身中に宿り居る「神の心」なりとする一派もあり。更に

亦「公準的表式」を以て、良心とする者もあるなるぞ。東西古今、一は一非尙未だ紛  
紛嗽嗽として決定すること能はざるものなるぞ。

今先づ古今東西慣用する所の「名目文字」に依りて、某が良心と云ふ良心の解釋を  
下すべき乎。夫れ此の心が是非を判断する活動態の範圍を稱して「知識」とは云  
ふぞ、是れ客觀等に對して、此の心の活動する状態ぞ。その客觀等に對して判断  
したる是非を、更に「主觀に廻向して吟味する所の心の活動の範圍」を稱して「情感  
」とは云ふぞ。是れ主觀に對して、此の心の活動する状態なるぞ。その知識とし  
ての判断と、感情としての吟味との觀照一致して、更に之を實行決定せんとする  
心の活動の範圍を稱して「意志」とは云ふぞ。是れ主客兩觀の觀照に對する、此の  
心の活動する状態ぞ。然れども、均しく之れ「此心の活動状態」なるぞ。同一の心  
なるぞ。「知識」としての心と、「意思」としての心と、「感情」としての心の三つあるに  
はあらぬぞよ。均しく之れ「此の心の活動状態」なるぞ。同一の心なるぞ。只夫  
れ此の心の活動状態を分斷し、客觀等に對して是非を裁斷する活動状態を以て、  
「知識」とし、之を「主觀に廻向して吟味する活動状態」を以て、「感情」とし、更にその「主客

觀照の一致して、之を現實に實行せんとする決定的活動状態を以て、「意思」とはす  
るに過ぎざるものぞ。均しく之れ「此の心なり、此心の活動状態」なるぞ。故に「知  
識」と云ふ時にも、其處には、感情と意思との併行しつゝあるものぞ、「感情」と云ふ時  
にも、其處には、知識と意思との併行しつゝあるものぞ。「意思」と云ふ時にも、其處  
には、知識と感情との併行しつゝあるものぞ。只その知識として活動する状態  
の最も強度なるが故に、茲に抽象して「知識」と稱し、感情として活動する状態の最  
も強度なるが故に、茲に抽象して「感情」と稱し、意思として活動する状態の最も強  
度なるが故に、茲に抽象して「意思」と稱するに過ぎざるものぞ。均しく之れ「此の  
心也、此心の活動状態」なるものぞ。

然則「良心」とは、如何なる活動状態を意味するかと究明すれば外ならず。

智情意の調和したる際の活動状態を抽象して、茲に「良心」とは云ふものぞ。知  
識の活動足りて、情の活動足らざれば、殘忍酷薄に歸す、意思は實行するに忍びず、  
意思は忍びて實行せんと決定するとも、猶情の調和を缺けり。故に此の心は安  
んぜざる也。情の活動足りて、知識の活動足らざれば、暗愚狂痴に歸す、意思は實

行するに忍びず、意思は断じて實行せんと決定するも、猶知識の調和を缺けり。故に此の心は安んぜざる也。知識の活動も足り、感情の活動も足り、智情茲に調和するも、意志の活動足らざれば、因循狐疑に歸す、その實行を決定すること能はず、是れ猶意志の調和を缺けるに因るぞ。故に此心は均しく安んぜざる也。されば、知識の活動足り、感情の活動足り、意志の活動も足りて、茲に其の智情意の活動調和したる時は、此心初めて安んずる也。知識にても、感情にても、意志にても、其の一方の活動に、過不及あるありて、その未だ調和せざる時は、此心は決して安んぜず、安んずること能はざるものぞ。故に曰く、

「良心」とは——智情意の發顯調和したる際の活動状態なりと。

然り、例へば、客觀に對して判斷したる知識活動の是非を、主觀に廻向して、感情に吟味し、感情活動の吟味は、知識活動の是非に照應して、衝突することなし。於是乎、其智情の照應に順して、意思は實行を決定したり。意思も智情の照應したる通りに、その實行を決定して、亦過不及あることなし。而して後、茲に初めて智情意の發顯活動は調和したるなり、此の心は初めて安んずるなり、心廣く體胖たいはつにし

て、亦那等なとうの遺憾あることなし。然り、断じて其の心に疾しきことなきものぞ。故に曰く、

「良心」とは——智情意の發顯調和したる際の活動状態なりと。

されば、此の心の外に、亦別に良心あることなきぞ、知識と働くも、此心なり、此の心の活動状態なるぞ。「感情」と働くも、此心也、此心の活動状態なるぞ。「意志」と働くも、此の心也、此心の活動状態なるぞ。「良心」と働くも、此の心なり、此心の活動状態なるぞ。此心の活動状態の、或る範圍を分域して、知識と稱し、或る範圍を分域して、感情と稱し、或る範圍を分域して、意思と稱するに過ぎざるが如く、或る範圍を稱して「良心」とは云ふに過ぎざるものぞ。知識と云ひ、感情と云ひ、意思と云ひ、良心と云ひ、均しく之れ此の心也、此心の活動状態なるものぞ。只その知識感情意思は、此心として的一部分一範圍の活動状態にして、良心とは、その智情意の總合調和したる全部全範圍の活動状態なるものぞ。

故に此心の外、別に本心なし、本性なし、神なし。神とし云へば、全身是れ神なるぞ、心のみ獨り神ならんや。心の中のみ、獨り神ましますと云はんや。神とし云ひ

ば、心も神ぞ、體も神ぞ、全身、渾て神なるぞ。世多くは、此の心の外に、神ありて、別に心を爲すと信じ、左なくば、少くとも、此の心の外に、別に良心、本心、若くば、法性、佛性、本善の性等の存在するものと誤信するものぞ、あはれ、古今東西、比比、是ならざるはなし、是れ皆此の心の活動作用を解せざりしより然るものなるぞ。猶、智情意の一方に偏して、良心の那的たることを全然了解會得することの能はざりしものと、相去ることなきぞ。

更に亦、公準的表式を以て、良心をなす者は曰く、「人類は何等か、公準的原則を定めて、之を目的表式とし、その目的表式とする所の公準的元則より、自己一切の思想言行を割り出す者なり。」例へば、君に仕ふに忠を以て公準とし、親に仕ふるに孝を以て元則とすれば、その忠孝たる公準元則を目的表式として、その公準原則たる忠と孝とに合するの思想言行は満足するを得れども、その公準元則に背戻するの思想言行は満足すると能はず。故に、良心とは、その目的表式とする所の公準元則なり」と云ふにありき。然れども、是は之れ、亦、只その末のみを見て、本を忘れたるものなるぞ。そも、その「公準元則」とは何ぞ、更にその公準元則たらしめ

たるものは、何ぞや。請ふ先づ、始に反りて本を究明せよ。その公準元則も、始より公準元則として存在するには、あらず、この心が究明して、君父に仕ゆるに、忠と孝とは、是れ公準元則たるに足るものぞと發見納得し、その已に公準原則たるに足るものと發見納得したるが故に、その忠を目的とし、その孝を表式として、自己一切の思量言行を權衡裁決するものにあらずや。されば、その「公準元則」たるものも、更にその「公準元則」たらしめたる者も、その本を質せば、この「心の作用」にあらずや。已に既に、「この心の作用なり」とすれば、その心の作用とは、智情意なり、智情意の總合調和して。是れ我が「公準元則」たるに足るものなり」と決定したるが故に、之を目的表式として、自己一切の思量言行を判断するものぞ、亦その心たる智情意が、その公準表式たるに足るものとの判断に總合調和して、安ずるに至るも、渾て是れこの心の活動作用たる智情意が、總合調和して安ずるが故なるぞ。若し、それその始に於て、この心の活動作用たる智情意の總合調和することなくんば、亦その何物をも公準元則なりとして判断忍容せず、従ふて、忠なり孝なりとて、自己一切の思慮言行に於けるの公準元則たらしめせず、目的表式とはせず

るものなるぞ。故に曰く、公準的元則表式は、未なり、良心とすべきものでない。其の始に反りて、本を質せば、良心とは、亦是れ心としての作用たる智情意が、總合調和したる際の活動状態なるぞ。

今夫れ「良心」とは、此の心としての智情意の總合調和したる際の活動状態なりとは、之れ何人も全然了解し會得したるべきぞ。然れども、此は是れ世に慣用し來れる「言語文字の名稱」に順して、良心の「那的」たるかを説明して、會得せしめたるまてなるぞ。而も未だ以て全き解釋とは、するに足らざる者なるぞ。他なし、是れ「心」としての解釋にして、未だ「體」としての解釋に達し居らざればなるぞ、然り、心體不二の解釋としてに達し居らざれば也。「心」としての解釋あるも、未だ體としての解釋に達せず、更に「心體不二一體」としての解釋に達せざれば、其實「良心」としての解釋も、未だ全からざるものなるぞ。そは、智情の觀照一致したる所若しくは、一致せざる所にてても、之を實行すべしと決意するは、意思としての活動作用なれども、さればとて、意思が之を實行するにわらず、之を實行するものは、肉なり、體なるぞ。「意思」としては、唯、智情の活動作用、若しくは、智情の觀照一致したる活動

作用を實行すべしと決意して、體に迫るの活動作用たるに過ぎざるものぞ。切言すれば、智情の活動作用を、更に實行すべく決意したる活動状態なるに過ぎざるものぞ。之を實行實顯するは、肉なり體なるぞ。いかに智情の觀照一致し、意思の之を實顯すべく決定したりとも、肉體として之を實行せざれば、此心は決して安んずるものでない。然れば、「良心」とは、此心としての智情意の總合調和したる時の活動状態なりとして、其の解釋は足れるものならぬぞや。|| 夫れ已に肉體としての實行を待たざれば安んずること能はざる良心なりとせば、其の良心とは、|| 肉體と相待て活動するものなるが故に、單に良心としてのみ解釋し盡すべきものではない、肉體としての活動をも、併せて解釋せねばならぬものなるぞ。而も、亦、良心として、心としてのみ解釋し盡されざるが如く、肉體としての活動のみにてても、其の解釋は了はるべからず。必ずや、心肉不二一體としての解釋ならねばならぬぞ。其の「心肉不二一體」としての「那的」は、是れ「那的」ぞ。曰く「英靈也、渾身、是れ英靈也。心も是れ英靈なるぞ、肉も是れ英靈なるぞ。心としての英靈と、肉としての英靈との二物あるではない。均しく之れ英靈なるぞ、不二一體の

英靈なるぞ、同一英靈の活動状態なるぞ。只、それ五官を分域して境線とし、其の同一英靈の活動状態を截断区劃し、氣態の活動状態を以て、無形とし、心性とし、知識とし、感情とし、意思とし、固態の活動状態を以て、有形とし、肉體とし、實行とするに過ぎざるものぞ。故に吾人人類の満足する所の者は、氣態としての活動状態を以て足れりとせず、心性としての活動状態を以て足れりとせず、固態としての活動状態を以て足れりとせず、肉體としての活動状態を以て足れりとせず、心體觀照調和一致したる時の活動状態に達して、初めて満足する者なるぞ。吾人人類は、渾身、是れ英靈也、英靈は英靈としての活動あり、その活動としての全活動が、茲に大觀照大調和したるの大状態に達して、初めて満足するものなるぞ。故に吾人人類としての英靈は、英靈としての活動状態が、心肉觀照調和して不二一體たる活動状態に達したる時を以て、初めて満足するものなるぞや。かくてこそ、良心の那的たるも、それ初めて了解し、會得するに足るものなれや。心と體との別物なりと思ふは、猶、在來の良心説の如く、心の外に、別に本心本性ありと誤認したる者と同一轍なるぞ。(委細は、大日本世界教天照大神宮、第一棟、第二棟、及至、第十三棟に辨彰す。)

### 第六十三節 本体大本體としての神に對する古今の諸信仰、諸解

釋——世は亦この本体大本體を神とする者あり。單に原原子とする者あり。理法とする者あり、心性のみとする者あり。其の神とするものは、唯心説の進歩したる者にして、原原子とする者は、唯物説の進歩したる者なるぞ。

然れども、心物一體とすれば、唯物論としての原原子説は、已に破れたり、唯心説も、亦破れたり、唯理説も、亦復、破れたるものなるぞ。そはその人生宇宙、天人萬有は、物のみにあらず、心のみにあらず、理のみにあらず、物と心との二物にもあらず、物と心と理との三物なるにもあらず。已に既に一體なる者とすれば、其一體の外に、別に理法として存在し得べきものならず、理性其的も、心と物とに相依り相待たては、發顯し得るものでない、活動し得べきものでもない。其活動は、猶、是れ心と物との活動と異なることなし。心其的も、理と物とに相依り相待たては、亦獨りして發顯し得る者でない、活動し得る者でもない。其活動は、猶、是れ理と物との活動と異なるることなし。物其的も、心と理とに相依り相待たては、亦復、獨りして發顯し得るものでない、活動し得るものでもない。其の活動は、猶、是れ理と心との活動と異なるこ



となし。理の外に心なく物なく、心の外に理なく物なく、物の外に心なく理なし。理と云ふ時は、已に心あり物あり、心と云ふ時は、已に理あり物あり、物と云ふ時は、已に心あり、理ありな。理と云ふも此の目的也、心と云ふも此の目的也、物と云ふも此の目的也、均しく之れ此の目的也、此の目的の活動也、同一體の活動也。知れや、その同一體の活動なることを。別に理法其的存在して活動するものではない。別に心性其的存在して活動するにわらず、別に物質其的存在して活動するでもない。同一體の活動が、心と活動し、物と活動し、理法と活動するに過ぎざるものぞ。その活動の或る範圍は、心としての活動状態を發顯し、或る範圍は、理法としての活動状態を發顯し、或る範圍は、物としての活動状態を發顯するので、均しく之れ活動なり、活動状態なり、同一體の活動なり、同一體としての活動状態なるものぞ。唯、是れ吾人人類の感官意識に分斷區劃して、その主宰的に活動する状態を抽象しては、心と稱し、軌範的に活動する状態を抽象しては、理法と稱し、堅固的に活動する状態を抽象して、物質とは稱するものぞ。而も是れ心と理と物との三個三體ありて獨立關聯するものではない、均しく之れ一體の活動なるぞ一體としての活動状態なるぞ。この

一體なるものを名けて「英靈」と稱す。それ唯だ、英靈也、英靈の活動状態なるぞ。茲に吾人人類の五官を境線分域として、其の英靈の活動状態を截斷し區劃し、氣態の活動状態たる者、をば、無形とし、心とし、理とし、固態の活動状態たる者、をば、有形とし、筋肉とし、物質とするに過ぎざるぞ。而も有形、決して有形にわらず、物質は時時刻刻に氣態に變じつゝあるものぞ。無形、決して無形にわらず、氣態は時時刻刻に固態に變じつゝあるものぞ。是れ猶、一體の英靈を分斷して、心とし、肉とすると一般なるぞ、一體なる英靈の活動状態を五官に權衡して、「心性」と稱し、「肉體」と稱すると一般なるぞ。

然則、心肉たる英靈と、心理物たる英靈と異なる乎。曰く同一也、同一英靈也。一は個人としての英靈にして、一は、大宇宙としての英靈也。個人としての英靈は、大宇宙としての英靈の一分也。決して二靈あるにはわらざるものぞ、不二一體たるものなるぞ。只是れ狹義に解すれば、心、肉、理也、小英靈也。廣義に解すれば、心性、理性、原子也、大英靈也。

夫れ已に心肉は英靈也。小英靈也。小英靈の活動状態也。心理氣は英靈也、大英

靈也、大英靈の活動状態なり。更にその小英靈と大英靈とは同一英靈也。大英靈也。大英靈の活動状態を分割しては、心とし、理とし、物質とし、小英靈の活動状態を、分断しては、心とし、理とし、肉とするも、其實<sup>ニ</sup>同一也、同一の英靈也、大英靈たるに過ぎざる者ぞ。大英靈としての活動状態たるに過ぎざる者ぞ。故に個人として、心が本たるにあらず、肉が本たるにあらず、理が本たるにあらず、心と肉と理とは同一英靈の活動状態なるぞ。宇宙としては、心性が本元たるにあらず、物質が本元たるにあらず、理法が本元たるにもあらず、心性と理法と物質とは、均しく、之れ同一英靈の活動状態たるものなるぞ。其の「本元」たるは、心にあらず、肉にあらず、理にもあらず、心性にあらず、理法にあらず、物質にあらず、唯これ英靈なるぞ、大英靈なるぞ。知れや、吾人人類の感官意識より、同一英靈を分断区割し、其の氣態的、主宰的、活動状態の強度なるものを抽象して、心と稱し、精神と稱し、氣態的、軌範的、活動状態の強度なる者を稱して、理性と稱し、法性と稱し、固態的、堅碍的、活動状態の強度なる者を以て、原子と稱し、物質と稱し、筋肉と稱するに過ぎざるものぞ。別に理と云ひ、法と云ひ、道と云ふものあらんや、別に心と云ひ、精神と云ひ、別に原子と云ひ、物質と云ふもの

ありて存せんやぞ。

世界開闢幾萬年、有史以來幾千年、古今東西茫茫たり、未だ以て這間このあいだの消息を喝破洞達せず、心的精神を以て本元とし、肉的細胞を以て本元とし、心性を以て本元とし、理法を以て本元とし、物質を以て本元とし、而して他を以ては、悉く其の發顯する所の者とし。或は「心物二元」の存するものと信じたる等の如く、渾て皆未だ以てその本元に洞達すること能はざりき。その「一元説」を主張する者も、何故に他を發顯するかを説明すると能はず、二元説を主張する者も、何故に二元として對立するかを説明すること能はず。更に理法を本元とする者に向つて、「心と物とを除き去て後の理法とは如何、心と物と以外の理法とは如何、心と物との以外に、理法は如何にして實在することを得るや、心と物との以外に理法を説明すること能はず、<sup>ニ</sup>心と物とを借りて<sup>ニ</sup>初めて理法の那的たたることを説明し得るものとせば、是れ理法が心と物とを發顯するにあらずして、心と物とが理法を發顯したるもとはなるぞ」と詰問すれば、直に窮して遁走するものぞ。乃至、物を本元とし、心を本元とする者も、無形なる心は、いかにして、有形なる物質を發顯し得るものぞ。有形なる物質は、何故に

無形なる心を發顯することを得るものなる乎」と難詰すれば、亦均しく窮して遁走しつゝあるものぞ。更に「二元として對立するは如何、有形なる物質と、無形なる心性との反對なるものが、いかにして、抱合一致しつゝある者乎」と詰問せられては、二元論者も、久しく煩悶して、亦未だ其の答を爲すと能はず、今は殆ど墓下に屍を埋めつゝあるものぞ。是等は皆之れ、五官を分域としたる有形無形の葛藤を喝破すること能はざりしに由來するものたるぞ。

夫れ已に心肉一體たる根本本体、心理物一體たる根本本体は、判然したり、その英靈大英靈たることを了解會得したり。而も吾人人類は、更に本体の本體たる大本體を認るものぞ、認めざるべからざるものなるぞ。換言すれば、英靈は、いかにして天照發顯するものなるかを觀ずるものぞ。然れども、そは後篇に辨彰しあれば、茲には略するとして、（委細は、大日本世界教天照大神宮、第一棟、第二、第三、第五）さて、その「神」と稱するは如何、古今東西に於て、「神」とは、いかに會得しつゝありしものぞ。古今東西多くは、人生宇宙、天人萬有の本元たる「心物の本元たる」心物一體の根本大極を名けて、「神」とは稱しつゝありしものぞ。然れども、その心物の一體

たることすら、未だ明瞭に會得し能はざりしものなれば、その神と云ふ神をも、亦復、充分に會得し得たるものとは思はれない。されども、その「神」とし云ふ神は、いかに會得しつゝありしもの乎、其の説明の内容を、一先づ究明せねばならぬぞよ、究明して、其「神」と云ふ神其的の實質と、之に對する信仰、解釋、實行等をも吟味せねばならぬぞや。

知れや、其「神」と云ふ神には、一神教あり、超在一體教あり、信神教あり、多神教あり、庶物教あり、萬有神教あり、汎神教あり、内存一體教あり、無神教あり、自然神教あり、萬有理性教、萬有物質教等あり、各自相互に對抗睥睨して、他一切を推倒破喝せんずる勢あるを。

第六十四節 庶物教と多神教——天體の日月星辰を神とし、地上の水、火も神とし、奇巖古木をも神とし、怪禽怪獸等をも神として、之を祠るは、太古未開の時代なりしぞ。太古未開の時代は、人間の知識經驗の及ばざる者を見ては、聞きては、神妙不可思議なる者として、風雨電雷、奇巖古木、怪鳥怪獸等を、悉く神なりとして祀りしものぞ、後世之を稱して「庶物教」とは名けたるぞ。

人類としての知識、情感、意思、經驗、歴史等の漸漸次第に進歩發達するや、風雨電雷等を以て、神の所爲なりとして、各自司る所の神ありとして、之を祭祀し、日月には日月の神あり、風雨には風雨の神ありて、之を天照らし、之を天吹かし、之を天降らすものぞと信じ。その威嚴として、苟も人類に勝るの威嚴を有する者は、是れ人力にあらざりとして、悉く神也として、神の所爲なりとして、之を祀に祭りたるものぞ。その威嚴を信ずるの極は、人間の卓絶したる英雄豪傑をも、神也として之を祭り、その崇高なる情靈は、段段歩歩發しに發して已まず、更にその祖先をば尊敬し、是れ我が家の神也として祀りに祭しものぞ、是れ天神地祇の別あるに至りし所以ぞ、後世之を稱して、多神教とは名けたるぞ。多神教とは、庶物教の進歩したる者なりと申すぞや。

第六十五節 一神教と萬有神教 然るに、人類の智識經驗等、次第次第に彌益發達進歩するや、信神の念も、亦次第次第に發達進歩し。神としては、最も力ある神を信ぜざるべからず、最も力あるの神は、最上の神たらざるべからず、最上の神は、唯一神ならざるべからざるものぞと云ふて、唯一神教を唱道するものあるに至

りたり。それと同時に、亦神とし云へば唯一神たるべからず、一切存在せる者は、皆神なり、萬有は總て之れ神也、大宇宙は之れ神也、と唱道する者あるに及べり、是れ萬有神教なるものぞ。

然れども、歐米に於ける萬有神教とは、漸漸發達して、神と世界との有機的關係を脱明し、彼の神と世界とを、別別にする普通なる舊式的有神論に反對する教理の總稱で、はては、二様の意義を發顯するに至れるぞ。そは餘の義にあらざり、神即世界、世界即神とすれば、世界が主なるか、神が主なるか、いづれをか主従として論ぜざるべからず。於是乎、神を主位として、世界を神に歸するものと、世界を主位として、神を世界に歸せんとする二派を生ずるに至れるぞ。均しく之れ萬有神教なれども、神を主位とすれば、神のみにして宇宙の存在を認めず、世界を主位とすれば、世界のみにして、神を認めざる無神論たるに歸す。是れ全く反對の見解を爲すに及べるぞ。然れども、均しく之れ萬有神教にして、此の如く反對の見解あるべきものでない。其の説は更に進歩して、最も狹義なる哲學的解釋を爲すに至れるぞ、其の解に曰く、「萬有神教」とは、有限世界の單に——唯一——永劫——絶對——なる實在の一變態、一制限、一

部分、一方面にして、而もこの實在の外に、亦何物も存在し居る者でない。極言すれば、神と世界との二物あるにあらざ、神と世界とは、同一體なり、と説く所の教義とはなれりけるぞ。

### 第六十六節

諸國の唯一神教と、三教の唯一神教——人生宇宙、天人萬有、唯一最上の神とは、獨り猶太教——基督教——回教の三教のみ、唱道するに止まらず、印度の大梵天の如きは、印度に於ける唯一最上の神として、——宇宙絶對無比の神として——信仰したるものぞ、希臘にも、埃及、阿刺比亞等にも、唯一——絶對——最上——の神は、感得唱道したる者なるぞ。只その猶太教、基督教、回教等の三教は、唯一神のみにして、亦別に神あるを認めず、多神の存在を許さざるの信仰なるぞ。

抑も古來、印度には、唯一最上の神たる大梵天に反對して、萬有神教、起りたるものぞ。更に印度に於ては、萬有神教と多神教とは、抱合せんとして、當時より已に默契しつ

つありしものぞ。古來印度に於ける唯一最上の神教に對して、萬有神教の起りたるが如く、今日亦唯一神教に對して、汎神教なるもの起り來れるぞ。汎神教とは汎心論の進歩したる

者なりと知れや。

### 第六十七節 唯一神教、超絶一體教、信神教と汎神教、内存一體教、

及、無神論——唯一神教は、超絶的にして、汎神教は、内存的なるぞ。「神」は宇宙萬有に超絶するものにして、人生宇宙、天人萬有は、悉く神の意匠の發顯する所也、と云ふは、唯一神教也、是れ神を以て宇宙萬有の外に實在超絶すると信ずる者なるぞ。故に亦、超在一體教とも云ひ、更に無神論者、及、自然神教、萬有神教等に對して、信神教とも申すぞや、信神とは人格的神あるを信仰する意味なるぞ。

「神」は人生宇宙、天人萬有と同體なるぞ、宇宙萬有は神なり、神其的の發顯する所の者なり、寧ろ、神は其の發顯したる所の萬有中に存在す、故に「神」は、其的によりて、神あるを認むるものなり、例へば、神は、人間によりて、神なることを認むるが如きものなりと云ふは、汎神論なるぞ。これ「神」は、宇宙萬有の中に存在する者也と信仰するものなるぞ、事事物物、之れ神なりと信仰するものぞ。故に之を、具存(若しくは、内存)一體教とは申すぞや。「汎神論」は、被布の着色を變じたる萬有神教なりと知れ。更に萬有神教の形式を輕妙に淡裝したる者は、汎神教なりと知れ。今日は「汎神論」を、以て、

有神論、無神論を調和したる者なりとして、宗教家も、哲學家も、科學者も、雙手を舉げて、之れに與みする者多きを見るぞ。何となれば、有神論に對する無神論は、古來よりして、希臘にも、印度にも、支那にも、之れありき。「無神論者」は、物質萬能主義、若しくは、理性全能主義にして、物質以外に神あることなし、理性以外に神あることなしと唱道する一派なるぞ、是れ蓋し實驗上、推理上、將た合理上、最も簡易直截なるものなるぞ。何人も容易に承知することを得るものなるぞ。而もその物質なるにもせよ、理性なるにもせよ、一種崇高敬虔なる情靈の煥發し來るは、争ふべからず、その一種崇高敬虔なる情靈の煥發し來る時は、神や否定すべからず、故に其の物質より煥發する心意的生活の情靈Ⅱ其一種崇高敬虔なる情靈Ⅱを以て、直に神なりとし、其理性より煥發する心意的情靈Ⅱ其一種崇高敬虔なる情靈Ⅱを以て、直に神なりと尊稱するに及べるものぞ、是れ亦調法なる説明ならずとせず。勿論、物質も、理性も、神たるには、相違なきものぞ。然れども、汎神論を以て、神としての解釋の全きに達したるものとせば如何、猶且、まだしき所少からぬぞや。

第六十八節 自然神教と萬有理性教Ⅱ自然神教は、唯一神を以て宇宙

萬有の根本本体と爲すは、唯一神教と同一見解なるぞ。然れども、唯一神教の如く、其の神を以て、直に宇宙萬有の人格的主宰者なりとは爲さず、その幾分が之を認むると雖、唯一神教の如く、嚴格なる意義を以て、神を全然、人格的に解するものとは異なるぞ。而して、亦萬有の變化を悉く神の自由意思に歸するは、唯一神教なれども、「自然神教」は、萬有の變化を以て、却て萬有自然の不變的法則に歸する者にて、唯一神教の可能的に贊成する所の超自然的を執らず、全然Ⅱ超自然的天啓、默示、豫言、奇跡等の怪異的所業Ⅱを放棄し、唯理性を以て宗教の規範とはするものぞ。故に世は之を稱して寧ろ、理性の宗教なりとは、呼び做すに至れるものぞ。

更に「萬有理性教」とは、理性は絶対Ⅱ即ち宇宙の本体なりⅡとの哲學的見解を稱する者にして、其の説の主なる者を舉ぐれば、哲學は學問にして、詩歌ではない、されば、哲學の對象は、直觀せらるゝものではなく、思惟によりて理解せらるゝものにぞある、而もその對象とは、絶対者なり。已に既にその絶対者は、思惟によりて、餘す所なく理解せらるゝものとせば、是れその絶対者としては、論理的のものでなくてはならぬ。さりとて、宇宙の根本本体は、論理的の者である、換言すれば、理性ばかりなり

と云ふに歸するぞ。さて、亦、佛教の眞如法性説は、亦是れ一種の萬有理性感なり。然れども、眞如法性説には、不可思議解脱門等ありて、同一に論斷すべきものならぬぞ。(以上六十四節より六十八節迄の委細は、大日本世界教天照太神宮第十七機、十八機、乃至、十二機に影辨す、萬有理性感は、始て、佛敎の眞如法性説と同じと雖も、佛敎の眞如法性説は、萬有理性感より、更に甚深微妙にして、同一に論斷すべきものではない、而も、豈に之を論斷せんとするれば、其の説甚だ廣大なるを以て、八家九宗乃至、十二三宗に涉らざるべからざるを以て、短篇の能くすべき所にあらず、已に本論に論斷しあれば、今は已むことなく省略す、委細は大日本世界教天照太神宮第二十機、乃至、第二十九機に辨影す。)

第六十九節 諸教義の調和融會と總合統一——唯一神のみ、他は神と

すべき者なし、神として拜するに足るものなしと云ふ、唯一神教は、偏せり、黨せり。そは、その神として崇敬すべきは何ぞ、神としは、人生宇宙、天人萬有を天照發顯するを以てにあらざるや。若し夫れ神としての神が、人生宇宙、天人萬有を發顯天照するとなくば、神として崇敬すべき處、何くにありや。神其的のみとせば、神は何の爲めに實在するの必要ありや、神は實在するの必要なのみならず、神として實在するとも能はぬぞ。そは神其的のみなれば、活動するの必要なければなり、活動せざる者は、是れ生命なきものぞ、生命なきものは、實在することを得ざる所以ならずや。

而も神の實在するは、神としての大生命あればなるぞ、大生命あるが故に、大活動するものぞ。大活動すれば、神は神のみとして存するを得ず、是れその大活動よりして、人生宇宙、天人萬有を發顯天照する所以なるぞ。人生宇宙、天人萬有は、神より天照發顯したるものなるぞ、神より發顯天照したる人生宇宙、天人萬有は、亦これ神其的なるぞ。宇宙萬有を現象とすれば、神は本体也。本体が神なれば、現象も亦神なるぞ。神は尊きものとせば、本体としての神のみ尊きにあらざる、現象としての神も、亦復、尊きものぞ。現象の神たる宇宙萬有の發顯飛躍あればこそ、本體としての神の神たる尊き所以をも知られつれ。現象神たる宇宙萬有の發顯飛躍することなくんば、本体の神としての尊敬すべき所、それ將た何くにありや。然則、獨り、唯一神のみ尊きにあらざる、多神教も亦た是れ尊きものぞ。一神、多神、本體、現象、いづれも之れ神にして、同一の神にして、その相待てこそ、全き神としての大稜威を大天照し、大靈光を大赫灼たらしむるものなるぞ。さりとは、人間を神とし、風雨電雷、日月星辰等を神とする、亦何の不可なる所ありや、一微塵も是れ神なり、神として尊敬し、更に萬有皆神なりとして、萬有各自に、其分を全ふしつゝ、あるの神能神徳を認め得る迄

に達せざるべからざるものなるぞ、一微塵なりとて、之を輕じ之を忽にして、明りに其分を毀つものあれば、是れ直に自己其的を毀つものなるぞ、萬有を毀つものなるぞ、人生宇宙を毀つ者なるぞ。神其的を輕んじ、神其的を忽にし、神其的を毀つに至れる者なるぞ。唯た其れ一微塵なれども、其の一微塵は、人生宇宙に關聯して缺くべからざる天職の一分を活動しつゝあるものぞ。その一活動は、實にそれ人生宇宙、天人萬有に重大なる影響を及ぼしつゝある者で、一微塵には一微塵としての良能あり、神徳あり。更に其の一微塵の神たることを認め得るに至りてこそ、初めて自己の良能神徳をも、自己の神たることをも、より明かに認め得るに至るものぞ。知れや、宇宙同根、萬有一體、總て之れ神にして、神より發顯したるものにして、各自は皆是れ各自としての神として、活動飛躍しつゝあるものぞ。自己も神なり、神の發顯する所なり萬有も神なり、神の發顯する所なり。唯その發顯に於ける活動飛躍には、大小廣狹等あり、其の勢力にも、消長盛衰等あり、故に現象としての神には、各自、その良能威徳に差別ある所以なるぞ。蓋し活動としては平等たるを得ず、平等のみなれば、活動するの必要なく、活動することも能はざるものぞ。已に活動と

云ふ時は、大小あり、消長あり、差別なかるべからざるものぞ。大小あり、消長あり、差別あるが故に、亦その活動飛躍あるを見るものぞ、活動に大小強弱あり、飛躍に消長盛衰あるは、必然的結果なるぞ。是れその現象の神に、大小の神祇ある所以にして、庶物教、多神教等の、天然自然として、人間に煥發し來れる所以なるぞ。更に宇宙萬有は、宇宙萬有としての不變的自然法則、寧ろ、その宇宙萬有たる必然的良能良徳あるものにして、宇宙萬有、悉く是れ神なりとしての萬有神教、汎神教、自然神教等の起り來れる所以なるぞや。

以上の意味よりして觀ずれば、唯一神教、多神教、庶物教、萬有神教、汎神教、自然神教等としても、其の實は一也。否定すべき所あることなし。智識經驗の未だ發達せざる太古は、神妙不可思議なる庶物を以て神とし。其智識經驗の發達し來るや、庶物を司る所の各自の神ありとし。亦一方には、之に反對なる信念發し、多神なれば根本神なかる可らず、統一神なかるべからず、根本神は唯一神なり、唯一神は全能なり、他の神の及ぶべき所にあらず、寧ろ神とするにも足らずとして、本体にのみ偏する、一神教の起り來れるものぞ。而して、顯象なければ本体なく、多神なけ



れば亦、一神あることなきを知らざるに至れり。かくて、一神多神の衝突は已むことなし。於是乎、その衝突を調和せんとして、唯一神教派よりは、宇宙萬有は、神の自由意思より發顯したるものなれども、發現して後は、萬有は萬有としての自然的不變法則ありて行動する者なりとして、別に萬有としての良能良徳あることを認むるに至れるぞ。而して、多神教派よりは、亦その衝突を調和せんとして、本來、一神なく多神なく、萬有悉く之れ神なりとの、萬有神教起り來れる所以なるぞ。亦その一方には、物質のみ、理性のみ別に神あることなしとの無神的、萬有物質教、萬有理性教等の起れるが故に、その物質が、その理性が、直に是れ神なるものぞ、神はその物質理性の中に内存するものぞとの、汎神論の顯れ來る所以なるぞ。然れども、遂觀すれば一也。庶物教としても、多神教としても、一神教としても、自然神教としても、萬有神教としても、物質萬能教としても、理性全能教としても、汎神教としても一也、同根一體なるぞ。

知れや、本來其的の、或る程度を抽象して庶物神とし、或る程度を抽象して多神とし、或る程度を超覺して、唯一神とし、自然神とし、或る程度を抽象して萬有神とし、更に

或る程度と概念し、觀念し、抽象して、物質とし、理性とし、汎神とするに過ぎざるものぞ。其の質としての體は、均しく之れ一にして、本來別物なるものにあらざるぞ。庶物神、多神、萬有神、自然神、物質神、理性神、汎神等を以て尊ぶに足らずとせば、一神も亦尊ぶに足らず、一とは多に對しての一なるぞ、多にしてなくば、亦一もなきものぞ、現象なくば、本体も亦なきなり。一にして尊ぶべくば、多も亦尊ぶべく、一神の尊ぶべくば、庶物神、多神、自然神、萬有神、汎神等、亦復、尊ぶべきぞ、本体尊ぶべくば、現象も、亦復、尊ぶべきぞ。由來、本体、現象とは、二物あるに非ず、一體なるぞ。只、其的の靜態を質とし、體とし、本体とし、其的の働態を量とし、用とし、現象とするに過ぎざるものぞ、而も其の靜態や決して靜態たらず、働態や決して働態たらず、動靜一體、均しく之れ神なり、均しく之れ神なれども、質として體として、本体、大本體としては活動し、量として用として現象としては活動し、本体としての神ともなれば、現象としての神ともなるが、神の神たる本体なるぞ、大本體神なるぞや。是れその本体、現象、一神、多神、庶物、自然、萬有物質、理性、汎神等の相共に相待て全き所以なるぞ、尊き所以なるぞよ。亦何ぞそれ、是れ、庶物教也、是れ、多神教也、是れ、一神教也、是れ、自然神教也、是れ、萬有神教

也、是れ「物質教」也、是れ「理性教」也、是れ「汎神教」也として、相共に對抗睥睨するの必要あらんや。 爭論悶着するの必要あらんや。

庶物は庶物神として、自然は自然神として、多神は多神として、人間は人間神として、萬有は萬有神として、將た物質は物質神として、理性は理性神として、更に宇宙は宇宙神として、活動飛躍し、進歩發達し、到頭以て其の根本大極たる大本體神に復歸還元するものぞ、せざるべからざるものぞ。 復歸還元しても、其儘に止むべきものならず、更に復、現象神として發顯し、萬有神として活躍し、その發顯活躍しては、亦復、大本體神に復歸還元するものぞ。 抑も本體現象均しく之れ神也、神としての兩面也、この兩面の一致したる合體全身を「大本體神」とは云ふなるぞ。 古今東西、そのいかに相對して相争ふとて、庶物神も多神も一神も自然神も萬有神も物質神も理性神も汎神も、均しく之れ質を同ふす、均しく之れ神也、現象神也、本体神也、大本體神也、大本體神としての天照發顯也、大本體神としての活動飛躍也。 是は其の大本體より發顯したる者は、依然、大本體なるぞ、神より發顯したる者は、依然、神なるぞ、均しく之れ神也、現象神也、本体神也、大本體神也、それ將た何の輕重する所かあるぞ。 只その

「活動飛躍する範圍程度」を分別抽象して、是れ「庶物神」也、是れ「自然神」也、是れ「多神」也、是れ「唯一神」也、是れ「萬有神」也、是れ「物質神」也、是れ「理性神」也、是れ「汎神」也とは差別するに過ぎざるものぞ。 知れや、庶物を除けば、萬有なく、宇宙なく、自然なく、多神なく、一神なく、物質なく、理性なく、汎神なし。 物質のみで活動すること能はざるが如く、理性のみにて亦活動すること能はず、「若し夫れ宇宙、萬有、庶物、物質等を除きて、唯一理性のみ、若しくば、唯一神のみ、獨りして、如何なる邊に、いかにして存在し、實在し得るか」と詰問せば、彼等は決して答辯し得べき者でない。 亦「理性を除きて、神と宇宙、萬有、庶物、自然とは、いかにして活動しつゝあるか」と難問せば、彼等はそれ均しく答辯すること能はざるものぞ。 神と云ひ、宇宙、萬有と云ひ、自然と云ひ、物質と云ひ、理性と云ひ。 更に多神と云ひ、一神と云ひ、若くば、自然神、庶物神、宇宙神、萬有神、汎神等と云はば云へ。 其の云ふ所の名稱こそ異なれ、其の質は同じき者ぞ、體は同じき者ぞ。 唯その質としての體の量として用として活動飛躍する範圍程度を、吾人人類の感官意識に觀照權衡して、之を抽象分別し、其抽象分別したる一範圍、一程度を、更に概念的に、觀念的に、推理的に、合理的に、實驗的實修的に、之を抽象意味した

る分分別別の名稱たるに過ぎざるものぞ。されば、以上總合調和の意味を以て、之を裁斷すれば、その各自各自が此の如くに差別あること當然ならずや。是れ實に大本體神としての發顯天照の活動態なり、活動態としての範圍程度なれば、其の範圍程度に照應して、此の如きの差別あること、蓋し、必然の結果なるぞ。

於是乎、庶物教も多神教も、一神教も、自然神教も、萬有神教も、理性全能教も、物質萬有教も、汎神教も、決して矛盾衝突すべき者ならず、諸教本來融會一致しつつあるものぞ。一教も魔道とすべきものあることなし、悉く是れ、眞神なり、眞神教なるぞや。

「然則、いづれの教趣を信仰するも可なる乎」。然り、いづれの教趣をも信仰せねばならぬなり。然れども、一教を信仰すれば、他は信仰せども可なりとの意味にはあらぬものぞ。庶物は庶物の神として、自然は、自然の神として、信仰すると共に、庶物神中にも、自然神中にも、わけて人間としての神をば、最も敬せざるべからず、人間神の中にも、其の能く人生に貢献したる所の君父偉人等の如きは、更らに敬せねばならぬなり、是れ庶物教、自然教を奉ずると共に、多神教を奉ぜざるべからざる所以のものぞ。一微塵も神なり、物質も神なり、理性も神なり、大宇宙も神也、神としての活動

飛躍あり。天人萬有は、その活動飛躍に依りて恩澤を受くると少しとせず、一念此に達すれば、均しく神として信仰せねばならぬなり、是れ亦物質教も、理性教も、汎神教も、萬有神教も奉ぜざるべからざる所以のものぞ。何ぞ、矧んや此等現象神、本體神の根本大極たる唯一大本體神に向てをや、信仰せざらんとするも能はざるものぞ。蓋し月も星も花も木も草も、雪も霜も氷も水も、雨も霞も嵐も霧も電雷も、皆之れ人生宇宙に必要にして、人類萬有の生活を助けつつあるものぞ、一微塵なりとて、之れを除き去りつつあれば、地球は遂に滅するぞ、地球なくば宇宙もなくなるぞ、地球なく、宇宙なくば、吾人人類は、いかにして生息するを得べきぞ。父母なくんば、我等は生る能はず、君王なくんば、世は亂れて、人生は發達すること能はず、忠臣孝子義人烈婦、乃至科學的、道學的、哲學的、宗教的偉人丈夫、聖賢君子等のなくんば、人生は相續して、此の如く發達進歩すること能はず。風雨、電雷なり、山川、草木なり、花鳥、風月なり、一微塵なり、一地球なり、大宇宙なり、將た原子、原原子なり、理性、大理性なり。更に君父なり、忠臣、孝子、志士、仁人、義人、烈婦なり、乃至科學的、道學的、哲學的、宗教的偉人丈夫、聖賢君子なり、それいづれか、人生宇宙に貢献し、吾人人類と天人萬有

とを擁護啓發しつゝあらざるものぞ。知れや、暗夜、未だ曾て知らざる人に提灯の餘光を受くるだも、その受くる所の人は、賢者偉人にして、與へたる所の人は、下郎賤女なりとも、その賢者偉人より下郎賤女に深く原意を謝するにわらずや。若し夫れ火難水難等の變事に際して、饑渴身に迫れる時、又は雲深く旅行して、深山幽谷、若しくは絶海孤島に於て、我を擁護する禽獸ありとすれば、いかに感謝の意を表すべきよ。人なれば其厚意を感謝すべきも、物なれば屁とも糞とも思はぬぞや、とは、餘りに理不盡の事なるぞ。人なればとて、物なればとて、その人生に貢獻し、吾人人類の生活状態を助長啓發するの効は一なる者ぞ。人一人にあらず、物一物にあらず、同一英靈なるぞ。人生に貢獻し、吾人人類の生活を助長せしめて、人類自然の成格を發達せしむるに、力ある者は、何ぞ、人と物とを擇ぶの要あるべき、人一人にあらず、物一物にあらず、同一英靈なるぞ、同一神なるぞ。知れや、宇宙同根、萬有一體なるぞ。是れ雷雨電雷、山川草木花鳥風月等をも、庶物神として、自然神として、其誼を認め、君父祖先師友を神として、其恩を報じ、志士仁人哲士達人聖賢君子を神として、其の徳を頌し、地球をも神とし、星界無數の天體をも神として、その功を尊敬し、一土塊なり

とも、一微塵なりとも、いはれなくして、之を輕んじ、之を忽にするの念あるべからず、まして、大宇宙に對してをや。神より發顯したる者は悉く神なるぞ、神としての發顯體なるぞ。人生宇宙、天人萬有は、悉く神より發顯したるものなり、神より發顯したるものは悉く神なり、神としての發顯體なり、發顯體としての現象神なるぞ。いかに花を得て月を待ち、隴を得て蜀を望み、つつ貪婪飽くことなき人の心も、神に達すれば満足するものぞ、いかなる智者も學者も覺者も、勇士も詩人も、理想者も、神までは冥想し得るも、神以上は、冥想することも、想像することも、能はざるものぞ。是れ神は天人萬有の極致なると共に、其の根本大極本体大本體たることを知るべきものぞ。神より出でたる者は神に還る、人人の念念、神を思ふて已まざると、豈に偶然ならんや。神より出でたる者は、神以上を越ゆる能はず、人人の神以上の境を冥想すること能はざるも、亦當然ならずや。神より出でたる者は神に達して満足す、人人の神に達して後は、亦何等の不平なきことも、それ偶然ならんや。而して、亦其現象神たる人生宇宙、天人萬有にして存在せずんば、神其的も神たることを發顯すること能はざるものぞ。於是乎、神と萬有とは、相待て全きものぞ、本來二物にあら

ず、一體たるものぞ。其の一體たるの證據は、人生宇宙、天人萬有は、悉く關聯一致し、小は一小微塵より、大は大宇宙まで關聯合體し、一として全然獨立するものはなきぞ、自然と云ふも、物質と云ふも、理性と云ふも、其的のみを、人生宇宙より抽象分離して、全然獨立せしむること能はざるぞ、其的自身のみも、人生宇宙より隔離して、全然獨立するとは能はざる者ぞ。是れ、その人生宇宙、天人萬有の同根一體たることを知るべきものにあらずや。唯、是れ神の本体大本體として、天照發顯するよりして、人生宇宙、天人萬有とは、活動飛躍したる現象なるぞよ、天照發顯としての活動態なり、活動態としての分分的飛躍現象なり、飛躍現象としての千變萬化なるぞ。而も之れ神としては、均しく神なり、神としての天照活躍に過ぎず、天照飛躍としての千變萬化に過ぎざればなり、同一の神なればなるぞ。是れ其の庶物教も此の如く信仰し、多神教も此の如く信仰し、一神教も此の如く信仰し、自然神教も此の如く信仰し、物質全能教も理性萬能教も此の如く信仰し、萬有神教も亦、復、此の如く信仰し、更にその大本體としての全神をも此の如く信仰せば、是れ實にその身も、亦、復、神にして、神神相對し、相互に敬虔にして、其の念念言言行の溫和嚴肅なること、亦人

間以上の大活動大飛躍あるに至るものぞ、人としての神、神としての人たる本体天職を盡すとともに、他の人生宇宙、天人萬有をしても、亦是れ神たらしめたるものぞ。これそのいかに信仰解釋實行の圓滿快活なるよ。かくてぞ皆それ、眞神なり、眞神教なるぞ。

眞神は是れ、全神にして、眞神教は是れ、全神教たるに達したるものぞ。それ已に諸教いづれも、眞神教にして、本來融會一致しつつあるものとせば、勿論その一教にのみ偏執すべからず、諸教の融會一致しつつある實質に照應して、總合統一的のものたらざるべからざるぞや。

然らば

如何に總合統一して、いかに名稱すべき乎。

曰く

その實質の融會一致しつつあるが如くに、總合すれば、直に統一することを得るものぞ、已に總合統一に相應するの名稱は、自ら煥發しつつあるものぞ。勿論、總合統一教なるが故に、獨り庶物教たるべからず、獨り多神教たるべからず、獨り一神教た

るべからず、獨り自然神教たるべからず、獨り物質萬能教、獨り理性全能教たるべからず、獨り萬有神教、獨り汎神教等たるべからず、之を總合統一したるの『全神教』たるべからざるものぞ。

全神教 聞け

全神教 祝へ

全神教 歌へ

『全神教』は諸教を總合統一したるの名稱ぞ、諸教は總て全神教的に信仰解釋實行せざるべからざる者ぞ。然らざれば、その活動飛躍する範圍は、狹隘固陋にして、前途の永續覺束なきぞ。猛然奮然として、此處、一番の大覺悟、大信仰、大解釋、大實行を要するぞや。

第七十節 信仰主體の大本體に對する諸學諸教の究明と不完全

——それ已にあらゆる諸の信仰は融會したり、一致したりな、あらゆる諸の教義は

總合したり統一したりな。然れども、猶最後の大問題ありて存す。是れ實に諸教として未だ解決し能はざる所なるぞ、而も『全神教』として解決し、以て千古の疑惑を一拭し、天人萬有をして、爽然觀照し、釋然悟入し、廓然超樂せしむべきものぞ。

抑も「最後の「大問題」とは何ぞ。

信仰の主體たる人生宇宙、天人萬有の根本大極たる本体、その本体の本体たる『大本體神の實在』是也。

第一項 唯一神教の缺陷不明——神の實在は、宇宙の外に超絶するものとせば、神と宇宙との關係は如何、神の四圍と、宇宙との關係は如何、曰く、そは神秘なり、不可思議也、人類の能く思議し得べき所にあらざる也と。曰く、それ已に神秘にして、人間の思議すべからざるものとせば、神は宇宙の外に超在するものなりとは、何を以て之を承知し得るぞ。思議すべからざるの神は承知すべからざるものぞ、承知すべからざるの神は、宇宙の外に超在するもの也とは云ふべからざるものぞ、言ふこと能はざるものなるぞ。然れば、神としての實在は、是れ未だ「唯一神教」として、「超在一體教」として、説明なき的なり、説明すること能はざるものなるぞ、缺陷

あり、不明なり、未だ以て完全なる説明とするに足らざるぞ。』

第二項 汎神教の缺陷不明——神は宇宙の内に實在し、萬有個個の中に實在するとせば、宇宙の外は如何、曰く宇宙の外は無邊無限にして知るべきものならずと。曰くそれ已に宇宙の外は無邊無限にして知る可らずとすれば、是れ其神は腹内のみ、臟腑のみにして、面貌を有せざるものぞ、天上天下、何の處にか、此の如き妖怪あるぞ、已に「宇宙内存説」を唱道する、汎神説は、亦宇宙の四圍十塞を説明せざるべからざるの責任あり、是れ無限也、無邊也、不可知也として、放棄遁走するを許さぬぞ、若し夫れ無限也、是れ無邊也、是れ不可知也として説明すること能はずんば、猶唯一神教の是れ不可思議也、是れ神秘也として説明すること能はざると一般ぞよ、何の擇ぶ所がある。外——唯一神教に向て、其神秘を追究せんとせば、先づ以て、内——自からの妖怪を退治する所なからざるべからざるものぞ。宇宙内存的汎神教も、缺陷あり、不明なり、未だ以て、完全なる説明に達せざるものなるぞ。

第三項 萬有神教の缺陷不明——大宇宙が直に神なりとは、萬有神教の唱道する所なりき。然らば、亦、大宇宙としての神の四圍は如何。四圍のありとせば、是れ

宇宙の外に宇宙の存するものぞ。さすれば、神と宇宙との關係は如何、換言すれば宇宙と宇宙との内外的關係は如何。更に宇宙の外に宇宙、その亦宇宙の外は如何。是れ實に萬有神教として説明すること能はざる所なるぞ。若し夫れ神としての四圍はなきものとせば、無邊無限なりとせば、是れ亦、汎神教と一般、面貌を有せず、唯その汎神教の内存説に反して、露骨的なりと雖、その面貌の説明に究するは、汎神説と共に、亦是れ轍を同ふするぞや。

且夫れ宇宙、直に神也、萬有、皆神也として、別に「大本體神の實在」を認めざる時は、これ萬有の歸着すべき標準點なきものぞ。さすれば、天人萬有の發達する要はなし、善人も神也、惡人も神也、禽獸も木石も神也、同一の神なるを以て、進歩するも神也、退歩するも神也、否、進歩と云ひ、退歩と云ふ標準もなきものぞ、進歩も退歩もなきに歸するぞや。已に進歩も退歩もなき者は、是れ活動すること能はざるに歸着するぞよ。天人萬有は、皆その神たるには相違なきも、さりとは、活動なきの神にして、其實は神とするにも足らず、神たることも能はぬぞ、活動なきものは自滅せざるを得ざれば也。「萬有神教」も、汎神教も、於是乎、缺陷あり、不明なり、益その説

明に窮して、其の不完全を曝露したるものなるぞや。

第四項 庶物教、多神教の缺陷不明——庶物教としては、勿論、多神教としても、未だ人生宇宙の大本體神としての究明にすら達せざる者なれば、其の庶物神としての神、多神としての神だに、未だ克くその意義を了解會得することさへ能はざるものなるぞ。奚ぞ矧んや、大本體神に至りては、その未だ究明解釋する所すらなきものぞ、未だ其の究明解釋すらなき者に向て、その解釋の不明瞭なることを追究するの要なきものぞ。唯、その多神教としては、進歩したる多神教としては、已に既に「大本體神」として、別に之を信仰しつつあるを認むるなり。而もその一神と多神との分際關係をば、未だ以て明哲めいせきに解釋すること能はず、いかに、況んや、その「實在的解釋」に至りては、唯一神教、萬有神教、汎神教等と一般なり、その説明には均しく窮しつつあるものなるぞ。缺陷あり、不明なり、固より以て其の説明は、幼稚なるものなるぞ。

第五項 無神的眞如法性說 萬有理性教 萬有物質教 萬有怪疑說等の缺陷不明——是れ人生宇宙の根本大極たる本体大本體を以て、理也、氣也、法也。とかの

因果的細胞的の無成格的信仰解釋なるぞ。例へば、佛教の因果無人の如き、眞如法性の如き——佛教の極意、釋尊の本懷は——寧ろ、因果無人の眞如法性說なるぞ、——は、支那の周易大極說——儒學の一理說——一氣說——理中有氣說——氣中有理說、——道學の玄玄說、自然無爲說——或は希臘、及歐米の今代に於ける哲學的科學的——實驗唯物說の物質恆存——實驗的、合理的、觀念的の勢力、若しくは、理性不滅——と共に、いづれも、皆、人格的、成格的の神と云ふを立てざるものぞ、大本體を以て人格的成格なしとするものなるぞ。然れども、成格なく——人なく——神なく——は、亦因果もなきものぞ、眞如法性もなきものぞ、理もなく、氣もなく、物質勢力も亦復なきものぞ。神人萬有を除きては、獨り因果の存すべき理なし、獨り眞如法性の實在すべきものでない、理のみ、氣のみ、物質のみ、勢力のみ、獨り實在し得べき者ならず。試みに神人萬有以外に、因果を示し見よ、眞如法性を出し見よ、彼等は直ちに窮して遁走せざるを得ぬ者ぞ。却て神人萬有に順應してこそ、因果も説明し、眞如法性も説明することを得るなれや。否——兩者相待てこそ——實に兩者相一致してこそ——完全に説明することを得るものなれや。乃至、理性也、氣也、物質也、勢力也、等と唱道



する一派も、此と同般ぞや、悉く皆、一部一時の解釋にして、共に未だ大本體としての全解とするに足らず、皆、共に其の窮する所のあれば也。大本體としては、斷じて一元、若しくは二元、若しくは三元、若しくは多元等にて、解釋し盡すべきものではない。「元」と云へば、亦それ、全元的解釋たらざるべからざるものぞ。無神論としては、そのいづれも、未だ以て缺陷あり、不明なり、全き解釋に達せざるものぞ。

夫れ人生宇宙の根本大極たる本體、その本體の本體たる大本體としての實在的解釋は、古今東西とも、未だ以てその全きに達せざるぞ。一元説も、二元説も、三元説も、多元説も、將た無神教も、庶物教も、多神教も、一神教も、自然神教も、萬有神教も、眞如法性教も、萬有物質教、萬有理性教、更に汎神教も、均しく其の一端を究明したる迄にして、未だ以て「全き解釋」とはするに足らず、いづれも、窮する所のあれば也。庶物教も、多神教も、一神教も、自然神教も、萬有神教も、汎神教も、猶唯物的、唯心的、唯理的、法性的、怪疑的等の極端なる無神論者等の、漸く一方面のみを究明し得たる者と、相去る幾許ぞ、唯それ比較的一日の長ありと云ふに過ぎず、未だ以て満足すべき者にあらぬぞよ。是れ更に勇猛奮進して、全神的、全元的、究明を以て、其の信仰解釋實行を全ふ

せざるべからざる所以ならずや。「全神教」の煥發、天照すること、豈に偶然たるべきぞ、天人萬有の要求勸請に應じて出顯したる者にあらずとせんや。寧ろ天人萬有の全神教<sup>そのもの</sup>的として出顯したるものなるぞ。然らば、全神教としての大本體に對する其の實在的信仰解釋實行は如何。(委細は、大日本、世界、天照、太神、乃、至、六十、神、に、辨、影、す)

第七十一節 日本民族の信仰、解釋、實行——日本民族の如きは、最も克く

「全神教的」に發達しつつあるものと云はざるべからず。その神話逸傳の如き、國史國典としての神話逸傳の如き、世界列國の神話逸傳に比較して、いかに完備卓絶せるよ。その大本體神をば、天御中主太神<sup>あまのみちのなす</sup>とし、本體神をば、高産神<sup>たかみけのかみ</sup>産の二神とし、現象神としては、八百萬神<sup>やっぴやうじん</sup>としつつあるが如き、いかに克く「全神教的」に、天照し、發顯し、發達活躍しつつあるかを見るべきぞや。而も是れ神として、此の如き分際差別ありと雖、神としては、均しく之れ神にして、大本體神たる天御中主神の分身分體として、之を信仰するが故に、亦殆ど、その間に輕重を置かず、各自長ずる所の神威神徳を崇敬して、之れを祭祀しつつあるなり。例へば、火には火の神ありとして、水には水の神ありとして、風には風の神ありとして、各自それ／＼に差別するも、其の功

は相待て相均しきものとする。武徳ある八幡神社も、春日神社も、楠神社も、文徳ある仁徳神社も、鎌足神社も、天満宮も、文武の分際差別こそあれ、その功は一なる。水の水たる所以と、火の火たる以所とは、その用こそ異なれ、功は則ち一なる。水は火の用を爲す能はざれども、火は水の用を爲す能はざれども、其功を論ずれば、即ち一なる。水のみにては用をせず、火のみにては用をせず、水火相待て水火の用を爲し、功を全ふする。其の間那等の輕重すべき所なき。文武の徳も相待て相全し、文なりとて、武なればとて、亦何の輕重すべき所ありや。神としては、何れも一也、異曲同功也、いづれも、皆各自應分の神威神徳を發顯したるものにして、活動したるものにして、唯その發顯活動したる現象活動を抽象差別して、文武の神威を分際し、水火の威力を分際するまでなる。則ち分際差別すると雖、發顯としては一也、同一の發顯也、活動としては一也、同一の活動也、現象としては一也、同一の現象也、神としては一也、同一の神也。その發顯活動現象は、均しく之れ大本體神なる天御中主太神の大稜威なる。大天照なる。大活動、大飛躍なる。均しく、之れ大本體たる天御中主太神の大稜威なり、大天照なり、大活動、大飛躍なりとせば、いかに本体と

しての二神現象神としての八百萬神に威徳の差別分際ありとするも、均しく之れ神也、天御中主太神也。其の間亦何等輕重する所なきもの。一に唯その分際に應じたる神威神徳を崇敬差別するは、亦最も大本體としての天御中主太神の大發顯大天照に相應し、大活動大飛躍に相當したるものにして、允にその宜敷を得たるものならずや、大日本古來の差引は、實に此に淵源由來するものなる。唯、未だ明かに其意味の解釋なしと雖、不知不識の間に、不言不語の間に、此の如く信仰し、此の如く解釋し、此の如く實行し、つつありしもの。かの同殿共床、報本反始の朝儀國典

の如き、亦最も尊ぶべき人道なれ、天道なれ、天人感應合體の神道なれや。勿論、支那、印度、希臘、埃及、阿剌比亞、一帯にも、其の古代は「全神教的の萌芽」は、なきにあらざりし。然れども、他の教理に推倒せられ、或はその國國が幾度か存亡興廢するにつれて、卒に克く發達すること能はざりしもの。獨り大日本皇國は、國として、一系連綿、天壤無窮にして、眼中全然興亡と云ふことなく、世界に比類なき絶大寶國なると共に、其の祖國的信仰は、嚴然として、亦他の教理に推倒せられず、却て他の教理は、祖國的信仰に同化し、其意を拜受し、體察して、祖國的信仰を堅固に擁

護しつつ、一方に其教を流布したる者なるぞ。儒教の如き、佛教の如き即ち是也。是れ日本民族の信仰解釋實行が、比較的無難に、最も克く『全神教的』に發達しつつあるものなるぞ。且その邦土を有機体として、大國魂命と尊稱表敬し、地球を有機體として、國常立尊として崇敬祭祠したるが如き、星界無數の天體を有機的として天常立尊と總稱し崇敬したるが如き、更に稷みこと云ひ、和魂わみたまと云ひ、荒魂あらいみたま—奇魂きみたま—幸魂さいみたま—として、の活動飛躍と云ひ、遂一究明し來れば、理化學を推倒し、倫理道德哲學を驚絶せしむるを始めとして、古今東西、一切の宗義學說を吞吐するに足るもの尠からざることを、茲に豫言し置くぞや。(委細は大日本世界教天照太神宮、第五十七條に辨彰す)

然れども、『全神教的』としては、未だ以て全き者にあらず、比較的にも最も克く全神教的に發達しつつあるものと云ふに過ぎざるぞ。何となれば、その大本體神たる天御中主太神としての實質實在は如何、その四圍は如何、人生宇宙との關係は如何、一神教的の超絶的實在乎、汎神教的の内存的實在乎、或は、萬有神教的の宇宙、直に天御中主太神なる乎。未だ皆判然たらざる者ぞ。是れ亦、世界列國、一切諸教と共に、全神教的に益々發達して、その完全なる信仰解釋實行を求めざるべからざる所以

なるぞ。その本体神たる二尊の解釋等の如きも、共に未だその全きに達せざるもの尠からざるぞや。(委細は大日本世界教天照太神宮、第五十七條、乃至五十三條に辨彰す)

### 第七十二節 歴史的異名と同一の解釋、及特寵と證明——抑も大本

體を以て、物と云ひ。心と云ひ。若しくは、心と物との二元なりと云ひ。若しくは、二元にあらず、一元なり、神なりと云ひ。若しくは、一元にあらず、二元にあらず、多元なりと云ひ。或は本体のみを神とし、現象のみを神とし、本体と現象とを同視して、均しく神なりとし、曰く一神也、曰く多神也、曰く庶物神也、曰く自然神也、萬有神也、宇宙神也、汎神也、原原子也、物質也、理性也、法性也、勢力也、と争ふに過ぎず。そのいかに争ふとも、均しく之れ人生宇宙の現象也、天人萬有の根本也。同一大極を分斷して、根本とし、現象とし、更にその活動發顯を分分に會得して、分分に解釋するに過ぎざるものぞ。其の質は同じ、其の量の異なるまでなるぞ。

大日本民族は、人生宇宙、天人萬有の大極大本體として、是れ天御中主太神也と尊稱し。支那民族は、是れ氣也、理也、天也、上帝也と尊稱し。印度民族は、是れ地也、火也、水也、風也、空也、大梵天也、佛陀也、眞如法性也、と尊稱し。波斯民族は、是れ火也、活火

也、靈火也、と尊稱し。希臘、埃及、巴比倫、或は阿刺比亞一帶も、是れ水也、火也、風也、地也、若しくは、一神也、多神也、と尊稱し。更に猶太民族の唯一神也、と尊稱し、始めしより、基督、マホメット等の之に呼應し、之を唱和し、盛んにその唯一神を贊美謳歌し。遂に卒に今日の歐米列國、及阿弗利加一帶は、最も多く唯一神也、ゴット也、エホバの神也、と尊稱歸依するに至れるものぞ。猶釋尊の佛教を立教したるより、亞細亞列國の多きは、悉く之れに歸依して、佛陀を尊稱するが如きものぞ。而も靜かに其蹟を吟味すれば、その名稱こそ異なれ、皆その人生宇宙、天人萬有の大極大本體也、として、此の如く名稱し、此の如く信仰するに外ならぬぞ。究竟すれば、その着眼發念の異なるよりして、言語文字の異なるよりして、其信仰の同じからず、其の解釋實行の同じからざるものぞ。其の實質は均しく、之れ人生宇宙也、天人萬有也、大極大本體也、同一體の實質なるぞや。そのいかに着眼發念を異にし、いかに言語文字を異にし、いかに其信仰解釋實行を異にするも、其目的は則ち一也、同一目的也、皆その天人萬有の根本大極に歸せんとするにあり、人生宇宙の本体大本體に化せんとはするものぞ。其の目的の同一なるが如く、其目的たる本体大本體の同一なるが如く、それ

より發顯天照したる人生宇宙、天人萬有も、亦復、同一也、同一の人生也、同一の宇宙也、同一の天人萬有也。均しく之れ、大極大本體其的の發顯天照なるぞ、活動飛躍なるぞ。その發顯飛躍する天照活動態こそ異なれ、天照活動する所以は、即ち一なるぞ、均しく之れ、大極大本體其的の大發顯大天照なり、大活動大飛躍なるぞ。人生宇宙、天人萬有たる量こそ相こそ分際差別あれ、其の量たるは則ち一也、相たるは則ち一也、宇宙萬有たるは一也。同一人生宇宙なり、同一天人萬有なるぞよ。

されば、人は均しく人也、いかに種を異にし、族を異にし、更に男女老幼、賢愚才不才の分際差別ありと雖、人も、同一の人なるぞ。その一人のみ、わけて神の特寵を受くべきものでない、人と云ふ人は、均しく皆一圓平等に、神の恩寵を享けつつあるものぞ、何人も神なり、神の發顯天照したる者なるぞ、神其的の發現身なるぞ、天照體なるぞ。故に何人と雖、神の恩寵を得得ることを得るものぞ、得ざるべからざるものぞ。茲に猛然奮然、刻苦勤勉して、之を得得したる者は、是れその恩寵を證明したるものぞ、更に之を實行する者は、正敷恩寵を全ふしたるものなるぞ。茫然、漫然、放逸、懈怠にして、之を得得せず、證明もせず、實行もせざる人は、自から、其の恩寵を放棄したる

者ぞ、是れその未だ以て神としての實位たかみくらに發達する迄の自覺的信仰と、宣明的解釋と、躬踐的實行との足らざるものなるぞ。

第七十三節 恩寵と天誅神罰——支那は中國也、中華也、天地秀靈の氣の扶與磅礪する所の國也。と自尊自負して、四圍の邊塞をば蔑視し、擯斥し、是れ夷狄也、是れ禽獸也、として伍せざりしは、支那民族にあらざるや。而もその中國中華的支那民族の放蕩驕奢にして、淫佚爛醉し、人の人たる道を怠るや、幾度か禽獸的夷狄に征服せられ、古代範疇の最も廣大にして、文質彬彬の制度典刑を建設したる周室は、夷狄より起りし君なるぞ。今日現在、禽獸的夷狄を奉じて、一天萬乘の君とは戴きつゝあるにあらざるや。天地秀靈の氣の頼みとするに足らざるや、此の如し、是れ中華的支那民族のみが、獨り天の特寵を占有するものにあらざるを知るべきぞ。印度波羅門種族は、梵天の金口より生れ出でたる最も貴き名門なり、一天四海、波羅門種族に及ぶものなし、故に他族と結婚すべからずとして、一時印度に大威力を恣にしたるものぞ。而もその一天四海、絶對無比の波羅門族が末路は、如何。其の教は、後日佛教に推倒せられて、殆ど亡びんとまでしたるにあらざるや。釋種は一天四海の

美望する所、其の教は、十方諸佛の贊美する所なるぞ。而もその種族と教との末路は、如何。その種族の王國は、釋迦在世中に滅亡して、社稷血食を絶つに至ると雖、釋迦を始め、其の一門教徒の怙然として、蹶起し、克く之を救ふこと能はざるのみならず、一人すら慨然として、意氣凜凜、難に投じ、義に殉じたる忠臣孝子、義人烈婦のなかりしは、何事ぞ。其の教は、亦復、後世に遷るに従ふて、波羅門の爲めに滅却せられたるよ。あはれ、今日では、釋迦種族と佛教とは云ふ迄もなく、波羅門族も、波羅門教も、佛教のみとして、波羅門教のみとして、立つこと能はず、相互に抱擁して、一種混合的なる印度教と化成し、それさへ、僅に奄奄として、其の一隅に氣息を存し得るばかりぞ。剩へ、其國は、英人蘭人等に、強奪横領せられ、今や全く亡國とはなれりけるぞ。一天四海の名族も、十方諸佛の贊歎教も、それ將た何の頼む所ありや。是を以て、波羅門族のみ、波羅門教のみ、釋迦族のみ、佛教のみ、獨り天の特寵を專有し、十方諸佛の加護を獨立する者に非ざることを知るべきぞや。獨り猶太族は、天帝の特寵する所にして、人間亦この光榮を獨占するものなしとまで、尊大に誇稱し、斷じて亦、他の人種とは結婚せず、唯その種族、唯その教徒のみにて、別に一天地を建設せんとするこ

との如何に光榮ある種族よ。而も此の如き特寵ある民族にして、光榮ある國にして、其國は如何、夙に亡國たり、その族は如何、久しく浮浪たり、世界到處に於て、嫌惡せられ、排斥せられ、つづつあるは何故ぞ。却て其の教より出てたる「基督教」は、歐米列國に歡迎歸依せられ、つづつあるこそ、本末を異にしたる逆比例にあらずや。天帝の特寵も、一神の光榮も、頼みとするに足らざるや、亦その此の如きものあり。是れ以て「猶太民族」のみ、獨り天の特寵と光榮とを專有するものにあらざることを知るべきぞや。更に「基督教」にあらざれば、「基督教徒」にあらざれば、文明人たる能はず、異教人種は、萬國公法の恩恵を享受するの權理資格なしとは、彼れ歐米人の「ツイ近頃まで」今も猶、一種固陋僻見の歐米人は、自負傲語する所にあらずや。而も克く基督教徒に歸依洗禮し、常に天帝に血誓祈禱する所の露國人は、其の基督教徒として、天帝の特寵國として、豆大の日本と、霸を東亞の海陸に争ひ、連戰連敗したり、獨り人事に於て失敗したるばかりでなく、天事に於ても、亦復、失敗したり、雷鳴雨雪等に依り、不虞の災害を受けたり、天の尤よを受けたりな。自から驕りて暴慢なる者は、基督教も頼みとするに足らず、天帝も頼みとするに足らず、洗禮も祈禱も糸瓜へちまもあつた者でな

い、悉く以て頼みとはするに足らざるものぞ。是れ以て天は一人種のみを限りて特寵し、一教徒のみに光榮を獨占せしむるものにあらざるを知るべきぞや。知れや、日本民族は、異人種にして、異教徒にして、僅僅三四年間の歲月と、精勵勤勉とを以て、彼等歐米人と同一の良能良徳を發揮し、同一の權理成格を獲得し、世界の豺狼惡魔とまで、恐怖したる、犖犖一大露國を日本海に殲滅し、滿洲の原野に擊退し、連戰連勝、恰も旭日の天に沖するが如く、列國の肚膽どたんを驚破し、更に是迄、歐米列國とすら同盟せず、光榮ある孤立なり、とまで、自尊自重したる大不列顛國と、對等的攻守同盟を締結し得て、世界の耳目を劇變せしめたるにあらずや。されば文明人の名稱も、萬國公法の恩恵も、獨り基督教徒のみに限り、歐米人にのみ定るものではない。是れ以て天は「基督教」のみを特寵し、その教徒たる歐米人のみに、文明的「一大光榮」を獨占せしむる者にあらざるを知るべきぞや。「歐米人」が基督教徒として、其の文明的光榮を自負し、「猶太民族」が上帝の寵民たるを自負し、「波羅門族」が梵天の愛子たるを自負し、「支那民族」が天地秀靈の化身たるを自負したるが如く、我が「日本民族」は、高天原より天降りたる神子天孫たるを以て、自尊するも、亦此の理に漏るること

能はず、放蕩怠慢にして、人道を實行せず、神道に合せざれば、直ちに劣等の民族に墮落するぞ、亦獨り永久的に天孫神子たるの特寵光榮を專有すること能はざるものぞ。

いづれの邦國、いづれの人種、いづれの民族も、均しく之れ人也、國也、同一の人也、同一の國也、同一の現象也。いづれの人種にても、民族にても、國家にても、猛然奮然、精勵勤勉して、その恩寵たることを感得するものは、その恩寵あることを悟入證出したる者にして、更に之れを實行すれば、正敷まさしく、その特寵たることを全ふしたる者となるぞ、他は茫然漫然として感得せず、遊惰放迭、流連荒亡して實行せざる間に、獨り我のみは之を感得し、之を證明し、之を實行したればなるぞ。故にいづれの國家にても、人種民族にても、人にても、漫然茫然、放佚懈怠して、流連荒亡する者は、是れ恩寵を去り、特寵に遠ざかるものぞ、猛然奮然、精勵刻苦して、勤勉する者は、是れ恩寵に近き、特寵を蒙るものぞ。遠ざかるものは、天誅神罰を受けて、益々墮落し、近づく者は、天賞神護を蒙りて、益々發達進歩するものぞ。故にいづれの國も、いづれの人も、日日夜夜に、時時刻刻に、猛然奮然、激勵勤勉して、其の恩寵たることを感得し、證明し、實行し

つつ、更に自己の那な的てきたるかを究明して、其の直に神の當體たることを自覺し、茲に猛然として、奮然として、其の神たる當體の正身を天照發顯し、活動飛躍し、神としての家庭、神としての國家を建設莊嚴し、他をして謳歌悅服し、贊美子來せしむると共に、之を救ひ、之を導きつつ、更に神としての世界を建設莊嚴し、共に與に神の恩寵を證明し、實行し、その特寵たることを全ふし、―後世子孫と共に、其の絶大なる光榮に沐浴し、翔翔せざるべからざるものなるぞ。

第七十四節 當體正身の二天照と愚兒偉人——我身は、神の當體正身なることを自覺し、その正身たる成格を發顯するには、二の天照に向て、精進突貫せざるべからざるぞ。二の天照とは、何ぞや。吾人人類の五官を分域として、發顯する所の活動状態なり。曰く、精神の天照なるぞ、曰く、肉體の天照なるぞ、精神の光明は、信仰の熱を待て、更に煥發照破し、肉體の剛鐵は、實行の油を待て、更に光芒陸離たり。而してその信仰と實行と觀照一致して、心體致一の活動飛躍あるべきものぞ。心體致一の活動飛躍あり、而して後、神としての當體正身を天照發顯し得たるものなるぞ、活動飛躍し得たるものなるぞ。故にその「信仰」は、世界唯一無比の「信仰」にし

て、常に他の信仰に超絶し、他の信仰を推服するに足る者ならざる可らざるぞ。その「實行」は他の實行に卓出し、他の實行を感化するに足る者ならざるべからざるぞ。「信仰と實行」との釋然一致したる發顯にして、初めて「心體不二の天照ありたる者ぞ、神の神たる當體としての正身成格の天照發顯ありたるものぞ、活動飛躍ありたるものぞ。」

されば、其信仰の主體實質たる人生宇宙、天人萬有の根本大極、本体大本體たる解釋は、亦常に他の解釋に卓出超絶する者たらざるべからず。警戒せよ、信仰は解釋の導火線たると共に、解釋は實行の前提なるぞ。解釋の如何によりて、亦その信仰の主體實質を窺ふに足ると共に、其の實行に影響するの效果、甚だ大なるものぞ。是れ個人として、家族として、民族として、人類として、更に家庭として、郷黨として、國家として、世界として、須臾も其の信仰と解釋と實行とに怠るべからず、晝日晝夜、時時刻刻、奮然猛然、茲に激發し、茲に精勵し、其信仰を向上大成して、その精神を健全にし、壯快にし、且その信仰的精神の發顯する四圍上下の文物萬象を究明同化して、更に肉體を健全にし、敏活にし、以て「心體致一の大英靈」として、宇宙萬有的現象の隨一た

る自己本有の特性當體たる神としての本体大本體を發顯天照し、活動飛躍し、自己當體應分の天職責任を全ふすると共に、他の天人萬有を教導感化し、救濟攝理しつつ、其根本大極としての本体大本體に還元復歸せざる可らざるものなるぞ、同化超樂せざるべからざるものなるぞ。是れ人として、萬有の隨一たる人としての道なるぞ、天職なるぞ、責任なるぞ。更に是れ根本大極たる本体大本體其的の大天照大發顯して、大活動大飛躍して、然らしむるものたるぞ、然るものなるぞ。警戒せよ、一日怠れば、一日劣敗の惡魔なるぞ、一日勤むれば、一日優勢の神明なるぞ。天の恩賜特寵は、其の實に先づ自から神として、自からに降すものなるぞ。蓋し大本體神としては、夙に現象神としての萬有各自に、天降りて天降して、特寵恩賜しつゝあるものなれば、現象神としての我等天人萬有は、之を自覺し之を證明し之を實行すれば、是れ直に我と吾身を神として、神たる其の身の當體に、他より卓出したる特寵を、我と吾身の當體に降したるものなるぞ、恩賜したるものなるぞ。我と吾躬に我と吾躬を特寵する者こそ、神も亦之を特寵するものなるぞ。

警戒せよ、徒に言語文字に拘泥して、其信仰目的たる主體實質に、本体大本體神を



誤解すること勿れ。言語文字は、國國の山河風土、風俗遺傳と共に、異れども、其の目的たる、人生宇宙、天人萬有の根本大極としての本体大體は、二ツなきものぞ。されば、世界列國、いづれの解釋も、皆その的の解釋なるを以て、其の言語名稱の如何に拘泥せず、其最も卓出超絶したる信仰解釋實行に歸順せよ。然らざれば、我と吾身に其の最も卓絶したる信仰解釋實行を發顯活動して、天人萬有を天照し攝理し救濟せよ。個人も、家族も、民族も、人類も、家庭も、郷黨も、國家も、世界も、更に宇宙萬有も、必ずや、謳歌贊美し、悦服子來して、其の威徳に感化歸順するぞよ。何人も茫然漫然として遊惰放心すれば、直に劣敗して、最劣等の愚兒たると共に、猛然奮然として精勤自覺すれば、亦最も卓絶の偉人丈夫たることを得るものぞ。然り、天孫神子として、天孫神子たる神として、高く、天人救済の大旭旗を翻し、大福音を傳へつゝ、更に、大體神の化身分體として、其の慰藉康樂の大稜威を、永く人生宇宙に天照らしに天照らすことを得るものぞ。天照らさるべからざるものなるぞ。

某は、天人萬有の隨一として、人生宇宙、何れにか其の位置を保有せざるべからざる者ぞ。今は人身として、鈍根劣機の人身として、大日本皇國に生れにき。故に大日

本皇國通用の言語文字を以て、宣明解釋したるぞ。然れども、某は亦、世界の一人也、宇宙萬有としての一分也、更に人生宇宙、天人萬有を代表したりと自覺する至愚至痴の人身なるぞ。故に日本民族のみを主とするにわらず、人生宇宙を究明し、天人萬有を究明して、自他の爲に宣明解釋したる者なるぞ。若しその言語文字を厭ふものあらば、其の國國の言語文字に翻譯して究明せよ、我も亦、時到らば、其の國國に到り、その國國の言語文字に依りて宣明すべきぞよ。いづれにせよ、其理致は赫約して、古往今來を一貫し、人生宇宙、天人萬有を一括して、動かすべからざるの大威嚴あるを自覺すべきものぞ。いかに、其の名を厭ふも、其の實は棄つべからざる、故に各自が信仰、各自が信仰主體の解釋實行は、悉く皆、此の如くに信仰し、此の如くに解釋し、此の如くに實行せざるべからざるに歸着するものぞ。

## 第拾五章 全神教と全神教趣としての 大日本世界教

人類は、世界と共に、時時刻刻に發達進歩するぞ。人類は、依然として、三千年以前の生

活状態たること能はざると共に、三千年以前の社會組織に逆戻さかもどりすることも能はざる者ぞ。故に三千年以前の信仰、解釋、實行を以て、依然今日に持續せんとするは、蓋し無理なる注文ぞや。三千年以後の今日は、今日相應の生活状態あり、今日相應の社會組織あり、其の動念動氣は、冲天の勢もて、日に夜に、時時刻刻に發達進歩しつゝあるものなるぞ。故にその信仰、解釋、實行は、亦そのそれ相應に發達進歩せざれば満足すべきものでない。是れ、在來の宗教宗義を總合統一する全神教の出顯する所以なるぞ。然れば、その『全神教』はいかに活動飛躍して、いかに人生宇宙、天人萬有を感化救濟せんとするぞ、還元超樂せしめんとするものたるぞ。

第七十五節 全神教と世界の將來——夫れ已に世界の將來は、獨り庶物教たるべからず、獨り多神教たるべからず、獨り一神教たるべからず、超在一體教たるべからず、獨り自然神教たるべからず、獨り萬有神教たるべからず、獨り萬有物質教たるべからず、獨り萬有理性教たるべからず、獨り眞和法性教たるべからず、亦獨り汎神教たるべからず、必ずや、それ、

## 全神教

たらざるべからず『全神教』は、一切諸教諸學を總合統一して、之を全からしめたる一大表顯體なるぞ。『全神教』の中には、庶物教も活動し、多神教も活動し、一神教も活動し、自然神教、萬有神教、萬有物質教、萬有理性教、眞如法性教、汎神教等も活動し、而も其活動たるや、相互に脾睨衝突する所なく、相互に釋然融會して、分分協同し、分分活動するものなるぞ。『全神教』は、一切諸教諸學を總合統一し、茲に新生命の大靈潮を灌頂して、各自が全身の乾血衰脈を清めはらふて稷あきしつゝ、各自應分に、其の特性、成格、天職、責任を活動飛躍せしむるものなるぞ。一切諸教諸學は、『全神教』の總合統一に依りて、大活動的大靈潮の大灌頂を受け、其全身の乾血を充足し、衰脈を復活し、茲に新生命の大活動大飛躍し、相共に以て、初めて其の良能神徳を全ふすることを得たるものなるぞ。一切諸教諸學は、『全神教』に同化せざるを得ず、同化して、各自の分分を全ふせざるを得ず、之に反抗せんとすれば、各自それ自身の活動を狭縮し、それ自身の飛躍を減少するものなればなり。いかんぞ、永く反抗するこ

とを得んや。一切諸教諸學は、悉く皆その平和を求めんとするものだ。いづれか好んで争を爲すものあるべきや。只その真誠の福音を傳へんが爲めに、其の争ふや蓋し已むを得ざるに出でしのみ。若しそれ争はで已むものとせば、それいづれか好んで争ふべきや。

『全神教』出でたり、一切諸教諸學を代表して出でたり、調和統一して出でたり、一切諸教は、歡喜踴躍しつゝ、『全神教趣』を我有として、相互に相待て、更に層一層の大活動大飛躍なかるべからざる大嘉會、大法樂、太大神樂とはなりつるものだ。

歸せよ。

## 全神教

祝せよ。

## 全神教

歌へよ。

## 全神教

『全神教』は、最も早く人生宇宙、天人萬有を慰藉し、感化し、攝理救済し、最も早くその根本大極本体大本體に同化還元せしめ、超樂天照せしむるの大神鼓なり、大福音なり、大德聲なり、大威力なり、大靈光なり、太大稜威なるぞや。

さて、其の『全神教』としての大主體と名稱及、信仰、解釋、實行の神典、神儀、神律は如何、

(委細は 日本世界教天照大神宮、第五十棟乃至第六十棟に辨彰す)

第七十六節 全神教趣と大日本世界教——信仰の主體たる人生宇宙、天人萬有の根本大極たる本体、その本体の本体たる大本體を會得するには、先づ以て自己の那的たる乎を知らねばならぬぞ、自己の那的たるを知らねば、自己は何事を爲すべきかの天職責任さへ辨ぜざるに歸するぞや。自己の那的たるを知ると共に、宇宙萬有の那的たる乎を知らねばならぬぞ、宇宙萬有の那的たる乎を知らねば、宇宙萬有は自己に如何なる關係ある乎さへ辨ぜざるに歸するぞや。自己の那的たる乎を知り、宇宙の那的たる乎を知り、而して後に、その本体を知り、自己としての

本体、宇宙としての本体を知り、更にその本体の本体たる大本體を會得するには至るものぞ。(委細は、一、大日本世界教天照大神宮、第一棟、乃至、第五棟に辨彰す)自己を知り、宇宙を知り、自己と宇宙萬有との本体を知り、更にその本体の本体たる大本體を知り。而して後にこそ、人生宇宙、天人萬有は、大本體の天照發顯する所に於て、天人萬有は、人生宇宙と共に、亦その各自としての本体を、各自に活動飛躍し、共に與に教へつ教へられつ、觀照應樂しつ、遂に辛に相互に感化し同化し一致して、其根本大極たる本体大本體に還元超樂する所以をも悟入開悟するに至るものぞ、悟入開悟すると共に、猛然奮然、激勵精進して、信仰解釋實行するに至るものぞ。『全神教』は、實に其の間の消息を宣明する者ぞ。是れ允に天人萬有が、各自の本体を、各自に天照發顯し顯彰發揚して、信仰解釋實行するに始まる。故に、**「本体顯彰教」**とも云ふぞ。**「本体顯彰教」**とは、萬有は萬有として、苟息すべきものならず、人類は人類として、苟安すべきものならず、其の神たる本体を自覺して、神たる本体を發顯顯彰し、更に神たる本体の稜威をば、神として、現象神として、寧ろ、大本體としての神として、人生宇宙の八表上下に天照らしつ、自他一切を教導し救濟し、同化超樂

せしむるにあり。故に竊に稱して、**「天照太神教」**とも云ふぞ。**「天照太神教」**は、大日本皇國に發祥して、其の**「全神教趣」**を、人生宇宙に天照煥發し、宣明實行せんとするものぞ。故に**「全神教趣」**大日本世界教とは稱するものぞ。大日本世界教は、獨り人類のみを慰藉し、感化し、救濟せんとするにあらず、均しく天人萬有を攝理し、人生宇宙を同化し、共に以て無始無終に、無經無緯に、發靈天照し、超等超樂せんとするものなるぞ。故に更に稱して、**「萬有攝理發靈教」**とも云ふぞや。某の此の如く云ひ、此の如く名くるにあらず、大本體の此の如く云ひ、此の如く名くるものぞ、大本體神の某に神宿かんぞくに神宿りて、此の如く名け、此の如く云ふものを、寧ろ大本體神の某と顯はれて、鈍根劣機、至愚至痴なる凡兒とこそは顯はれて、此の如く云ひ、此の如く名くるものなるぞ。某としての凡兒は、そのいかに鈍根劣機、至愚至痴なりと雖、天人萬有と共に、均しく之れ大本體神の發顯なれば也、大本體神其的そのものの天照當體なれば也。さて、其の**「全神教趣」**を天照宣明したる書を名けては、**「大日本世界教天照太神宮」**と稱す、是れ其の門に入り、其宮を拜し、自己を神として、本体神として、大本體の太神たかみかみとして、其全身を宮とし、家庭を宮とし、國家世界を宮とし、人生を宮とし、宇宙を

宮として、その全身宮、家庭宮、國家宮、世界宮、人生宮、宇宙宮より、自己神たる、家族神たる、國民神たる、人類神たる、萬有神たる、更に現象神たる、本体神たる、大本體神たる、稜威大稜威を、人生宇宙に光榮大光榮ある稜威大稜威を、煥發大煥發して、先づ大日本皇國より、世界人類を天照らしに天照らし、現在世界なる個人―家庭―國家―世界を、各自各自に、天照太神宮として、各自各自に、觀照應樂せしめつゝ、更に以て相共に萬有一切を天照らしに天照らししては、大宇宙を、大本體神其儘の大天照太神宮たることを會得せしめて、其の大天照太神に同化還元し、超等超樂することを期するものぞ。且その大日本より世界一圓を天照感化せんとするは、亦それ世界列國をして、此の如くに世界一圓を天照感化せしめんとするものなるぞ。

第七十七節 全神教としての冠國的世界教 ――此に「大日本世界教」と云ふは、大日本國が、獨り全神教趣を專有し、其の光榮を獨占するの存意なりと誤認すべからず、自負尊大ふる者と誤解すると勿れや。某が此の如く自覺する者は、他なし、某が大日本國を紀念として、君父恩愛の地として、立脚發軔するが如く、亦それ他をして、此の如くに自覺し、此の如くに實行し、各自其の國國を恩愛紀念の地と

して、此の如くに立脚發軔せしめんとする微衷ぞよ、前提ぞよ。

蓋し自己本体の發顯天照は、萬有自然の本有性也、通有體也、人類自然の本有性也、通有體也。天人萬有は、悉く其本体を發顯天照し、活動飛躍し、其の大本體に達せざるべからず、達せんとしつゝ、あるものなるぞ。特に人類は、最も早く其本体を發顯天照し、活動飛躍して、其の大本體に達せざるべからず、達せんとしつゝ、あるものなるぞ。故に其の本体を發顯天照し、活動飛躍し、大本體に達せんとするものは、必ずや「全神教趣的」ならざるべからず。故に何人も必ず「全神教」を奉ずるを知る、奉ぜざるべからざるを知る。いかに、其の名を厭はんとする者ありとするも、其實は棄ること能はず、實行せざるべからざるものなるぞ。苟も「全神教趣的」にまで、その本体の發達しつゝ、ある人人は、寧ろ、猛然、快然、行行然として、「全神教」を奉ずると共に、其國名を冠して、何何世界教と稱するに至るべきぞや。例へば、清國人なれば、「大清世界教」と號し、大不列顛國人なれば、「大不列顛世界教」と稱すべきものぞ。其の意たるや、その國人が世界烈國に率先して、その本体を「全神教趣的」に發顯天照し、活動飛躍し、直に大本體に到達せんとするにあり、獨り自己一人のみならず、自國人たる兄弟同胞

同族をして、其の本体を、全神教趣的に發顯天照せしめ、活動飛躍せしめ、その大本體に到達せしむるのみならず、更に世界列國をして、均しく之れ、全神教趣的に、その本体を發顯天照せしめ、活動飛躍せしめ、大本體に到達せしめんとするにある者ぞ。換言すれば、各自各自に自國を列國の主動者として、全神教趣的に、世界一圓を感化救濟し、人生宇宙を攝理同化せんとするものぞ。大不列顛國より、全神教趣的に主動率先して、世界一圓を感化救濟せんとするが故に、大不列顛世界教と云ふ者にして、猶、大日本皇國より、全神教趣的に主動率先して、先づ世界一圓を感化救濟せんとするが故に、大日本世界教とは云ふものぞ。獨り日本皇國のみならず、大不列顛國のみならず、米、獨、伊、埃、佛、露、等のありとあらゆる列國は、均しく皆その此の如くならざるべからざるものぞ。徒に資産を驅り集め、領地を横領開拓するのみが、個人として、家庭として、國家として、世界としての本体發顯にあらぬぞ。されば、いつれの人人にても、家庭にても、國家にても、其の本体を發顯天照し、活動飛躍して、自他共に其根本大極たる大本體に到達せんとする者は、全神教趣的に信仰解釋實行を以て、自我的、自家的、自國的、寧ろ自他平等の世界教、人生教、萬有教、宇宙教として、猛然、奮然、

激勵し、精進し、勤行し、共に與に以て、自他の本体を發顯天照し、活動飛躍し、世界列國を教導啓發し、天人萬有を感化救濟し、人生宇宙を攝理同化し、均しく其の人生宇宙、天人萬有の根本大極たる本体大本體神に還元超樂すべき者ぞ。此の如くんば、其身は一個神也と雖、現象神也と雖、直に是れ本体神にして、大本體神にして、過今來の三世は云ふまでもなく、無始無終に、相續發靈して、無經無緯、その到る處に於て、常に他に則るべき模範的成格、現象、本体、大本體の稜威大稜威を、人生宇宙に天照らしに天照らすの一個神、家族神、國家神、世界神、萬有神、現象神、本体神、大本體神、其的なるぞ。天照太神、大天照太神、其的なるぞ。是れ實に、全神教としての極意なるぞ。嗚呼、是れ、全神教趣としての大日本世界教、其的の大本意なるぞよ。歸せよ、祝せよ、歌へよ。



## 大日本世界教

### 大日本世界教宣明書第二了

天地の神の靈みたまをそのまゝに

わかなきあとの形見とは知れ

明治三十九年丙午二月廿八日吉旦

東京谷中第二薰舎

凡 兒

明治三十九年四月十三日第一版印刷  
明治三十九年四月十七日第一版發行

(大日本世界教宣明書典付)

定價金壹圓

著作  
所有

著者	川 面 凡 兒	東京市下谷區谷中三崎町十番地
發行者	新 村 寅 治 郎	東京市下谷區谷中三崎町十番地
印刷者	中 野 鎧 太 郎	東京市京橋區小田原町二丁目九番地
印刷所	帝國印刷株式會社	東京市京橋區築地三丁目十五番地

發行所

東京市下谷區谷中  
三崎町十番地

稜威會出版所

近刊豫告

全神  
教趣  
安身立命宮  
全一冊

大日本世界教儀  
上下  
二冊

大日本世界教宣明書  
第三  
第四

大日本世界教天照太神宮第一棟

稜威會出版部



724  
24

724  
24

我は生れながらに聰明なり  
と自信する者は愚也而も我  
は終生凡庸なりと自棄する  
者は更に愚也いかに聰明な  
りと自信するとも怠りて人  
生に那等の善事を建設する  
こと能はずは是れ凡人どよ  
いかに凡庸なりとも勤めて  
人生に善事を貢獻する所あ  
らば是れ直に偉人なるを

324  
23

終